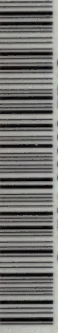
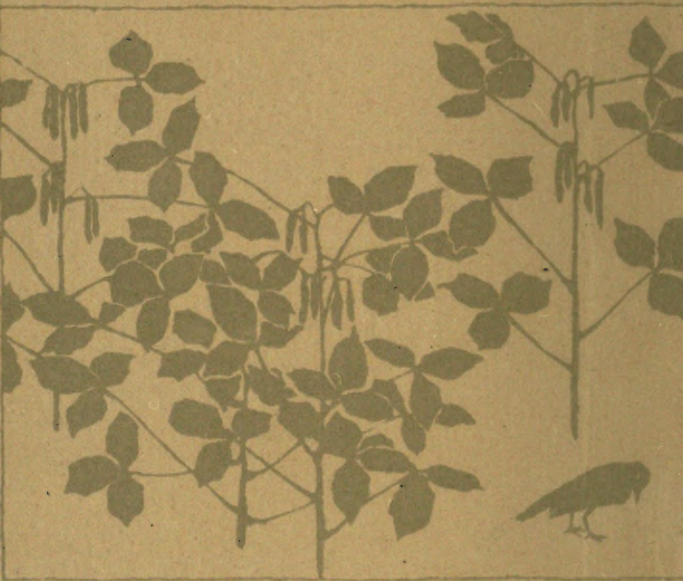


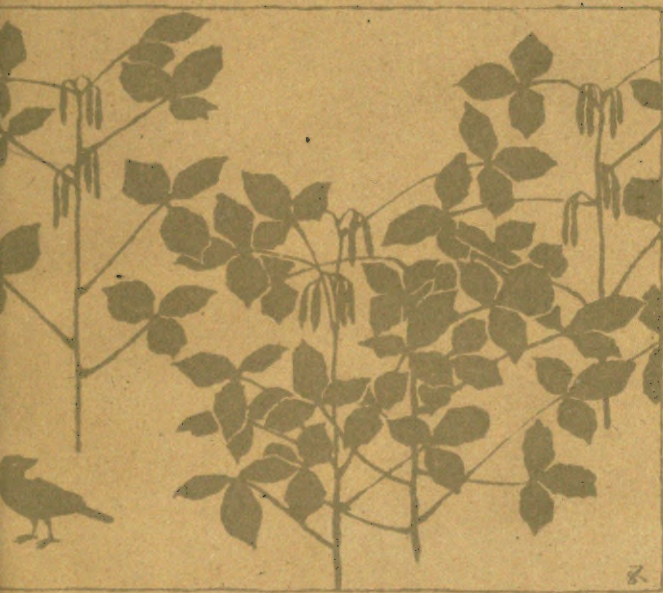
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03028 5746











(岡山製本)

大正四年四月二十日印刷

大正四年四月廿三日發行

有朋堂文庫

山家和歌集拾遺  
愚草・金槐和歌集

(非賣品)

編輯者

三

浦

理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平

井

登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

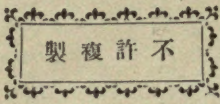
凸版印刷株式會社工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



不許複製

金槐和歌集終

右之一帖者鑣倉右大臣家集京極中納言定家  
卿門弟此道之達者云々然最初雖部類在不審  
尙之間重而改之畢尤可爲證本者乎

柳營亞槐判



にけるを聞きてよめる

聞きてしも驚くべきにあらねどもはかなき夢の世にこそありけれ

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを

そのあたりの人に尋ねしかば父母なむ身まかり

にしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる

慈悲の心を

物いはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親の子を思ふ

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎きせむことを思

ひて一人奉向本尊聊致祈念と云ふ

ときによりすぐればたみのなけきなり八大龍王雨やめたまへ

いにしへの朽木の櫻春ごとにあはれむかしとおもふかひなし

蘆

難波がたうきふししけき蘆の葉におきたる露のあはれ世の中

無常を

かくてのみありてはかなき世の中をうしとやいはむ哀とやいはむ  
現とも夢とも知らぬ世にしあれば有りとしてありと頼むべき身か

わび人の世にたちめぐるを見て

とにかくにあれば有りける世にしあればなしとてもなき世をもふるかも

人心不常といふことを

とにかくにあな定なき世の中や喜ぶ者あればわぶる者あり

世間つねならずといふことを人のもとによみて

遣し侍りし

世の中に賢き事もわりなきも思ひしとけば夢にぞ有りける

日頃やみふすとも聞かざりし人曉はかなくなり

かち人の渡ればゆるぐかつしかのまゝのつぎ繼橋朽ちやしぬらむ

故郷の心を

いにしへを忍ぶとなしに石の上ふりにし里にわれは來にけり  
まないたといふ物の上にかりをあらぬさまにし

て置きたるを見て

あはれなり雲井のよそに行く雁もかゝる姿になりぬと思へば

黒

ぬば玉のやみのくらきにあま雲のやへ雲がくれ雁ぞ鳴くなる

鶴

澤邊より雲井に通ふ葦たづも憂きことあれや音のみ鳴くらむ

千鳥

朝ほらけ跡なき浪に鳴く千鳥あなことくしあはれいつまで

櫻

うつせみの世は夢なれや櫻花咲きては散りぬあはれいつまで

てよみ侍る歌

玉くしけ箱根の海はけゝれあれやふた山にかけて何かたゆたふ  
民のかまどより烟のたつを見てよめる

みちのくにこゝにやいづくしほ釜の浦とはなしに烟立つ見ゆ  
濱へ出でたりしに海士のたく藻しほ火を見て詠

める

いつもかく寂しき物か葦のやにたきすさびたる海士の藻鹽火  
山の端に日の入るを見てよみ侍りける

紅のちしほのまふり山つイのはに日の入るときの空にぞありける

二所詣下向に濱邊の宿のまへに前川といふ川あ  
りなが雨ふりて水まさりしかば日暮れて渡り侍  
りし時よめる

濱べなるまへの川せを行く水の早くも今日のくれにけるかな  
かち人の橋わたりたる所

とよ國のきくの濱松おいにけり知らずいく世の年か經にけむ  
年ふれば老ぞたふれて朽ちぬべき身は住の江の松ならなくに

屏風の繪に野中に松三本おひたる所をきぬかづ  
ける女一人とほりたり

おのづから我を尋ぬる人もあらば野中の松よみきとかたるな  
三崎といふ所へまかへりし道に磯邊の松としふ  
りにけるを見てよめる

磯の松いくひささにかなりぬらむいたく木だかき風の音かな  
ものまうでし侍りし時磯のほとりに松ひと本あ

りしを見てよめる  
梓弓いそべにたてるひとつまつあなつれくけ友なしにして  
あら磯に浪のよるを見てよめる

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも  
又のとし二所へまるりたりし時箱根の水海を見

身のたちるにたへすなむなりぬる事をなくく  
申して出でぬ時に老といふ事を人々に仰せてつ  
かうまつらせしついでによみ侍りし

我いくそ見し世のことを思ひ出づのイあくるほどなき夜の寐覺に  
思ひ出でて夜はすがらにねをぞなくありし昔の世々のふる事  
なかくに老はほれても忘れなくないとイなどか昔をいとしのぶらむ  
道遠し腰はふたへにかどまれり杖にすがりてこゝまでもくる  
さりととも思ふものから日を経てはしだいに弱る悲しき

雑の歌の中に

世にふればうきことの葉のかす毎にたえず涙の露ぞおきける  
歎きわび世を背くべきかた知らず吉野の奥も住みうしといへり  
いづくにて世をばつくさむ菅原や伏見の里も荒れぬといふものを  
春秋はかはりゆくともわたつ海のなかなる島の松もひさしき

屏風の歌

君が代に猶ながらへて月きよみ秋のみそらのかけをまたなむ  
萬代に見るともあかじ長月のありあけの月のあらむかぎりは  
朝にありてわが代はつきじ天の戸や出る月日のてらむ限りは  
君が代もわが世もつきじ石川やせみの小川のたえじと思へば  
宮柱ふとしきたてよよろづよにいまぞさかえむかまくらの里

大嘗會の年の歌に

黒木もて君がつくれる宿なれば萬世ふともふりずも有りなむ  
いまつくる黒木のもろやふりずして君はかよはむ萬世までに

太上天皇御書下預時歌

おほ君の勅をかしこみ父母に心はわくともひとにいはいはめやも  
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心われあらめやも  
ひむがしの國に我をれば朝日さすはこやの山の陰となりにき

相州の土屋といふ所に年九十にあまれるくち法

師ありおのづからきたり昔語などせしついでに

岩の上におふる小松の年も経ぬいく千代までと契りおきけむ

寄竹祝

竹の葉にふりおほふ雪のうれを重み下にも千世の色は隠れず  
なよ竹のなよのものもよそぢおいぬれどやそのちふしは色も變らず  
なよたけのちどのさ枝のはよ枝のその節々によよはこもれり  
あひおひの袖のふれにし宿の竹よよは經にけりわが友として

寄苔祝といふ事を

岩にむす苔のみどりの深き色をいく千世までと誰かそめけむ

梅花を瓶にさせるを詠める

たまだれのこがめにさせる梅の花萬代ふべきかざしなりけり

櫻花さけるを見て

宿にある櫻の花は咲きにけり千とせのはるもつねかくし見む

慶賀の歌

ちどの春よろづの秋にながらへて月と花とをきみぞ見るべき



世の中は鏡にうつる影にあれやあるにもあらずなきにもあらず

心の心をよめる

神といひ佛といふも世のなかの人のこゝろのほかのものかは

祝の心を

姫島の小松がくれにゐるたづの千とせふれども年おいすけり

田鶴のゐるながらの濱のはま風に萬代かけてなみぞよすなる

寄松祝といふ事を

田鶴のゐる長良ながらの濱の濱松のまつとはなしに千世をこそふれ

君が世はなほしもつきじ住吉のまつは百たびおひかはるとも

行末もかぎりは知らず住吉のまつにいく世のとしか經ぬらむ

住の江におふてふ松の枝しけみ葉毎に千世のかすぞこもれる

行末の千とせをこめてはるがすみ立田の山にまつかぜぞ吹く

くらの山木だかくならむ松にのみ八百萬代とはるかぜぞ吹く

障子の繪に岩に松のおひたる所

ふりにけるあけの玉垣かみさびてやれたるみすに松風ぞふく  
故郷を神祇のイによせて詠みける

いそのかみふるの都は神さびてたよるにしあれや人も通はぬ

神祇の歌數多よみ侍りしに

かみつけのせたのあかぎの神社かみやしろやまとにいかで跡をたれけむ  
さとみこがみ湯だてざさのそよくに靡きおきふしよしや世の中  
みづがきの久しき世よりゆふだすきかけし心は神ぞしるらむ

得功德歌

大日の種子よりいでてさまや教さまやきやうまた尊形となる

懺悔歌

塔をくみ堂をつくるもひとなけき懺悔にまさる功德やはある

思罪業歌

ほのくくと虚空こくうにみてる阿鼻地獄行方もなしといふもはかなし

大乘作中道觀歌

社頭時鳥

五月雨を幣ぬぎに手向けて三熊野の山ほとよぎす鳴きとよむなり

法限定忍にあひて侍りしに那智の山の瀧のあり

さまを語りしかば

み熊野のなちのお山に引く標しめのうちはへてのみ落つる瀧かな

屏風に同じ山をかきたる所

冬ごもりなちのあらしの寒ければ昔の衣のうすくやあるらむ

走湯山參詣の時

渡津海わたつみの中に向ひていづるゆのいづのお山とうべもいひけり

走湯はしりゆの神とはうべぞいひけらし早きしるしのあればなりけり

伊豆の國や山の南に出づる湯のはやきは神のしるしなりけり

二所詣し侍りしに

ちはやぶる伊豆のお山のたま椿やほよろづ代も色はかはらじ

社頭松風

すみのえの岸の姫松ふりにけりいづれの世にか種はまきけむ  
社頭月

月のすむきた野のみやの小松原いく世を経てか神さびにけむ

松間雪

雪つもる和歌のまつばらふりにけりいく世へぬらむ玉津島守

月前千鳥

玉津島和歌のまつばら夢にだにまだ見ぬつきに千鳥なくなり

社頭夏月

ながむれば吹く風涼し三輪の山杉のこずゑを出づるつきかけ

三輪社を

今つぐる三輪のはふりが杉社すぎにしことはとはずともよし

社頭雪

年つもるこしの白山知らずともかしらの雪をあはれとは見よ

み熊野の柳なすの葉しだり雪降ればイふる雪は神のかけたるしでりけるイにぞあるらし

鶴岡別當僧都の許に雪のふれりしあした詠みて

遣す

鶴が岡あふぎて見れば嶺の松こすゑはるかに雪ぞつもれる  
八幡山木だかき松にゐるたづのはね白たへにみゆき降るらし  
ゆきはふりつゝイ

河邊月

千はやぶるみたらし川の底きよみ長閑くイのさかに月のかけはすみけり

屏風に賀茂へまうでたる所

たちよればころもですとしみたらしや影みる岸の春の川なみ

同じ社をよめる

あふひ草かづらにかけて千早ふる賀茂の祭をねるはたが子ぞ  
名にしおはどその神山のあふひ草かけて昔をおもひいでなむ

社頭霜あふひ草

さよふけていなりの山の杉の葉に白くも霜のおきにけるかな

屏風にかきつけ侍りし

すどかけの苦おりぎぬのふり衣おくもこのもよきつよなれけむ  
いくかへり往來の嶺のそみかくだすどかけ衣きつよ馴れけむ

伊勢御遷宮の年の歌

神かぜやあさひの宮の宮遷みけうつしかけのどかなる世にこそありけむ

建保六年十一月素還法師(于時胤行)下總國に侍り

し頃のほるべきよし申し遣すとて

戀ひしとも思はでいかど久かたのあまてる神も空に知るらむ

神祇の歌の中に

いにしへの神代のかげぞのこりける天の岩戸のあけがたの月  
月さゆるみもすそ川の底清みいづれの代にかすみはじめけむ  
八百萬やほよろよもの神たちあつまれりたかまの原にちぎたかくして  
をとこやま神にぞぬさを手向けつる八百萬代も君がまにく

寄松祝といふ事を

八幡山木高き松のたねしあれば千とせの後も絶えじとぞ思ふ

濱千鳥八十鳥かけてかよふともすみこし浦をいかゞわすれむ

秋の頃いひなれたる人の物へまかりしに便につ

けてふみなど遣すとて

うはの空に見し面影を思ひ出でて月になれにし秋ぞこひしき  
思ひいでよ見し世はよそになりぬともありし名残の有明の月

忍びていひわたる人ありき遙なるかたへゆかむ

といひ侍りしかば

ゆひそめてなれしたぶさの濃紫思はずいまもあさかりきとは

遠き國へまかれりし人のもとより見せばや袖の

など申しおこせたりし返事に

われゆるにぬるよにはあらし唐衣山路の苔の露にぞありける

法眼定忍にあひて侍りし時大峯の物語などをし

いへるを聞きて後によめる

おく山の苔のころもにおく露はなみだの雨のしづくなりけり

ど遣し侍りし中に時鳥のかた書きたる扇にかき  
つけ侍りし

たちわかれないなばの山の時鳥まつとつけこせかへりくるがに

近うつかふ女房遠き國に罷らむとて暇申し侍り

しかば

山遠み雲井に雁の越えていなば我のみひとりねにや鳴きくらむいなむ

遠き國へまかれりし人八月ばかりには歸り參る

べき由を申して九月まで見えざりしかば彼の人

のもとに遣し侍りし

こむとしもたのめぬうはの空にだに秋風ふけば雁は來にけり

いまこむとたのめしひとは見えなくに秋風寒み雁は來にけり

素還法師へ物まかり侍りけるにつかはしける

沖つ波やそ島かけてすむ千鳥こゝろひとつといかどたのまむ

かへし



春雨にうちそほちつこいよあしびきのやま路ゆくらむ山人やたれ  
はるさめはいたくな降りそたび人の道ゆき衣ぬれもこそすれ

同詣下向の後朝にさぶらひども見えざりしかば

詠める

旅をゆきし跡の宿守おれくこにわたくしあれや今朝はまだこぬ  
ある人の方へのほり侍りしにたよりにつけて

詠みて遣す

夜をさむむ獨寐覺の床さえてわがころもでにつゆぞ置きける  
かよる折もありけるものを手枕たまくらのひまもる風を何いとひけむ  
みやこべに夢にもゆかむ便たよりあらばうつたの山風吹きもつたへよ  
都よりふきこむ風の君ならばわするなとだにいはましものを  
うつたへに思ふばかりはいはねども便につけて尋ねばかりぞ  
岩ねふみいくへの峯を越えぬともおもひも出でむ心へだつな  
五月の頃みちのくにへまかれりし人の許に扇な

まれにきて聞くだにかなし山がつの苔のいほりの庭のまつ風  
まれに來てまれに宿かる人もあらずあはれとおもへ庭の松風  
相摸川といふ川あり月さし出でてのち舟にのり

てわたるとき

ゆふづく夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもうとき波の音かな  
あさほらけ八重のしほぢ霞み渡りて空もひとつ  
に見え侍りしかば

えぞイ

空や海うみや空とも見えわかぬかすみも波もたちみちにつよ

箱根の山をうち出でて見れば浪のよる小島あり

供の者に此うらの名は知るやと尋ねしかば伊豆

の海となむ申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ

二所へ詣でたりし還向けかうに春雨のいたく降りし

かば

旅の空なれぬはにふのよるの床とにいわびしきまでにもる時雨かな

旅宿霜

そでまくら霜おく床の苔のうへにあかすばかりのさよの中山  
しながどりるな野のはらの篠枕まくらの霜ややどるつきかけ

鞞中雪

たびごろも夜半の片しきさえくゝて野中の庵に雪ふりにけり  
あふ坂の關の山みち越えわびてきのふもけふも雪しつもれば  
雪ふりて跡ははかなくたえぬとも越この山みちやまずかよはむ

屏風の繪に山中に雪ふれる所に旅人數多かける

所を

かたしきのころもでいたくさえわびぬ雪ふかき夜の嶺の松風  
あかつきの夢のまくらに雪つもりわがねざめ訪ふみねの松風

屏風の繪に山家に松かけるところに旅人あまた

あるを詠める

舟

世中はつねにもがもななきさこぐ海士の小舟の綱手かなしも

鞆中夕露

露しけみならはぬ野邊のかりごろもころしもかなし秋の夕暮  
野邊わけぬ袖だに露はおくものをたどこのごろのあきの夕暮  
旅衣うらがなしかるゆふぐれのすそ野の露にあきかぜぞ吹く

鞆中鹿

旅ごろもすそ野の露にうらがれてひもゆふ風に鹿ぞ鳴くなる  
あきもはやすゑ野の原に鳴く鹿の聲きくときぞ旅はかなしき  
ひとりふす草の枕のよるの露はともなき鹿のなみだなりけり

旅宿月

ひとりふす草のまぐらの露の上に知らぬ野原の月を見るかな  
岩がねの苔のまぐらに露おきていく夜み山のつきに寐ぬらむ

旅宿時雨

金槐和歌集 卷之下

雜部

旅の心を

玉銚のみちは遠くもあらなくに旅とし思へばわびしかりけり  
草枕たびにしあれば妹にこひさむるまをなみゆめさへ見えす  
草枕たびにしあればかりごもの思ひみだれていこそねられね  
たびごろも袂かたしきこよひもやくさの枕にわれひとり寐む  
旅ねする伊勢のはまをぎ露ながらむすぶ枕にやどるつきかけ  
東路あづまぢのさやの中山こえていなばいとどみやこや遠ざかりなむ

旅泊

みなと風いたくな吹きそしながどりるなの湖舟みづぶねとむるまで  
やらのさき月影さむしおきつ鳥鴨といふふねうきねすらしも

待つ宵のふけゆくだにもあるものを月さへあやな傾きにけり  
小篠原おく露寒みあきさればまつむしのねになかぬ夜ぞなき  
ある人のもとに遣し侍りし

秋の田の穂の上にすがくさよがにのいと我ばかり物は思はじ  
雁のゐる羽風にさわぐ秋の田の思ひみだれてほにぞ出でぬる  
難波渦みぎはのあしのいつまでかほに出でずしも秋を忍ばむ

故郷戀

故郷の杉の板屋のひまをあらみ行きあはでのみ年のへぬらむ  
 草ふかみきしもあれたる宿なるを露をかたみに尋ねこしかな  
 しのぶ草しのびくかるイにおく露を人こそとはねやどはふりにき  
 宿は荒れて古きみ山の松にのみとふべきものと風のふくらむ  
 荒れにけりたのめし宿はくさのはら露の軒端にまつ蟲の鳴く  
 里はあれて宿は朽ちにし跡なれや淺茅が露にまつむしの鳴く

契むなしくなれるこゝろを

契りけむこれやむかしの宿ならむ淺茅が原にうづら鳴くなり

今も見てしが山賤のといふことを

やまがつかきほに咲けるなでしこの花の心を知る人のなき

神無月の頃人のもとに

時雨のみふるの神杉ふりぬれどいかにせむとか色のつれなき

たのめたる人に

寄金戀

こがねほるみちのく山にたつ民のいのちもしらに戀もするかな  
あふ事のなき名をたつの市によるかねて物思ふわが身なりけり

人々歌よみしに寄衣戀

忘らるゝ身はうらぶれぬ唐衣からころもきてもたちにし名こそ惜しけれ

寄簾戀

津の國のこやのまろやの蘆すだれまどほになりぬ行きあはずして

寄物語戀

わかれにし昔はつゆかあさぢ原あとなき野邊にあき風ぞふく

水邊戀

みしま江や玉江の眞菰水み隠かくれて目にし見えねばかる人もなし  
まこもおふる淀の澤水水草みくさるてかけし見えねばとふ人もなし

海邊戀

うき身のみ小島こじまの海士のぬれ衣ぬるとないひそ朽ち果はつるとも



寄薄戀

待つ人はこぬものゆるゑに花薄ほに出でてねたき戀もするかな

寄瞿麥戀

なでしこのはなにおきゐる朝露のたまさかにだに心へだつな

寄菊戀

花により人の心ははつしものおきあへず色のかはるなりけり  
消えかへりあるかなきかに物ぞ思ふうつろふ秋の花の上の霜

寄七夕戀

たなばたにあらぬわが身のなぞもかく年に稀なる人をまつらむ

寄雁戀

しのびあまり戀しきときは天の原空とぶ雁のねに鳴きぬべし

ぞ鳴きつるイ

雲がくれ鳴きて行くなる初雁のはつかに見ても人はこひしき

寄鹿戀

秋の野に朝ぎりがくれなく鹿のほのかにのみや聞き渡りなむ

月影もさやには見えすかきくらす心のやみのはれしやらねば

寄雲戀

白雪のきえは消えなでなにしかも立田の山の名のみたつらむ

寄風戀

あだし野の葛のうら吹く秋風の日にし見えねば知る人もなし  
から衣裾あはぬつまに吹く風の目にこそ見えね身にはしみけり

寄雨戀

時鳥なくや五月のさつきあめのはれずもの思ふ頃にもあるかな  
時鳥きなく五月の卯のはなのうきことの葉のしけきころかな  
郭公待つ夜ながらの五月雨にしけきあやめのねにぞ鳴くなる

寄露戀

色をだに袖よりつたふした萩のしのびし秋の野邊のゆふつゆ  
わがそでの泪にもあらぬ露にだに萩の下葉は色に出でにけり  
秋はぎの花野の薄露をおもみおのれしをれて穂にや出でなむ

待戀の心をよめる

さ筵にひとりむなしくとしもへぬよるの衣のすそあはずして  
さむしろにいく世の秋を忍びきぬ今はたおなじ宇治のはし姫  
こぬ人をかならずまつとなけれども暁がたになりやしぬらむ  
みちのくの眞野のかや原かりにだにこぬ人をのみ待つが苦しき  
までとしもたのめぬひとの葛の葉もあだなる風か恨やはせむ

寄月待人

忍ふれば苦しきものを山の端にさし出づる月の影に見えなむ  
恨みわびまたじと思ふゆふべだになほ山のはに月は出でにけり  
までとしもたのめぬ山も月はいでぬいひしばかりの夕暮の空

月前戀

わか袖におほえす月ぞ宿りけるといふ人あらばいかゞ答へむ

寄月戀

數ならぬ身はうき雲のよそながらあはれとぞ思ふ秋の夜の月

さ筵につゆのはかなくおきていなば曉ごとにきえやわたちむ

山家後朝戀

消えなましけさたづねずば山陰のひとこぬ宿のみちしばの露

會不逢戀

今更になにをか忍ぶ花すよきほに出でし秋もたれならなくに

夏戀

五月やま木のしたやみのくらければおのれまどひてなく郭公

冬戀

庭の面にしけりにけらし八重葎とはでいく世の秋かへぬらむ  
あさぢ原跡なき野邊におく霜のむすほほれつよ消えや渡らむ  
浅茅原あだなる霜の結ほほれ日かけを待つに消えやわたらむ

人々歌よみしに經年待戀といふことを人々にお

ほせてつかうまつらせしついでに

故郷のあさぢが露にむすほほれひとり鳴く蟲の人をうらむる

思ひきやありしむかしの月影を今はくもるのよそに見むとは

寄沼忍戀

かくれぬの下はふ蘆のみごもりに我ぞ物おもふ行方しらねば

寄草忍戀

わがこひは夏野の薄うすしけけれどほにしあらねばとふ人もなし  
秋風になびくすよきのほにはいです心みだれて物おもふかな

忍戀

時雨ふる秋のやまべにおく霜の色にはいでじいろにいつとも  
時雨ふるおほあらし野の小篠原ぬれはいつとも色に出でめや

久戀

わが戀はあはでふる野の小篠原いくよまでとか霜のおくらむ

曉戀

曉の鳴のはねがきしけけれどなどあふことのまどほなるらむ  
曉の露やいかなるつゆならむおきてし行けばわびしかりけり

わがこひはかこのわたりの綱手繩たゆたふ心やむときもなし  
思ひたへわびにしものを今さらに野中の水にわれをたのむる  
水莖の岡べのまくすかれしより身をあき風のふかぬ日はなし  
風をまついまはた同じ宮城野のもとあらのはぎの花の上の露  
おきつ波うち出の濱の濱ひさぎしをれてのみや年をへぬらむ  
君により我とはなしに須磨の浦に藻鹽たれつゝ年をへぬらむ  
住の江のまつこと久ひさになりけりこんとたのめて年の經へきぬらん  
住の江のまつとせしまに年も經ぬ千木の片そぎ行きあはずして  
いかにせん命も知らず松山のうへこすなみにくちぬおもひを  
初戀の心を右部類之時追加也遠島御歌合衣笠内  
府の歌といへり尤可除者也

はるがすみたつたの山の櫻花おほつかなきを知るひとのなき  
寄月忍戀

春やあらぬ月は見しよの空そらながらなれし昔のかけぞ戀ひしき

東路やみちのおくなる白川のせきあへぬ袖をもるなみだかな  
涙こそゆくへも知らねみわの崎さ野のわたりの雨のゆふぐれ  
人しれず思へばくるし武隈たけぐまのまつとはまたじまてばすべなし  
から衣きなれの里に君をおきてしま松の木のまてばくるしも  
わがせこを待乳まちちの山の葛くわかづらたまさかにだにくる由よしもがな  
しのぶ山下行く水の年をへてわきこそかへれあふよしをなみ  
心をししのぶの里におきたらばあふくま川にみまくちかけむ  
雲のるる吉野のたけにふる雪のつもりくゝて春にあひにけり  
かくてのみありその浦うらにありつよもあふよもあらば何か恨みむ  
白波しらかのいそちいくちなるのもせ川後もあひみむみをし絶えずば  
渡津海わたつみに流れいでたるしかま川しかもたえずやこひ渡りなむ  
ちはやふる加茂の川波いくそたび立ちかへらん限知らずも  
むこの浦の入江のすどり朝なく、常に見まくのほしき君かな  
田子の浦の荒磯の玉藻波の上うきでたゆたふ戀もするかな

難波がた浦よりをちに鳴くたづのよそに聞きつゝ戀や渡らむ  
海人衣あまころたみのの島に鳴くたづの聲聞きしよりわすれかねつも  
すまの浦にあまのともせる漁火いかりびのほのかに人を見る由もがな  
あふ坂の關屋もいづらやましろのおと羽の瀧の音に聞きつゝ  
廣瀬川袖つくばかりあさけれど我はふかめておもひそめてき  
神山の山下水のわきかへりいはでものおもふわれぞかなしき  
おく山の岩かき沼に木葉このは落ちてしづめるこゝろ人知るらめや  
山城のいはたのもりのいはすとも秋の梢はしるくやあるらむ  
み熊野のうらのはまゆふいはすとも思ふ心のかずを知らなむ  
年ふともおとにはたてじ音羽川したゆく水のしたのおもひを  
富士のねの烟も空にたつものをなどかおもひの下にもゆらむ  
白山しらやまにふりてつもれる雪なれば下こそ消ゆれうへはつれなし  
葦のやのなだの鹽やき我なれや夜はすがらにくゆりわぶらむ  
いせ島やいちしの海士のすて衣あふ事なみにくちやはてなむ



かもめるる荒磯のすさき潮みちて隠るひ行けばまさるわが戀  
風吹けば波うつきしの岩なれやかたくもあるか人のこよろの  
うき沈みはては泡とぞなりぬべき瀬々の岩浪身もくだきつよ  
山川の瀬々の岩波わきかへりおのれひとりや身をくだくらむ  
岩ばしるやましたたぎつ山川のこよろくだけて戀やわたらむ  
昔ふかき石間をつたふ山水のおとこそたてねとしはへにけり  
もらしわびぬしのぶの奥の山深み木がくれて行く谷川の水  
それをだにおもふ事とて千はやふる神の社にねがぬ日はなし  
よそにてもあるべきものをなか／＼に何しか人に睦れそめけむ  
名所戀の心をよめる

とよ國のきくのたかはま夢にだにまだみぬ人に戀やわたらむ  
大あらしきのうき田の森に引く標しほのうちはへてのみ戀や渡らむ  
いそのかみふるのたか橋ふりぬとももとつ人には戀や渡らむ  
淡路島かよふ千鳥のしば／＼にはねかくまなく戀やわたらむ

かれはてむ後しのべとや夏草のふかくは人のたのめおきけむ  
天の原かぜにうきたるうきぐもの行方さだめぬ戀もするかな  
久堅のあまとぶ雲の風をいたみ我はしか思ふ妹にしあはねば  
久かたのあまの川原にすむたづも心にあらぬねをや鳴くらむ  
わが戀はあまの原とぶあしたづの雲井にのみやなき渡りなむ  
今更にわが名はたよじかはらやのしたしく烟くゆりわぶとも  
藻鹽やく蟹のたく火のほのかにもわが思ふ人を見るよしもがな  
わが戀は初山あるのすり衣ひとこそ知らねみだれてぞおもふ  
あしびきの山にすむてふやまがつの心も知らぬ戀もするかな  
おくやまのたつきもしらぬ君によりわが心から迷ふべらなり  
おく山の末のたつきもいざ知らず妹にあはず年の經行けば  
しらま弓いそべの山の松の色のときはに物をおもふころかな  
あし鴨のさわぐ入江の浮草のうきてやものをおもひわたらむ  
おきつ島うのすむ石による浪のまなくもの思ふ我ぞかなしき

さ夜ふけて雁のつばさにおく霜のきえても物は思ふかぎりそイを  
逢ふ事を雲井のよそに行く雁のとほざかればや聲もきこえぬ  
おくやまの草ふみならずさを鹿もふかき心のほどは知らなむ  
はみのほるあゆすむ川の瀬を早み早くや君にこひわたりなむ  
君にこひうらぶれをれば秋風になびくあさぢの露ぞけぬべき  
秋の野におく白露の朝なくはかなくてのみ消えやかへらむ  
秋の野の花の千ぐさに物ぞ思ふ露よりもしけき色は見えねど  
物思はぬ野邊の草木の葉にだにも秋のゆふべは露ぞおきける  
足引の山の尾上にかかるかやのつかのまもなく亂れてぞおもふ  
きかでたどあらましものを夕づく夜人だのめなる萩のうは風  
夕月夜おほつかなきを雲間よりほのかに見えしそれかあらぬか  
月影のそれかあらぬかかけろふのほのかに見えて雲隠れにき  
わが戀は百島めぐりはま千鳥ゆくへも知らぬかたに鳴くなり  
夜を寒み鴨の羽がひにおく霜のたとひけぬとも色にいでめや

# 金槐和歌集 卷之中

## 戀之部

### 戀の歌の中に

春ふかみ峯のあらしに散る花のさだめなき世に戀つまぞする  
おもひのみふかきみ山の郭公ひとこそ知らねねをのみぞ鳴く  
をじかふす夏野の草の露よりも知らじなしけき思ひありとは  
わが戀はみ山の松にはふ葛のしけきを人のとはずぞありける  
山しけみ木の下がくれ行く水のおと聞きしよりわれや忘るよ  
なつふかき杜の空蟬うつせまおのれのみむなしき戀に身をくだくらむ  
わが宿のませのはよそにはふ瓜のなりもならずもふたりねまほし  
木がくれて物をおもへば空蟬うつせまの羽におく露のきえやかへらむ  
かさよぎの羽におく露の丸木橋ふみみぬさきに消えや渡らむ

はかなくて今夜更けなば行く年の思出もなき春にやあはなむ  
ぬば玉のこの夜なあけそしばくもまだふる年の内ぞと思はむ  
ちぶさすふまだいとけなき縁子のともになきぬる年の暮かな  
行く年のゆくへをとへば世の中の人こそ一つまうくべらなれ

老人寒を厭ふといふことを

年ふればさむき霜こそさえけらしかうべは山の雪ならなくに

老人憐歲暮

しらがといひ老いぬるけにや今年あれば年の早くも思ほゆるかな  
老いぬれば年のくれ行くたび毎にわが身ひとつと思ほゆるかな  
うちわすれはかなくてのみ過ごし來ぬ哀と思へ身につもる年  
足引のやまよりおくに宿もがな年のくまじきかくれがにせむ

歲暮

塵をだにすゑじとやおもふ行く年の跡なき庭をはらふ松風  
とりもあへずはかなく暮れて行く年のしばし留むる關守もがな  
ものよふのやそうぢ川を行く水のながれてはやき年の暮かな  
しら雪の降るのやまなる杉村のすぐるほどなき年のくれかな  
かづらきや雲をこだかみ雪しろしあはれと思ふとしの暮かな  
老いらくの頭かしらの雪をとどめ置きてはかなの年やくれて行くらむ

かへし

ぬし知れと引きける駒の雪を分けば賢かどき跡にかへれとぞ思ふ

みづからかきて好士を選び侍りしに内藤馬允和

親を使としてつかはし侍りし建保五年十二月方

違のため永福寺の僧坊に罷りてあした歸り侍る

とて小袖を残し置きて

春待ちて霞の袖にかさねよとしものころものおきてこそゆけ

山々に炭やくを見侍りて

炭をやく人の心もあはれなりさてもこの世をすぐるならひは

炭 竈

ゆき降りてけふとも知らぬ奥山にすみやく翁あはれはかなみ

すみがまのけぶりもさびし大原やふりにしさとの雪の夕ぐれ

佛名のこゝろを詠める

身につもる罪やいかなる罪ならむけふ降る雪と共にけななむ

閑居雪

ふるさとはうらさびしともなき物を吉野のおくの雪の夕ぐれ

雪中待人

けふもまたひとりながめて暮れにけりたのめぬ宿の庭の白雪

足にわづらふことありて入こもりし人の許に雪

ふりし日よみてつかはす

降るゆきをいかに哀とながむらむ心は思ふとも足たよずして

建曆二年十二月雪の降り侍りける日山家の景色

を見侍らむとて民部大夫行光が家にまかり侍り

けるに山城判官行村など數多侍り和歌管絃の遊

ありて夜ふけて歸り侍りしに行光黒馬をたびけ

るを又の日見けるに立髪に紙を結び侍るを見れ

ば

この雪を分けて心の君にあればぬし知る駒のためしをぞひく



おのづからさびしくもあるか山深み草のいほりの雪の夕ぐれ  
われのみぞ悲しとは思ふ浪のよる山のひたひに雪のふれよば  
はし鷹の今日やしらふにかはるらむとかへる山に雪のふれよば  
白といふことを

かもめるる沖のしらすにふる雪の晴れ行く空の月のさやけさ  
松間雪

たかさごの尾上の松にふる雪のふりていくよの年かつもれる  
屏風の繪に三輪の山に雪のふれるけしきを見侍  
りて

冬ごもりそれとも見えす三輪の山杉の葉白くゆきの降れよば  
海邊雪

立ちのほる烟はなほぞつれもなき雪のあしたの鹽がまのうら  
寺邊夕雪

うちつけに物ぞかなしき初瀬山をのへのかねの雪のゆふぐれ

奥山の岩ねにおふるすがの根のねもころくもイにふれるしら雪  
ゆふさればすど吹く嵐身にしみて吉野のたけにみ雪ふるらし  
ゆふさればうらかぜ寒しあまを舟泊瀬の山にゆきぞふるらし  
ゆふさればしほかぜ寒し波間より見ゆる小島に雪は降りつゝ  
山たかみあけはなれ行く横雲のたえまに見ゆるみねのしら雪  
見わたせば雲井はるかに雪しろし富士の高根のあけほの空  
ながむればさびしくもあるか煙立つむろの八島の雪の下もえ  
ひさかたのあま雲あへりかづらきや高間の山はみ雪ふるらし  
み山には白雪ふれりしがらきのまきのそまびと道たどるらし  
卷向の檜原のあらしさえくゝてゆつきがたけに雪ふりにけり  
まきの戸を朝明の雲のころもでに雪をふきまく山おろしの風  
はらへたど雪わけころもぬきを薄み積れば寒し山おろしの風  
山里は冬こそことにわびしけれ雪ふみわけてとふひともなし  
わがいほは吉野のおくの冬ごもり雪ふり積みて訪ふ人もなし

せしついでに

磯イ

夕づく夜みつしほあひの瀉をなみ波にしをれて鳴く千鳥かな  
夜をさむみ浦の松風吹きすさびむしあけの浪に千鳥鳴くなり  
月清みさ夜ふけ行けばいせしまやいちしの浦に千鳥なくなり

寒夜千鳥

風寒み夜のふけ行けばいもが島かたみのうらに千鳥なくなり

名所千鳥

衣手にうらのまつ風さえわびてふきあけの月に千鳥鳴くなり

水鳥

水鳥のかものうき寐のうきながら玉藻の床にいく夜へぬらむ

海邊鶴

難波がた潮干にたてる蘆たづのはねしろたへに雪ぞ降りつよ

はイ

雪

みさごゐる磯邊にたてるむろの木の枝もとをよに雪ぞ積れる

海邊冬月

月のすむ磯のまつ風さえくくしてしろくも見ゆる雪のしらはま

月前嵐

ふけにけり外山のあらしさえくくてとをちの里にすめる月影

山邊霰

くもふかきみ山のあらしさえくくて伊駒のたけに霰ふるらし

霰

ものよふの矢なみつくろふこての上には霰たばしるなすの篠原  
さよの葉のみ山もそやに霰ふりさむき霜夜をひとりかもねむ  
笹の葉に霰さやぎてみ山べのみねの木がらししきりて吹きぬ

千鳥

夕づく夜さほの川かぜ身にしみて袖より過ぐる千鳥鳴くなり  
降りつもる雪ふむ磯の濱千鳥なみにしをれて夜半に鳴くなり

海邊千鳥といふことを人々に數多つかうまつら

冬ふかみ氷にとづるやまがはのくむひとなしと年やくれなむ  
わがかどのいた井の清水冬ふかきかけこそ見えね氷すらしも

池上冬月

はらの池の蘆間のつらよしけければたえく月の影はすみけり

湖上冬月

ひらの山山風さむきみイからさきのにほの水うみつきぞこほれる

河邊冬月

千鳥鳴くさほの川原のつききよみ衣手さむし夜やふけぬらむ

夜ふけて月をみて詠める

さ夜ふけてくもまの月の影見れば袖にしられぬ霜ぞ置きける

月影似霜といふことを

月影のしろきを見ればかさよぎのわたせる橋に霜ぞイや置きるイけむ

月前松風

あまの原そらをさむけみぬば玉のよわたる月にまつ風ぞふく

難波瀉あしの葉白くおく霜のさえたる夜半にたづぞ鳴くなる  
おほさはの池の水草かれにけりながき夜すがら霜やおくらむ  
東路あづまぢの道のふゆぐさかれにけり夜なく、霜やおきまさるらむ

野 霜

花薄枯れたる野邊におくしものむすほほれつゝ冬は來にけり

深夜霜

烏羽玉うはたまのいもが黒髪うちなびき冬ふかき夜にしもぞ置きける  
夜を寒み河瀬にうかぶ水の泡の消えあへぬほどに氷しにけり

冬の歌

片しきの袖こそ霜のむすびけれ待つ夜ふけぬる宇治のはし姫  
かたしきの袖も氷りぬ冬の夜の雨ふりすさむあかつきのそら  
あしの葉はさは邊もさやにおく霜の寒き夜なく、氷わたれりしにけり  
おとはやま山おろし吹くあふ坂の關の小川はこほりしにけり  
冬ふかき氷みやいたくとぢつらむかけこそ見えね山の井のみづ

散りつもる木葉朽ちにし谷水も氷にとづるふゆは來にけり  
春といひ夏とすぐして秋風のふきあけの濱にふゆは來にけり  
よしのがはもみぢ葉ながる瀧の上のみふねの山に嵐ふくらし  
初時雨ふりにし日より神なびのもりのこずゑぞ色まさり行く  
みむろ山紅葉ちるらし神無月たつたのかはにしきおりかく  
神無月時雨ふればかなら山のなるの葉がしはかせにうつろふ  
神無月しぐれふるらしおく山は外山のもみぢいまさかりなり  
下紅葉かつはうつろふはとそ原かみな月して時雨ふれてへむイ

## 松風似時雨

神無月木葉ふりにしやまざとは時雨にまがふまつの風かな  
ふらぬ夜もふる夜もまがふ時雨かな木の葉ののちの嶺の松風

## 水上落葉

流れ行く木の葉の淀むえにしあれば暮れての後も秋は久しき

## 霜

秋ふかみすそ野の眞葛まぐわかれぐにうらむる風の音のみぞする  
秋はぎの下葉のみぢうつろひぬながつきの夜の風の寒さに  
もみぢ葉は道もなきまで散りしきぬわが宿をとふ人しなれば  
木の葉ちるあきの山べはうかりけりたへでや鹿の獨鳴くらむ  
九月盡のこゝろを人々におほせてつかうまつら

せじついでに

初瀬山今日をかぎりと眺めつよいりあひの鐘に秋ぞ暮れぬる

## 冬 部

十月一日よめる

秋はいぬ風に木の葉は散りはてし山さびしかる冬は來にけり

初冬の歌の中に

木葉こは散り秋も暮れにし片岡のさびしき森にふゆは來にけり  
夕づく夜澤邊にたてるあしたづの鳴く音悲しき冬はきにけり



初雁の羽風のさむくなるまゝに佐保の山邊はいろづきにけり  
雁なきてさむき嵐のふくなべに立田のやまはいろづきにけり

雁のなくを聞きて

けさ來なく雁がね寒みからころも立田の山はもみぢしにけり

秋のすゑに詠める

雁鳴きて吹く風寒みたかまとの野邊のあさぢは色づきにけり  
雁鳴きてさむきあさけの露霜に矢野のかみ山いろづきにけり  
はかなくて暮れぬと思ふをおのづから有明の月に秋ぞ残れる

惜秋といふことを

長月の有明の月のつきずのみくるあきごとに惜しき今日かな  
年毎に秋の別はあまたあれど今日のくるるぞわびしかりける  
九月霜降秋早寒といふ心を

蟲の音もほのかになりぬ花すよき秋のすゑ葉に霜やおくらむ

暮秋の歌

月夜菊花をたをるとて

ぬれてをる袖のつきかけふけにけりまがきの菊の花の上の露

雨のふれるに庭の菊をみて

宵の村雨イ

露を重みまがきの菊のほしもあへずはるればくもる村雨の空

菊を

ませの内に夜おく露やいかならむぬれつゝ菊の移ろひにける

さほ山のはゝその紅葉しぐれぬるといふことを

人々によませしついでに詠める

さほ山のはゝその紅葉ちどの色にうつろふ秋は時雨ふりけり

水上落葉

くれて行く秋の港にうかぶ木の葉あまの釣する舟かとも見ゆ

深山紅葉

神無月またで時雨やふりにけんみやまにふかき紅葉しにけり

名所紅葉

名所秋月

さよ浪やひらの山風さ夜深くつきかけさびししがのからさき  
月見れば衣手さむしさらしなやをばすて山のみねのあきかせ  
山寒み衣手うすしさらしなやをばすての月にあきふけしかば  
八月十五夜のこよろを

ひさかたの月の光しきよければ秋のなかばをそらに知るかな  
月前擣衣

秋たけて夜ぶかき月の影見ればあれたる宿にころもうつなり  
さよふけてなかばふけ行く月影にあかでやひとの衣うつらむ  
夜をさむみねざめて聞けばながつきの有明の月に衣うつなり

故郷擣衣

みよし野のやましたかぜの寒き夜をたれふる里の衣うつらむ

擣衣をよめる

ひとりぬる寐覺に聞くぞあはれなる伏見のさとに衣うつこゑ

閑居望月

草の庵いほにひとりながめて年もへぬともなき宿のあきの夜の月

荒屋月

浅茅原ぬしなきやどの庭の面おもてにあはれいく夜の月はすみけむ

故郷月

行きめぐりまたも来てみむ故郷のやどもる月はわれを忘るな  
おほはらやおほろの清水里きよみづとほみ人こそくまね月はすみけり

水邊月

わくらばに行きても見しがさめが井のふるき清水に宿る月影

海邊月

たまさかに見る物にもが伊勢の海きよきなぎさの秋の夜の月  
いせの海や浪にたけたる秋の夜の有明の月にまつかぜぞ吹く  
須磨のあまの袖ふきかへす鹽風にうらみてふくる秋の夜の月  
しほがまの浦ふく風に秋たけてまがきがしまに月かたぶきぬ

夕秋風といふことを

秋ならでたど大かたの風の音もゆふべはことに悲しきものを

秋の歌

玉だれのこすのひまもる秋風はイに妹はイこひしらすイに身にぞしみける

秋風はやよはださむくなりはイにけり獨はイやねなむながきこの夜を  
むかし思ふ秋の寐覺の床の上にほのかにかよふ峯のまつかぜ

聲うちそふるおきつしら浪といふ事を人々あま

たつかうまつりしついでに

住吉江イのきしの松吹くあきかぜをたのめて浪のよるを待ちける

月の歌

月きよみ秋の夜いたくふけにけりさほの河原に千鳥しばなく  
天の原ふりさけみれば月きよみ秋の夜いたく更けにけるかな  
我ながらおほえずおつる袖のつゆ月に物おもふ夜頃へぬれば  
思ひ出でて昔を忍ぶ袖の上はイにありしにもあらぬ月ぞやどれる

におほせてつかうまつらせし時よめる

さよがにの玉ぬくいとの緒をよわみ風に亂れて露ぞこほるよ

山邊眺望といふことを

聲たかみはやしにさけぶ猿よりも我どもの思ふ秋のゆふべは  
暮れかよる夕の空をながむればこだかきやまにあき風ぞふく  
秋を経てしのびもかねに物ぞ思ふ小野の山邊のゆふぐれの空

田家露

秋田もる庵いほに片しくわが袖に消えあへぬ露のいくよおきけむ

田家秋夕

かくてなほたへてしあとはいかどせむ山田もる庵の秋の夕暮

海のほとりをすぐとて

ながめやる心もたへぬ和田の原八重の鹽路のあきの夕ぐれ

秋の夕によめる

大かたに物思ふとしもなかりけりたどわがための秋の夕ぐれ

をざさはら夜半に露ふく秋風をやとさむしとや蟲の鳴くわぶいらむ  
にはくさの露の敷そふむらさめに夜ふかき蟲の聲ぞかなしき

故郷蟲

たのめこし人だにとはぬ故郷にたれまつ蟲の夜半に鳴くらむ

蟋蟀

秋深き露寒き夜のきりくすたどいたづらに音をのみぞ鳴く  
あさぢ原露しけき庭のきりくす秋ふかき夜の月に鳴くなり  
秋の夜の月のみやこのきりくす鳴くは昔のかけやこひしき  
きりくす鳴く夕ぐれのおきかぜに我さへあやな物ぞ悲しき  
長月の夜蟋蟀のなくを聞きてよめる

蟋蟀夜半の衣のうすきうへにいたくは霜のおかずもあらなむ

ある僧に衣をたまふとて

野邊みれば露霜さむみきりくす夜の衣のうすくやあるらむ  
りけむい

秋の野におく白露は玉なれやといふことを人々

雲のゐるこずゑはるかに霧こめてたかしの山に鹿ぞ鳴くなる  
月をのみあはれと思ふにさ夜ふけて深山がくれに鹿ぞ鳴くなる  
さ夜ふくるまゝに外山の木のまよりさそふかつきに獨鳴く鹿  
朝まだき小野の露霜さむければあきをつらしと鹿ぞ鳴くなる  
さを鹿のおのが住む野の女郎花花にあかすと音をや鳴くらむ  
はぎが花うつろひ行けば高砂のをへの鹿のなかぬ日ぞなき  
あさなく露にをれふす秋萩のはなふみしだき鹿ぞ鳴くなる  
秋萩のむかしの露にそでぬれてふるきまがきに鹿ぞ鳴くなる

夕鹿

なく鹿のこゑより袖におくか露もの思ふ頃のあきのゆふぐれ

田家秋

山田もる庵にしをれば朝なくたえず聞きつるさをしかの聲  
からころもいな葉の露に袖ぬれて物思へともなれるわが身は

蟲



## 月前雁

九重の雲井をわけてひさかたの月のみやこにかりぞ鳴くなる  
鳴きわたる雁の羽風に雲消えて夜ふかき空にすめるつきかけ  
あまの戸を明けがたの空になく雁の翅のつゆにやどる月かけ  
天の原ふりさけみればますかどみきよき月夜に雁なきわたる  
ぬば玉の夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月かたぶきぬ  
雁をよめる

雁鳴きて秋かぜさむくなりにはけり獨やねなむよるの衣うすし  
秋風にやま飛びこゆる初雁のつばさにわくるみねのしらくも  
あしびきの山とびこゆる秋の雁いくへの霧をしのぎ來ぬらむ  
雁がねは友まどはせりしがらきやまきの柚山きりたよるらし

## 鹿の歌に

妻こふる鹿ぞ鳴くなるをぐら山やまの夕ぎりたちけんかも  
夕されば霧たちくらしをぐら山やまのとかけに鹿ぞ鳴くなる

白露のあだにもおくか葛の葉にたまれば消えぬ風たよぬまにあき風はあやなく吹きそ白露のあだなる野邊の葛の葉の上に

朝顔

風を待つ草の葉におく露よりもあだなるものはあさがほの花

故郷の心を

うづら鳴くふりにし里の浅茅生にいく夜の秋の露かおきけむ

野邊露

ひさかたの空とぶ雁のなみだかもおほあらし野の笹の上の露

夕雁

ゆふさればいな葉のなびく秋風に空とぶ雁のこゑもかなしや

田家夕雁

かりのゐる門田のいな葉うちそよぎたそがれ時に秋風ぞふく

海上雁

和田の原八重のしほ路にとぶ雁のつばさのなみに秋風ぞふく

朝ほらけ萩のうへ吹くあきかぜに下葉おしなみ露ぞこほるよ  
夕のこゝろをよめる

たそがれに物思ひをればわが宿のをぎの葉そよぎ秋風ぞ吹く  
われのみやわびしどは思ふ花薄ほにいづるやどの秋の夕ぐれ

野刈萱

ゆふされば野路の刈萱うちなびき亂れてのみぞ露もおきける

蘭

藤ばかまきてぬぎかけし主やたれ問へどこたへす野邊の秋風

烏狩さかりしにとがみが原といふところにいで侍りし

時荒れたる庵の前に藤ばかまの咲けるを見て

秋風になに匂ふらむふぢばかまぬしはふりにし宿と知らずや

女郎花

よそに見てをらでや過きじ女郎花名をむつましみ露にぬるとも

葛

萩をよめる

秋はぎの下葉もいまだうつろはぬにけさ吹く風は袂さむしも  
みる人もなくて散りにき時雨のみふりにし里のあきはぎの花  
花におく露をしづけみしらすけの眞野の萩原しをれあひにけり

庭萩

秋風はいたくな吹きそ我宿のもとあらの小萩ちらまくも惜し

故郷萩

故郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみ咲きか散るらむヤイ

路頭萩

路のべの小野の夕霧たちかへり見てこそゆかめあきはぎの花

庭の萩わづかにのこれるを月さしいでて後見る

に散りわたるにや花の見えざりしかば詠める

萩の花くれぐれまでもありつるが月出でてみるになきがはかなしきイはかなき

曙に庭の萩を見て

ゆふされば秋風涼したなばたの天の羽ごろもたちやかふらむ

七 夕

天の川きりたちわたるひこ星のつまむかへ舟はやもこがなむ  
こひくゝて稀にあふ夜の天の川河瀬のたづは鳴かずもあらなむ  
七夕の別ををしみあまのがはやすのわたりにたづも鳴かなむ  
いまはしもわかれもすらし棚機の天の河原にたづぞ鳴くなる

秋のはじめ月あかよりし夜

天の原くもなきよひにひさかたの月さえわたるかさよぎの橋  
秋風に夜のふけゆけばひさかたの天の河原につきかたぶきぬ  
七月十四日の夜勝長壽院の廊下に侍りて月さし

入りたりしに詠める

ながめやる軒のしのぶの露の間にいたくなふけそ秋の夜の月

草花

野邊にいでてそほちにけりなから衣きつゝわけゆく花のしづく華に

野となりてあとは絶えにし深草の露のやどりに秋は來にけり  
すむ人もなき宿なれど萩の葉の露をたづねてあきは來にけり

白露

秋ははや來にけるものを大かたの野にも山にも露ぞおくなる  
今よりは涼しくなりぬ日ぐらしの鳴く山かけの秋の夕かぜ  
蟬のなくを聞きて

吹く風は涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

山家早秋

ことしけき世をのがれにし山里にいかで尋ねて秋のきつらむ  
ひとり行くそでよりおくか奥山の苔のとほその路のゆふつゆ

秋のはじめに詠める

天の川みなわさかまきゆく水のはやくも秋のたちにけるかな  
久かたの天の河原をうちながめいつかとまちし秋も來にけり  
ひこほしのゆきあひをまつ久方の天の河原にあきかぜぞ吹く

六月祓

わが國のやまとしまねの神たちをけふの禊みそぎに手向つるかな  
あだ人のあだにある身のあだ事をけふ水無月の祓みそぎひすてつといふ

秋部

七月一日のあした詠める

きのふこそ夏はくれしかあさ戸出とでの衣手さむし秋のはつかぜ

秋風

ながむれば衣手さむしゆふづく夜さほの川原のあきのはつ風  
ゆふさればころもで涼したかまとのをのへの宮の秋のはつ風

海邊秋來

霧たちて秋こそそらに來にけらしふきあけのはまの浦の鹽風  
うちはへて秋は來にけり紀の國やゆらのみさきの海士のうけ繩

初秋の歌

かきつばたおふるさはべに飛ぶ螢數こそまされ秋やちかけむ

蟬

夏山に鳴くなる蟬の木がくれて秋ちかしとやこゑも惜しまぬ  
泉川はよそのもりになく蟬のこゑのすめるはなつのふかさか

夜風涼衣

夏ふかみ思ひもかけぬうたゝねのよるの衣にあきかぜぞ吹く  
みな月廿日あまりのころ夕の風すだれ動かすを

詠める

秋ちかくなるしるしにや玉すだれこすのまとほし風の涼しさ

夏の暮によめる

夏はたごよひばかりと思ひねの夢路にすどし秋のはつかぜ  
昨日まで花の散るをぞ惜みこし夢かうつよか夏も暮れにけり  
みそぎする河せにくれぬ夏の日の入相のかねのその聲により  
襖みそぎするかやの軒端にひくしでのまつはれつきて夏をとどめむ



袖ぬれて今日ふく宿のあやめ草いづれの沼にたれか引きけむ

菖蒲

五月雨に水まさるらむあやめ草うれ葉かくれて刈る人もなし

五月雨

五月雨は心あらなむ雲間より出でくるつきを待てばくるしき

照射

さ月山おほつかなきを夕づく夜こがくれてのみ鹿や待つらむ

撫子

ゆかしくば行きても見ませゆき島のいはほにおふる撫子の花

蓮露似玉

さ夜ふけてはすのうき葉の露の上に玉とみるまでやどる月影

河風似秋

岩くどるみづにや秋の立田川かはかぜすどしなつのゆふぐれ

螢火亂飛秋已近といふ事を

有明の月は入りぬる木の間より山ほとよぎす鳴きていづなり  
さみだれに夜の更け行けば時鳥ひとり山邊をなきて過ぐなり  
五月雨さみだれの露もまだひぬ奥山のまきの葉がくれ鳴くほとよぎす  
五月雨のくものかよれるまきもくのひはらがみねに鳴く時鳥  
葛城や高間のやまのほとよぎす雲井のよそに鳴きわたるなり  
たまくしけはこねの山の郭公むかふのさとにあさなく鳴く  
五月山木だかきみねのほとよぎすたそがれ時の空に鳴くなり  
みなひとの名をしもよぶや郭公鳴くなるこゑの里をとよむる  
ほとよぎす聞けどもあかず橘の花ちるさとのさみだれのころ

故郷盧橘

いにしへをしのぶとなしに故里のゆふべの雨に匂ふたちばな

盧橘薰夜衣

うたよねの夜の衣にかをるなりものおもふ宿の軒のたちばな  
五月雨ふれるにあやめふくを

なつごろもたちしときよりあしびきの山郭公なかぬ日ぞなき

山家郭公

山ちかくいへるしをれば時鳥なくはつごゑをわれのみぞ聞く

夕郭公

ゆふやみのたづくしきに郭公こゑうらがなし道やまどへる

深夜郭公

さつきやみおほつかなきに郭公ふかき嶺より鳴きていづなり

さつきやみ神なびやまの時鳥つまごひすらし鳴く音かなしも

さつきやみさ夜ふけぬらし時鳥神なびやまにおのがつまよぶ

雨いたく降れる夜ひとり時鳥を

ほとよぎすなく聲あやな五月きつやみきく人なしみ雨は降りつよ

郭公

あしびきの山時鳥こがくれて目にこそ見えねおとのさやけさ  
足引のやまほとよぎすみ山いでて夜ふかき月の影に鳴くなり

更衣をよめる

をしみこし花のたもともぬぎかへつ人の心ぞ夏にはありける

夏のはじめ

なつごろもたつきの山の郭公いつしか鳴かむこゑを聞かばや  
春過ぎていくかもあらねどわが宿の池の藤波うつろひにけり

卯花

わが宿の垣根に咲けるうの花はうき事しけき世にこそありけれ  
かみまつる卯月になればうの花のうき言の葉の數やまさらむ

夏の歌

五月待つ小田のますらを暇いとまなみせきいるよみづに蛙なくなり

待郭公

郭公かならず待つとなけれども夜なくめをもさましつるかな  
時鳥聞くとはなしにたけくまの待つにぞ夏の日かすへぬべき  
初はつこゑを聞くとはなしにけふもまた山時鳥待たずしもあらず

春の暮をよめる

春ふかみあらしもいたく吹く宿は散り残るべき花もなきかな  
眺めこし花も空しく散りはてはかなく春のくれにけるかな  
いづかたに行き歸るらむ春霞立ち出でて山の端にも見えなくなむいに  
行く春のかたみと思ふにあまつ空有明の月はかけもたけにき

三月盡

朝ぎよめ格子なあけそゆく春をわがなむ閨なむの中にしばしとどめむ  
惜むともこよひあけなば明日よりは花の袂をぬぎやかへさむ  
正月ふたつありし年の三月郭公のなくを聞きて

きかざりきやよひの山の郭公春くはよれる年にはありしかど  
屏風に春の景色を繪がきし所を夏見てよめる

見てのみぞおどろかれぬる烏羽玉うはたまの夢かと思ひし春の残れる

夏部

水底款冬といふ事を人々あまた仕つかうまつらせし序ついでに

こゑたかみかはづなくなり井手の川岸の款冬いまは散るらむ  
立ちかへり見れどもあかず山吹の花散るきしのはるの川なみ

款冬を折りてよめる

いまいくか春しなれば春雨のぬるともをらむやまぶきの花

款冬をよめる

わが宿の八重の山ぶき露を重みうち拂ふ袖のそほかをりぬろイちつるかな

雨のふれる日款冬をよめる

春雨の露のやどりを吹くかぜにこほれてにほふやまぶきの花

款冬に風の吹くをみて

わが心いかにせよとか山吹のうつろふはなのあらしたつみむ

款冬の花を折らせて人のもとにつかはすとて

おのづからあはれともみよ春ふかみ散り残るきしの山吹の花  
散り残るきしの山吹春ふかみこのひと枝をあはれといはなむ

まると弓風流に大井川をつくりて松の藤のかよれ  
る所を

立ちかへり見てもわたらむ大井川かはべの松にかよる藤なみ  
屏風の繪にたごの浦に旅人藤の花を折りたる所

たごの浦の岸の藤波立ちかへりをらではゆかじ袖はぬるとも  
池邊藤花

いとはやも暮れぬる春かわが宿の池の藤なみうつろはぬまに  
故郷の池の藤なみたれ植ゑてむかしわすれぬかたみなるらむ

河邊款冬

やまぶきの花のしづくに袖ぬれてむかしおほゆる玉川のさと  
款冬くまふゆきのはなの盛になりぬれば井手のわたりにゆかぬ日ぞなき  
款冬をよめる

玉もかる井手のしがらみ春かけて咲くや川せのやまぶきの花  
玉藻かる井手のかはかせ吹きにけりみなわにうかぶ款冬くまふゆきの花

瀨波がたこぎいづる舟のめもはるに霞に消えてかへる雁がね

如月きさらぎの廿日あまりの程にや有けむ北むきの縁に

たち出でて夕暮の空を眺め一人をるに雁の鳴く

を聞きてよめる

ながめつゝおもふもかなしかへる雁行くらむ方の夕暮のそら

屏風の繪に花散る所に雁のとぶを

雁がねの歸るつばさにかをるなり花をうらむる春のやまかぜ

喚子鳥

あをによしならの山なる呼子鳥いたくな鳴きそ君もこなくに

雉

高まとのをのへの雉こひす子朝なくつまにこひつゝ鳴く音悲しも

おのが妻こひわびにけり春の野にあさる雉子の朝なく鳴く

堇菜

あさぢ原行方も知らぬ野べに出でて故郷人はすみれつみけり



春ふかみ花散りかよる山の井はふるき清水にかはづ鳴くなり  
みちすがら散りかふ花を雪と見てやすらふ程にこの日暮しつ  
櫻をよめる

櫻花さける山路やとほからむ過ぎがてにのみはるのくれぬる

春山月

風さわぐをちのと山に雲晴れてさくらにくもるはるの夜の月

春月

ながむればころもでかすむひさかたの月の都の春の夜のそら

故郷春月

故郷は見しごともあるずあれにけり影ぞむかしの春のよの月  
誰すみてたれながむらむふるさとの吉野のみやの春の夜の月

海邊春月

住吉の松の木がくれ行く月のおほろにかすむはるの夜のそら

海邊春望

風吹けば花は雪とぞ散りまがふ吉野のやまははるやなからむ  
春は来て雪は消えにし木のもとに白くも花の散りつもるかな  
山ふかみたづねて來つる木の下に雪とみるまで花ぞ散りける

雨中夕花

やまざくらあだに散りにし花の枝にゆふべの雨の露ぞ残れる  
山ざくら今はのころのはなの枝にゆふべの雨の露ぞこほるよ

故郷惜花

今年さへとはれで暮れぬ櫻花春もむなしき名にこそありけれ  
散りぬればとふ人もなし故郷は花をむかしのあるじなりけり  
さよ波やしがのみやこの花盛かぜよりさきにとはましものを

落花をよめる

はるふかみ嵐の山のさくら花咲くと見しまに散りにけるかな  
春くればいとかの山のいとざくら風にみだれて花ぞ散りける  
さけばかつうつろふ山の櫻花はなのあたりにかぜな吹きそも

山櫻ちらば散らなむをしけなみよしや人見ず花の名だてに  
瀧の上のみふねの山のやまざくら風にうきてぞ花も散りける  
山風のさくらふきまく音すなりよし野の瀧のいはもとどろに

湖邊落花

山風のさくらふきまき散る花のみだれて見ゆる志賀のうら波

水邊落花

やまざくら木々の梢にみしものを岩間の水にあわとなりぬる  
行く水に風のふきいるよ櫻花ながれて消えぬあわかとぞ見る  
さくら花ちりかひかすむ春の夜のおほろ月夜のかものかは風

春風

さくら花咲きてむなしく散りにけり吉野の山はよしはるの風

名所落花

さくらばなうつろふときはみよし野の山下風に雪ぞ降りける

花似雪

あふさかにあらしの風、に散る花をしぼしとどむる關守ぞなき  
逢坂のせきの關屋のいたびさしまばらなればや花のもるらむ

花厭風

咲きにけりながらの山の櫻花かぜに知られて散りもすぎけんいわきなむ

花恨風

心うきかぜにもあるかな櫻花さくほどもなく散りぬべらなるりい

三月すゑつかた勝長壽院にまうでたりしにある

僧かけに隠れをるを見て花はと問ひしかば散り

ぬとなむ答へ侍りしを聞きて

行きて見むと思ひし程にちりにけりあやなの花や風たよぬまに

さくら花さくと見しまに散りにけり夢かうつよかはるの山風

人のもとに詠みてつかはしける

春くれど人もすさめぬ山ざくら風のたよりにわれのみぞとふ

屏風に山中の櫻のさきたる所

櫻花咲き散る見ればやまざとにわれぞおほくの春はへにける

尋花

花を見むとしも思はでこしわれぞふかき山路に日數へにけるリイ

屏風の繪に旅人あまた花の下にふせる所

いましはと思ひしほどに櫻花ちる木のもとに日かずへぬべし  
木のもとにやどりはすべし櫻花ちらまくをしみ旅ならなくに  
木のもとにやどりをすれば片しきのわが衣手に花は散りつよ  
木のもとの花のしたぶしよごろへのわが衣手に月ぞなれぬる

故郷花

たづねても誰にかとはむ故郷の花もむかしのあるじならねば  
里はあれぬ志賀の花藺そのかみのむかしの春や戀しかるらむ

關路花

たづね見るかひはまことに相坂の關路に匂ふ花にぞありける  
名にしおはどいざ尋ねみむあふ坂の關路に匂ふ花はありやと

屏風に吉野山かきたる所

みよし野の山にこもりし山人や花をばやどのものに見るらむ

名所櫻

おとに聞くよし野の櫻咲きにけり山のふもとにかよるしら雲

遠山櫻

かづらきや高間の櫻ながむれば夕るるくもにはる風ぞ吹くイさめぞ降る

雨中櫻

雨ふるとたちかくるれば山櫻はなのしづくにそほちぬるかな

今日もまた花にくらしつ春雨の露のやどりをわれにかさなむ

山路夕花

みちとほみ今日こえくれぬ山櫻花のやどりをわれにかさなむ

屏風繪に山家に花見る所

時の間とおもひてこしを山里に花見るみるとながるしぬべし

同じ心を入々に詠ませしついでに

雨中柳

青柳のいとよりつたふしらつゆを玉と見るまで春雨ぞ降る  
水たまる池のつよみのさしやなぎこの春雨に萌えいでにけり  
あさみどり染めてかけたる青柳の絲に玉ぬくはるさめぞ降る

早蕨

早蕨さわらびのもえいづる春になりぬれば野邊の霞もたなびきにけり  
花をよめる

櫻ばな散らまくをしみうちひさす宮路の人ぞとのるせりけり  
櫻花ちらばをしけむたまほこの道ゆきぶりに折りてかざさむ  
みよし野の山したかけの櫻ばな咲きてたてると風に知らすな  
弓あそびせしに芳野山のかたをつくり山人の花

見たる所をよめる

み吉野の山の山守花を見てながくし目をあかずもあるかな  
みよし野の山に入りけむ山人となり見てしがな花にあくやと

梅香薰衣

梅が香はわがころもでにほひ來ぬ花よりすぐる春の初風

梅花風に匂ふといふ事を人々に詠せ侍りし序ついでに

梅が香をゆめの枕にさそひきてさむる待ちける春のはつかぜ  
このねぬるあさけの風にかをるなり軒端の梅のはるのはつ花

梅花厭雨

わが宿の梅の花さけり春雨はいたくな降りそ散らまくもをし

屏風の繪に梅花に雪の降りかゝるを

梅の花いろはそれともわかぬまで風にみだれて雪はふりつゝ

梅の花さける所

わがやどの梅のはつはな咲きにけり待つ鶯はなどか來なんいかぬ

柳

春くればなほいろまさる山城のときはの森のあをやぎのいと  
あをやぎの絲もてぬけるしらつゆの玉こき散らす春のやま風



古寺のくち木の梅もはるさめにそほちて花もほころびにけり

## 梅の花をよめる

梅が枝にこほれる霜やとけぬらむほしあへぬ露の花にこほれる  
春風はふけどふかねど梅の花さけるあたりはしるくぞありける  
梅の花さけるさかりを目のまへにすぐせる宿は春ぞすくなき  
わが宿の八重の紅梅咲きにけり知るも知らぬもなべてとはなむ  
咲きしよりかねてぞをしき梅の花ちりの別はわが身と思へば  
わが袖に香をだに残せ梅の花あかで散りぬるわすれがたみに  
さりともと思ひしほどに梅の花散りすぐるまで君が來イまさぬ  
鶯はいたくなわびそ梅のはなことしのみ散るならひならねば

## 故郷梅花

年ふれば宿は荒れにけり梅のはな花はむかしの香に匂へども  
故郷にたれしのべとか梅の花むかしわすれぬ香にほふらむ  
誰にかもむかしをとほむふるさとの軒端の梅は春をこそしれ

花間鶯

春くればまづ咲く宿の梅の花香をなつかしみうぐひすぞ鳴く

雨後鶯

春雨の露もまだひす梅が枝にうは毛しをれてうぐひすぞ鳴く

雪中若菜

若菜つむころもでぬれてかた岡のあしたの原にあは雪ぞふる

屏風の繪に若菜つむ所

春日野のとぶ火の野守今日とてや昔かたみにわか菜つむらむ

屏風の繪に春日山に雪ふれるところ

松の葉のしろきを見れば春日山木の芽もはるの雪ぞ降りける

残雪

春來ては花とかみえむおのづから朽木のそまに降れるしら雪

雨そほふれる朝に勝長壽院の梅ところへ咲き

けるを見て花にむすびつけ侍りし

春はまづ若菜つまむとしめ置きし野邊とも見えす雪のふれよば

故郷立春

朝がすみたてるを見ればみづのえの吉野の宮に春は來にけり

海邊立春

しほがまのうらの松風かすむなり八十島かけて春やたつらむ

子日

いかにして野中の松のふりぬらむ昔の人のひかずやありけむ

霞

大かたに春のきぬれば春がすみ四方の山邊に立ちみちにけり  
み冬つき春し來ぬればあを柳のかづらき山にかすみたなびく  
おしなべて春は來にけり筑波嶺つくはなねのこのもかのもとに霞たなびく

鶯

ふか草の谷のうぐひす春ごとにあはれむかしと音をのみぞ鳴く  
草ふかき霞の谷にはぐくまるうぐひすのみやむかし戀ふらしんい

# 金槐和歌集

## 卷之上

### 春部

正月一日よめる

今朝みれば山もかすみて久方のあまのはらより春は來にけり

春のはじめの歌

九重ここのへの雲井にはるぞ立ちぬわらんいらしおほうち山にかすみたなびく

山里に家るはすべしうぐひすのなく初はつぎぎのきかまほしさに  
うちなびき春さりくればひさぎおふるかた山かけに鶯ぞ鳴く

春のはじめ

かきくらしなほ降る雪のさむければはるとも知らぬたにの鶯

拾遺愚草終

いける世にそむくのみこそ嬉しけれあすとも待たぬ老の命は

同時

按察入道

君がいるまことの道の月のかけ夢とみし世をいまやてらさむ

かへし

やみ深きうき世の夢のさめぬとて照さば嬉しありあけのつき

おどろかじ夢のまくらによる波も聲こそかはれ袖は馴れにき

船中述懐

朝なぎの船出にだにも忘ればやくがに沈めるあきのこよろを

厭離穢土

濁江になほしも沈むあしのねの厭ふふしのみしけきころかな

欣求淨土

思ふかな咲き散る色をながめてもさとひらけむはなの臺うたなを

掬龜井水言志

もろ人のむすぶちぎりは忘るなよかめ井の水に劫はへぬとも

於難波精舍卽事

吹き拂へこよろの塵もなにはがたきよきなぎさの法のりの浦かぜ

遁世のよし聞きて

家長朝臣

黒染の袖のかさねて悲しきはそむくにそへてそむく世のなか

かへし

心うき里と知りにしこひなれば輪廻のかすみいまやはるらむ

中務

しのぶらむ涙にくもる影ながらさやかに照すありあけのつき

文治の頃般富門院大輔天王寺にて十首の歌よみ

侍りしに

月前念佛非尺教題依追書入在奥

西を思ふなみだにそへてひく玉にひかりあらはす秋の夜の月

草庵忌歸

とまりなむ暮るれば宿る露のまもおきどころなき身は隠れけり

曉天懷舊

知らざりつ身はありあけのつきもせず昔になして忍ぶべしとも

薄暮親身

消え果てむけぶりのはてと眺むればなほあともなき夕暮の雲

旅宿波聲



春かけて鳴く鳥の音に雪消えてひかりを添へよあけほの空

高津内親王

木にもあらぬ竹の下根のうきふしに空しき世々をまづや悟らむ

齋宮女御

誘はなむかよひし琴の音をそへてむかふる西のみねの松かぜ

廣幡御息所

うつしおく蓮の上にみがかなむかきほに吹けるなでしこの露

在原中將言

藻鹽たれなけきをすまの道かへてうき世吹きこせ關の浦かぜ

小野宰相

泣く涙わかれば雨とふりぬともまことの道にかへれとぞ思ふ

衣通姫

むらさきの雲間にけふやむかふらむ待ちには待たぬ心通はど

大伴坂上郎女

住江殿にて供養すべしとて人のすゝめ侍りし解

脱房のためとて法花經大意

法の花菊のあさつゆやどりきて漏すかすなきひかりをぞ待つ

海路懷舊

かへりみば行く方したふしるべせよ南のうみの深きちかひに

舍利讚歎の心を

消えせずな鶴の林のけぶりにも残すひかりのつゆのかたみは

金光明最勝王經王法正論品歌國內居人盛蒙利益

四方のうみ夜わたる月にとざしせで曇なき世の御影をぞしる

亡き人の名を各とりて卒都婆供養すとて人のす

すめし歌

磐姫皇后

黒髪のながきやみぢも明けぬらむおきまがふ霜の消ゆる旭に

二條后

六 卷

照さなむ世々もかぎらぬ秋の月入るやまのはにひかり隠さで

七 卷

むかはれよ木葉しぐれし冬の夜をはぐくみ立てし埋火のもと

八 卷

歴劫の弘誓ぐびのうみにふねわたせ生死しやうじのなみはふゆあらくとも

無量義經

たのもしな光さしそふさかづきを世をてらすべき初はじめとや見ぬ

普賢經

朝日かけ思へばおなじよるのゆめわかれに絞しぼるしのとめの露

心 經

むなしさを三世の佛のはとならばことろの闇を空にはるけよ

無量義經の心を人のよませしに

渡し守いだす舟路はほどもあらじ身はこの岸に霧はれずとも

律師默因すゝめ法花經普賢品歌

こち風に散りしくはなもにほひ來てわしの御山の主をぞとふあるじ

母の週忌に法花經六部みづから書き奉りて供養

せし一部の表紙に繪に書かせし歌

一 卷

あはれしれ春のそなたをさす光我が身につらききさらぎの空

二 卷

をしますよあけぼの曙かすむはなのかけこれとおもひの下にふるさと

三 卷

時鳥たづぬるみねも惑はましかりねやすむるしるべならずば

四 卷

身をしほる山井の清水おとちかし先だつ人にかぜやすどしき

五 卷

女郎花まなはしうけとる花のあとしあれば消えしうは葉に露な亂れそ

尋ね行く清水にちかき道ぞこれ御法のはなのつゆのしたかけ

報恩會提婆品

わたつみの底の玉もにやどかりて南のそらをてらすつきかけ

報恩會勸持品

霧晴れてゆくすゑてらす月かけをよもさらしなと何眺めけむ

雲の雨漏品出

いかにして初音はわかき鶯のふかき野やまのはるをつけけむ

分別功德品

飛ぶ鳥のあすか川かぜそれもかと袖吹きかへし花ぞふりしく

屬累品

三たびなづる我が黒髪の末までもゆづる御法を長くたのまむ

亡父十三年の忌日に遺言に侍りしかば歌よむ人

人すゝめて結縁經供養し侍りしに嚴王品

この道をしるべと頼む跡しあらば迷ひし闇もけふははるけよ

年を経て子の日になると姫小松ひくにぞ千代の影も見えける

果

袖の香をよそへてうゑし橘もあさ置くしみにみをむすぶまで

報

知らぬ世を思ふもつらき目の前にまたなけき積むのちの烟よ

本末究竟等

浅茅生やまじるよもぎの末葉までもとの心のかはりやはする

人のよませ侍りし化城喩品歌

假の宿にたとふる法のりをあふけども**しば**しやすめぬ身の憂かな

報恩有五百弟子品

戀しとてこがるゝ色もあらし吹くはゝそが原に人もやどらで

同會人記品

諸共に思ひそめけるむらさきのゆかりの色も今日ぞ知らるゝ

大輔勸進住吉一品經法師品

とて十如是の心を

相

跡もなく空しき空にたなびけど雲のかたちはひとつならぬを

性

濁り江やを川のみづにしづめどもまことはおなじ山の端の月

體

かりそめに鶴の林の名を立てよけぶりの後のすがたをぞ見る

力

みなれざをいはまに波はちかへども撓まず上るうぢの川ふね

作

春の田にこゝろをつくる山賤やまがっも植うる早苗ぞいろに出でける

因

種まきし春を忘れぬつまなれやかきほに忍ぶやまとなでしこ

縁

み山路は紅葉も深きことろあれや嵐のよそにみ雪まちける

海邊冬月

くもりなきはまのま砂に君がよのかずさへ見ゆる冬の夜の月

川邊落葉

染めし秋を暮れぬとたれかいはた川また浪こゆる山姫のそで

旅宿冬月

岩波のひどきは急ぐたびの庵をしづかに過ぐる冬のつきかけ

靄中殿

冬の日をあられふりはへ朝立てば浪に浪こすさのつきかけ

松風イ

夕神樂

神垣やけふの空さへゆふかけてみむろの山のさかき葉のこゑ

釋教

後法性寺入道關白殿舍利講に詩歌結縁あるべし



風の音もたゞよの常に吹かばこそみ山出でての形見ともせめ

瀧間月

やはらぐる光そふらし瀧の絲のよるとも見えすやどる月かけ

寺落葉

寺ふかき紅葉の色にあとたえてからくれなるを拂ふこがらし

本宮にて又講ぜられし遠近落葉

こけむしろみどりにかふる唐錦一葉のこらぬをちのこがらし

暮聞河波

諸人のことろのそこも濁らじなゆふべにすめる河なみのこゑ

道のほどの歌山路月

袖の霜にかけうちはらふみ山路もまだ末とほきゆふ月夜かな

曉初雪

冬もけさ今年の雪をいそぎけり夜をこめて立つ嶺のあけほの

深山紅葉

御熊野詣の御供に参りて歌つかうまつりし中に

本宮寄社祝

千早振熊野の宮のなぎの葉をかはらぬ千代のためしにぞ折る

川千鳥

さよ千鳥八千代とかみやをしふらむ清きかはらに君祈るなり

山家月

み山木のかげより外にくまもなしあらしにくちしかり庵の月

新宮海邊殘月

わたつ海もひとつに見ゆる天の戸のあくるもわかす澄める月影

庭上冬菊

霜おかぬ南のうみのはまびさし久しくのこるあきのしらぎく

曉聞竹風

あけぬるか竹の葉風のふしながらまつこの君の千代ぞ聞ゆる

那智深山風

ことわりと思ひし事を北野にて祈り申すとて

千早振かみの北野にあとたれて後さへかよるものやおもはむ

その事ばかりしるしあらたになむ侍りけり日吉

社にこもりて思ひつどけよる事の中に

見し夢の末たのもしくあふことに心よわらぬものおもひかな  
うしと世を三歳は過ぎぬ憂へつゝかくて嵐に身やまじりなむ  
數へやる程やなけきを祈りけむ神にまかせて音をぞ泣きつる  
捨てはつる契あればぞ頼みけむ神のなかにもひとのなかにも  
承久元年九月日吉の歌合とて内よりの仰せごと

にて六首の中

社頭松風

頼みこししるしもみつの川よどにいまさへ松の風ぞひさしき

湖上眺望

鳩の海やあさなゆふなに眺めしてよるべ渚の名にやくちなむ

昔八幡の歌合とて人のよませ侍りし社頭述懐

頼むかな雲井にほしをいたゞきて我がすみかてふもとの誓を

住吉并びに依羅社に求子の歌よみてたてまつる

べき山祠官申しよかば奉りし

住吉の松がねあらふしき波にいのるみかけは千代もかはらじ  
君が世はよさみのもりのとことにはに松と杉とやちたび榮えむ

承元二年の秋少將具親三社にて歌講すべきよし

申しよ中に

住吉

つれもなくなほ住吉に手向草引きすてらるよあとのくちばを  
かきつめし松のしき波色わかぬ藻屑なりけりみさへくちぬる

廣田

あはれびを廣田の濱に祈りても今はかひなき身のおもひかな  
海士の住む里のしるべの幾年に我からたへでみるめ刈りけり

霜のたて山のにしきのよを経てはともなふ蟲や弱り果つらむ  
思ひやるまくらの霜も冴え果てよみやこのゆめも嵐こそ吹け  
さだめなくしぐるよ雲の行方にもそなたの空を忘れやはする  
大方のみを知る雨におきそへてなほ色ふかきあきのつゆかな  
古里のしぐれにつけて言傳てよひとかたならず思ひやるとは  
女院かくれさせおはしまして典侍世をそむきに

しころとぶらひつかはして

前宮内卿

花の色もうき世にかふる墨染の袖やなみだになほしづくらむ  
かへし（あはれとも見き）  
墨染をはなのころもにたち返しなみだの色はあはれとも見き

神祇

後京極攝政殿伊勢勅使の時外宮にまゐりて  
契ありて今日宮川のゆふかつらながき世までもかけて頼まむ

惜むべき人はみじかき玉のをにうき身ひとつの長き夜のゆめ  
けふごとに草葉のつゆを踏みわけて跡なききみの跡ぞ悲しき  
今よりのけふこむ人を數へつよこれやなごりの形見なりけり

つぎの日

老いらくの思ぞ空に知られにしうきをかさねしいにしへの夢  
思ひきやとばかりは見しとしふも今年を知らぬ恨なりけり  
知らざりし誰もえ知らじいにしへや跡なき君の跡を見むとは  
忍ぶべきけふこむ人のその數に残るべしとはおもはざりしを

老耄籠居の後秋の頃母のおもひなる人に

變りにしたもとの色もいかならむしぐれはてぬる四方の梢に  
いかばかり秋の夜すがらしのぶらむ久しきはてのさらぬ別を  
露時雨袖しぐれになごりをしのべとや秋をかたみのわかれなりけむ  
形見とていくかもあらぬ秋の日にうつろひまさる白菊のはな  
亡き人をこふる涙やきはふらむ落つるこの葉にあらし立つ頃

かへし

とく袖もなかくこそはあかしつれ空しき床の秋のこのごろ  
とはれても常世はなれし雁が音の秋のわかれば悲しかりけり

承元四年三月七日左大將殿へ

後れじと慕ひし月日うきながらけふもつれなく巡りあひつゝ

かへし

大將殿

かすみにし今日の月日をへだてよもなほ面影の立ちぞ離れぬ

入道寂蓮身まかりぬと聞きて雅經の少將のもと

へ

たまきはる世のことわりもたどられずなほ恨めしき住吉の神

承久元年六月故女院の御忌日蓮華心院に参りて

思ひ出づる事どもおほくて参られたりし女房の

うち

老いらくのつらき別はかずそひて昔見し世のひとのすくなき

とほざかる月日のうさを數へても面影のみぞいとどけぢかき  
頼まれぬ夢てふもののうき世には戀しき人のえやは見えける  
うかりける彌生の花のちぎりかな散るをや人は習ひなれども  
神になほ君を祈りしさかきばのかけにも見えし玉かつらかな  
いはへども我がため露ぞこほれそふ藤の盛をまつぞふりつよ

建永元年七月和歌所當座

寄風懷舊

月日經て秋のこのはを吹く風にやよひの夢ぞいとどふり行く

雨中無常

よそふれば重ねてもろき末の露身をしる袖のうへのむらさめ

六條三位家衡卿人のおくれて歎くと聞きて申し

おくりし

とどむてふしがらみもがな別路わかれぢのあきの涙をなににせくらむ  
鳴き渡るよさむの風のいかならむとこよはなれしかりの翼に



思ひきや待ちし彌生の花の色に花たちばなのよすがばかりと  
あだに見し花のことやは常ならぬうき春風はめぐりあふとも  
夜の鶴のこゝろのいかにとまりけむ衣の色にたれもなく音を  
思ひかね一人なごりを尋ねつゝその世にも似ぬ宿を見しかな  
うたがひて植ゑしこずゑは青葉にて人目は庭の外に枯れにき  
日をさして急ぎし池の花のふね水草のなかにうき世なりけり  
おもひ川あはれうき世の増りつゝいかばかりなる涙とか知る

又の年三月七日かもに御幸侍りしつぎの日大僧

正十首の御歌のかへし

うきながら昨日はそれもしのばれきまだ知らざりし去年の曙あけぼの  
今朝はいとど涙ぞそでにふりまさる昨日も過ぎぬ去年も昔と  
おくれてはやすく過ぎける月日かな慕ひし道はゆく方もなし  
大方はたどあけぬ夜の心地して知らずことしの昨日今日とも  
わすられぬ命のかぎりなけきしてつらきはもとの情なりけり

今はたゞ我が身ひとつの思ひがはうたかた消えてたきつ白浪  
おなじころ人のとぶらへしかへし

道かはる烟のはてに立ちそめて夢ならねばぞ明けくらすらむ  
見しもうき變らぬ夢とかつきけど我が心にはためしだになし  
三笠山あふぎし道も頼まれず世のことわりにまどふこゝろは  
見ぬ人も知らぬも涙かゝる世に馴れて背かぬそでのつれなさ  
面影はまだかぎりともたどられずいとしも人の賤ちぢのをだまき  
世の中はうきにあふぎのあきはてぬ何の別のわすれがたみぞ  
さきだてゝ忍ぶべしとは知らざりき思へおもひのほかの涙を  
朝露にぬれての後の世も知らずころもに染めぬ色ぞかなしき  
おなじ年の夏ごろの事にや人に

我がそむる袂の色のひまもがなそれより深きことのはも見む  
無くば世に偲おもばれむとは見し人ぞ後おるゝ身こそ思ふには似ね  
あけくれも覚えぬ月日へだたりてそれかの雲のそらも頼まず

かりそめの宿にせき入れし池水に山もうつりて影を戀ふらし  
いつまでか誰もいく田の杜の露消えにし跡を戀ひつよもへむ  
たまきはる命はたれもなきものを忘れねこゝろ思ひかへして  
消えぬべし見れば涙の瀧つ瀬にうたかた人のあとをこひつよ  
こひわぶる花のすがたはかけろふの燃えし烟を胸にたきつよ  
せきもあへぬ涙のとかくもれ月かすみ親しき空とたのまむ  
紅のなみだふり出しはる雨にあらし身を知るそでのたぐひは  
夢ならであふ夜も今は白露のおくとはわかれぬとは待たれて  
埋もれぬ玉のこゑのみとまり居てしたひかねたる昔の下かな  
かすみにしうきものからの春の空くるれば悲しそれも形見に  
山の色はせき入れし水にうつるとも戀しき影をいつか見るべき  
春の夢のかぎりに聞きしゆふべより生田のもりの秋も恨めし  
世々ふとも忘れじこゝろたまきはるあたの命に身こそ變らめ

かへし

むらさきの色と聞くにぞ慰むる消えけむくもは悲しけれども

後京極故攝政殿俄に夢の心地せし御事のおくる

日宮内卿とぶらひ遣したりし返事のついでに

昨日までかけと頼みしさくら花ひとよの夢のはるのやま風

かへし

悲しさの昨日のゆめにくらぶればうつろふ花もけふのやま風

その後日かずへてまたあれより

櫻花こふとも知らじかけろふの燃ゆる春日になくくぞふる  
春の夜のおほろ月夜もおほろけの夢とも見えぬ花のおもかけ  
泣くなみだこのめもかれし春の夢にぬるゝ袂は君もかはかじ  
ふしてこひ起きても惑ふ春の夢いつか思の覺めむとすらむ  
思ひやるこけの下こそかなしけれかすみ谷の春のゆふぐれ  
仰ぎ見しかりの霞に消えしより空しく暮るゝはるのそらかな

なほのこれあけ行く空の雪のいろこのよの外の後のながめに

御かへし

衣手にはてなきなみだまづ暮れてかはる外山の雪をだに見ず  
雪つもるふり行くかたぞあはれなる思ひなれたる別なれども  
おなじ世になれしすがたは隔りて雪つむこけの下ぞしたしき  
去年は見ぬ昨日のゆめのかずそひて枕に似たるのきの雪かな  
心もてこの世の外をとほしとていはやおくのおくの雪を見ぬかな

建久元年二月十六日西行上人身まかりにけるを  
はりみだれざりけるよし聞きて三位中將のもと

へ

望月のころはたがはぬ空なれど消えけむ雲のゆくへかなしな

上人先年詠すといふ

願くば花の下にて春しなむその二月さつきの望月の

頃 今年十六日望月也

我が宿はけさこそいとどあはれなれ秋におくるゝ庭を眺めて  
君はさは思ひしらでやたどるらむ願ふすみかぞ秋のとなりも  
一人のみ夜もあけやらぬ秋の夢さはまたさめぬ君もありけり  
秋も冬もながめばかりは君をのみたのむの雁を月にまかせて  
言の葉に結ぶちぎりは見えねども頼めといとどいはしろの松  
おなじ日女院大輔に

とどまらぬ秋の別のかすくゝにみなれし人のなきぞおほかる  
かへし

つくづくとひとり眺めて思ひ出づる心のうちを君も知りけり  
おなじ年の雪のあした後京極大將殿より

白妙の外山のゆきをながめてもまづ色おもふきみがそでかな  
人の世は思ひ馴れたるわかれにて朝日にむかふ雪のあけほの  
いかに君思ひやるらむこけの下をいくへやま路の雪埋むらむ  
まださめぬ昨日の夢のそでの上に絶えず結べる雪のしたみづ

見し人のなき數まさる秋のくれわかれなれたる心地こそすれ  
かすみまでとはれし人はまどひにき空しき秋のくれの白くも  
明け暮れてこれも昔になりぬべし我のみもとの秋とをしめど  
とはぬ人馴れつる秋の露あらしあとたしかなる庭のあさぢふ  
ねがはると思のすゑも風さむく谷のとほそもあきやいぬらむ  
まださめすよしなき夢の枕かなこゝろの秋をあきにあはせて  
を山田の露のかりいほのやどりかな君を頼まむいなづまの後

## 御かへし

くれの秋を數へて知ればかひもなくしるしありける庭の初霜  
下とほるそでにて君も思ひ知れよそぢかさなる霜のたもとを  
我が秋のふくれば冬の山おろしつよく身にしむあかつきの空  
人の世の露にしぐれを染めかへて別れなれたる心地こそすれ  
藤ごろも染めけむ春のかすみよりさてしも秋のくれのしら露  
思ひ出づる昨日のあきはむかしにてこの頃おもふ行末のはる

別れにし身の夕暮にくも消えてなべての春はうらみはてよき

おなじ年五月になりて

三位季經卿

はかなさを忘れぬほどを知るやとて月日をへても驚かすかな

かへし

月日經てしづまるほどの歎こそこととふ人のなさけをも知れ

秋野分せし日五條へまかりてかへるとて

玉ゆらのつゆも涙もとどまらずなき人こふるやどのあきかぜ

御返事

入道殿

秋になり風の涼しくかはるにもなみだの露ぞしのに散りける

三位中將なくなりての秋母のおもひにてこもり

るたる九月盡日山座主にたてまつる

初霜よなれのみときはわきがほに人はかぞへぬ秋のくれかは

三十あまり二とせへぬる秋のしもまことに袖の下とほるまで

ふりまさるわが世のあらし弱るらし袖までもろき秋の暮かな



寄山朝

けさぞこの山のかひあるみむろ山絶えせぬ道の跡をたづねて

寄海暮

しき波のたゝまくをしきまとるして暮るゝも知らぬわかぬ浦人

無常

きさらぎのころ母のおもひに侍りしとぶらふと

て

大

常ならぬ世はうきものといひくゝてけに悲しきを今や知るらむ

かへし

悲しさはひとかたならず今ぞ知るとにもかくにも定なき世を

おなじ三月盡日後京極大將殿より

春がすみかすみし空のなごりさへ今日を限のわかれなりけり

御かへし

わしのやま	世にもまれなる	跡とめて	ふるきながれに
むすぶてふ	のりのしみづの	そこすみて	にごれる世にも
にごりなき	ぬまのあしまに	かけやどす	あきのなかばの
つきなれば	なほやまのはを	行きめぐり	そら吹くかぜを
あふぎても	むなしくなさぬ	ゆくすゑと	みつのかはなみ
立ちかへり	こよろのやみを	はるくべき	日よしのみかけ
のどかにて	きみをいのらむ	よろづ世に	千代をかさねて
まつが枝を	つばさにならす	つるの子の	ゆづるよはひは
わかぬ浦や	いまもたまもを	かきつめて	ためしもなみに
みがきおく	わがみちまでも	絶えせずば	ことのはごとの
いろくゝに	のち見むひとも	こひざらめかも	

反歌

君を祈るこよろふかくは頼むらむたえてはさらに山がはの水

建保五年五月御室にて三首

## かへし

たすけこし	やまたかみ	かへされぬ	たにがくれ	うぐひすの	それならぬ	さだめなき	おとろへず	ながめやる	いろかへず	いのりつゝ	誓ひ置きし	ひさかたの
ほしのやどりを	くもるのそらに	くすのうらばに	こりつむなけき	ふるすはくもに	うきふししけき	かやがしたばに	にほはむものと	みやこのはるを	いくとしんぐを	むかしのひとの	かみもろともに	あめつちともに
ふりすてよ	まじりつゝ	うらむとも	しひしぼの	あらしつゝ	くれたけに	みだれつゝ	思ひおきし	となりにて	へだつとも	しめてける	まもれとて	かぎりなき
ひとり出でにし	照る日によよに	きみはみかさの	しひてむかしに	あと絶えぬべき	鳴く音を立つる	もとのこよろの	すゑ葉のつゆも	みのりのはなも	八重のしらくも	みねのすぎむら	わが立つそまと	あまつひつぎを

わがおもひ	消えぬばかりを	たのみ來て	なほざりともと
おもひつゝ	しばしみやこに	やすらひて	のこるみのりの
はなの香に	しひてこゝろを	つくばやま	しけみなけきの
ねをたづね	しづむむかしの	たまをとひ	すくふこゝろは
ふかくして	つとめ行くこそ	あはれなれ	みやまのかねを
つくぐと	わがきみが世を	おもふにも	みねのまつかぜ
ひとりにて	千代にちとせを	そふるほど	のりのむしろの
はなのいろ	野にもやまにも	にほひてぞ	ひとをわたさむ
はしとして	しばしこゝろを	やすむべき	つひにはいかど
あすかがは	あすよりのちや	わが立ちし	そまのたつきの
ひどきより	みねのあさざり	晴れのきて	くもらぬそらも
立ちかへるべき			

反歌

さりともと思ふ心ぞなほふかきたえてたえ行く山がはのみづ

過ぎはてよ　のちのいつよの　もよとせに　入りにけるこそ  
かなしけれ　あはれやのりの　みづの泡の　消え行くころに  
なりぬれば　それにこよろを　すましてぞ　わがやまがはに  
しづみ行く　こよろあらそふ　のりのしは　われもくくと  
あをやぎの　いとところせく　みだれ來て　はなももみぢも  
散り行けば　こすゑあとなき　みやま邊の　みちにまどひて  
過ぎながら　ひとりこよろを　とどむるに　かひもなぎさの  
志賀のうら　あと垂れましよ　日よしのや　かみのめぐみを  
たのめども　ひとのねがひを　みつかはの　ながれもあさく  
なりぬべし　みねのひじりの　すみかさへ　こけのしたにぞ  
むもれ行く　うちはらふべき　ひともがな　あなうのはなの  
世のなかや　はるのゆめ路は　むなしくて　あきのこすゑを  
おもふより　ふゆのゆきをも　たれかとふ　かくてやいまは  
あと絶えむ　とおもふからに　くれはとり　あやしきよるの

かへし

上

人

結びながす末をこゝろにたよふれば深く見ゆるを山がはの水

又

神路山まつのこすゑにかよる藤の花のさかえを思ひこそやれ

又かへし

神路山君がこゝろの色を見むしたばのふぢにはなしひらけば

と申しおくり侍りしころ少將になりてあくる年思

ふゆゑありてのぞみ申さざりし四位して侍りきみ

なせ殿にさぶらひしに大僧正の長歌をよみてたて

まつられたるかへりごとたどいまつかうまつるべ

きよしおほせごと侍りしかばやがてかきつけはべ

りし

さてもいかに わしのみやまの つきのかげ つるのはやしに

入りしより 經にけるとしを かぞふれば ふたちとせをも

立ち歸りなほぞ戀しきつらね來しけふのみつのよ山あるの袖

かへしつぎの日

山蓋のしをれ果てぬる色ながらつらねし袖のなごりばかりを

小侍従にゆかりある人のむかへにつかはしたれ

ばまかるにことづけやすると申しよかばその人

のかひなにかきつけし

恨みばや世に數ならぬうき身をばわきてとふべき人もとはすと

かへし

小

侍

従

待てどかくとはれぬ我をうち返し恨むるにこそ妬さをひけれ

西行上人みもすその歌合と申して判すべきよし

申しよをいふかひなくわかかりし時にて度々か

へさひ申しよをあながちに申しをしふるゆゑ侍

りしかばかきつけてつかはすとて

山水のふかよれとてもかきやらす君がちぎりを結ぶばかりぞ

子を思ふふかき涙のいろに出でてあけの衣のひとしほもがな  
ゆるさるべきよし御氣色侍りければ返事

家

長

道を思ふこよろの色の深ければこのひとしほも君ぞ染むべき

京官除目のついでに下臈參議多く納言に昇進あ  
るべきよし聞えしに正三位を申すとて清範朝臣  
つにけ侍りし

雪の中のもの松だに色まされかたへの木々は花も咲くなり

人のよろこびはなく加階ゆるされ侍りにき建

久六年正月敍位にともに加階したるあしたに

左衛門督隆房卿

吳竹に木づたふ鳥の枝うつりうれしきふしもともにこそ知れ

かへし

百千鳥こづたふ竹のよのほどもともにふみ見しふしぞ嬉しき

四位して後臨時祭の日越中侍從舞人にて内をい

でしほどに



雜歌

天地もあはれ知るとはいにしへの誰いつはりぞしきしまの道  
つれなくて今も幾世のしもかへむ朽ちにし後の谷のうもれ木

承元のころほひ内より古今を賜りてかきてまる

らせしおくに

ためしなき世々の埋木くちはてよまだうき跡のなほや残らむ  
照る光ちかきまもりは名のみして人のしもにや思ひ消えなむ  
ふるき歌をかきいだして仁和寺の宮にまるらす

とて

年ふかき時雨のふるはかきぞおく君にのこさぬ色や見ゆると

承久三年内よりめされし述懐歌

神かけて祈りし道のむもれみづ掬びもはてぬかけやたえなむ

爲家元服したる春加階申すとして兵庫頭家長につ

け侍りし

寄山暮

思ひかねわが夕暮のあきの日にかさの山はさしはなれにき  
おなじ頃歌あまたよみける中に

なきかけの親のいさめは背きにき子をおもふ道の心よわさに  
承元二年五月住吉の歌合

寄山雜

ゆくすゑのあとまで悲し三笠山みちある御代に道まどひつよ

松尾の歌合

社頭雜

神垣やわが身の方はつれなくて秋にぞあへぬくすのうらかぜ

建曆三年閏九月内裏の歌合寄風雜(于時從三位侍從)

寄風雜(于時從三位侍從)

飛鳥川いまはふる里吹く風の身はいたづらのあきぞかなしき

三宮十五首

思ひやる月こそ水にやどるらめまくら結ばぬかへるさのみち

述懐(建久五年夏左大將殿の歌合述懐浮田杜イ)

君はひけ身こそうき田の杜のしめたど一すぢに頼むこゝろを

述懐三首建永元年秋和歌所

君が代にあはずばなにを玉の緒の長くとまでは惜まれじ身を  
我ぞ見しみよのはじめの秋の月年はへにけりもとの身にして  
思ひおくつゆのよすがの忍草きみをぞたのむ身は消えぬとも

承元二年少將具親朝臣八幡にて講すべきよし申

しよかば詠みておくり侍りし

せく袖はからくれなるの時雨にて身のふりはつる秋ぞ悲しき  
松風になみだぞきほふまじりなむ昔がたりのみねのつきかけ

同四年九月粟田宮の歌合(于時辭職)

寄海朝

わかみをつくしの浦やなぎたる朝の濔標みをつくしくちねかひなき名のみ残らで

内裏の歌合

山夕風

鐘の音をまつに吹きしく追ひかぜに妻木やおもきかへる山人

野曉月

うち拂ひさよわくる野邊のかすくに露あらはるよ有明の月

内よりめされし歌

鞆中

そこはかと見えぬ山路にこと問へばこよひもうとし白雲の宿

旅泊

かぢまくら誰とみやこをしのばまし契りし月の袖に見えずば

水無瀬殿の山の上の御所つくられて後まゐりて

池など見巡りて罷り出づとて清範朝臣のもとへ

おもかけにもしほの烟立ちそひて行くかたつらき夕霞かな

見てもあかぬ春の山邊にふりすてよ花の都ぞ旅心地する

御返事

うちも寐ずあらしの上の旅枕イながらみやこのゆめにかはる心は  
斧の音を立てしちかひもいさぎよく雪にさえたる杉の下かけ

建久七年内大臣殿にて文字をかみにおきて二十

首の歌よみし中

たびのみち

谷の水みね立つ雲をこえくれてまつらゆふべの松のあきかせ  
日かず行く山と海とのながめにてはるより秋にかはる月かけ  
軒に生ふる草の名かけし宿の月あれ行く風やかたみそふらむ  
都とて雲の立ちるにしのべども山のいくへをへだてきぬらむ  
契りきなこれをなごりの月の頃なぐさむ夢も絶えて見じとは

松尾の歌合

山家夕

身におひてすむべき山の夕ぐれをならはぬ旅となに急ぐらむ

馴れぬよのたびねなやます松風にこの里人やゆめむすぶらむ  
攝政殿の詩歌合

羈中眺望

秋の日のうすき衣に風立ちて行くひとまたぬをちのしらくも  
かり庵やなびく穂向のかたよりにこひしき方のあき風ぞ吹く

建仁元年十二月八幡の歌合

旅宿嵐

故郷にさらば吹きこせみねのあらし假寐の山の夢はさめぬと

母のおもひに侍りし年の暮にひえの山へのほり

て中堂にこもりて侍りし春のはじめもわかれず

かつ降る雪に跡絶えたりし朝入道殿山のおほつ

かなさなどこまかにかきつどけ給ひておくに

子を思ふこゝろやゆきに迷ふらむ山のおくのみ夢に見えつよ

三度をがみ一度たてし斧の音をいま聞くばかり思ひやるかな

つれづれと松にくたくる山風もさとから人のこよろをや知る

正治元年冬左大臣の家の十首の歌合

羈中晩風

いづこにかこよひは宿をかり衣日も夕ぐれのみねのあらしに

同二年二月同家の歌合

秋旅

忘れなむまつとなつけそなかくにいなばの山のみねの秋風

建仁二年三月六日

旅

袖に吹けさぞな旅寐の夢も見じおもふ方よりかよふうらかぜ

建永元年秋和歌所暮山雲當座

跡絶えてとはれぬ山をたがみそぎゆふべの空になびく白くも

建保右大臣の家の歌合

羈中松風

旅

えぞ過ぎぬこれやすどかの關ならむふりすて難き花の影かな  
宇治の御幸に

秋 旅

わが庵はみねの笹原しかぞ刈る月にはなるなあきのゆふつゆ

建曆三年八月内裏の歌合

山 曉月

やどれ月衣手おもしたびまくら立つやのちせの山のしづくに

河 朝霧

あさほらけいさよふ波もきりこめて里とひかぬるまきの島人

建仁元年秋和歌所の歌合

鞆 中暮

立ちまよふ雲のはたての空毎にけぶりを宿のしるべにぞとふ

山 家松



なほざりに頼めしほども過ぎ果てば何にかくべき命なるらむ  
いかさまに戀も歎もなぐさめむこのよながらのあらぬ世もがな  
あす知らぬ世のはかなさを思ふにも馴れぬ日數ぞいとど悲しき  
はかなしな夢に通はむよなくを形見にそれと思ひなすとも  
おのづから人も涙やしるからむ袖よりあまるうたよねのゆめ  
面影の身にそふ袖のにほひゆるたゞその色にしむこよろかな  
思ひ出づる春の衣のかたきまでいはぬ色にぞちしほそめてし  
身にかへて人を思ひてこひ見ばやなきになしてもあふ夜ありやと  
待つらむと契りしことを忘れずば誰とながめて日を暮すらむ  
かく知らばをだえの橋のふみ迷ひ渡らでたゞにあらましものを  
をしからぬ命も今はながらへて同じ世をだにわかれずもがな

## 雜

伊勢勅使の御ともにてすゞかの關越えしに山中  
の櫻さかりなりし下にて

したるを人づてに見て

うらくにたどかき捨つる藻鹽草みるよりいとど立つ烟かな  
人の持ちたる扇にうつの山の現にもとかきたる

を見て

さぞ歎く戀をするがのうつこの山うつとの夢のまたし見えねば  
おのづからそれとばかりを外に見て胸にせかるゝ水莖のあと  
久しくかき絶えたる人に

いかどせむありし別をかぎりにてこのよながらの心かはらば  
かぎりあらむ命もさらにながらへじ是よりまさる月日隔てば  
身をつくし今身にかへてしづみけむ同じ難波のうらの波かは  
涙せくむなしき床のうきまくら朽ちはてぬまのあふ事もがな  
こひしさを思ひしづめむ方ぞなきあひ見し程に更くる夜毎は  
よしさらば同じ涙にくれなるの色にをこひむひとは知るとも  
山の端に侍たれて出づる月影のはつかに見えし夜半の戀しさ

かきやりしその黒髪のすぢごとにうちふす程はおも影ぞ立つ  
別れての思をさぞと知りながらたれかはときしよはのした紐  
來てなれしにほひを色にうつしもて絞るも惜しき花染のそで

## 遠き所に行き別れにし人に

心をばそなたの雲にたぐへてもなほ戀しさのやるかたぞなき  
あなこひし吹きかふ風もことづてよおもひ佗びぬる暮の眺を  
思ひ出づる心ぞやがてつきはつるちぎりしそらの入相のかね  
人目もりへだつる道をおもふよりやがても胸に閉づる關かな  
誰もこのあはれみじかき玉の緒に亂れてものを思はずもがな  
結びおく名のみ流るゝわたり川わがてにかけむ波とやは見し  
おのづからあはれとかけむ一言もたれかはつてむ八重の白雲  
けふまでは人も忘れずとばかりもうつゝに知らぬ中ぞ悲しき  
契りおきし音を頼にしのおとも同じ風だに吹かずやあるらむ  
つゝむことありて文やることもせぬ人の手習ひ

舟よするおもひもあらじよひのまの別は星のまぎれなりとも  
うき船のなにの契にみなれ棹あだなるそでをくたし初めけむ  
忍ぶとも戀ふとも知らぬつれなさに我のみ幾夜歎きてかねむ  
忍ばれず戀ひずばなにを契とかうきにたへたる歎をもせむ  
せきわびぬ今はたおなじ名取川あらはれ果てぬせどの埋れ木  
名取川行手のなみにあらはれてあさくぞ見えむせどの埋れ木  
思ひやれ里のしるべもとひかねてわが身のかたにくゆる煙を  
とひかぬる里のしるべになかたえて今やあとなき烟なるらむ

その人のもとより返事に

なにか問ふおもひもいとど末の松わが浪ならぬ浪も越ゆなり

かへし

こえくす心をかくる浪もなし人のおもひぞすゑのまつやま

戀歌よみける中に

ときのまもいかに心をなぐさめてまたあふまでの契まちみむ

逢坂は君がゆきよと聞きしよりまだみぬやまにふみも通はず

心かはりにける人に

あらはれて霜より後の色ながらさすがにかれぬしら菊のはな  
變る色をたれあさ露にかこちても中のちぎりぞつき草のはな

文つたふる人さわぐ事ありてかきたえて

ふみまよふ道もかりばのおのれのみ戀はまされる歎をぞする

かへし

みかり野のかりそめ人をなら柴に我ぞふみ見し道はくやしき

限なく忍びて人に知らせざりける人に

あぢきなくなにと身にそふ面影ぞそれとも見えぬやみの現に

かへし

いつはりのたが面かけか身にそはむ夢にまさらぬやみの現は  
有明のあかつきよりは憂かりけりほしのまぎれのよひの別は  
いかにせむさすがよなく、水剛棹しづくに濁る宇治のかは長

の許にさだまりるにければ其蓋を返しやるとて

増かどみ二人契りしかね言のあはでややがてかけはなれなむ

かへし

身こそかくかけ離るともます鏡ふたり見しよの夢はわすれず

秋の暮をもろとみにをしみあかして里へいでに

ける人にいでぬ人のつたへて

いかにせむ捨てよし秋を慕ふとて身もをしからず惜しき別を  
恨めしやけふしもかふる衣手に入りにし玉のみちまどふらむ

かへし

忘れねよしたひて暮れし秋よりもあだに立つ名は惜しき別を

愚かなるなをだも見えぬ袖のうへにとどめし玉と誰か頼まむ

ある所なる人をわれにはどかるよしを聞きて 三位 中將

君ならでかよふ人なきよひくをねぬ關守にかこたざらなむ

かへし

今日やさは隔て果てつる春霞はれぬおもひはいつとわかねど  
春物ごしにあひたる人の梅の花ををらせておく  
りけるまたの年おなじところにて

心からあくがれそめし花の香になほもの思ふはるのあけほの

又

我のみや後もしのばむ梅のはなにほふ軒端のはるの夜のつき  
かけばかり見てかへりける道にて火のあるよし

人のいふに

戀ひくゝてあふともなしに燃えまさる胸の煙や空に見ゆらむ  
ことなることなき女の心たかくおもひあがりて  
つれなかりければ

さても猶をらではやまじ久方の月のかつらのはなと見るとも

宮仕しける女の局にて尋ぬるに隠れければ鏡の  
蓋をとりて隠して返さどりける後その女ある人

寄細戀

人心あだなる名のみ立つ鳴のあみの行くてになどかよるらむ  
はじめて人に

かぎりなくまだ見ぬ人のこひしきは昔や深くちぎりおきけむ  
戀歌とて

うつりにし心の色にみだれつゝひとり忍ぶのころもへにけり  
跡もなき波行くふねにあらねども風をしるべにもの思ふころ  
世々かけてつらきちぎりにあひ初めて深き思の色ぞかひなき  
歎くとも戀ふともあはむ道やなき君かつらぎのみねの白くも  
あだし野の若葉の草におく露の袖にたまらぬものをこそ思へ  
わきかへり落つればこほる瀧つ瀬の下に碎けて幾世經ぬらむ  
神無月の頃まどろまであかして

悲しさのたぐひもあらじ神無月ねぬ夜の月のありあけのかけ  
つゝむことありける人の春ごろ遠く別れけるに



寄弓戀

獵人の引くやゆずるのよるさへやたゆまぬ關のもるに惑はむ

寄玉戀

緒を絶えしかざしの玉と見ゆばかり君にくだくるそでの白露

寄枕戀

忘れずよみとせの後の新まくらさだむばかりの月日なりとも

寄帶戀

いかにせむうへはつれなき下帶の別れし道にめぐりあはずば

寄絲戀

夏引のいとしもなれし面影は絶えてみじかきのちぞかなしき

寄筵戀

東野あづまのの露の假寐あまのかやむしろ見ゆらむ消えてしきしのぶとは

寄舟戀

白妙のそでの浦なみよるくはもろこし舟やこぎわたるらむ

漕ぐ舟の風にまかするまほにだにそこと教へぬあふのまつ原  
忍待戀

を鹽山千代のみどりの名をだにもそれとはいはぬ暮ぞ久しき

寄螢戀

いとどまた餘るおもひはもえつきぬ袖の螢のひかり見えても  
隔遠路戀

尋ぬともかさなるせきに月こえてあふを限のみちやまどはむ

暮山戀(權大納言家)

うつ蟬のは山もりくる夕日かけうすくや人と音をのみぞ鳴く

貞永元年七月大殿の歌合戀十首

寄衣戀

秋草のつゆわけ衣おきもせずねもせぬそではほすひまもなし

寄鏡戀

行く水の花のかどみの影もうしあだなる色のうつりやすきは

絶久戀

それとだに忘れやすらむ今更にかよふこころは夢に見ゆとも

建久六年二月左大將の家の五首

戀

思ひねはたが心にて見えねども夢にぞいとどうかれはてぬる

建保左大臣の家の六首の歌合

行路見戀

露ぞおくるでの下帶さばかりもむすばぬ野邊の草のゆかりに

山家夕戀

涙せく宿もは山にかくろひてあらはに戀ふるゆふぐれぞなき

承久二年八月土御門院より忍びてめされし

夜長増戀

秋の夜の鳥の初音はつれなくて鳴くく見えし夢ぞみじかき

寄名所戀(私家)

戀不離身といふこころを

曲のつらき恋むこ

心をばつらきものとして別れにしよよの面かけなにしたふらむ

仁和寺宮花五首

寄花戀

花のごと人のこよろのつねならばうつろふ後も影は見てまし

建久七年内大臣殿にて文字をかみにおきて二十

首の歌よみしに戀五首

片思

神なびみのみむろの山のやま風つつてにもとはぬ人ぞ戀しき  
たましひの入りにし袖のほひ故さもあらぬ花の色ぞ悲しき  
奥も見ぬしのぶの山に道とへばわがなみだのみ先に立つかな  
藻鹽たれすまの浦浪立ちなれし人のたもとやかくはぬれけむ  
飛驒たくみ打つ墨繩をこよろにて猶とにかくに君をこそ思へ  
中納言長方卿の五首の歌よませ侍りし中に

逢ふことはしのぶの衣あはれなどまれなる色に亂れそめけむ  
來ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身も焦れつよ

九月十三夜内裏

寄海戀

人心うきなみ立つる由良の戸のあけぬくれぬと音をのみぞなく

建保四年内にて

寄蘆戀

なかばなる身をつくしてのかひもなし短き蘆の一夜ばかりは

正治元年冬左大臣の家の冬十首の歌合

契歳暮戀

新玉のとしのくれ待つ大空はくもるばかりのなぐさめもなし

住吉の歌合

旅宿戀

やどりせしかり庵の萩の露ばかり消えなで袖の色に戀ひつよ

建保五年四月庚申

久戀

戀ひ死なぬ身のおこたりぞ年へぬるあらばあふ夜の心つよさに

建永元年七月和歌所被忌戀(當座)

咽ぶともしらじな心かはらやにわれのみけたぬ下のけぶりは

建曆三年三月内裏戀歌三首

やどりせぬくらぶの山を恨みつゝはかなの春の夢のまくらや  
ちぎりのみいとど獵場のならばは絶えぬ思の色ぞまされる  
影をだにあふせにむすべ思川うかぶみなわのけなばけぬべく

建曆三年九月十三夜内裏の歌合

於宿戀

とどめおきし袖の中にや玉くしけふたみの浦はゆめも結ばず

建保四年閏六月内裏の歌合

戀

宇治御幸夜戀元久元年七月

待つ人の山路のつきもとほければ里のなつらきかたしきの床

建仁二年三月六首の中

戀

頼む夜の木のまの月にうつろひぬことろの秋の色をうらみて

愚不會戀(承久閏四月四日和歌所)

とひ來かしまたおなじ夜の月を見てかよる命に残るちぎりを

承久四年九月粟田宮の歌合

寄月戀

やどり來し袂はゆめかとはかりにあらばあふ夜のよその月影

三宮十五首の戀の歌

露時雨したくさかけてもる山の色かずならぬそでを見せばや  
大方は忘れはつともわするなよありあけの月のありしひと言  
習ふなと我もいさめしうたとねをなほもの思ふ折は戀ひつよ

名取川わたればつらし朽ちはつる袖のためしの瀬々の埋れ木  
ゆくへなき宿はととへば涙のみ佐野のわたりのむらさめの空

寄風戀

白妙のそでのわかれに露おちて身にしむ色のあきかぜぞ吹く

建久五年夏左大將の家の歌合

三 島

卿

戀

移りにきわがころからみしま江の入江のつきのあかぬ面影

建仁元年三月盡歌合

不會戀

人ごころほどは雲井の月ばかりわすれぬ袖のなみだとならむ

正治二年二月左大臣の家の歌合

夏戀

宵ながら雲のいづこと惜まれし月をながしと戀ひつよぞぬる



ながめつゝまたばと思ふ雲の色をたれ夕暮ときみたのむらむ

驛中戀

君ならぬ木のはもつらし旅ごろも拂ひもあへず露こほれつゝ

山家戀

風吹けばさもあらぬみねの松もうしこひせぬ人は都にを住め

故郷戀

つれなきを待つとせしまの春の草かれぬこゝろの古里のしも

旅泊戀

忘れぬは波路の月にうれへつゝ身をうしまどにとまるふな人

關路戀

須磨の浦や浪におもかけ立ちそひて關吹きこゆる風ぞ悲しき

海邊戀

別のみをじまの蟹の袖ぬれてまたはみるめをいつか刈るべき

河邊戀

わがなかはうきたのみ注連しめかけかへて幾度くちぬ森の下葉も  
おなじとしながつき十三夜水無瀬の戀十五首の

歌合に

春 戀

忘ればやはなに立ちまよふ春がすみそれかとばかり見えし曙

夏 戀

時鳥空につたへよこひ侘びて鳴くやさつきのあやめわかずと

秋 戀

今夜しも月やはあらぬ大方のあきはならひをひとぞつれなき

久 戀

床のしも枕のこほり消えわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに

曉 戀

面影も待つつ夜むなしきわかれにてつれなく見ゆる有明のつき

暮 戀

おなじ八十賀に

百歳は八十やそぢのさかにちかけれど神のめぐみの千代ぞはるけき

元久三年正月高陽院殿初度應製遅花春久

あら玉の年のちとせの春の色をかねてみかさの花に待つかな

戀

建仁二年六月水無瀬殿のつり殿に出でさせたま

ひてにはかに六首の題をたまはりて御製にあは

せられ侍りし中三首

初戀

春やときとばかり聞きし鶯のはつ音をわれと今日やなかなむ

忍戀

夏草のまじるしけみに消えぬ露おきとめて人の色もこそ見れ

久戀

春の雨のふりぬとなにか思ひけむめぐみもしけきもりの柏木

祖父中納言の春日の行幸の賞をつのりて正三位

下したるあしたに

右 兵 衛 督

神もまたきみが爲とや春日山ふかきみや木のあとのこしけむ

かへし

うづもれしおどろの道をたづねてぞ深き御幸の跡もとひけり

宮内卿のぞみ申さぬ三位ゆるされたるあしたに

君が世も昔いかなる契ありておのくかよるはるにあふらむ

かへし

人はいさなれもやすらむ君が世に一人ぞ春にあふことちする

右兵衛督の少將のよろこびに

三笠山わかばの松にいかばかりあめのめぐみの深さをか見る

日吉の禰宜親成七十賀に人々歌つかはしよ時

百歳にみそとせ足らぬ岩根まつ千代を待つらし色もかはらず

れて後まるりてあしたに清範朝臣のもとへ地形

勝絶の由申しよ中に

ありへけむもとの千歳にふりもせでわが君契るみねのわか松  
春日野やまもるみ山のしるしとて都のにしもしかぞ住みける  
君が世にせきいるよ庭を行く水の岩こす數は千代も見えけり

院の御前六月庚申扇合のよしにて左方の扇にか  
かるべき歌三條の宮よりめされ侍るよし清範朝  
臣申しよかば奉りし

治まれる御代にあふぎの風なれば四方の草葉もまづぞ靡かむ

二條中將近衛づかさにて年たけぬる由述懐百首  
に多くよみてほどなく右兵衛督になりてあした  
に

かしは木は今日や若葉の春にあふきみがみかけのしけき恵に

・かへし

右兵衛督

嬉しざは昔つよみし袖よりもなほたちかへる今日やことなる  
かへし

嬉しさはむかしのそでの名にかけて今日身にあまる紫のいろ

おなじ日

宮内

卿

嬉しさは昨日や君がつむ菊のとへとやなほも今日をまつらむ

かへし

けふぞけに花もかひある菊のいろのこき紫の秋をまちけり

とは申しよかどしづみぬる事をのみ歎き侍りし

に思ひよらざりし参議の闕に多くの上臈をこえ

てなりて侍りし朝

宮内

卿

ふして思ひおきても身にや餘らむ今夜の春の袖のせばきに

かへし

嬉してふ誰もなべての言の葉をけふのわが身にいかど答へむ

水無瀬殿にあたらしく瀧をおとされいしたてら

かへし

うれしさをとはれぬほどの日數ゆゑ分くる心も色や見ゆらむ  
爲家元服したる後ほどもなく従上のかかいし

たるよろこびにまさつねの中將

袖のうちと思ひなれても嬉しさのこの春いかに身に餘るらむ

かへし

袖せばくはぐくむ身にもあまるまで此春にあふ御世ぞ嬉しき

同中將の子を歩初ありきせのに遣しける手本の包紙に

跡ならへ思ふおもひもとほりつゝ君にかひあるしき島のみち

かへし

しき島の道しる君にならひおきつ末とほるべき跡にまかせて

年頃のぞみかなはで辭し申す三位になほ紋すべ

きよしおほせごと侍りしかば侍従を一度はと申

してゆるされたりしに同中將

松に吹く風のみどりにこゑ添へて千代の色なるいりあひの鐘

建曆二年とよのみそぎ二たびとけおこなはれし

次の日

中將雅經朝臣

君待ちて二たびすめる河水に千代そふとよのみそぎをぞ見し

かへし

君が世の千世に千代そふ御禊みそぎしてふたよびすめる賀茂の川水

皇后宮權亮公衡朝臣色許いろよされて供未知ざりしに

御禊行幸に菊の下襲しもきられたりしを見て次の日

白菊の根はひともの色なれどうつろふ程はなほぞ身にしむ

かへし

たぐふなる名を思ふにも白菊のうつろふ色はけにぞ身にしむ

少將になりたるよろこびにおなじ中將身にうら

みありてこもり居られたりし比三日をすぐして

うれしさをとはど過ぎつる日數にもおもふ心の色や見るらむ



建仁三年十一月入道殿和歌所にて九十賀給りた

まひし時

君にけふ十年のかずをゆずりおきて九のかへりの萬世や經む

承久二年住吉の歌合

わが君のときはのかげは秋もあらし月の桂の千代にあふとも

仁和寺宮にて

寄松祝

この里は岡邊の松葉もる月のいつともわかぬ千代ぞ見えける

建保三年五月歌合

松經年

手向草つゆもいく世かちぎりおきし濱松が枝の色もかはらず

一條家にて始めて栽松といふ題を人々詠侍しに

七十なごもろのとなりをしむる宿に植ゑて千代のはじめは松や習はむ

夕松風(私家イ)

秋の池のつきにすむなることの音を今より千代の例にもひけ

正治二年二月左大臣の家の歌合

松風のこゑさへ春のにほひにてはなも千とせを契るやどかな

建久五年左大將の家の歌合

祝春日山

春日山みねのあさ日をまつほどのそらものどけき萬世のこゑ

建仁元年三月盡歌合

神祇祝

跡たれし四方の社も君にこそまもるかひある千代をならはめ

正治二年九月歌合十首

神祇

君をまもるあまてる神のしるしあれば光さしそふ秋の夜の月

庭松

枝かはす玉のみぎりの松のかぜいく千代君にちぎりそふらむ

思ひ入るみ山に深きまきの戸のあけくれしのぶ人はふりにき

おなじ會歲承久三年

盡きもせぬうき思ひでは數そひてかはり果つなる年の暮かな

賀

建保二年九月十四日和歌所

月契千秋

君が代の月とあきとのありかすにおくや草木の四方の白つゆ

建仁元年烏羽殿にてはじめて歌講ぜられ御遊な

ど侍りし夜

池上松風

池水に千代のみどりを契るらしこゑすみわたるみねのまつ風

建永元年八月十五夜烏羽殿御舟にあそびありし

夜歌人みぎはに侍ひて

思ふてふたどさばかりをわが身にて雪にへだたる山陰もがな  
袖の上は四方の木草に萎れあひてひとりともなき雪の下かな  
正治二年二月左大臣の家の歌合

冬述懐

いたづらに今年も暮れぬとばかりに冬は歎きぞそふ心地する

山野落葉といふことを私家

みかり野のとだちをうづむなら柴になほふりまさる山の木枯

松竹霜

庭の松まがきの竹におくしものしたあらはなる千代の色かな

報恩會の次に

歳暮述懐

思ひやれまくらにつもる霜雪のむそぢに近きはるのとなりは

同會

山家懷舊

打ちはらひ宿かりわびぬ雪折の木々のしたみち面がはりして

建保五年庚申

冬夕

ふりくらす吉野のみ雪いくかとも春のちかきは知らぬ里かな  
母の思ひにて籠りし冬雪のあしたに大將殿より

み吉野やをばすて山の春あきもひとつにかすむ雪のあけほの  
霜枯のまがきの野邊のけさの雪とほきこゝろを庭に見ゆるむ  
この里はまつべき人の跡もなしにはのしら雪みちはらふとも  
思へども君を尋ねぬ雪の夜になほはづかしきやまかけのあと  
ながめするわが袖ならぬ草も木も萎れはてぬる今朝の雪かな

御返事

面かけのそれか見えし春秋も消えてわするゝ雪のあけほの  
むかし今こゝろにのこす跡もなし枯野の雪のにはのひとむら  
わがやどの雪はいくへと春や見むあれにしのちの蓬生のかけ

待つ人のふもとの道はたえぬらむ軒端の杉にゆきおもるなり

野亭雪

雪の中はなべてひとつになりにけり枯野の色も頼むかきねも

社頭雪

春日山おほくの年のゆきふりて春のあさ日はかみもまつらむ

古寺雪

うつしける月のみかほはひかりあひて軒の荒間につもる白雪

雪中戀人

おきくらす夕の雪にせきとちてこゝろやみぢに通ひわぶらむ

雪中述懐

かすまざる年に哀のつもるかなわが夜更け行く雪をながめて

雪中遠望

降りまがふ雪をへだてよ出でつれど雲間にきゆるあまの釣舟

雪中旅行

みそら行く月もまぢかしあしがきの吉野の里の雪のあさけに

正治二年九月院の初度歌合

曉雪

明けぬるかこすゑ折れふす松がねのもとより白き雪の山の端

建久五年左大將の家の歌合

深草雪

雪折のたけの下みちあともなしあれにしのちのふかくさの里

文治五年十二月後京極攝政大納言の時雪の十首

の歌

禁庭雪

冴えのほるみはしの櫻ゆき降りて春秋みするくものうへの月

故郷雪

山人のひかり尋ねしあとやこれみ雪さえたる志賀のあけほの

山家雪

庭雪

とどむべき人もとひこぬ夕ぐれのまがきを山とつもるしら雪

建仁元年三月盡歌合

雪似白雲

冬の朝よし野の山のしらゆきも花にふりにしくもかとぞ見る

攝政殿の詩歌合

雪中松樹低

花と見る雪も日かずもつもりて松のこすゑは春のあをやぎ

風のまのもとあらの萩の露ながらいく世か春をまつ白ゆき

秀能五首の歌

雪は空を白く染めたるをみれば春のあやをさす

天つ風はつ雪しろしかさよぎのとわたる橋のありあけのそら

建保内裏の十首の中

冬



冬の日のゆくかた急ぐ笠やどり霰すぐさば暮れもこそすれ

遠村雪

跡もなき末野の竹のゆきをれにかすむやけぶり人はすみけり

建仁元年十二月八日八幡宮の歌合

社頭松

神垣や松につれなきよるのしもかはらぬ色よ起きあかせども

月前雪

吹きみだるゆきのくもまを行く月のあまぎる風に光そへつよ

承久元年七月内裏の歌合

冬水月

あまの川こほりによどむ風冴えて行くかたおそき月ぞ淋しき

杜間雪

初雪のいのるやなにの手向していそぐ生田のもりのしらゆふ

正治二年二月左大臣の家の歌合

水鳥

薄氷るるをしかものいろくに打ち出づる波の花ぞうつろふ  
同年内裏にて頭中將通具朝臣人々に歌よませ侍

りしに

深夜水鳥

こほり行くみぎはを出づるをしかもに山の端ちぎる有明の月

建仁二年三月六日冬の歌

濱千鳥つまとふ月のかげ寒しあしのかれ葉のゆきのしたかせ

建保四年内裏

寒山月

月の上に雲もまがはでおく霜をあかず吹き拂ふみねの木枯

寒閨月老後私家

山風のあるにしとこをはらふ夜はうきてぞこほるそでの月影

行路霞

池の面はこほりやはてむとぢそふる夜ごろの敷をまたし重ねば

山家夜霜

夢路まで人めはかれぬ草まくらおきあかす霜に結ほほれつゝ

關路雪朝

雪つもる須磨の關屋の板びさしあけ行く月もひかりとめけり

水鳥知主

みなれてはこれも名残やをしかものなれだに宿の主はわきけり

旅泊千鳥

漕ぎよするとまりさびしき潮風にまた夢さまし千鳥鳴くなり

湖上冬月

月に出づるかた田のあまのつり舟は氷かなみか定めかねつゝ

爐邊懷舊

つくぐゝとわが世もふくる風の音にむかし戀しき埋火のもと

正治二年九月院にはじめて歌合侍りしに

空とぢてまたこの暮のいかならむひごろの雪に跡はたえにき  
また暮れぬすぐれば夢のことちして哀はかなくつもる年かな  
つかさはなれて後つくふと籠りゐたるに霜月

丑の日ときよし夜になりて太政大臣の文給へる

月の行く雲のかよひぢかはれども少女のすがた忘れしもせず  
昔の事かきくつし思出づる折節いと哀増りて

少女子の忘れぬすがたよふりて我が見し空の月ぞはるけき  
建久六年二月左大將の家の五首

冬

霜のうへの朝けのけぶり絶えふにさびしさなびく遠近の宿

正治元年左大臣の家の冬十首の歌合

寒樹交松

冬來てもまたひとしほの色なれや紅葉にのこるみねの松ばら

池水半氷

正治元年十一月七日二條殿の新宮の歌合

紅葉殘梢

冬も深くしぐれし色ををしみもて初雪待たぬみねのひとむら

寒夜埋火

埋火うらひのきえぬひかりを頼めどもなほ霜さゆるとこのさむしろ

文治三年冬侍従公仲よませ侍りし冬十首

故郷のしのぶの露もしもふかくながめし軒にふゆは來にけり  
宿からぞみやこのうちもさびしきは人目かれにし庭の月かけ  
霜がるよよもぎがそまのかれまより雪けににたる冬の若くさ  
雲かよる嶺よりをちの時雨ゆゑふもとの里をくらすこがらし  
かこたじよ冬のみ山の夕ぐれはさぞなあらしの聲ならずとも  
苔ふかき岩やのこの村時雨よそに聞かばやありてうき世を  
浦風の吹上のまつのうれ越えてあまぎる雪をなみかとぞ見る  
ながらへむ命も知らぬ冬の夜のゆきと月とをわがひとり見る

池に住む有明の月のあくる夜を己が名しけくうきねにぞ鳴く  
寒 草

霜かゆきか尾花にまじり咲くはなののこりし色も昔ばかりに  
正治二年十月一日院の御會(當座)

枯野朝

朝しものいろにへだつる思ひ草消えずはうとしむさし野の原

建仁元年三月盡日の歌合

嵐吹寒草

淺茅生やのこる葉末のふゆのしもおきどころなく吹く嵐かな

建保四年閏六月内裏の歌合冬の歌

よしさらばかたみも霜に朽ち果てねいまはあだなる秋の白菊

三宮の十五首冬の歌

神無月くれやすき日のいろなれば霜のしたばに風もたまらず  
しがらきの外山のあられ降りすさびあれ行く頃の雲の色かな

時雨

山めぐり時雨やをちにうつるらむ雲間まちあへぬそでの月影

承元四年十月家長朝臣日吉社にて講すべきよし

申しよ歌

故郷時雨

村雲やかぜにまかせて飛ぶ鳥のあすかの里はうちしぐれつよ

時雨知時(私家)

偽いつはりのなき世なりけり神無づきたがまことよりしぐれ初めけむ

寒草纒殘

吹く風のやどすこの葉の下ばかりしもおき果てぬ庭の冬くさ

建保二年内裏の三首

時雨

山の井の滴しづくもかけも染めはてよあかすは何のなほしぐるらむ

水鳥

夜深待月

夜を重ねたゆまず久にながめする山のはおそき月を戀ひつゝ

故郷紅葉

うつろひしむかしの花の都とてのこるにしきの色ぞしぐるよ

河邊搦衣

こはた川こはたがためのから衣ころも淋しきつちの音かな

元暦元年宰相中將通親卿五首の中

搦衣

さえ増るひどきをそへて打つ衣かさなる夜半に秋や來るらむ

冬

正治二年毎月歌めされしとき

初冬

この頃の冬の日かすのはるならば谷のゆきけにうぐひすの聲



暮山紅葉

しぐれつゝ袖ぬれきつる山人の歸るいほりはあらぬもみぢば

對菊惜秋

いかにせむ菊の初しもむすほほれ空にうつろふ秋の日かすを

紅葉見秋

立田川をられぬ水のくれなるに流れてはやきあきのかけかな

九月十三夜侍宴詠三首

秋山月

さゝ枕み山もさやに照るつきの千世も經ばかりかけの淋しき

秋野月

久方のあまつそら行く月かけをおのれしめ野のあきの白つゆ

秋庭月

雲のうへをてらさむ秋も知らざりき教へし庭のみちの月かけ

右大臣の家の六首の歌合

暮天聞雁

雁がねの鳴きてもいはむ方ぞなきむかしのそらのいまの夕暮

紅葉添雨

降りまさる涙も雨もそほちつよそでの色なるあきのやまかな

建保五年四月十四日庚申五首

秋朝

小倉山しぐると頃のあさなく、昨日はうすき四方のもみぢ葉

承元三年九月新羅社の歌合とて人の詠せ侍りし

紅葉

露しもの下てるにしきたつた姫わかるよ袖もうつるばかりに

内裏にて

朝見紅葉

もみぢばのなほ色まさる朝日山よのまの霜のこよろをぞ知る

建保二年九月十三夜内裏

承久元年七月内裏の歌合

聞擣衣

なさけなく吹く秋風ぞ教ふらむこぬよの床にころも打てとは

庭紅葉

もるやまも木の下までぞしぐるなるわが袖のこせ軒の紅葉ば

聞擣衣といふ事を人々よみ侍りしに

萩の葉のつけふるしてふ秋風をまたしも更にころもうつなり

依月思秋

いたづらにつもれば人の長き夜も月見てあかす秋ぞすくなき

承久元年九月日吉の歌合とて内よりの仰せごと

深夜秋月

大方のあらしも雲もすみはてよ空のなかなるあきの夜のつき

遠山曉霧

ほのかなる鐘の響にきりこめてそなたの山はあけぬとも見す

たつた山ゆふつけどりの鳴く聲にあらぬ時雨の色ぞきこゆる  
山姫のかたみに染むるもみぢ葉を袖にこきいるゝ四方の秋風  
建保二年みなせ殿にて講ぜられし秋十首の歌應

製臣上

もしほくむ鬢の苫屋のしるべかはうらみてぞ吹く秋の初風  
淺茅生の小野の篠原うちなびきをちかたびとにあき風ぞ吹く  
大方の秋おく露やたまはなす身ながら朽ちし袖はほしてき  
いく秋をたへて命のながらへてなみだくもらぬ月にあふらむ  
宮城野はもとあらの萩のしけければ玉ぬきとめぬ秋風ぞ吹く  
夕づく日むかひの山の薄紅葉まだきささびしきあきのいろかな  
高砂のほかにも秋はあるものをわがゆふぐれと鹿は鳴くなり  
川なみのくゝるも見えぬ紅をいかに散れとか峯のこがらし  
玉きはるわが身時雨とふりゆけばいとゞ月日も惜しき秋かな  
霜のたて山の錦をおりはへて鳴く音もよわる野邊のまつむし

波かへる袖師の浦のあきの月やどかるまよにまづやしほらむ

秋恨

こよろもてよよの昔やならひけむ秋風いそぐをかのくすばに

秋雑

知られじななくくあかす長き夜も澤邊の鶴の秋のこよろは

内裏の秋十首

夏はてよぬるや河邊のしのよめに袖吹きかふるあきのはつ風  
おのづから幾世の人のながむらむあまのかはらの星合のそら  
わすれじな秋の白露しきたへのかりほの床にのこるつきかけ  
宿れどもぬらさぬ袖のわれからに馴れてひさしき秋の夜の月  
聲立てよたれ松風のおのれのみたゆまぬ月にころも打つらむ  
待たれつる月もはるかに鳴くつるの聲あけがたき長きよの霜  
いくかへり梅をば菊にながめつよ霜より霜のそでしほるらむ  
身をくだくとしの幾歳なけきして思ひとどめし秋のなみだぞ

秋の色と身を知る雨の行く雲に伊駒のやまもおもがはりして

秋 花

このくれの秋風すらしから衣ひもとくはなにつゆこほれつよ

秋 田

眺めあへぬ穂向ほむけの風のかたよりに田面吹きこす峯のもみぢ葉

秋 霜

世やはうき霜より霜に結びおくおいその杜のものとくちばは

秋 祝

露しぐれもるにつれなき秋風のまつにぞ君の御代は見えける

秋 戀

初雁のとほちもよほす秋風になれてまぢかきなかぞ枯れゆく

秋 夢

風騒ぐ萩の葉よくとうきて見し夢のたゞちぞいやはかななる

秋 旅

秋の色に残る形見の霜をだにおけかしくさばそれもとまらず

秋 祝

山水においせぬ千代をせきとめて己うつろふしらぎくのはな

秋 旅

古里はとほやま鳥のをのへより霜おくかねのながき夜のそら

秋 戀

下むせぶもしほの烟こがるとて秋やはみゆるひとはうらめし

秋 思

老が世は哀すそ野のくさがれによるのおもひのながつきの空

秋 雜

わたつみや秋なき花の浪風も身にしむころのふきあけのはま

仁和寺宮よりしのびてめされし秋の題十首承久

二年八月

秋 風

いつはとはわかぬ常磐の山びとも空におどろく月のかけかな

秋雨

花ぞめの衣の色もさだまらず野わきになびくあきのむらさめ

秋花

旅衣ひもとく花のいろくにとほざと小野のあたらあさぎり

秋雁

この頃の雁のなみだの初しほにいろわきそむる峯のまつかぜ

秋蟲

主から思ひたえにしよもぎふにむかしもよほすまつ蟲のこゑ

秋鹿

あさなくこのはうつろひ鳴く鹿のことわりしるき秋の山陰

秋水

秋かぜのかけ吹きはらふ谷の戸におもふもきよくすめる山水

秋霜



鳴く蟬も秋のひゞきの聲たてゝ色にみやまのやどのもみぢば  
へだて行く霧も日かずも深ければ忘れやしぬる遠きみやこは  
しきたへの枕忘れてみる月のかぞふばかりのよなくのかけ  
ふりにけりとしぐなれし月を見て思ひしことの更に悲しき  
散りぬればこひしきものを秋萩のけふの盛をとほどとへかし  
はやせ河みなわさかまき行く浪のとまらぬ秋をなに惜むらむ  
雁がねの雲行くはねにおく霜の寒き夜ごろにしぐれさへ降る  
松島の蜚のころもで秋くれていつかはほさむつゆもしぐれも

## 内裏の秋十五首の歌合

秋風

治まれる民のくさばをみせ顔になびく田のもの秋の初風

秋露

袖ぬらすしのぶもぢずりたが爲にみだれてもろき宮城野の露

秋月

染めてけり月のかつらの末葉までうつろふ頃の野邊の秋かぜ

秋 聲

冴えわたる霜にむかひてうつ衣幾とせ秋のこゑをつくらむ

秋 香

形見かな暮れ行く秋をうらみつよけふつむ袖にほふしら菊

秋 情

雨つゆにこの葉をなにのあはれとてなき心地する心わくらむ

秋 戀

うかりける山鳥の尾のひとりねよ秋やちぎりし長き夜にとも

同七年の秋内大臣殿にて文字をかみにおきて二

十首の歌の中に

秋 十 首

小篠はらほどなき末の露おちてひとよばかりに秋かぜぞ吹く  
みねに吹く風にこたふる下紅葉ひとはの音にあきぞきこゆる

建久六年秋の頃大將殿にて末句十をかきいだし

てよむべきよし侍りしに當座

しをるべきよもの草木もおしなべてけふよりつらき萩の上風  
とればけぬわくればこほる枝ながらよし宮城野の萩のした露  
來し方はみな面影に浮びきぬゆくすゑてらすあきの夜のつき  
いざ越えじ思へば遠き古里をかさなるやまのあきのゆふぐれ  
更けまさる人の松風くらきよにやまかけつらきさをしかの聲  
風なびくすゝきの末は露ふかしこのごろこそは初かりのこゑ  
昔かなあはれ幾世と來てとへば宿もるかぜにうづら鳴くなり  
河風によわたるつきのさむければやそうちびとも衣打つなり  
みそぢあまりみしをばなきと數へつゝ秋のみおなじ夕暮の空  
ひとりねのさならぬ床も袖ぬれぬ別れなれたるあかつきの空

おなじ頃左大將殿にて五首の歌

難波江に咲くやこのはな白妙の秋なきなみをてらすつきかけ

暮山松

秋はいぬ夕日がくれの峯の松四方のこの葉ののちもあひ見む

元久二年夏院の詩歌合

山路秋行

都にも今やころもをうつ山のゆふしもかよふつたのしたみち  
夕づく日木のまの影も初雁の鳴くやくもるのみねのかけはし

建仁三年和歌所の歌合

海邊雁

行く雁のたが秋風とうれふらむ浪もふせがぬいそのとまやに

三宮より十五首の歌めされし秋の歌

とぶ雁の涙もいとどそほちけりさよわけし野邊の萩の上の露  
久方の月のかつらのした紅葉やどかるそでぞいろに出で行く  
涙のみこのは時雨とふりはてようき身を秋のいふかひもなし

行路秋

打ちわたす遠方をちかた野邊の白露に四方のくさ木のいろかはるころ

建永元年七月十三日和歌當座

行路風

玉鉾やゆくでの野邊のあさぢまでうつろふ袖の秋のはつかぜ

正治二年二月左大臣の家の歌合

唐衣すそ野のまくす吹きかへしうらみて過ぐるあきの夕かぜ

元久元年七月宇治の御幸

野露

山城のくぜの原野のしのすよき玉ぬきあへぬかぜのしらつゆ

建仁二年三月六首秋の歌

霜迷ふ小田のかり庵のさむしろに月ともわかすいねがての空

建曆三年九月十三夜内裏の歌合

江上月

名所月

里わかずもろこしまでの月はあれど秋の半のしほがまのうら

同夜當座八月十五夜詠翫月應製和歌

萬世はこよひぞはじめ宿の月なかばのあきの名はふりぬとも

建仁元年三月盡歌合

湖上秋霧

さど浪やにほのみづうみのあけがたに霧隠れ行くおきの釣舟

建保四年閏六月内裏の歌合

秋

をじか鳴く葉山の陰のふかければ嵐待つまのつきぞすくなき

建曆三年後九月内裏の歌合

寒野蟲

行く秋の裾野のこのはあさなくそむれば弱る蟲のこゑく

建保三年五月和歌所の歌合

對月問昔

忘れずやはじめも知らぬよ空イはの月かへらぬ秋の數はふりつゝ

月契閏月

月もまだしかならふまでなれよとや數そふ秋の空をたのめて  
元久元年五辻殿に御わたりの後初めて講ぜらる

序通具卿讀師太政大臣應製臣上

松間月

木のまより月もちとせの色に出でて君が代契る庭のわかまつ

野邊月

みよし野は雪ふる嶺のちかければ秋よりうづむ月のしたくさ

田家月

ながめつゝとはれず久じきに秋の田のほの上てらす月のいく夜を

驛旅月

草枕みやこをとほみいたづらにゆき來の月のやどるしらつゆ

秋夜侍宴同詠池月久明應製和歌(建保六年八月十三日內裏中殿宴)

幾千代ぞ袖ふる山のみづがきもおよばぬ池にすめるつきかけ

元暦元年九月神主重保賀茂社歌合とてよませ侍

りしに

月

しのべとや知らぬむかしの秋をへて同じかたみに残る月かけ

霧

晴れくもり山のいはねに立つ霧をなづる衣のそでかとぞ見る

野宿月

權大納言家貞應

夕露のいほりはつきをあるじにてやどりおくるよ野邊の旅人

建久五年八月十五夜左大將の家

見月思旅

待つほどを語らぬ月にかこつとも知らでやぬらむ荒き濱べに



月はさぞ雪だに残るころならばそれとも見まし峯のあけほの  
内裏にて

禁庭月

わすれずよ御階みはしの霜の長きよになれしながらの雲のうへの月  
建久二年法皇栖霞寺におはしましよ時駒牽のひ

きわけの使にまゐるとて

さがの山千代の古道あととめてまたつゆわくるもちづきの駒  
九月十三夜内裏にて

山路月

山風は月のさごろもはらへどもおもらぬ雪はこのはこそふれ  
玉銚のみちもさりあへぬ春の花それかとまがふやまの月かけ  
建保二年九月十三夜内裏

月前風

すがのねや長月の夜の月影をはるかにわたる野邊のあきかぜ

待つことは心の秋にたえぬれどなほ山のはのつきは出でけり  
建曆三年後九月内裏の歌合

深山月

しらがしの露おく山も道しあれば枝にも葉にも月ぞともなふ  
建久七年九月十三夜内大臣の家

未出月

秋の空月ぞこよひとはらふなりひかりさきだつ峯のまつかぜ

初昇月

さしのほる三笠の山の峯からにまたたぐひなくさやかなる月

停午月

秋の月半のそらのなかばにてひかりのうへにひかりそひけり

漸傾月

物毎に秋のあはれは數そひてそら行くつきのにしにすくなき

入後月

月前竹風

月きよみ玉のみぎりの吳竹に千世をならせるあきかぜぞ吹く

月前擣衣

月に打つ民の衣もやどごとにくにさかえたる御代ぞきこゆる

月前眺望

きはもなきたのもばかりにしく雲の塵もまがはぬ秋のよの月

建永元年七月十三日和歌所當座

湖邊月

さゝ浪や鳩の浦風ゆめ絶えて夜わたるつきにあきのふなびと

元久元年七月宇治御幸

水月

にほのうみやしたひてこほる秋の月みがく浪間をくだす柴舟

正治二年左大臣の家の歌合

山月

月にふす伊勢の濱荻こよひもやあらし磯邊のあきをしのぼむ  
湖上月明

さよ波やちりもくもらすみがかれて鏡の山をいづるつきかけ  
古寺残月

初瀬山ゆづきがしたに照る月のあくるも知らぬありあけの影

深山曉月

鳥の音も聞えぬ山のやまびとはかたぶく月をあげぬとや知る

野月露深

おきあかす野邊の假庵の袖の露おのがすみかと月ぞさえ行く

田家見月

さを鹿の妻とふ小田に霜おきてつきかけ寒しをかのべのやど

河月似氷

すみわたる月影きよみみなかぜは結ばぬ水をこほりとぞ見る

建保三年八月十五夜内裏

月明風又冷

雲たえてのちさへ月を吹く嵐こぬようらむるとこなはらひそ  
さむしろに初霜さそひ吹く風を色に冴え行くねやのつきかけ

正治二年九月院に初度の歌合

浦月

あはぢ島月のかけもてゆふだすきかけてかざせる須磨の浦浪

建仁元年八月十五夜の歌合

月多秋友

千代經べき玉のみぎりの秋の月か<sub>は</sub>すひかりの末ぞひさしき

月前松風

ゆふべより雲はまよはぬ月影にまつをぞはらふ峯の木がらし

月前擣衣

秋風に夜さむの衣うちわびぬ更け行くつきのをちのやまもと

海邊秋月

なほざりの小野の浅茅におく露も草葉にあまる秋のゆふぐれ  
承久元年内裏の歌合

秋夕露

夕暮の草のいほりの秋のそでならはぬひとやしをれても見む  
建永元年七月和歌所の歌合

朝草花

あさなく、下葉もよほす萩の枝にかりのなみだぞ色にいでゆく

海邊月

藻鹽くむ袖の月かけおのづから外にあかさぬすまのうらびと  
建久八年秋歌あまた詠みける中に

ながめつゝ思ひしことのかすく、にむなしき空の秋のよの月  
秀能がよませ侍りし月の歌

秋といへば月のたどちを吹く風の雲をばすてのひさかたの山  
攝政殿の詩歌合に

閑中草花

跡絶えて風だにとはぬ萩の枝に身を知る露は消ゆる日もなし

元久元年七月宇治御幸

山風

かへり見る裾野の草はかたよりに浪なき秋の山おろしのかぜ

正治二年九月院の初夏の歌合

山嵐

秋の嵐ひと葉をしめみむろ山ゆるす時雨の染めつくすまで

建保元年内裏の詩歌合

野外秋望

村雨の玉ぬきとめぬ秋かぜにいく野かみがく萩のうへのつゆ  
ながめつゝ草の袂はうつろひぬかりのなみだもをちの篠原しのはら

同四年閏八月内裏の歌合

秋

秋きぬる萩吹く風のそよさらにしばしもためぬ宮城野のはら

隙磨關

世やはうき秋やは過ぐるすまのせき浦風こゆる袖のしらなみ

建保三年七夕内裏七首

天の河みづかけぐさのうちなびき玉のかつらも露こほるらむ  
天の河古きわたりもうつろひて月のかつらぞいろにいで行く  
天のがはかはこの浪の秋風にくものころもをたつやとぞ待つ  
天のがは手玉もゆらにおる機はたの長きちぎりはいつかたえせむ  
天の河紅葉のはしの色に見よあきたつそでのくれを待つほど  
天の河あれにし床をけふばかりうちはらふ袖のあはれ幾とせ  
天の河あくるともなさけしれ秋の七日のとしのひと夜を

建久六年二月左大將の家の五首

秋

秋といへど木の葉もしらぬ初風にわれのみもろき袖の白たま



松かけや外山をこむるかきねより夏のこなたにかよふあき風

建仁元年三月盡日歌合

水邊涼自秋

雪とのみ落つるしらあわに夏きえて秋をもこゆる瀧のいは波  
夏ごろも秋だにたよぬ神無月るぜきのなみのいそぐしぐれに

建保四年閏六月内裏の歌合

夏

夏はつるみそぎに近き川かけにいはなみ高くかくるしら木棉キムワタ

秋

松尾の歌合に初秋風建曆三年ニイ

あら玉の今年もなかばいたづらに涙かずそふをぎのうはかせ

建久五年夏左大將の家の歌合

秋宮城野

名所夏月

かけ清きなつみの川と秋かけてしらゆふばなをてらす夜の月

山納涼

夏の日のさすともしらぬ三笠山松のみかけぞますかけもなき

權大納言家

海上螢

みつしほに入りぬる磯をゆく螢己がおもひはかくれざりけり

建仁二年六月みなせ殿の釣殿に出でさせ給ふと

て六首題を賜りて御製にあはせられ侍りし中に

川上夏月

たかせ舟下す夜川のみなれざをとりあへずあくる頃の月かけ

海邊見螢

すまの浦もしほの烟とぶほたるかりねの夢路わぶとつけこせ

山家松風

郭公いづるあなしの山かづらいさやさとびとかけて待つらし

水邊草

かり寐せし玉江のあしにみがくれて秋の隣のかぜのすどしき

建保五年四月十四日庚申五首

夏 曉

なきぬなり木綿カッパ附鳥ツグのしだり尾の己にも似ぬよはのみじかさ

建保二年六月和歌所にて當座に

田家夏月

門田吹くほむけの風カゼのよるくは月ぞいなばの秋をかりける

水風晚涼

下くどる水よりかよふ風の音に秋にもあらぬあきのゆふぐれ

建久五年夏左大將の家の歌合

立田川夏

夕暮は山風すどしたつたがはみどりのかけをくどるしらなみ

あけまきの跡だに絶ゆる庭もせにおのれ結べとしける夏ぐさ

建仁二年三月六首めされし夏の歌

五月雨のふるの神杉過ぎがてに木高くなのるほとよぎすかな

承元二年閏四月四日和歌所

雨中時鳥

誰がために濡れつよしひて時鳥ふるともあめの山路わくらむ

秀能五首の歌の中

郭公

こひすとやなれもいぶきの時鳥あらはに燃ゆとみゆる山路に

建保四年閏六月内裏の歌合の十首の中

夏

郭公たがしのよめを音に立てよ山のしづくにはねしほるらむ

承久元年七月内裏の歌合

曉郭公

院の北面にて講ぜられし二首

菖蒲

手なれつよすよむ岩井の菖蒲草あやめくさけふはまくらにまたや結ばむ

郭公

待ちあかすさ夜の中山なかくに一聲つらきほとよぎすかな

建仁元年三月盡日歌合

雨後時鳥

五月雨の餘波なごりの月もほのくと里なれやらぬほとよぎすかな

正治二年二月左大臣家の歌合

夕時鳥

時鳥たそがれ時のくもまよりわれなのりてぞやどいとふなる

五月雨朝

玉水の軒もしどろの菖蒲草さみだれながら明くるいくかぞ

庭夏草

思ひやるかりねの野邊の葵草きみをこよろにかくる今日かな

かへし

使少將忠明朝臣

あふひ草かりねの野べの哀をもたれことのはにかけてとはまし

建保三年五月和歌所の歌合

夕早苗

あら玉の年ある御世の秋かけてとるや早苗にけふもくれつよ

建久六年二月左大將家の五首の夏

あれまくも人はをしまぬ故郷の夕かぜしたふのきのたちばな

建久六年民部卿經房卿の家の歌合に

初郭公

かはらずも待ち出でつるかな時鳥月にほのめく去年の古ごゑ

三宮より十五首の歌めされし夏の歌

問へかした霞も霧もたなびかぬ軒のあやめのあけほののそら  
時過ぎずかたらひつくせ時鳥誰かさみだれのそらおほれせで

散る花にたにのしばはし跡たえて今より春をこひやわたらむ

三位中將公衡卿の家にて旅宿三月盡

いほりさすは山が嶺のゆふ霞たえてつれなくすぐるはるかな

夏

春後思花

わすられぬ彌生の空を慕ふとてあを葉ににほふ花の香もなし

郭公初聲

待つほどやさすがにしるき時鳥今年わすれぬくものをちかた

土御門内大臣宰相中將に侍りし時五首の歌よま

せられ侍りし中に

卯花

夕月夜いりぬる影もとまりけりうの花さけるしらかはのせき

承元二年祭使神館かみだちに泊りたる翌日あしたに送り侍りし

庭上花

月くさの色ならなくにうつし植ゑてあだにうつろふ花櫻かな

閑中花

我が身世にふるともなしにながめして幾春風に花の散るらむ

權大納言の家の五首の中關路の花貞應三年

山櫻花のせきもるあふさかは行くもかへるもわかれかねつよ

土御門内大臣の家の歌合春六首

水邊躑躅

たつた川いはねのつよじかけ見えてなほ水くゞる春のくれなる

故郷款冬

山吹のこたへぬ色に露おちてさとのむかしはとふかひもなし

雨中藤花

しひてなほ袖ぬらせとや藤の花春はいく日のあめに咲くらむ

山家暮春



左大臣殿より八重櫻をたまふとて承久三年三月

いたづらに見る人もなき八重櫻宿からはるやよそに過ぎなむ

御かへし

八重櫻宿のさかりのちかければこの春の日ぞひかり添ふらむ

同三月八日内よりしのびてめされし三首の中

野 花

かくしつと散らずば千代も櫻咲く野邊の幾日に春の過ぐらむ

海 霞

浦に立つもしほの烟したふらしかすみ捨てたる春のゆくてを

川上花

みなの川みねよりおつる櫻花にほひのふちのえやはせかるよ

老後仁和寺宮しのびて仰せられし五首

野外花

吹きまよふ櫻色こき春かぜに野なるくさ木のわかれやはする

建保四年閏六月内裏の歌合春十首の中

散る花は雪とのみこそふるさとを心のまよにかぜぞすゞしき

正治二年九月十首の歌合

落花

我が來つる跡だに見えず櫻花ちりのまがひのはるのやまかぜ

院に詩歌合とてめされし元久二年六月

水郷春望

宮木もりなぎさの霞たなびきてむかしも遠きしがのはなぞの

網代木に櫻こきませ行く春のいさよふなみをえやはとどむる

承久元年七月内裏の歌合

深山花

山びともすまでいくよの石のゆかかすみにはなほ匂ひつゝ

暮春雨

鶯のかへるふる集やたどるらむ空にあまねきはるさめのそら

山のはの月まつ空のにはふより花にそむくるはるのともしび

建保元年内裏の詩歌合

山中花夕

時雨せし色はにほはずからにしきたつたの嶺のはるの夕風  
櫻狩かすみのしたにけふ暮れぬ一夜やどかせはるのやまびと

建保二年内裏詩歌合

河上花

花の色のをられぬ水にさす棹のしづくもにほふうぢの河長  
なとり川春の日かずはあらはれて花にぞ沈むせどのうもれ木

内裏歌合

朝落花

庭もせにうつろふ頃の櫻花あしたわびしきかずまさりつよ

同詩歌合山居春曙二首の中

なもしるし嶺のあらしも雪と降るやまざくら戸の曙のそら

かへし

大方の春に知られぬならひ故たのむさくらもをりやすぐさむ

殷富門院皇后宮と申しよ時まりて侍りしに權

亮大輔などさぶらひて夕花といふ事を詠みしに

つま木こりかへる山路の櫻花あたりにほひを行くてにや見る

建久七年三月關白殿宇治にて山花留客といふ事

を當座

春きての花の主にとひなれてふるさとうときそでのうつり香

中宮の女房舟にて人々よみ侍りしに

たづぬとてならぶる舟の衣手に花もさらにやはるを知るらむ

大内の花ざかりに宮内卿藤少將などに誘れて

春をへてみゆきになるよ花のかけふりゆく身をも哀とや思ふ

建保五年四月十四日院にて庚申五首

春  
夜

春の歌

花ざかり霞のころもほころびて嶺しろたへのあまのかぐやま

秀能が人々によませ侍りし五首の中花の歌

大かたのまがはぬ雲もかをるらむ櫻のやまのはるのあけほの

三宮十五首の中

百千鳥鳴くや如月ささづきつくくと木の芽はるさめ降りくらしつと

みよし野は春のにほひにうづもれて霞のひまも花ぞふりしく

建久五年夏左大將の家の歌合

泊瀬山

鐘の音も花のかをりになりはてぬをはつせ山の春のあけほの

同六年二月花月同家五首の春歌

山の端はかすみはてたるしのよめのうつろふ花にのこる月影

花のさかりに大宮大納言のもとより

かすならぬ宿に櫻のをりくはとへかし入のはるのかたみに

題を二首よませられし詩歌合とかやの初也此後

連々在此事

花添山氣色

春の花雲のほひにはつせやまかはらぬ色ぞそらにうつろふ  
玉すだれ同じみどりもたをやめのそむる衣にかをるはるかぜ  
正治二年三月左大臣の家の歌合

曉霞

はつせ山傾ぶく月もほのくとかすみにもるゝ鐘のおとかな

朝花

世の常の雲とは見えす山ざくら今朝やむかしの夢のおもかけ  
建保三年五月歌合和歌所

春山朝

このねぬるあさけの山の松風はかすみをわけて花の香ぞする  
建仁二年三月三體とかや仰られて召れし

狩衣立ちうき花のかけに來てゆくすゑくらすはるのたびびと

内裏の詩歌合山居春曙首の中

外山とてよそにも見えし春のきる衣かたしきねてのあさけは

内裏の歌合

夜歸雁

つれもなくかすめる月の深き夜に數さへ見えすかへる雁がね

海邊歸雁

さとの蟹のしほやき衣立ちわかれなれしも知らぬ春の雁がね

賀茂社の歌合御幸日

曉歸雁

花の香もかすみて暮ふありあけをつれなく見えて歸る雁がね

暮山花

たが春の雲のながめにくれぬらむ宿かる花のみねの木のもと

攝政殿にて歌を詩にあはせらるべしとておなじ

水邊柳

春の日にきしの青柳打ちなびき長き世ちぎるたきのしらいと

同題家會

染めかくるはなだの絲の玉柳した行くみづもひかり添へつゝ

江上霞

内裏歌合

春霞かすめる空の難波江にこゝろあるひとやこゝろ見ゆらむ

建保二年二月内裏の詩歌合

野外霞

立ちなれしとぶ火の野守おのれさへ霞にたどる春のあけほの  
松の雪消えぬやいづこ春の色にみやこの野邊はかすみ行く頃

建仁元年三月盡日歌合

霞隔遠樹

みつ潮にかくれぬ磯の松の葉も見らくすくなくかすむ春かな

霧中見花



湖邊梅花

けふぞとふしかつのあまの住む里を驚さそふはなのしるべに

旅宿早春

枕とて草のはつかに結べどもゆめもみじかきはるのうたよね

三宮より十五首の歌めされし春の歌の中に

あすか川遠き梅が枝匂ふ夜はいたづらにやは春かぜの吹く

建保四年閏六月内裏の歌合春の二十首の中

知る知らずわきてはまたず梅の花匂ふ春べのあたり夜のつき

土御門内大臣の家の歌合密有臨幸春の歌題六首

の中

梅香留袖

梅の花ありとや袖のにほひ故やどにとまるはうぐひすのこゑ

翠柳誰家

打ちなびき春のやどりやこれならむそともの柳主は知らねど

内裏歌合に

かすみ立ちこのめ春雨昨日までふる野の若菜けさはつむらむ  
承久元年七月内裏の歌谷十首之内

野徑霞

春日野のかすみの衣山かぜにしのももぢずりみだれてぞ行く  
正治二年九月院の初夏の歌合若草十首の中

うちなびき春のみ空も縁にてかぜにしらるゝ野邊のみづくさ  
雪間の若菜といふことを

いつしかと飛火とびひの若菜うちむれて摘むとも未だ雪もけなくに  
老後閑居つれづれのあまりとぶらひまうで来る

人々の歌よみ侍りしに

初春鶯

あらたまの年の初聲うちはぶきあさけの空に来るるうぐひす

霞中梅

とひ來かし立枝は梅の見えずともにはひをこめて立つ霞かは

拾遺愚草 下

部類歌

春

建久五年夏左大將の家の歌合題名所春二首之中

志賀浦

氷とく春の初かぜ立ちぬらしかすみにかへるしがの浦なみ

建仁元年正月七日院に年始の歌講ぜられ侍し日

初春祝

春毎のかもの羽色の駒なれどけふをぞひかむ千代のためしに

松間鶯

松のはも春はわけとや夕づく日さすや岡邊に来るるうぐひす

朝若菜

歳暮

足引の山路にふかき柴の戸も春のとなりはなほやわすれぬ

### 泥繪の御屏風

石清水臨時祭

散りもせじころもにすれるさよ竹の大宮人のかざすさくらは

重陽宴

こよのへのとのへもにほふ菊のえにことばの露も光そへつよ

千鳥

あはぢがた往來の舟のともがほに通ひなれたる浦ちどりかな

網代

あじろぎや浪のよろ／＼てる月に積る木の葉の數もかくれず

十一月鶴

浦にすむたづの上にとおく霜は千世ふる色ぞかねて見えける

鷹狩

いはせ野や鳥ふみたてよはしたかの梢もゆらに雪はふりつよ

炭竈

國とめる民の烟のほど見えてくもまのやまにかすむすみがま

十二月氷

鳩のうみや氷をてらす冬の月なみにますみのかどみをぞしく

雪

みよし野のみ雪ふりしくさとからはときしもわかぬ有明の空

八月鹿

草も木も色のちぐさにおりかくる野山のにしき鹿ぞ立ちける

月

ことわりの光さしそへ夜半の月あきらけき世の秋のなかばに

初雁

秋霧の立つやと待ちしこしぢよりけふは都のはつかりのこゑ

九月菊

老をせく菊の下水手にむすぶこのさとびとぞ千代も住むべき

田家

民の戸のあまつそらなる秋の日にほすやおしねの数も限らず

紅葉

立田姫手ぞめの露のくれなるに神代もきかぬみねのいろかな

十月水鳥

池にすむ鴛の毛衣よを重ねあかすみなるよみづのしらなみ

床 夏

咲きまざるいやはつ花の日をへつと籬まがきにあまる大和なでしこ

六月山井

たづねても夏に知られぬすみかかな杜もりの下風やまの井のみづ

納 涼

風わたる濱松が枝の手向ぐさなびくにつけてなつや過ぎぬる

六月祓

夏衣おりはへてほすかは浪をみそぎに添ふるせどのゆふしで

七月秋風

沖つ浪あさけすどしき秋風もまつのちとせぞそらにきこゆる

野 花

諸人の心いるらしあづさゆみひくまの野邊のあきはぎのはな

山 蟲

山里のこや松蟲のこゑまでもくさむらごとに千代いのるなり

款 冬

谷がはの春もちしほの色そめて深きやよひのやまぶきのはな

藤

紫の雲のしるしのはななれば立つ日もおなじいはのふぢなみ

四月更衣

諸人の袖もひとへにおしなべて夏こそ見ゆれ今日きたりとは

葵

久方のかつらにかくるあふひぐさ空の光にいく世なるらむ

早 苗

小山田のむろのはや早<sup>わ</sup>稻<sup>せ</sup>とりあへずそよぐ稻葉の頃や待つらむ

五月菖蒲

いつかとぞ待ちし沼江の菖<sup>かや</sup>蒲<sup>め</sup>草<sup>ぐさ</sup>けふこそ長きためしにはひけ

時 鳥

時鳥おのがときはのもりのかけおなじき月のころもかはらず



正月元日

宿ごとに都は春のはじめとてまつにぞきみの千代いはふなる

若菜

とぶひ野はまだ古年の雪間よりめぐむ若菜ぞはるいそぎける

霞

春のきる袂ゆたかに立つ霞めぐみあまねき四方の山のは

二月梅

野も山もおなじ雪とはまがへども春は木毎にほふうめが枝

柳

浪のよる柳の絲のうちはへていく千代ふべきやどとかは知る

網

おくあみの霞を結ぶはる風になみのかざしのはなぞ咲きそふ

三月櫻

山櫻花のしたひもときしあればさながらにほふ春のころもで

山家松

しのばれむものともなしに小倉山軒端のまつぞ馴れて久しき

山家橋

竹の戸の谷のしばはし改めてなほ世をわたるみちしたふらし

山家苔

知られじな岩のしたかけ宿深きこけの亂れてものおもふとも

寄神祇祝

春日山嶺のこのまの月なればひだりみぎにぞかみもまもらむ

寄水懷舊

せく袖もかへらぬ波の花のかけうきをたのみの春ぞかなしき

寄雲述懷

なべて世のなさけゆるさぬ春の雲頼みし道はへだてはてよき

月次御屏風十二帖倭歌

寛喜元年十一月女御  
入内御屏風の和歌

稀 戀

待ち渡るあふをうらやむあまのがはそのほど知らぬ年の契に

増 戀

色わかぬ闇の現うつらのひとことにそでのちしほはいとど染めつゝ

怨 戀

かけてだにまたいかさまにいはみがたなほ浪高き秋のしほ風

被忘戀

身を捨てゝ人の命を惜むともありしちぎりのおほえやはせむ

旅 行

かへりみるその面影は立ちそひて行くはへだたるみねの白雲

旅 宿

山かけやあしの庵のさゝまくらふしまち過ぎて月もとひこす

旅 泊

こぎよせてとまるとまりの松風を知るひとがほに急ぐ暮かな

海邊鹿

秋の鹿のわが身こす浪吹く風に妻を見ぬめのうらみてぞ鳴く

閑庭薄

招くとて草の袂のかひもあらじ問はれぬ里のふるまきがきに

名所擣衣

久方のかつらの里のさよごろもおりはへ月のいろにうつなり

朝寒蘆

朝霜のいかにおきける芦あしの葉のひとよのふしに色かはるらむ

深夜千鳥

おのれ鳴け急ぐ關路のさ夜千鳥鳥のそらねもこゑ立てぬまに

故郷雪

み吉野はまれのとだえの雲まとして昨日の雪のきゆる日もなし

聞聲戀

いへばえにおさふる袖も朽ちはてぬ玉のをごとのあきの調に

花満山

花ざかり空にしられぬ白雲はたなびきのこすやまのはもなし

江上暮春

堀江こぐ霞のをぶね行きなやみ同じはるをましたふころかな

溪卯花

かへるさのゆふべはきたに吹く風の浪たてそふる岸のうの花

野郭公

宮城野のこのしたつゆに時鳥濡れてやきつるなみだかるとて

雨後鵜川

鵜かひ舟村雨すぐるかどり火に雲間のほしのかげぞあらそふ

月前萩

萩の葉も心づくしの聲たてつあきは來にけるつきのしるべに

夕蟲

つれづれと秋の日おくるたそがれにとふ人わかぬ松蟲のこゑ

海旅

明くる夜のゆふつけ鳥に立ち別れ浦浪とほく出づるふなびと

野旅

野邊のつゆうつりにけりな狩衣萩のしたばを分くとせしまに

寄松祝

大方の松のちとせはふりぬともひとのまことは君ぞかぞへむ

詠三十首和歌

権大納言家 三十首

早春霞

立ち初めてけふや幾日のあさまだき霞もなれぬ春のさごろも

澤春草

いつの日か色には出でむ夜の鶴鳴くや澤邊のゆきのしたくさ

曉梅

まきの戸の夜わたる梅のうつりがもあかぬ別のありあけの影

寄草戀

末までと誰かちぎりし秋の霜むかしがたりのにはのしたくさ

寄鳥戀

逢坂の往來ゆきまにたつる鳥のねの鳴くくをしきあかつきぞうき

寄枕戀

思ひ出づるちぎりのほどもみじか夜の春の枕に夢はさめにき

雜六首

曉述懷

おのづからまた有明の月を見てすむともなしの憂うれにたへける

閑中燈

つくぐと明け行く窓の燈火のありやとばかり問ふ人もなし

山旅

分きてなど我しもたへぬ露けさぞ山路は誰もたびびとぞ行く

松 雪

下絶えず梢折れふすよなくに松こそうづめみねのしらゆき

湖 雪

鳩のうみやみぎはの外のくさきまでみるめなぎさの雪の月影

惜 歳 暮

思ひやれさすがにもものとはかりも恨みぬふしにつもる年々

戀 六 首

寄 雲 戀

いこま山いさむる嶺にゐるくもの浮きて思のきゆる日もなし

寄 露 戀

道の邊のあだなる露をおきとめて行くてに消えぬ戀ぞ悲しき

寄 煙 戀

いかにせむ蟹の藻鹽火絶えずたつ烟によわる浦かぜもなし



夕紅葉

立田ひめくものはたてにかけておる秋の衣はぬきもさだめず

殘菊句

おきそめていく世つもれるにほひともいさ白菊のはなの下露

冬七首

朝時雨

秋すぎてなほ恨めしきあさほらけ空行く雲もうちしぐれつよ

竹霜

いつの世までなれてふりぬる川竹のまた下陰に霜ぞおきそふ

池水鳥

鳩鳥たばきりのしたのかよひもたえぬらむ残る浪なきいけのこほりに

島千鳥

はまびさしなけの形見か友千鳥とわたりすぐるおきの小島に

尋蟲聲

松蟲の鳴く方とほく咲く花のいろくをしきつゆやこほれむ

山家月

月ならでたが柚山のかけばかりふかきしばやの秋をとほまし

野徑月

むさし野は露おくほどのとほければ月を衣にきぬひとぞなき

船中月

知らざりき秋の潮路をこぐ船はいかばかりなる月を見るときも

曉鹿

長き夜にあかずや月をしたふらむ嶺ゆく鹿のありあけのこゑ

河霧

飛鳥川ふちせも知らぬあきの霧なににふかめて人へだつらむ

擣衣幽

秋風にさそはれきよてうつころも及ばぬ里のほどぞきこゆる

夜盧橘

たちばなの花ちる里の夕月夜そらに知られぬかけやのこらむ

籬瞿麥

なでしこの頼むまがきのたわむまで夜のまの露のぬける白玉

江螢

こぎかへる棚なし小船同じ枝に燃えてほたるのしるべ顔なる

秋十二首

早秋

天の川わたせの浪に風立ちてやよほどちかきかさよぎのはし

萩露

わきてよも天とぶ雁のおきもせじやどからふるき萩の朝つゆ

萩風

今よりの夕暮かこつしたをぎをうちつけに吹く秋のはつかぜ

庭花

跡絶えてとはれぬ庭の苔の色もわするばかりに花ぞ散りしく

河款冬

山吹の花にせかるよおもひがは浪のちしほはしたに染めつよ

夏七首

社卯花

みぬさとる三輪の祝はかりや植ゑおきしゆふしで白くかくるうの花

早苗多

植ゑくらす縁の早苗里ごとにたみのくさばのかずも見えけり

里時鳥

時鳥たれしのぶとかおほあらしのふりにし里を今もとふらむ

岡時鳥

まだ知らぬ岡邊の宿のほととぎすよその初音に聞きかなやまむ

行路梅

玉鉾のゆくてばかりを梅の花うたてにほひのひとしたふらむ

春月

山のはも霞のほかの花の香にこのごろふかきいざよひのつき

岸柳

おそくときいづれの色に契るらむ花待つ頃のきしのおをやぎ

旅春雨

旅衣こやもかくれぬ芦の葉のほどなきとこにはるさめぞ降る

遠歸雁

いくかすみ行く野の末は白雲のたなびくそらにかへる雁がね

山花

あしびきの山ざくら戸をまれにあけて花こそ主誰を待つらむ

關花

櫻花たが世のわか木ふりはてよすまの關屋のあとうづむらむ

夕日かけむれたる田鶴はさしながら時雨の雲ぞやまめぐりする

十一月千鳥

千鳥なくかもの河瀬の夜半の月ひとつにみかく山あひのそで

十二月水鳥

ながめする池の氷にふる雪のかさなる年をしの毛ごろも

詠五十首和歌（仁和寺宮五十首）

春十二首

初春

春の色と頼むまでやはながめつるいふばかりなる山の霞を

雪中鶯

松の葉は今もみゆきの古里にはるあらはるようぐひすのこゑ

橋邊霞

かけたえて下行く水もかすみけり濱名のはしの春のゆふぐれ

すみれ咲く雲雀の床に宿かりて野をなつかしみくらす春かな

四月時鳥

時鳥しのぶの里にさとなれよまだ卯のはなのさつき待ところ

五月水雞

楨の戸をたよく水雞ひなのあけほのに人やあやめの月のうつりが

六月鶉

みじか夜の鶉川に上るかどり火のはやく過ぎ行く水無月の空

七月鶉

長き夜に羽はねをならぶるちぎりとして秋まちわたるかさよぎの橋

八月初雁

ながめつゝ秋のなかばもすぎの戸にまつほどしるき初雁の聲

九月鶉

人目さへいとどふかくさ枯れぬとや冬まつしもに鶉鳴くらむ

十月鶉

秋たけぬいかなる色と吹く風にやがてうつろふもとあらの萩

九月薄

花すゝき草の袂のつゆけさをすてと暮れ行くあきのつれなさ

十月残菊

神無月霜夜の菊のにははずばあきのかたみになにをおかまし

十一月枇杷

冬のひはこのは残さぬ霜の色をはがへぬえだの花ぞまがふる

十二月早梅

色うづむ垣根の雪のころながら年のこなたににほふうめがえ

正月鶯

春来てはいくかもあらぬ朝戸出に鶯きるるまどのむらたけ

二月雉

狩人の霞にたどるはるの日をつまとふきじのこゑに立つらむ

三月雲雀



うちなびき春くる風のいろなれや日をへて染むる青柳のいと

二月櫻

かざしをる道行く人の袂までさくらににほふきさらぎのそら

三月藤

行く春の形見とや咲くふぢの花そをだにのちの色のゆかりに

四月卯花

白妙のころもほすてふ夏のきて垣根もたわにさける卯のはな

五月盧橘

時鳥鳴くやさつきの宿がほにかならずにほふのきのたちばな

六月常夏

大方の日かけにいとふみな月の空さへをしきとこなつのはな

七月女郎花

秋ならで誰もあひ見ぬをみなへしちぎりやおきし星合ほしあひのそら

八月鹿鳴草

鳴く涙やしほのころもそれながら馴れずばなにの色か俵しのばむ  
秋の色にさてもかれなで蘆邊こぐ棚なしを船われぞつれなき  
契りおきし末の原野のもとがしはそれとも知らじよその霜枯

### 雜五首

跡たれてちかひを仰ぐ神も皆身のことわりにたのみかねつよ  
久方の雲のかけはしいつよまで一人なけきの朽ちてやみぬる  
思ふこと空しき夢のなか空に絶ゆとも絶ゆなつらきたまの緒  
日影さす少女の姿われもみきおいすばけふの千世のはじめに  
ふして思ひおきてぞ祈る長閑なるよろづよてらせ雲の上の月

後仁和寺宮月次の花鳥の歌のゑにかよるべき事

あるをふるき歌かずのまよにありがたくは今よ

みても奉るべきよし仰せられしかば詠花鳥倭歌

正月柳

春日山嶺のあさ日の春の色にたにのうぐひすいまやいづらし  
櫻麻のをふのうらかぜ春吹けばかすみを分くるなみの初はな  
我ぞあらぬ鶯さそふ花の香はいまもむかしのはるのあけほの  
雲路行く雁の羽風も匂ふらむうめ咲くやまのありあけのそら  
淺緑玉ぬきみだるあをやぎのえだもとをよにはるさめぞ降る  
あらたまの年にまれなる人までど櫻にかこつはるもすくなじ  
頼むべき花の主もみちたえぬさらにやとはむはるのやまざと  
みよし野やたぎつ川うち春の風神代もきかぬ花ぞみなぎる  
いくかへり彌生の空を恨むらむたには春の身をわすれつよ  
色に出でてうつろふ春をとまれともえやはいふべき山吹の花

## 戀五首

おのづからみるめの浦に立つ烟風をしるべのみちもはかなし  
草の原露をぞ袖にやどしつる明けてかけ見ぬつきのゆくへに

阿武隈川 老耄忘却兩度詠之左道

思ひかね妻とふちどり風さむみあぶくまがはの名をや尋ぬる

安達原

しぐれ行くあだちの原の薄霧うすぎりにまだ染め果てぬ秋ぞこもれる

宮城野

うつりあへぬ花のちぐさに亂れつゝ風の上なる宮城野のつゆ

安積沼

踏みしだくあさかの沼の夏草にかつ亂れそふしのぶもぢずり

鹽竈浦

かすみとも花ともいはじ春の影いづこはあれどしほがまの浦

冬日同詠二十首應製和歌(建曆二年十二月院よ)

從三位行侍從臣 藤原朝臣定家上

春十首

濱名橋

霧はるゝ濱名のはしのたえぐにあらはれわたる松のしき浪

宇津山

うつの山うつるばかりの嶺の色はわきて時雨や思ひそめけむ

佐良之奈里

嵐吹く山の月かけあきながらよもさらしなのさとのしらゆき

富士山

時鳥なくやさつきもまだ知らぬ雪はふじのねいつと分くらむ

浄見關

きよみがた袖にも浪の月を見てかたへも待たぬ風ぞすどしき

武藏野

武藏野のゆかりの色もとひ侘びぬ見ながらかすむ春の若くさ

白川關

暮るとあくと人を心におくらさで雪にもなりぬしらかはの關

小鹽山

春にあふをしほの小松かすくゝにまさる緑のすゑぞひさしき

會坂關

今はとて鶯さそふ花の香にあふさかやまのまづかすむらむ

志賀浦

しがの浦やこほりもいくへるる田鶴の霜の上毛に雪はふりつゝ

鈴鹿山

秋は來て露はまがふとすどかやまふる紅葉ばに袖ぞうつろふ

二見浦

ますかどみ二見の浦にみがかれて神風きよきなつの夜のつき

大淀浦

大淀の浦にかりほすみるめだにかすみにたえて歸るかりがね

鳴海浦

なるみがた雪の衣手吹きかへす浦風おもくのこるつきかけ

野中清水

玉鉾の道の夏ぐさすゑとほみ野なかのしみづしばしかけ見む

海橋立

踏みも見ぬいく野の外に歸る雁かすむ浪間のまつとつたへよ

宇治川

網代木や波のきりまに袖見えイさえて八十うぢびとは今かとふらむ

大井川

大井川まれのみゆきに年へぬる紅葉のふなぢあとはありけり

鳥羽

諸人も千代のみかけに宿しめてとはにあひ見む松のあきかぜ

伏見里

ふしみ山妻とふ鹿のなみだをやりほのいほの萩の上のつゆ

泉川

いづみ川かは浪清くさす棹のうたかたなつをおのれ消ちつと

水無瀬川

この里に老いせぬ千世はみなせがはせき入るゝ庭の菊の下水

須磨浦

すまの蟹の馴れにし袖もしほたれぬせき吹きこゆる秋の浦風

明石浦

明石瀉いさをちこちも白つゆのをかべの里のなみのつきかけ

志加麻市

君が代は誰もしかまのいちじろくとしあるたみの天つ空かな

松浦山

たらちめやまたもろこしにまつら舟今年も暮れぬ心づくしに

因幡山

これもまた忘れしものを立ちかへりいなばの山の秋の夕ぐれ

高砂

高砂の松はつれなきをのへよりおのれ秋知るさをしかのこゑ



住吉濱

白菊の匂ひし秋もわすれぐさ生ふてふきしの春のうらかぜ

葦屋里

あしのやのかりねの床のふしのまに短く明くる夏のよなく

布引瀧

ぬのびきの瀧の白絲なつくれば絶えずぞひとのやま路尋ぬる

生田杜

秋とだに吹きあへぬ風に色かはるいくたの杜のつゆのした草

若浦

夜の鶴なく音ふりにし秋の霜ひとりぞほさぬわかのうちらびと

吹上浦

潮風のふきあけの雪にさそはれて浪のはなにぞはるは先だつ

交野

風をいたみ交野かたののとだちしたはれて忍ぶかれ葉に霰降るなり

名所御障子の和歌(最勝四天王院名)  
所御障子の歌

春日野

春日野に咲くや梅が枝雪まよりけふは春邊とわか菜つみつよ

芳野山

みよし野は花にうつろふ山なれば春さへみゆきふるさとの空

三輪山

けふこすばみわの檜原の時鳥ゆくての聲をたれか聞かまし

龍田山

たつた山よものこすゑの色ながら鹿の音さそふ秋のかはかせ

泊瀬山

を泊瀬や嶺の常磐木吹きしをりあらしにくもるゆきの山もと

難波浦

春の色はけふこそみつのうらわかみあしの若葉を洗ふしら波

山野樹竹雪ふりつみたる所(人家あり)

吳竹もまつのすゑ葉もをれふして千世をこめたる雪の中かな

十二月 歳暮に下人等自山松切りて出でたる所

民も皆君が八千世を松が枝にかすとりそむるとしのくれかな

### 泥繪の御屏風の和歌

夏 樹蔭納涼

すどみにと道は木のまにふみ馴れて夏をぞたどる森の下かけ

冬 池邊氷

宿からば夜をへてこほる池水は重ねむ千代のかげぞ見えける

### 入道皇太后宮大夫九十賀算屏風の歌

雪

花山の跡をたづぬる雪の色にしふるみちのひかりをぞ見る

十月 海邊に千鳥ある所(海人鹽屋あり)

君が代を八千代とつぐるさ夜千鳥しまの外まで聲きこゆなり

網代に人あつまりたる所

この頃はせどの網代に日を経つこととふ人のたゆるまぞなき

江澤邊に寒蘆しけれる所(鶴あり)

行末もいくよの霜かおきそへむ蘆間に見ゆるつるのけごろも

十一月 五節參入のところ

白妙のあまのはごろもつらね來て少女まちとる雲のかよひぢ

賀茂臨時祭社頭儀式(上御社)

ふる袖はみたらし川にかけさえて空にぞすめるうどはまの聲

野邊に鷹狩したる所

急ぎ立つ日なみのみ狩雪ふかしかた野のを野の冬のあけほの

十二月 内侍所の御神樂儀式

空さえてまだしも深きあけ方にあかほしうたふ雲のうへびと

春日野に鹿ある所

春日山朝日まつまのおけほのにしかもかひある秋とつぐなり

八月 人家池邊人々翫月所

天つ風みかく雲井にてる月のひかりをうつすやどのいけみづ

會坂關駒迎に行き向ふ所

せき水のかけもさやかに見ゆるかなにごりなき世の望月の駒

田中に人家ある所

秋ふかき山田のなるこおしなべて治れる世のためしにぞひく

九月 山中に菊盛りに咲きたる邊に仙人ある所

かぎりなき山路の菊の影なれば露もや千世をちぎりおくらむ

山野井人家紅葉さかりなるを人々翫ぶ所

移し植うる花も紅葉もをりごと尋ぬる人のこよろをぞ見る

海邊に霧立ちたる所

立ちまさるうらわの霧に長月の日數ばかりをあらはにぞ見る

五月 人家の雲間に郭公ある所

いく里のひとにまたれて時鳥やどのこずゑにこゑならすらむ

菖蒲かりたる所(又人家に葺きたる所もあり)

あやめ草長き契をねにそへて千世のさつきといはふ今日かな

六月 山井邊に人々納涼したる所(人家あり)

長き日に春秋とめる宿やこれむすべばなつも知らぬましみづ

野邊の杜間に夏草しける所

わけ行けば夏のふかさぞ知られけるもりの下草末もはるかに

河邊に六月祓したるところ

みそぎして結ぶかはなみとしふともいく世すむべき水の流ぞ

七月 小野井人家に秋風吹きたる所(萩あり)

てる月の光そふべき秋來ぬと聞くもすどしきはぎのうはかせ

野花盛に開きて人々集りたる所

おしなべて花に心は入りにけり野邊の千草を分くるもろびと

二月 人家ならびに野邊に梅花さきたる所

をちこちのにはひは色に知られけりまきの戸すぐる梅の下風

三月 澤邊春駒

春深く澤邊のまこもえぬればたちもはなれずあさる駒かな

山野并人家に櫻花さかりに咲きたる所

もろびとの心にかをる花ざかりのどけき御代も色に見えけり

人家の庭に藤さかりにひらけたる所

春の日のひかりてります庭の面にむかしにかへる宿のふぢ波

四月 人家に更衣したる所(卯花垣根あり)

けふごとくにひとへにかふる夏衣なほいくとせを重ねてかきむ

賀茂下御社神館邊葵付けたる人參る所

千早振かものみづがき年をへて幾世の今日にあふひなるらむ

早苗植ゑたる所

天の下けしきもしるくとりなへは水を心にまづぞまかする

寄衣戀

みしかけよさては山あるの摺衣すりころもみそぎかひなきみたらしの浪

月次御屏風十二帖和歌(女御入内御屏風の歌久治五年十二月)

正月 小朝拜列立の所

霞しく春のはじめのにはのおもにまづ立ちわたるくもの上人

野邊小松原に子日する所

小松原春の日かけにひきつれて千代のけしきを空に見るかな

山野に霞たちわたる所(住吉の松もあり)

春霞いま行くするをおしこめておもふもとほきすみよしの松

二月 春日祭社頭儀

みかさ山さしけるつかひけふくればすぎまに見ゆる袖の色々

花中に鶯ある所(人家あり)

里わかぬ春の光を知りがほにやどをたづねてきるるうぐひす



寄雨戀

雨そよぎほどふる軒の板廂ひさしやひとめもるとせしまに

寄草戀

いまはとてわするよほどやしけりにしわがすむ里の軒の下草

寄木戀

せく袖にせどの埋木あらはれてまた越す浪にくちや果てなむ

寄鳥戀

かりにだにとはれぬ里の秋風にわがみうづらの床はあれにき

寄嵐戀

わびはつるわがおもひねの夢路さへ契しられて吹く嵐かな

寄船戀

こぬ人をつきせぬ浪にまつら船よるとは月のかげをのみ見て

寄琴戀

形見ぞと頼みしことのかひもなくうきなかのをの絶えやはてなむ

月前鹿

秋の野にさゝわくるいほの鹿の音に幾夜露けき月を見つらむ

旅泊月

むしあけのまつと知らせよ袖の上にしほりしまゝの浪の月影

月前草露

草のはら月の行方におく露をやがて消えねと吹くあらしかな

菊籬月

しら菊のまがきの月の色ばかりうつろひのこる秋のはつしも

暮秋曉月

今いくか秋もあらしの横雲にいづればしらむやまのはのつき

寄雲戀

知られじなちしほのこのはこがるともしぐるよ雲に色し見えねば

寄風戀

いかにせむ人もたのめぬ呉竹の末葉吹きこすあきかぜのこゑ

月前聞雁

白妙の月も夜さむにかぜさえてたれにころもをかりのひと聲

浦邊月

波風の月よせかへる秋のよをひとりあかしのうらみてぞぬる

月照瀧水

秋の月そでになれにしかけながらぬるゝ顔なるぬのびきの瀧

杜間月

露にうつる月より秋の色に出でてときはの杜もりの影ぞかひなき

月前秋風

吹きはらふとこの山風さむしろにころもでうすし秋の月かけ

江上月(忘却八詠雖見苦力不及)

すみの江の松がねあらふ白波のかけてよるとも見えぬ月かけ

月前蟲

夜の風冴え行くつきにたがあきの衣おりはへむしの佗ぶらむ

月前草花

宮城野に風待ちわぶるはぎのえの露をかぞへてやどる月かけ

雨後月

かき曇り侘びつよねにし夜頃だにながめし空に月ぞはれ行く

松間月

秋の露もたどわがためやをかべなる松の葉分の月のころもで

おのづから身をうぢ山に宿かればさもあらぬ空の月もすみけり

月前竹風

臥しわびて月にこがるゝ路の邊のかきねの竹をはらふ秋かぜ

野徑月

めぐりあはむ空行く月のゆく末もまだはるかなる武藏野の原

澤邊月

人しれぬあしまに月の影とめていり江のさはに秋かぜぞ吹く

鞆中花

思ふ人心へだてぬかひもあらじさくらの雲の八重のをちかた

湖上花

さよなみや櫻吹きかへす浦風をつりするあまの袖かとぞ見る

橋下花

跡もなき山路の櫻ふりはへて問はれぬしるきたにのしばはし

花下送日

木のもとに待ちし櫻を惜むまでおもへばとほきふるさとの空

庭上落花

春の色と消えずば今朝も見るばかりすこし梢にはなの残りて

暮春惜花

いかにせむ春もいくかの櫻花かたもさだめぬかぜのほひを

初秋月

露やおく宿かりそむる秋の月まだひとへなるうたよねのそで

古寺花  
散らすなよかさぎの山の櫻花おほふばかりのそでならずとも

花似雪

みよし野の春の日かずやつもるらむ枝もとをよの花の白ゆき  
河邊花

すどか河八十瀬の浪の春の色はふりしく花のふちとこそなれ  
深山花

やまぶしの人も来て見ぬ苔の袖あたらさくらをうち拂ひつよ

暮山花

誰とまた雲のはたてに吹きまよふあらしの嶺の花をうらみむ

古溪花

山びとの跡なきたにのゆふ霞こたへぬはなににほふはるかぜ

關路花

櫻色に四方の山かぜそめてけりころものせきの春のあけほの

初春待花

春霞かすみそめぬる外山よりやがて立ちそふはなのおもかけ

山路尋花

みよし野の花もいひなしの空めかと分け入る嶺にほふ白雲

山花未遍

山かけはなほ待ちわびぬ櫻ばないたりいたらぬ春をうらみて

朝見花

かすくゝに咲きそふ花の色なれや嶺のあさけのやへの白くも

遠村花

誰か住む野原の末のゆふがすみ立ちまよはせる花の木のもと

故郷花

飛鳥川かはらぬ春の色ながらみやこのはなといつにほひけむ

田家花

春をへて門田にしむるなほしろ苗代にはなのかどみのかけぞかはらぬ

雜

久方のあま照る月日のどかなる君のみかけをたのむばかりぞ  
あきつしま外まで波はしづかにて昔にかへるやまとことは  
仰けどもこたへぬ空の青みどり空しくはてぬ行くすゑもがな  
わがともとみかきの竹も哀しれ世々までなれぬ色もかはらで  
歎かずもあらざりし身のそのかみを羨むばかり沈みぬるかな  
身を知れば人をも世をも恨まねど朽ちにし袖の乾く日ぞなき  
十年あまり三年はふりぬ夜の霜おき迷ふそでに春をへだてよ  
わがたのむ心の底をてらし見よみもすそがはにやどる月かけ  
春日野やしたもえ侘ぶる思ひぐさ君のめぐみを空に待つかな  
くもりなき日吉の宮のゆふだすきかへる思のいつかはるべき

冬日同詠五十首應製和歌（院句題五十首建仁元年十一月）



山姫のぬさの追風吹きかさねちひろのうみにあきのもみぢば  
物毎にわすれがたみのわかれかなそをだに後とくると秋かな

## 冬

月日のみ杉の葉しぐれ吹くあらし冬にもなりぬ色はかはらで  
神無月しぐれてきたるかさよぎのはねに霜おきさゆる夜の袖  
冬がれて青葉も見えぬ村すよき風のならひはうちなびきつよ  
み山より村雲なびき吹く風にあられよこぎるふゆのゆふぐれ  
冴えとほる風の上なる夕月夜あたるひかりにしもぞ散りくる  
大淀の松に夜ふくる浪かぜをうらみてかへるともちどりかな  
眺めつよ夜わたる月におく霜のすぎてあとなきひととせの空  
神さびていはふみむろの年ふりてなほゆふかくるまつの白雪  
春しらぬたぐひをとへば三笠山このごろふかき雪のうもれ木  
日もくれぬ今年もけふになりにつり霞を雪にながめなしつよ

夏の日をみち行きつもれいなむしろなびく柳にすどむかは風  
影やどす水の白浪立ちかへりむすべどあかぬなつの夜のつき  
山めぐりそれかとぞ思ふ下紅葉うち散るくれのゆふだちの空  
夏はつるあふぎに露もおき初めてみそぎすらしきかもの川風

## 秋

秋風よそよやはぎの葉こたふともわすれね心わが身やすめて  
夕月夜入る野のをばなほのふくと風にぞつたふさをしかの聲  
玉くしけふたみのうらの秋の月あけまくつらきあたら夜の空  
秋の夜は月のかつらも山の端もあらしにはれて雲もまがはず  
秋を経て昔は遠きおほぞらにわが身ひとつのものつきかけ  
露おつる櫛の葉あらく吹く風やなみだあらそふ秋のゆふぐれ  
初雁のたよりもすぐる秋風にこととひかねてころもうつこゑ  
たをやめの袖か紅葉かあすか風いたづらに吹く霧のをちかた

梓弓いそ邊の小松はるといへばかはらぬ色もいろまさりけり  
百千鳥こゑものどかにかすむ日に花とはしるしよもの白くも  
千代までの大宮人のかざしとや雲るのさくらにほひそめけむ  
春霞かさなる山をたづぬともみやこにしかじはなのにしきは  
春やいかに月もありあけかすみつゝ梢のはなは庭のしらゆき  
年のうちの二月フキやよひほどもなく馴れてもなれぬ花の面かけ

## 夏

櫻色の袖もひとへにかはるまでうつりにけりな過ぐる月日は  
春暮れていくかもあらぬを山風に葉末かたよりなびく下くさ  
神まつる卯月待ち出でて咲く花の枝もとをよにかくる白ゆふ  
はるかなる初音はゆめか郭公くものたどおはうつゝならねど  
五月雨の月はつれなきみやまよりひとりもいづる時鳥かな  
ことわりやうち臥す程も夏の夜はゆふつけ鳥のあかつきの聲

こと問へよ思ひおきつの濱千鳥鳴くく出でしあとの月かけ  
面影の身にそふ宿にわれまつとをしまぬ草や霜かれぬらむ

眺望二首

かへりみる雲より下の古里にかすむこずゑははるのわかくさ  
わたのはら浪と空とはひとつにて入日をうくる山のはもなし

春日應太上皇製和歌五十首

建仁元年春

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝

臣定家上

春

鶯うすのうみやけふより春にあふさかの山もかすみて浦風ぞ吹く  
白妙の袖かとぞ思ふわかな摘むみかきのはらのうめの初はな  
かすむより鶯さそひ吹く風にとやまもにほふはるのあけほの  
心あてにわくともわかじ梅の花ちりかふさとのはるのあは雪

雜十二首

祝二首

君が世はたかのの山にすむ月の待つらむ空にひかり添ふまで  
うごきなき君がみむろの山水にいく千代法のすゑをむすばむ

述懷三首

あす知らぬけふの命のくるよまにこの世をのみもまづ歎くかな  
かばかりと恨みすてつるうき身ほど生れむ後の猶かたきかな  
立ちかへり思ふこそなほかなしけれ名は残るなる苔の行方に

閑居二首

わくらばにとはれし人も昔にてそれよりにはの跡は絶えにき  
残る松かはるこのはの色ならですぐる月日も知らぬやどかな

旅三首

旅衣きなれの山のみねのくもかさなる夜半をしたふゆめかな

秋風にそよぐ田の面のいねがてに待つは粟田のはつ雁のこゑ  
露さえてねぬ夜の月やつもるらむあらぬ浅茅あさぢの今朝の色かな  
ひとり聞く空しきはしに雨おちてわがこし道を埋むこがらし  
年毎のつらさと思へどうとまれずたと今日あすの秋の夕ぐれ

### 冬七首

けふそへに冬の風とは思へども絶えずこき下すよもの木葉このはは  
霜うづむを野の篠原しのぶとてしばしもおかぬ秋のかたみを  
神無月うちぬる夢もうつよにも木の葉時雨とみちは絶えつよ  
蘆鴨のよるべのみぎはつらく居てうきねを移すおきの月かけ  
玉銚のみちしろたへにふる雪をみがきて出づる朝日かけかな  
そなれ松梢こすえくだくる雪をれには打ちやまぬなみのさびしさ  
あらたまの年の幾とせ暮れぬらむ思ふおもひの面がはりせで

夕暮はいづれの空のなごりとてはなたちばなに風の吹くらむ  
夕だちのすぎの下かけ風そよぎなつをばよそにみわの山もと  
打ちなびきしけみが下のさゆりばの知られぬ程にかよふ秋風  
松かけや岸による浪よるばかりしばしぞすとむすみよしの濱

## 秋十二首

しきたへの枕にのみぞ知られけるまだしのよめの秋のはつ風  
秋きぬとたが言の葉かつけそめし思ひたつたの山のしたつゆ  
あはれまたけふも暮れぬと眺めする雲のはたてに秋風ぞ吹く  
里はあれて時ぞともなき庭の面も本あらの小萩秋は見えけり  
秋風に侘びてたまちる袖のうへを我とひがほにやどる月かな  
年ふれば涙のいたくもりつと月さへくつることちこそすれ  
今よりはわれ月影と契りおかむ野はらのいほのゆくすゑの秋  
誰も聞くさぞなならひの秋の夜といひてもかなしさを鹿の聲

大空はうめのにほひにかすみつよくもりもはてぬ春の夜の月  
みちの邊に誰うゑおきてふりにけむ残れる柳はるをわすれず  
霜まよふそらにしをれし雁が音のかへるつばさに春雨ぞ降る  
面影に戀ひつゝ待ちしさくら花さけば立ちそふ嶺のしらゆき  
春を経て雪とふりにし花なれどなほみよし野のあけほの空  
櫻花うつりにけりなとばかりを歎きもあへずつもるはるかな  
春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に別るよよこぐものそら  
年ふともわすれむものか神風やみもすそがはの春のゆふぐれ  
行く春よわかるよ方も白雲のいづれのそらをそれとだに見む

### 夏七首

へだてつるけふ立ちかふる夏衣ころもまだへぬ花のなごりを  
たが爲に鳴くやさつきの夕とて山ほとよぎすなほ待たるらむ  
山のはに月も待ち出でぬ夜を重ねなほ雲のほるさみだれの空



頼むかなその名も知らぬみ山木に知る人えたる松とすぎとを  
明くるより故郷とほき旅まくらこよろぞやがてうら嶋のはこ  
有りつよと待たれしもせぬ岡の陰一夜の宿にをがやをぞかる  
黒かりし我が駒の毛のかはるまで上りぞなづむ嶺のいはほに  
山を越え海をながむる旅のみち物のあはれはをしぞつけたる  
諸共にめぐりあひける旅まくらなみだぞそよぐ春のさかづき  
人のくに夜はながつきの露しもよ身さへ朽ちにしとこの衾に  
來し方も行くさきも見ぬ浪の上の風をたのみにとばす船の帆

詠五十首和歌（仁和寺宮五十首）

建久五年  
夏

春十二首

いつしかと外山の霞立ちかへりけふあらたまる春のあけほの  
若菜つむ都の野邊にうちむれて花かとぞ見るみねのしらゆき  
鶯は鳴けどもいまだふるさとの雪のしたくさはるをやは知る

われぞあらぬ雪は昔に似たれども誰かは訪はむ冬のやまかけ  
いざさらば尋ねのほりてせきすゑむたどこの上ぞ月の入る嶺  
おのづから知らぬあるじも残しけり宿もる杉のもとの心は  
あらし吹く月のあるじは我ひとり花こそ宿と人もたづぬれ

### 旅

面影のひかふるかたにかへりみるみやこの山は月ほそくして  
いとどしく家路へだつる夕霧にあまの藻鹽火けぶり立ちそふ  
故郷の空さへあらぬ心地かなほどなきとこのをがや葺くのき  
旅衣そで吹くかぜやかよふらむわかれて出でし宿のすだれに  
立ち濡るよ日かすにつけておもなれぬ嶺なる雲もたにの氷も  
出でてこし春は冬野にかはるまでもとの契をなほやたのまむ  
萩を編めるこやのかり寐のたぐふべき風に待たるよ宵の燈火  
すぎ行くと人の聲する宿もなし江の浪につきのみぞ澄む

## 山家

麓にやみね立つ雲とながむらむ我あけほのにおはぬさくらを  
山ふかみ人はむかしのやどふりて月より先にのきぞかたぶく  
心から聞くこゝちせぬすまひかなな聞なよりおろすまつかぜの聲  
瀧の音にあらし吹きそふあけがたはならずがほに夢ぞ驚く  
うきよりは住みよかりけりとばかりに跡なき霜に杉立てる庭  
年へぬる宿たちいづるしひがもとより居し石も苔あをくして  
分けのほる庵の篠原かりそめにこととふ袖もつゆは落ちつゝ  
幾年ぞ見ししばの戸は人すまでいはるの水にしけるうきくさ  
我が宿のひかりとしめて分け入れば月影しろしみやまべの秋  
かけ絶えて山もや主は忍ぶらむ昔せき入れし水のながれに  
山里のかど田吹き越すゆふかぜにかり庵の上にもほふ秋はぎ  
立ちかへり山路かなしき夕ゆふべかな今はかぎりのやどをながめて

昔のしたにうつさぬ名をば残すともはかなの道やしき嶋の歌  
かの岸にこのたびわたせ法の舟のりうまれて死ぬるふるさとの河  
みかさ山麓ばかりをたづねてもあらましおもふ道のはるけさ  
難波瀉いかなるあしかつけおきし世々にその身の跡ならぬ家  
なぐさめは秋にかぎらぬ空の月はるより後もおもかけのはな  
さてもうし今年も春をむかへつよながめながめむはての霞よ  
いつかさはうき世の夢をさますべき我が思ふ山のみねの嵐に  
急がばや思ふによらぬちぎりあらば住までもやまん草の庵を  
誰もきけなく音に立つるかりの世に行きてはかへる北と南と  
つひにまたいかにうき名のとどまらむ心一つの世をばはづれど  
三代をへて星をいたどく年ふりてまくらにおつる秋のはつ霜  
いかにせむみ山の月はしたへどもなほ思ひおく露のふるさと  
さまざまに春のながめぞあはれなる西の山のはかすむ夕日に  
いかでなほまどひし闇をあきらめむこのとふかたを照す光に

面影はたつたの山の初もみぢいろに染めてしむねぞこがるよ  
おくるよりなけきぞいとど數まさる空しき日のみつもる朝あしたは  
露時雨さてだに人にいろ見せよながめしまゝの末のあさぢに  
より見ばやしはしも影をやどすやと手に結ばるゝ水の泡とも  
おのづから春過ぎばとも頼むらむくもにつけたる鳥の古巢は  
玉銚の行くての道もすぎ佗びぬ思ふあたりのやどのこすゑは  
亂れあしの下のこひぢよ幾世へぬ年ふるたづのひとり鳴く空  
人心しものかれはのさとふりてやがて跡なしもとのむしろに  
いとどしくたえぬなけきは末の松われより越ゆる波の高さに  
いかさまにせきかとどめむ色かはる人の木の葉の末のしら浪

## 述 懷

年月はきのふばかりの心地して見馴れし友のなきぞおほかる  
いかにせんはてなき人は世にもなしとまらぬ駒の影は過ぐめり

山ふかき雪やいかにと思ひ出づる情なまけばかりの世こそかたけれ  
いとどしく山井の袖やこほるらむかへる川風身にさむくして  
雪うづみ氷とむせぶをしものかけと頼めるいけのますけを  
炭がまや小野の里人あさゆふはやまぢをやくと往き還りつよ  
かきくらす都の雪もひかず経ぬ今朝いかならむこしのしら山  
思ふとていふかひもなき大空にすゑはや年のこえぬせきとて

戀

胸のうちよ知れかし今もくらべ見よあさまの山は絶えぬ烟を  
しるべしてなるよ心のかひぞなき君をおもひの積るとしく  
かはり行く袖の色こそかなしけれ音を鳴きはてよあきの空うつせみ蟬  
今は皆思ひつくばの山おろしよしけきなけきと吹きも傳へよ  
形身かはしるべにもあらず君こひてたどつくくとむかふ宵々  
誰故とたえぬとだにも白雲のよそにややがておもひ消えなむ

おく霜にむかひはてぬる野原かな露のひかりも花のにほひも  
萬世とちぎれる月のかげなれば惜までくらすあきのみやびと

## 冬

遠山のこなたの空のむらしぐれくもればかゝるころのうき雲  
家居する外山が裾のかみなづきあけぬ暮れぬと時雨をぞ聞く  
木の葉ちる板まの月の曇らずばかはる時雨をいかにわけまし  
月やそれすこし秋あるまがきかな深きしも夜の菊のかをりに  
さびしとよおき迷ふ霜の夕まぐれをかやのこやの野邊の一村  
物おもはぬ人のきけかし山里のこほれるいけにひとりなく鴛鴦  
はし鷹のかへるしらふに霜おきておのれさびしきを野の篠原  
かつ見つとわが世は知らぬはかなさよ今年もくれぬ暮るよを今日も  
ゆく年のさのみ過ぎ行くはてよさはいづれかひとつ歸る川浪  
雲さえて峯のはつゆきふりぬれば有明のほかにつきぞ残れる

八重葎あきの分け入るかぜの色を我さきにこそ鹿は鳴くなれ  
今よりは契りしつきを友としていく秋なれぬやまのすみかに  
旅人の袖ふきかへすあきかぜに夕日さびしき峯のかけはし  
つま木こる道ふみならず山人もこの夕ぎりやなほまよふらむ  
色わかぬ秋のけぶりのさびしきは宿よりをちのやどにたく柴  
秋の夜はつむといふ草のかひもなし松さへつらき住吉のきし  
山水のたえ行く音を來てとへばつもるあらしの色ぞうづめる  
よしさらばともなひはてよ秋の月苔の岩屋に世はそむけども  
影をまたあかすも月の添ふるかなおほかた秋の頃のあはれに  
色に出でて秋のこすゑぞうつり行くむかひのみねのうかぶ盃  
昔だになほ古里のあきのつき知らずひかりのいくめぐるとも  
思ふとも今はのこらじ秋の色よみね吹く風に木の葉はらひぬ  
かり人の袖こそうたてしをれぬれ露ふか草のさとのうづらに  
衣打つひときぞ風をしたひくるこすゑはとほき月のとなりに



夕まぐれねに行く鳥うちむれていづれの山のみねに飛ぶらむ  
夏の夜はけにこそあかね山の井のしづくに結ぶ月のひかりも  
しのよめのゆふつけ鳥の鳴く聲にはじめてうすきせみの羽衣  
岩井くむ松にまたるよあき風にまくすうらみば我もかへらむ  
行きなやむ牛のあゆみに立つちりの風さへあつきなつの小車  
立ちのほるみなみの果に雲はあれどてる日くまなき頃の大空  
夏の夜は月ぞげぢかき風すらむふせやの軒のまやのあまりに  
池水にすゑうちさわぐ浮草はまづゆふかぜの吹きや初めつる  
大井河なつごとになす假屋形かりやいくとせか見るくだすいかだを  
山かけは結ばぬ袖もかぜぞ吹くいはせく水におつるしらたま  
あとふかきわが立つたま杣まに杉ふりてながめ涼しき鳩はとのみづうみ  
折しもあれ雲のいづくに入る月のそらさへをしき東雲しのゝめのみち

## 秋

なにはがた明け行く月のほのくゝと霞ぞうかぶ浪のいり江に  
深き夜を花とつきとにあかしつよよそにぞ消ゆる春の燈火ともしび  
あれはてよ春のいろなきふるさとに羨む鳥ぞつばさならぶる  
風かよふ花のかどみはくもりつよ春をぞわたる庭のいしばし  
散る花にみぎはの外のかけそひて春しも月はひろさはのいけ  
春よたど露の玉ゆらながめしてなぐさむ花のいろはうつりぬ  
朝露の知らぬ玉の緒ありがほに萩うゑおかむはるのまがきに  
あはれいかに霞も花もなれくゝて空しく谷にかへるうぐひす

### 夏

春の草のまた夏くさにかはるまで今と契りし日こそおそけれ  
見るごとに猶めづらしきかざしかな神代かけたる今日の葵に  
夏山のかはかみきよき水の色のひとつに青き野邊のみちしば  
春もいぬ花もふりにし人にしてまた見ぬやどに松ぞのこれる

拾遺愚草中

韻歌

百二十八首和歌

建久七年九月十八日  
内大臣家他人不詠

春

いつしかと出づる朝日をみかさ山けふよりはるの峯の松かせ  
かすみぬる昨日ぞとしは吳竹の一夜ばかりのあけほののそら  
むさし野のかすみも知らずふる雪にまだ若草の妻やこもれる  
去年こちもさぞたどうたよねの手枕たまくらにはかなくかへる春の夜の夢  
谷ふかくまだ春しらぬ月の中にひとすぢふめるやまびとの跡  
子の日する野邊のかたみに世に残れうゑおく庭のけふの姫松  
日はおそしこゝろはいさや時わかで春か秋かのいりあひの鐘  
白雲か消えあへぬ雪かはるの來てかすみしまよのみ吉野の峯

たらちねの及ばずとほき跡過ぎて道をきはむるわかの人

祝

君を祈るけふのたふときかぐらこそ治る世には樂しきをつめ  
霜雪の白き髪までは仕へきぬ君の八千代をいはひおくとて  
代々ふとも變らぬ竹のふしておもひおきてぞ祈るきみの齡を  
君が代をいく萬世と數へても何にたとへむあかぬこころは  
ひさにふるみ室むろの山のさかきばぞ月日はゆけど色もかはらぬ

月にふく嵐ばかりやむかへけむみなみの山のしものふるみち  
谷ごしのましばの軒のゆふ煙よそめばかりはすみうからじや  
とこなるゝ山下露のおきふしに袖のしづくはみやこにも似ず

## 眺望

もよしきのとのへを出づる宵々は待たぬにむかふ山の端の月  
吹き拂ふもみぢの上の霧はれて嶺たしかなるあらしやまかな  
いづみ川ゆき來の舟はこぎ過ぎてはよその杜に秋ややすらふ  
津の國のこやさく花と今もみるいこまの山のゆきのむらぎえ  
雲の行かた野のおきやしぐるらむやよかけしめる蟹かまの漁火いさりび

## 述懐

神風やみもすそ川に祈りおきしこゝろの底やにごらざりけむ  
そのかみの我がかね言にかけざりし身の程過ぐる老の波かな  
待ちえつるふるえの藤の春の日にこすゑの花を並べてぞ見る  
はからずよ世にありあけの月に出でてふたよび急ぐ鳥の初聲

己のみあまのさかてをうつたへに降りしく木の葉跡だにもなし  
あけぬなりおのが心のあたら夜はむかしむすばぬ契しられて  
思ふとも戀ふともなにのかひがねよ横ほりふせる山を隔てよ  
なれし夜の月ばかりこそ身にはそへ濡れても濡るゝ袖に宿りて  
道の邊の人ごとしけきおもひ草霜のふり葉も朽ちぞ果てぬる

旅

都出でて朝たつ山のたむけよりつゆおきとめぬ秋かぜぞ吹く  
夕日影さすやをかべの玉ざさを一夜のやどとたのみてぞかる  
故郷にとまるおもかけ立ちそひて旅にはこひの道ぞはなれぬ  
なぐさますいづれの山も住み馴れし宿をばすての月の旅寐は  
臥しなれぬ濱松がねのいはまくら袖うちぬらしかへるうき波

山家

なほしばし雲居る谷を立ちかへりみやこの月に出づる山みち  
松風のおとにすみけむ山人のものとこのころはなほやしたはむ

我が戀よ何にかゝれるいのちとてあはぬ月日の空に過ぐらむ

## 後朝戀

今のまの我が身にかぎる鳥の音を誰うきものと歸り初めけむ  
おきわびぬ長き夜あかぬ黒髪のをでにこほると露みだれつよ  
關守の心も知らぬわかれにはかならずたのむこのくれもなし  
朝露のおくをまつまのほどをだに見果てぬ夢を何にたとへむ  
初よりあふは別と聞きながらあかつき知らでひとを戀ひけり

## 逢不遇戀

命とてあひ見むこともたのまれずうつる心のはなのさかりは  
はるかなる人の心のもろこしは騒ぐみなとにことづてもなし  
はかなしな夢にゆめみしかけろふのそれも絶えぬる中の契は  
海とのみあれぬる床のあはれ我が身さへうきても誰に傳へむ  
色かはるみのの中山あきこえてまたとほざかるあふさかの關

## 怨戀

いそのかみふる野は雪の名なりけりつもる日數を空に任せて  
夢かとも里の名のみやのこるらむ雪もあとなき小野の淺茅生あきぢふか  
たればかり山路を分けてとひくらむまだ夜は深き雪の景色に

忍戀

くちなしの色のやしほにこひそめし下の思やいはではてなむ  
水莖の人づてならぬ跡もだにおもふこよろはかきもながさず  
うへ茂るかきねがくれのを笹原しられぬ戀はうきふしもなし  
白露のおくとはなけくとばかりも夢のたどぢやこと通ふらむ  
殊更にこるやしほ木の名に立てよ燃えてかくれぬ煙なりとも

不遇戀

よりかけてまだてに馴れぬ玉の緒の片絲ながらたえや果てなむ  
夜なくの月も涙にくもりにきかけだに見せぬ人を戀ふとて  
名取川こよろのとはむ言のはも知らぬ逢ふ瀬は渡りかねつよ  
あまの苜るよそのみるめをうらみにて夜は袂にかよる波かは



山姫の濃きもうすきもなぞへなくひとつに染めぬ四方の紅葉は  
山人のうたひてかへるゆふべより錦をいそぐみねのもみぢば  
しぐれつゝ袖だにほさぬ秋の日にさこそ御室の山は染むらめ  
龍田山かみのみけしに手向くとや暮れ行くあきの錦おるらむ  
今はとてもみぢにかぎる秋の色をさぞともなしにはらふ木枯

氷

氷るておき中河のたえしよりかよひしにほのあとを見ぬかな  
瀬だえしてみなはわかるゝ涙川底もあらはに氷とぢつゝ  
冬の夜の長きかぎりは知られにきねなくにあくる袖のつらゝに  
袖の上渡る小川をとぢはてゝ空吹く風もこほる月かけ  
氷のみむすぶさ山のいけ水にみくりもはるのあくるまつらし

雪

おひくゝは雪の中にぞ思ひ知るとふ人もなし行くかたもなし  
いたづらに松の雪こそ積るらめ我が踏み分けしあけほの山

玉鉾やかよふたゞちも川と見て渡らぬなかのさみだれのころ

早 秋

暮れ難き春の菅のねひきかへて明くる夜おそき秋は來にけり  
秋來ぬと萩のはかぜはなのるなり人こそとはねたそがれの空  
風のおとのなほ色まさるゆふべかなことしも知りぬ秋の心を  
昨日今日あさげばかりの秋かぜにさそはれわたる木々の白露  
手馴れつるハギのあふぎをおきしよりとこも枕も露こほれつよ

月

時わかずそら行く月のあきの夜をいかにちぎりて光そふらむ  
むかし思ふ草にやつるよ軒ばよりありしながらの秋の夜の月  
長き夜の月をたもとに宿しつよ忘れぬことをたれにかたらむ  
した萩もおきふしまちの月の色に身を吹きしをるとこの秋風  
秋の月たまきはるよのなよそぢにあまりてものは今ぞ悲しき

紅 葉

匂ふより春はくれ行く山ぶきの花こそはなのなかにつらけれ  
散る花のくものはやしもあれはてよ今はいくかの春も残らじ  
忘れぬやよひの空のうらみより春のわかれぞ秋にまされる

郭公

たれしかもはつねきくらむ時鳥またぬ山路にこよろつくさで  
時鳥おのがさ月をつれもなくなほこそをしむとしもありけれ  
山かづらあけ行く雲にほとよぎすいづる初音も峯わかるなり  
あぢきなき遠方人のほとよぎすそれともわかぬ野邊の夕ぐれ  
袖の香の花にやどかれほとよぎす今もこひしき昔とおもはど

五月雨

ぬきもあへずこほると玉のをはたえぬ五月雨そむる軒の菖蒲に  
五月雨の日かすも雲もかさなれば見らく少きよものやまのは  
五月雨のくものまぎれに中たえてつどきも見えぬ山のかけ橋  
みわの山五月の空のひまなきにひはらの聲ぞあめを添ふなる

知らざりき山よりたかきよはひまで春の霞の立つを見むとは  
みよし野は春のかすみのたちとにて消えぬに消ゆる峯の白雪  
いつしかと都の野邊はかすみつゝ若菜つむべき春は來にけり  
たづぬともあひ見むものか春來ては深きかすみの浦の初しま  
幾春のかすみの下にうづもれておどろの道のあとをとふらむ

櫻

ちはやぶる神代のさくら何故によし野の山をやどとしめけむ  
櫻ばな待ち出づる春のうちをだにこふる日多くなぞ匂ふらん  
尋ね見る花の處もかはりけり身はいたづらにながめせしまに  
雲のうへ近きまもりに立ちなれし御階みはしの花のかげぞこひしき  
庭の面は柳さくらをこきませむ春のにしきのかすならずとも

暮春

かすまざる我が新玉の年ふればありしよりけに惜しき春かな  
雪とふる花こそぬさのかどでしてしたふ跡なき春のかへるさ

人もわかず山路しぐれて行く雲をともなふ嶺の袖のしづくは  
玉銚やたび行く人はなべて見よくにさかえたる秋津しまかな  
君が代の雨のうるひはひろけれど我ぞめぐみの身に餘りぬる  
いかにして朽ちにし谷の木のもとに道ある御代の春を待つらむ  
むらさきの色こきまでは知らざりき御世のはじめの天の羽衣  
わかぬ浦に鳴きてふりにし霜の鶴このごろ見えぬ心やすめて  
祈りおきしわがふるさとの三笠山きみのしるべを猶思ふかな

先撰二百首之愚歌有結番事仍可謂拾其遺又養和元

年企百首之初學建保四年書三卷之家集彼是之間再

居拾遺之官故爲此草名

建保四年三月十八日書之 參議治部卿兼待從藤判

關白左大臣家百首

(貞永元年四月)

詠百首和歌

わくらばに通ふ心のかひもなし頼むよし野のかざしばかりは  
音に立つるかけのたれ尾の誰故か亂れてものは思ひ初めてし  
秋の野にをばなかりふく宿よりも袖ほしわぶるけさのあさ露  
下紐のゆふ手もたゆきかひもなし忘るゝ草をきみやつけけむ

### 雜十五首

あけぬとてゆふつけどりの聲すなり誰かわかれの袖濡すらむ  
ながめする今日も入相の鐘の音に過ぎ行く方を身に數へつゝ  
山里はなほ淋しとぞたちかへるあくれば急ぐこゝろやすまで  
よそにのみみ山の杉のつれもなくもとの心はあらずなりつゝ  
それもうとし心なぐさむ海山は身のよるべとも思ひならはで  
心からいきうしといひて歸るともいさめぬ關を出でぞ煩らふ  
かきやれば煙たち添ふもしほぐさあまのすさびに都こひつゝ  
浪まくらはま風しろくやどるつきそでの別のかたみがほなる

むかひ行く六十の坂ひそぢの近ければあはれも雪も身につもりつよ

戀十五首

けふぞ思ふいかなる月日ふじのねのみねに煙の立ち初めけむ  
昨日今日くものはたてをながむとて見もせぬ人の思ひやは知る  
初雁のとわたる風のたよりにもあらぬおもひを誰につたへむ  
まどろまぬ霜おくよはの百はがき羽かく鳴のくだけてぞ鳴く  
夜もすがら月に憂へて音をぞなく哀にむかふものおもふとて  
暮るゝ夜はおもかけ見えて玉かづらならぬ戀する我ぞ悲しき  
袖のうへも戀ぞつもりてふちとなる人をば峯のよその瀧つ瀬  
いかにしてむかひの岡にかる草のつかのまにだに露の影見む  
いかにせむ浪こす袖にちる玉のかすにもあらぬ賤のをだまき  
夢といへばいやはかななる春の夜に惑ふ直路は見ても頼まず  
石いしばしる瀧あるはなのちぎりにてさそはどつらしはるの山風

こがらしのもりの梢のあさなく、名にあらはるゝ神無月かな  
風さむみみほの浦邊をこぐ舟に山のこの葉のきほひがほなる  
とまらじな四方の時雨の古里となりにしならの霜の朽葉くちはは  
かさよぎのはがひの山の山風のはらひもあへぬ霜のうへの月  
にほどりは玉もの宿もかれなくに頼みしあしぞ青葉まじらぬ  
冬草をむすぶもあだにあかす夜のまくらも知らず霰ふるなり  
色見えぬ冬のあらしのやまかぜに松の枯れ葉ぞ雨と降りぬる  
ならしばのかれ行く雉子きりこかけをのみ立つや狩場の己が在處を  
濱松のねられぬ浪のとまやかたなほ聲そふるさ夜ちどりかな  
みをしほるすみのやすきを疊かさねにて氷をいそぐあまのころもで  
難波潟もとよりまがふみだれ蘆のほすゑおしなみ初雪ぞふる  
あけぬとて出でつる人のあともなしたど時のまにつもる白雪  
とはるゝを誰ばかりとやながむらむ雪のあしたの岩のかけ道  
いとどしく降りそふ雪にたにふかみ知られぬ松の埋れぬらむ



まどろまで眺むる月のあけがたにねざめをすらむ衣打つなり  
おきて行くたが通ひぢの朝露ぞくさのたもとも絞るばかりに  
さを鹿のしがらむ萩も時過ぎて枯れ行くを野を恨みてぞ鳴く  
引き結ぶかりほの庵もあき暮れてあらしによわき松蟲のこゑ  
秋の色の目にさやかなるふるさとに鳴きて鶉の誰しのぶらむ  
おろかなる露や草葉にぬくたまを今はせきあへぬ初時雨かな  
雁が音のなみだのつゆの玉ながらぬきもさだめす織る錦かな  
もる山の時雨の秋を見てしがなこゝろづからや紅葉はつると  
ちぎりありてうつろはむとや白菊の紅葉の下の花に咲きけむ  
長月のもみぢの山のゆふしぐれ晴るゝ日影もゆきはそめけり  
いづみ川日もゆふぐれのこま錦かたえおち行く秋のもみぢば  
木葉もて風のかけたるしがらみにさても淀まぬ秋のくれかな

## 冬十五首

夏ごろもかとりの浦のうたよねに浪のよるくかよふあき風  
木のまもる垣根にうすき三日月のかけあらはるよ夕がほの花  
夕立のくも吹く風のときのまに露ほしはつる小野のしのはら  
あすか川行くせの波にみそぎして早くぞ年のなかば過ぎぬる

### 秋二十首

(此歌忘却似故殿御歌  
後年見付之可恥可痛)

さらぬだにあだに散るてふ櫻あさの露もたまらぬ秋のはつ風  
七夕たまたのてだまもゆらに織るはたのをりしもならふ蟲の聲かな  
我が宿ははぎの白露あともなしたれかはとはむ野邊のふる道  
大方につもれば人のとばかりにながめし月もそでや濡れけむ  
あはれのみいやとしのはに色まさる月とつゆとの野邊の笹原  
秋の月かはおとすみてあかす夜にをちかた人の誰をとふらむ  
袖の上におもひいれじとしのべども絶えず宿かる月の影かな  
あづまやの軒のほどなき板庇いたくも月に馴れにけるかな

とはどやな花なき里にすむ人もはるはけふとやなほ眺むらむ

## 夏十五首

はなのいろにせみの羽衣ぬぎかへてはつこゑおそき時鳥かな  
しのぼるゝ常磐の山のいはつゝじ春のかたみの數ならねども  
物毎にしぐれのわきし松のいろをひとつに染むる夏の雨かな  
ほととぎす旅なるけさの初聲にまづ里見えよのきのたちばな  
いたづらに雲るるやまの松の葉のときぞともなき五月雨の空  
あやめ草ふくやさつきの長き日にしばしをやまぬ軒の玉みづ  
時鳥こよろつくしのやまのはを待たぬにいづるいさよひの月  
秋たよむいなばの風をいそぐとてみしふにまじる田子の衣手  
あたらしや鶉川のかどりさしはへていとふ河瀬の有明のつき  
さゆりばの知られぬ戀もあるものを身より餘りて行く螢かな  
よそへてのかひこそなけれまつ人はこずの常夏花とこなつに咲けども

暮ると明くとめかれぬ花に鶯の鳴きてうつろふ聲なをしへそ  
新玉のこけのみどりに春かけて山のしづくもときは知りけり  
あさみどりかすみたなびく山がつのころも春雨色に出でつよ  
あをによし奈良の都のたまやなぎ色にもしるく春は來にけり  
嶺のゆき解くらむ雨のつれなくと山邊もよほす花のしたひも  
昨日今日やまのかひより白雲のたつたのさくら今か咲くらむ  
みよし野のよし野は花の宿ぞかしさてもふりせず匂ふ山かな  
さくら花咲きぬるころは山ながらいしま行くてふみずの白浪  
百千鳥さへづるはるのかすくゝに幾世の花の實もふりぬらむ  
花のいろにひと春まけよかへる雁ことし越路こしちの空頼そらたのめして  
眺めつよかすめる月はあけはてぬ花のにほひも里わかぬころ  
山のはをわきてながむる春の夜にはなのゆかりの有明のつき  
散る花のつれなく見えし餘波なごりとて暮るよも惜しくかすむ山陰  
色まがふ野邊の藤なみ袖かけてみかりの人のかざしをるらし

相坂關

君になほあふ坂山もかひぞなきすぎのふる葉に色し見えねば

御津濱松

待ちこひしむかしは今もしのばれてかたみ久しきみつの濱松

春日同詠百首應製和歌

參議從三位行治部卿兼侍從伊豫權守

臣藤原朝職定家上

春二十首

春霞立つやと山のあしたより咲きあへぬ花を雪とやは見る  
朝日さす春日かすがの小野のおのづからまづあらはるゝ雪のした草  
蘆垣のまぢかき冬のゆきながらひらけぬ梅にうぐひすぞ鳴く  
梅のはな匂ふやいづくもかよるみやまの松は雪も消ひなくに  
むば玉の夜のまの風のあさとでに思ふにすぎてにほふ梅が枝

玉河里

てづくりやさらすかきねのあさ露を貫きとめぬたまがはの里

生浦

何故か底のみるめもおふの浦にあふことなしの名には立つらむ

佐夜中山

關の戸をさそひし人は出でやらで有明のつきのさやのなか山

嵯峨野

結びおきし秋の嵯峨野のいほりより床は草葉の露になれつよ

角太川

水莖のあとかきながすすみだ川ことづてやらむ人もとひこす

志加麻市

はれぬまにまづ朝霧を立ちこめてしかまの市に出づる里びと

若浦

より來べきかたもなぎさの藻鹽草かきつくしてしわかか濱松

天橋立

むばたまの夜わたる月のすむ里はけに久方のあまのはしだて

明日香川

さよれ石は巖となりてあすか川ふち瀬の聲を聞かぬ御代かな

鳥羽

末とほき鳥羽田のみなみしめしより幾世の花にみ雪降るらむ

辰市

しき島のみちにわが名は辰の市やいさまだ知らぬ大和言の葉

吹飯浦

こす波にわが世吹飯のうらみきてうちぬる夢も此の頃ぞ見る

布引瀧

布引のたきにたもとをあらそひて我が年波のいづれたかけむ

長柄橋

さもあらばあれ名のみ長柄の橋ばしら朽ちずば今の人も忍ばじ

二見浦

ふたみがたいせの濱荻しきたへの衣手かれてゆめもむすばず

名取川

名取川こゝろにくたす埋木うもれぎのことわり知らぬそでのしがらみ

雑二十首

吉野川

吉野川いはとがしはをこす波のときはかきはぞわが君の御代

鈴鹿川

鈴鹿川すずかやそせふみわたるみてぐらを君が世長き千代のなが月

不盡山

天のはらふじのしば山しばらくも煙たえせずゆきも消けなくに

還山

いかばかり深き中とてかへる山かさなる雪をとへと待つらむ



守山

夜もすがら夢さへ人目もる山はうちぬる中のたのみやはする

佐野布奈橋

ことづてよ佐野の舟橋はるかなるよそのおもひに焦れ渡ると

安積沼

いかにせむあさかの沼におふと聞く草葉につけて落つる涙を

松島

ふくる夜をこゝろひとつに恨みつゝ人まつ島のあまの藻鹽火

緒絶橋

琴の音をなけきくはよる契とてをだえのはしに中も絶えにき

三熊野浦

時のまの夜半のころもの濱ゆふやなけき添ふべきみ熊野の浦

鳴海浦

よそ人に鳴海なまゑの浦の八重がすみ忘れずとてもへだて果てよき

袖 浦

袖の浦たまらぬ玉のくだけつよよせてもとほくかへる波かな

益田池

人ごころいとどます田の池水に上葉しけれる名をうらみつよ

高師濱

あだ波のたかしの濱のそなれ松なれずはかけてわれ戀ひめやも

阿波手杜

かた絲のあだの玉のをよりかけてあはての杜に露きえねとや

志加須賀渡

秋風に鳴く音をたつるしかすがのわたりし波におとる袖かは

濱名橋

あづま路やはまなの橋にひく駒もたそ待ちわたる逢坂のせき

磯間浦

梓弓いそまのうらにひく網のめにかけながらあはぬこひかな

因幡山

きのふにも秋の田おもに露おきしいなばの山もまつの白ゆき

鏡山

かどみ山うつれるなみのかけながら空さへこほる有明のつき

戀二十首

伏見里

笛竹のふしみの里は名のみしていづれの世にか音をも立つべき

霞浦

春がすみかすみの浦を行く舟のよそにも見えぬ人をこひつゝ

石瀬杜

神なびのいはせの杜のいはすとも知れかし下につもる松葉を

筑波山

あしほ山やまず心はつくばねのそがひにだにもみらくなき頃

小鹽山

朝霜をしらゆふかけて大原やをしほの山にかみまつるころ

住吉浦

淡路島むかひのくものむらしぐれ染めもおよばぬ住吉のまつ

交野

狩人の交野かたののみゆきうち拂ひとよのあかりにあはむとやする

田籠島

おきあかす霜ぞかさなるたび衣たみの島の島は來てもかひなし

有乳山

あらし山みねの木枯さきだてよ雲のゆくてにおつるしらゆき

浮島原

富士の嶺にめなれの雪のつもり來ておのれ時しる浮島がはら

安達原

そなたより霞や下にいそぐらむあだちの眞弓まゆみはるはとなりと

佐良之奈里

はるかなる月のみやこにちぎりありて秋の夜あかす更科の里

白河關

白河のせきのせきもりいさむともしぐるゝ秋の色はとまらじ

野島崎をむく懸の波をせし美をそはるのささる

面影は日も夕ぐれに立ちそひて野島によするあきのうらなみ

明石浦

ともし火のあかしのおきの友ぶねも行方たどる秋のゆふぐれ

阿武隈川

立ちくもるあぶくま川の霧のまに秋をばやらぬ關を据ゑけむ

冬十首

清瀧川

音まがふこのはしぐれをこきまぜていはせに染むる清瀧の波

三室山

みむろ山しぐれもやらぬ雲の色のおのれうつろふ秋の夕ぐれ

高圓野

大空にかゝれる月も高まどの野邊にくまなきくさの上のつゆ

伊駒山

いこま山あらしも秋の色にふく手染のいとのよるぞかなしき

生田池

しぐれ行く生田のもりのこがらしに池のみぐさも色かはる頃

淨見關

きよみがたひま行く駒もかけうすし秋なき波のあきの夕ぐれ

武藏野

誰が方による鳴く雁の音にたてよなみだうつろふ武藏野の原

伊吹山

秋をやく色にぞ見ゆるいぶき山燃えてひさしき下のおもひも

立田山

こよろあてのおもひの色も立田山ぞイけさしもそめし木々の白露

須磨浦

たびごろもまだひとへなる夕霧にけぶり吹きやるすまの浦風

宮城野

秋にあひて身をしる雨と下露といづれかまさる宮城野のはら

水莖岡

水莖のをかのまくずをあまの住む里のしるべと秋かぜぞ吹く

小倉山

小倉山秋のあはれやのこらましを鹿のつまのつれなからずば

宇治川

川浪もまつよひすぎば遠ざかれやそうぢ人のあきのまくらに

常磐杜

初雁の來鳴くときはの杜のつゆ染めぬしづくも秋は見えける

天香久山

五月雨はあまのかく山空とちてくもぞかよれる嶺のまさかき

大江山

夕すども大江の山のたまかづら秋をかけたるつゆぞこほるよ

難波江

おしてるやなには堀江にしく玉のよるのひかりは螢なりけり

美豆御牧

わたりする遠方をちかたびとの袖かとかみづ野にしろき夕がほのはな

松浦山

蟬の羽のころもに秋をまつらがたひれふる山のくれぞ涼しき

秋二十首

泊瀬山

はつ瀬めのならず夕の山風もあきにはたへぬしづのをだまき



末松山

あづさ弓末の松山はるはたど今日までかすむ浪のゆふぐれ

夏十首

大井河

大井河かはらぬるぜきおのれさへなつ來にけりと衣ほすなり

篠田杜

みちのべの日影のつよくなるまよにならず篠田のもりの下蔭

猪名野

短夜のゐなの篠原かりそめにあかせばあけぬやどは無くとも

御裳濯河

月宿るみもすそ河のほとよぎす秋の幾夜もあかずやあらまし

伊香保沼

からころもかくる伊香保の沼水にけふは玉ぬくあやめ菖蒲をぞひく

葦屋里

葦のやのわが住むかたのおそ櫻ほのかにかすむかへるさの空

吹上濱

今日ぞ見るかざしの波の花の上にはぬ風にふきあけの濱

湯等三崎

花鳥の匂も聲もさもあらばあれゆらのみさきの春の日ぐらし

忍山

岩つよじいはでやそむる忍山こよろのおくのいろをたづねて

水無瀬川

春の色をいく萬代かみなせ川かすみのほらの苔のみどりに

大淀浦

つらからぬ松も木深くおほよどのかすみばかりもかよる浦波

田籠浦

たごの浦の浪もひとつに立つ雲の色わかれゆく春のあけほの

葛木山

青柳のかづらき山のながき日は空もみどりにあそぶいとゆふ

手向山

たつあらしいづれの神に手向山はなのにしきのかたも定めず

伊勢海

伊勢の海玉よるなみにさくら貝かひある浦のはるの色かな

志賀海

さよなみや志賀の花ぞのかすむ日のあかぬ匂に浦かぜぞ吹く

三島

みしま江の波に棹さすたをやめの春のころもの色ぞうつろふ

鹽竈浦

しほがまやうらみて渡るかりがねを催しがほにかへる浪かな

宇津山

うつの山我がゆくさきもほどとほきつたの若葉に春雨ぞふる

花にほふよつの大空とほからであかつき待たぬ逢ふ事もがな

初冬同詠百首和歌（内裏百首名所依未被行中）  
殿宴猶爲密儀

春二十首

音羽川

音羽川ゆきけの波も岩こえてせきのこなたにはるは來にけり

玉島河

梅が香やまづうつるらむかけ清きたましま河の花のかどみに

高砂

それながらはるは雲井に高砂のかすみの上のまつのひとつしほ

春日野

若菜つむ飛ぶ火の野の守春日野にけふ降る雪のあすや待つらむ

三輪山

いかさまに待つとも誰かみわの山人に知られぬ宿のかすみは

春日

祈りおきしいかなる末に春日山捨てゝ久しきあと残りけむ  
百歳身住吉もさききまは三才等々なるも  
かたばかりわれは傳へしわがみちの絶えや果てぬる住吉の神

釋教五首

天日

あまつそら光をわかつよつの身に何の草木ももるとものは

釋迦

きさらぎのなかばの空をかたみにて春のみやこを出でし月影

阿彌陀

九重の花のうてなをさだめすばけぶりの下やすみかならまし

薬師

十あまりふたつのちかひきよくしてみがける玉の光をぞしる

彌勒

みかさ山松の木のまを出づる日のさして千歳の色は見ゆらむ

月

秋のつき久しき宿にかけなびくまがきの竹はよろづ世やへむ

星

くもりなき千代のかずくあらはれて光さし添ふほしの宿にヤシロ

雲

山人のよはひを君のためしにて千年のさかにかゆるしらくも

神祇五首

伊勢

身を知ればいのるにはあらで頼みこし五十鈴川浪哀かけけり

石清水

石清水月には今もちぎりおかむ三たびかけみし秋のなかばを

賀茂

神も見よかもの川浪ゆきかへりつかふる道にわけぬこよろを

山

くるとあくと思ひし月日杉の庵の山路つれなく年は經にけり

河

きえせぬはあはれ幾世のおもひ川空しく越えしせどのうき浪

海

海わたる浦こぐ舟のいたづらにいそぢを過ぎて濡れし浪かな

里

あれまくや伏見の里のいでがてに憂を知らでぞ今日にあひぬる

關

いまはまた關の藤浪たえずとも國に報いむためをこそおもへ

祝五首

天

くもりなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな

日

雜二十五首

旅五首

春

時のまも人をこゝろにおくらさでかすみにまじる春の山もと

夏

山路ゆく雲のいづこの旅まくらふすほどもなき月ぞあけ行く

秋

草の庵やくると夜ごとの秋風にさそはれわたる旅のつゆけさ

冬

しきたへのころもでかれていくかへぬ草を冬野の夕ぐれの空

曉

面影にあらぬむかしもたちそひてなほしのよめぞ旅は戀しき

述懐五首



思ひ出づる後のことろにくらぶ山よそなる花の色はいろかは  
いかにせむ浦のはつ島はつかなるうつゝの後は夢をだに見ず  
たのめおきしのちせの山のひとことやこひを祈の命なりけむ  
たづねぬは思ひし三輪の山ぞかしわすれねもとのつらき面影  
里の名を身にしる中のちぎりゆゑまくらに越ゆる宇治の川浪  
やすらひに出でけむ方もしら鳥のとは山松の音にのみぞ鳴く  
しるべせよむしあけのせとの松の風ほか行く波のしらぬ別に  
形見こそあだのおほ野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし  
袖のうらかりにやどりし月草のぬれてのちをなほや頼まむ  
忘れ貝それもおもひの種たえず人を見ぬ目のうらみてぞぬる  
命だにあらばあふせを松浦川かへらぬ浪もよどめとぞおもふ  
横のはの深きをすての山におふる苔の下までなほやうらみむ  
忘れぬまゝのつぎはし思ひねにかよひし方は夢に見えつゝ

戀二十五首(寄名所戀)

よとともに吹上の濱の潮風になびくまさごのくだけてぞ思ふ  
暮るゝ夜は衛士のたく火をそれと見よ室むろの八島も都ならねば  
すみのえの松のねたくやよる浪のよるとは歎く夢をだに見で  
かひがねにこのは吹きしく秋風もこゝろの色をえやは傳ふる  
龍田山夕つけ鳥のをりはへて我がころもでにしぐれふるころ  
わが袖にむなしき波はかけそめつちぎりも知らぬとこの浦風  
知られじな霞のしたにこがれつゝ君にいぶきのさしも忍ぶと  
あしのやに螢やまがふあまやたくおもひも戀も夜は燃えつゝ  
白玉のをだえの橋の名もつらしくだけておつる袖のなみだに  
今よりの往き來も知らぬ逢坂にあはれなけきの關を据ゑつる  
玉くしけあくれば夢のふたみがた二人やそでの浪にくちなむ  
あらはれて袖の上行く名取川いまはわが身にせくかたもなし

浦千鳥かたもさだめすこひて鳴くつま吹く風の夜ぞひさしき

湖水

かどみ山よわたる月もみがかれてあくれどこほるしがの浦波

林雪

林あれてあきのなさけも人とはず紅葉をたきしあとの白ゆき

濱雪

おほとものみつの濱風吹きはらへまつとも見えじうづむ白雪

岡雪

けさはまた跡かき絶ゆる水ぐきの岡のやかたの雪のふりはも

深更霞

あけがたもまだ遠山の木がらしにあられ吹きまげなびく村雲

歳暮

行く年よ今さへおくりむかふてふ心ながさをいかに見るらむ

山もとのもみぢのあるじうとけれど露も時雨も程は見えけり  
古寺紅葉

そばだつる枕におつる鐘のおとももみぢを出づるみねの古寺

暮 秋

朝な朝なあへず散りしく葛の葉におきそふ霜の秋ぞすくなき

冬十首

田家時雨

かり残す田のもの雲もむらくにしぐれて晴るゝ冬は來にけり

野徑霜

朝霜のはな野のすゝきおきて行く遠方とほかたびとのそでかとぞ見ゆ

水郷寒蘆

冬の口のみじかき蘆はうらがれて浪のとまやに風ぞよわらぬ

寒夜千鳥

みかの原くにのみやこの山越えてむかしや遠きさをしかの聲

島 月

秋はまたぬれこし袖のあひにあひてをじまの蝿の月に馴れける

江 月

あかす夜は入江の月のかけばかりこぎ出でし舟の跡のうき波

浦 月

久方のつきのひかりを白妙にしきつのうらのなみのあきかせ

橋 月

はるかなる峯のかけ橋めぐりあひて程は雲井の月ぞさやけき

河 月

ひかりさす玉しま川の月きよみをとめのころも袖さへぞてる

曉擣衣

長き夜をつれなく残るつきの色におのれもやまず衣うつなり

遠村紅葉

はつせのやゆづきがしたにかくろへて人に知られぬ秋風ぞ吹く

秋十五首

初秋

あぢきなくさもあらぬ人の寐ざめ迄物思ひ始むる秋の初風

行路萩

秋はぎのゆくての錦これもまたぬさとりあへぬ手向にぞをる

山家蟲

松蟲のこゑもかひなし宿ながらたづねば草のつゆのやまかせ

夕萩

人ごころいかにしをれと萩の葉のあきの夕ゆふべにそよぎ初めけむ

谷鹿

さをしかの朝行く谷のたまかづら面かけさらす妻やとふらむ

原鹿

山のはのあさけの雲にほととぎすまだ里なれぬ去年のふる聲

嶺郭公

よそにのみ聞きか惱まむほととぎすたかまの山の空のをち方

杜郭公

ほととぎす聲あらはるゝ衣手の杜のしづくをなみだにや借る

池菖蒲

さ月きぬ軒のあやめのかけそへて待ちしいつかと匂ふ池みづ

山五月雨

峯つゞき雲のたどちに窓とぢてとはれむものか五月雨のそら

故郷橘

橘のそでの香ばかりむかしにてうつりにけりな古きみやこは

澤 螢

芹つみし澤邊の螢おのれまたあらはに燃ゆとたれに見すらむ

樹陰納涼

鳥のこゑかすみの山をしるべにて面影にほふはるのやまぶみ

翫花

かざしをる花の色香にうつろひてけふのこよひにあかぬ諸人もろびと

惜花

消えずともあすは雪とや櫻花くれゆく空をいかにとどめむ

残春

春はたどかすむばかりのやまのはに曉かけてつき出づるころ

夏十首

首夏

あはれをもあまたにやらぬ花の香の山もほのかに残る三日月

夏草

さゆりばに交る夏草茂りあひて知られぬ世にぞ朽ちぬと思ひし

初郭公



しる知らぬ逢坂山のかひもなしがすみにすぐる關のよそめは  
朝若菜

たが爲とまだあさ霜のけぬが上に袖ふりはへて若菜つむらむ

庭梅

袖ふれし宿のかたみの梅が枝にのこるにほひよ春をあらすな

夜梅

久方の月やはにほふうめの花そら行くかぜをいろにまがへて

夕歸雁

暮れぬなり山もと遠きかねの音にみねとびこえて歸る雁がね

栽花

ふりはつる身にこそ待たね梅の花うゑおく宿の春なわすれそ

待花

かすみ立つ山のやま鳥ことつてよいくか過ぎてのはなの盛と

尋花

いたづらにあたら命をせめきけむながらへてこそ今日に逢ひぬれ  
和歌の浦にかひなき藻屑かきつめて身さへ朽ちぬと思ひけるかな

詠百首和歌（内大臣の家の百首）

建保三年九月十三夜講

春十五首

早春

鶯もまだいでやらぬ春のくもことしともいはず山かぜぞ吹く

春雪

あは雪の今もふりしくときは山おのれ消えてや春を分くべき

野鶯

春來れば野邊にまづさく花の枝をしるべに來ぬるうぐひすの聲

海霞

かざすてふ浪もて結へる山やそれかすみ吹きとけすまの浦風

關霞

はてはたど蟹かまのかる藻をやどりにて枕定むるよひくぞなき  
枯れぬるはさぞなためしとながめてもなぐさまなくに霜の下草  
時つ風ふけひの浦にあらびてもたが爲にかは身をもをしみし  
久方の月ぞかはらで待たれける人にはいひしやまのはのそら

## 雜十首

大方のつきもつれなき鐘のおとになほうらめしき有明のそら  
立つ煙野山のすゑのさびしさはあきともわかすゆふぐれの空  
幾世へぬかざしをりけむいにしへにみわのひ原のこけの通路  
駒とめしひのくま河の水きよみ夜わたる月のかげのみぞ見る  
空に吹くおなじ風こそこゑたつれみねの松が枝あらいその波  
朝夕は頼むとなしにおほぞらのむなしき雲をうちながめつよ  
磯いそ馴なれ松しづえやためしおのれのみ變らぬ袖に波の越ゆらむ  
年ふれば霜夜の闇に鳴くつるをいつまで袖のよそに消えけむ

四方よの海も煙にぎはふはまびさし久しき千代に君ぞさかえむ

### 戀十五首

あふことのまれなる色やあらはれむもり出でそむる袖の涙に  
たれかまたもの思ふ事は教へおきし枕ひとつを知る人にして  
戀しさのわびていざなふよひくに行きては歸る道のさと原  
片絲の逢ふとはなしに玉の緒もたえぬばかりぞおもひ亂るよ  
消え佗びぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしのもりの白露  
夢なれや小野のしの原かりそめに露分けし袖は今もしをれて  
尋ね見るつらき心のおくの海よ汐干のかたのいふかひもなし  
人ごころ通ふたどちのたえしより恨みぞわたる夢のうきはし  
面影はなれしながらの身にそひてあらぬ心のたれちぎらむ  
思ひ出でよたがきぬくの曉もわがまたしのぶ月ぞ見るらし  
忘れねよこれはかぎりぞとばかりの人づてならぬ思出もうし

まきの屋に時雨あはれは夜がれせでこぼる箕かひの音づれぞなき  
これやさは秋のかたみのうらならむかはらぬ色をおきの月影  
浦風にやくしほけぶり吹きまよひたなびく山の冬ぞさびしき  
鳴く千鳥袖のみなとをとひ來かしもろこし船も夜のねざめに  
ことぞともなくて今年もすぎの戸のあけでおどろく初雪の空  
かたしきの床のさむしろこぼる夜にふりかしくらむ岸の白雪  
雪ふかきまののかや原跡たえてまだこととほし春のおもかけ  
宿ごとに春のかすみを待つとてや年をこめては急ぎ立つらむ

## 祝五首

天地とかぎりなかれと誓ひおきし神のみことぞ我が君のため  
さねこじの榊にかけしかどみにぞ君がときはの影は見えけむ  
わが道をまもらば君をまもらむよはひはゆづれ住吉のまつ  
よろづよの春秋きみになづさはむ花と月とのすゑぞひさしき

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまがふ床のつきかけ  
いかにせむきほふ木の葉の木枯にたえずものおもふ長月の空  
さをしかの臥すや草むらうらがれて下もあらはに秋風ぞ吹く  
岩代の野中さえゆくまつかぜにむすび添へつる秋のはつしも  
冬はたどあすかの里のたびまくらおきてやいなむあきの白露

### 冬十五首

秋くれし紅葉のいろを重ねてもころも更へうき今日の空かな  
冬來ぬとしぐれの音に驚けば月もさやかに晴るゝ木のもと  
残るいろもあらしの山の神無月るぜきの浪におろすもみぢば  
枯れ果つる草のまがきはあらはれて岩もる水を埋むもみぢば  
しをればや露のかたみにおく霜もなほあらし吹くにはの蓬生よもぎ  
花すよき草のたもとも朽ちはてぬ馴れて別れし秋をこふとて  
しぐれこし岸の松かけつれもなくすむにほぼりの池のがよひぢ

水ぐきの岡の葛はら吹きかへしころもでうすき秋のはつかぜ  
夕暮は小野のしのはらしのばれぬあき來にけりと鶉なくなり  
松のはのいつともわかぬかけにしもいかなる色とかはる秋風  
露を重み人は待ちえぬ庭のおもに風こそはらへもとあらの萩  
萩原や植ゑてくやしき秋かぜは吹くをすさびに誰かあかさむ  
さをしかの鳴く音のかぎり盡してもいかゞこゝろに秋の夕暮  
秋來ぬと袖にしらるゝ夕露にやがて木の間のつきぞやどかる  
松蟲のこゑをとひ行く秋の野につゆたづねける月のかけかな  
思ひいれぬ人の過ぎ行く野山にも秋はあきなる月やすむらむ  
高砂の尾上のしかのこゑたてし風よりかはるつきのかけかな  
こゝろのみもろこしまでもうかれつゝ夢路に遠き月の頃かな  
もみぢする月のかつらに誘はれて下のなけきも色ぞうつろふ  
幾秋を千々にくだけて過ぎぬらむ我が身ひとつを月に憂へて  
秋とだに忘れむとおもふ月かけをさもあやにくにうつ衣かな

なほざりに山郭公鳴きすてよわれしもとまる杜のしたかけ  
夕暮は鳴くねそらなるほとよぎすころの通ふ宿やしるらむ  
またれつよ年にまれなる時鳥さつきばかりのこゑなをしみそ  
今日はいとどおなじ縁にうづもれて草の庵もあやめふくなり  
天の川やそせも知らぬ五月雨におもふもふかき雲の水脈みかな  
袖の香をはなたちばなにおどろけば空に有明の月ぞのこれる  
久方ひさかたのなかなる川のうかひ舟いかにちぎりてやみを待つらむ  
夏衣たつた河原を来て見ればしのにをりはへなみぞほしける  
夏のつきはまだよひのまとながめつよぬるや河邊の東雲しのよめの空  
山のかけおほめく里にひぐらしの聲たのまるよゆふがほの花  
誰がみそぎ同じ淺茅のゆふかけてまづうちなびく賀茂の河風

## 秋二十首

けさよりは風をたよりのしるべにて跡なき浪も秋や立つらむ



知るしらぬわかぬ霞のたえまよりあるじあらはに薫る花かな  
あかざりしかすみの衣たちこめて袖のなかなる花のおもかけ  
さくら花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅茅生の宿  
さくら色の庭のはる風あともなしとはどぞ人の雪とだに見む  
花野にも風こそよもにさそふらめこゝろも知らぬ故郷のはる  
とまらぬは櫻ばかりを色に出でて散りの迷ひに暮るゝ春かな  
吉野川たぎつ岩波せきもあへずはやく過ぎ行く花のころかな  
けふのみとしひてもをらじ藤の花さきかゝる夏の色ならぬかは

## 夏十五首

時鳥まつにこゝろのうつるよりそでにとまらぬ春のいろかな  
まつとせし人のためとはながめねど茂る夏草みちもなきまで  
時しらぬ里は玉川いつとてかなつのかきねをうづむしら雪  
葵草あひびき假寐の野邊にほととぎすあかつきかけてたれをとふらむ

春二十首

春霞きのふをこぞのしるしとやのきばの山もとほざかるらむ  
春といへば花やおそき吉野山消えあへぬ雪のかすむ明ほの  
山のはに霞ばかりをいそけども春にはなれぬそらの色かな  
山里は谷のうぐひすうちはぶき雪より出づるこぞのふるごゑ  
消えなくにまたもや山を埋むらむ若菜つむ野もあは雪ぞ降る  
谷かぜの吹上にさける梅の花あまつそらなる雲やにほはむ  
里わかぬ月をば色にまがへつよよものあらしに匂ふうめが枝  
春やあらぬ宿をかごとに立ちいづれどいづこも同じ霞む夜の月  
あづまやのこやの假寐のかや筵しくくほさぬ春雨ぞふる  
待ちわびぬ心づくしの春がすみはなのいさよふ山のはのそら  
さくら花咲きぬやいまだ白くものはるかにかをる小初瀬の山  
雲のなみかすみの浪にまがへつよ吉野の花のおくを見ぬかな

祝五首

萬代とときはかきはにたのむかなはこやの山の君のみかけを  
天津空けしきもしるし秋の月のどかなるべきくものうへとは  
我が君のひかりぞそはむはるの宮てらすあさ日の千代の行末はぐす末  
をとこ山さしそふ松のえだごとごとに神も千歳をいはひそむらむ  
秋津島四方の民の戸をさまりて幾よろづ代もきみぞたもたむ

千五百番歌合是也 建仁元年七月進

平出無先例如此可書由内府披露仍隨時儀

夏日侍太上皇仙洞同詠百首應製和歌

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣

定家上

## 山家五首

露しものをぐらの山に家居いぐらしてほさでも袖の朽ちぬべきかな  
秋の日に都をいそぐしづのめのかへるほどなきおほはらの里  
浪の音に宇治の里人よるさへや寐てもあやふき夢のうきはし  
柴の戸の跡みゆばかりしをりせば忘れぬ人のかりにもぞとふ  
庭の而は鹿のふしどとあれはてよよふりにけり竹編める垣

## 鳥五首

宿に鳴く八聲の鳥は知らじかしおきてかひなき曉のつゆ  
手馴れつゝ末野を頼むはし鷹の君が御代にぞ逢はむと思ひし  
君が代に霞を分けしあし鶴つるのさらにさはべの音をや鳴くべき  
いかにせむつら亂れにしかりがねのたちども知らぬ秋の心を  
我が君にあふくま川のさ夜千鳥かきとどめつるあとぞ嬉しき

わくらばにたのむる暮のいりあひはかはらぬ鐘の音ぞ淋しき  
あかつきは別るゝ袖をとひがほに山した風もつゆこほるなり  
まつ人のこぬ夜のかけにおもなれて山のは出づる月も恨めし  
憂はうくつらきはつらしとばかりも人め覺えて人をこひばや  
誰ゆゑに月をあはれといひかねてとりの音おそきさ夜の手枕  
見せばやな待つとせしまのわが宿を猶つれなさはこと問はずとも

## 旅五首

草まくらゆふ露はらふ笹の葉のみやまもそよにいくよ萎れぬ  
浪の上の月を都のともとしてあかしのせとを出づるふなびと  
いもとわれといるさの山は名のみして月をぞしたふ有明の空  
駒なづむいはきの山を越えわびて人もこぬみの濱にかもねむ  
みやこ思ふなみだのつまとなるみがた月にわれとぶ秋の潮風

冬の夜の結ばぬ夢にふしわびてわたる小川はこほりるにけり  
庭の松はらふあらしにおく霜を上毛にわぶるをしのひとりね  
誰をまた夜ぶかき風にまつしまやをじまの千鳥聲うらむらむ  
ながめやる衣手さむく降る雪にゆふやみ知らぬ山のはのつき  
駒とめて袖うちはらふかけもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ  
しろたへにたなびく雲を吹きまぜて雪にあまざるみねの松風  
庭の面にきえずはあらねど花と見る雪は春までつぎて降らなむ  
いくかへり春をばよそに迎へつゝ送る年のみ身につもるらむ

### 戀十首

久方のあまてる神のゆふかづらかけていく世を戀ひ渡るらむ  
松が根をいそべの浪のうつたへにあらはれぬべき袖の上かな  
あはれとも人はいはたのおのれのみ秋のもみぢを涙にぞかる  
しのぶるはまけてあふにも身をかへつつれなき戀なごめの戀ぞなき

染めはつる時雨を今は松蟲のなくしをしむ野邊のいろく、  
白妙の衣しでうつひどきよりおきまよふ霜のいろに出づらむ  
思ひあへず秋ないそぎそさをしかの妻とふ山の小田のはつ霜  
秋もれてわが身しぐれとふる里の庭はもみぢの跡だにもなし  
あすよりは秋も嵐の音羽山かたみとなしに散るこのはかな

## 冬十五首

手向してかひこそなけれ神無月もみぢは幣と散りまがへども  
山めぐりなほしぐるなり秋にだに争ひかねしまきのしたばを  
うらがれし浅茅はくちぬ一年のすゑはの霜のふゆのよなく  
冬はまだあさはの野らにおく霜の雪よりふかきしの上めの道  
よしさらば四方の木枯吹きはらへ人はくもらぬ月をだに見む  
おとづれしまさきのかづら散りはてと外山も今は霰をぞ聞く  
山賤のあさけのこやに焼く柴のしばしと見れば暮るゝ空かな

白露にそでも草葉もしをれつゝ月かけならすあきは乘にけり  
秋といへば夕ゆふべのけしきひきかへてまだ弓張のつきぞさびしき  
いくかへりなれても悲し萩原や末こすかぜのあきのゆふぐれ  
物思はどいかにせよとて秋の夜にかよる風しも吹き初めけむ  
からころもかりいほの床の露さむみはぎの錦を重ねてぞきる  
秋はぎの散り行く小野の朝露はこほると袖もいろぞうつろふ  
秋の野に涙は見えぬしかの音はわくるをかやの露をからなむ  
思ふ人そなたの風にとはねどもまづ袖觸るとはつかりのこゑ  
ゆふべより秋とはかねてながむれど月におどろく空の色かな  
秋をへてくもる涙のますかどみ清きつき夜もうたがはれつゝ  
思ふことまくらも知らじ秋の夜のちどにくだくるつきの盛は  
もよほすもなぐさむもたど心からながむる月をなど唧かつらむ  
さびしさも秋にはしかじなけきつゝ寐られぬ月にあかすさじしろ筵  
秋の夜のあまの戸わたる月影におきそふ露のあけがたのそら



あやめふく軒のたちばな風吹けば昔にならふ今日のそでの香  
いかばかりみやまさびしとうらむらむ里なれはつる郭公かな  
時鳥しばしやすらへすが原やふしみのさとのむらさめのそら  
郭公なにをよすがにたのめとて花たちばなの散りはてぬらむ  
誰が袖をはなたちばなにゆづりけむ宿はいくよと音信おきづねもせで  
わがしめし玉江の蘆のよをへては刈らねど見えぬ五月雨の頃  
夏草の露わけ衣ほしもあへずかりねなからに明くるしのよめ  
片絲をよるく々峯にともす火にあはずば鹿の身をもかへじを  
萩の葉もしのびく々に聲立てよまだき露けきせみのはごろも  
夏か秋かとへどしら玉岩ねよりはなれて落つるたきがはの水  
今はとて有明のかげの横の戸にさすがにをしきみなづきの空

## 秋二十首

けふこそは秋もはつせの山おろしに涼しく響くかねの音かな

白雲のはるはかさねてたつた山をぐらの峯にはなにほふらむ  
高砂のまつと都にことづてよをのへのさくらいまさかりなり  
花の色をそれかとぞ思ふ少女子が袖ふるやまの春のあけほの  
春の織る花のにしきのたてぬきに亂れてあそぶ空のいとゆふ  
おのづからそことも知らぬ月はみつ暮れなばなけの花を頼みて  
さくら花ちりしく春の時しもあれかへす山田を恨みてぞ行く  
春もをし花をしるべに宿からむゆかりの色のふぢのしたかけ  
しのばじよわれふりすてと行く春のなごりやすらふ雨の夕暮

### 夏十五首

脱ぎかへてかたみとまらぬ夏衣さてしも花のおもかけぞたつ  
すがの根や日影も長くなるまよにむすぶばかりにしける夏草  
卯花の垣根もたわにおける露ちらすもあらなむ玉にぬくまで  
もろかづら草のゆかりにあらねどもかけてまたると郭公かな

## 春二十首

春來ぬとけさみよし野のあさほらけ昨日はかすむ峯の雪かは  
あらたまの年の明くるを待ちけらしけふたにの戸を出づる鶯  
春の色を飛ぶ火の野守尋ぬれど二葉のわかな雪も消えあへず  
もろ人ひとのはないろごろもたちかさね都ぞしるき春きたりとは  
うちわたすをちかた人はこたへねど匂ぞなる野邊の梅が枝  
梅の花にほひをうつす袖の上のにきもる月のかけぞあらそふ  
花の香のかすめる月にあくがれて夢もさだかに見えぬ頃かな  
百千鳥こゑやむかしのそれならでわが身ふり行く春雨のそら  
有明の月かけのこる山の端をそらになしても立つかすみかな  
おもひ立つ山のいくへも白雲に羽うちかはしかへるかりがね  
吉野山くもにこゝろのかよるより花の頃とはそらにしるしも  
いつも見し松の色かははつせ山さくらにもるよ春のひとしほ

寄遊女戀

心通ふ行き來の舟のながめにもさしてかばかりものは思はじ

寄傀儡戀

一夜かす野がみの里のくさまくら結びすてたる人のちぎりを

寄海人戀

袖ぞ今はをじまの海人もいさりせむほさぬたぐひに思ひけるかな

寄樵夫戀

山ふかみなけきこるをのおのれのみ苦しくまどふ戀の道かな

寄商人戀

たつの市や日を待つ賤しづのそれならばあす知らぬ身にかへて逢はまし

秋日侍太上皇仙洞同詠百首應製和歌(正治二年八月八日追給)

題同二十五日詠進之

從四位上行左近衛權少將兼安藝權介臣藤家朝上定家

寄獸戀

うらやます臥す猪の床はやすくとも歎くもかたみ寐ぬも契を

寄蟲戀

忘れじの契うらむるふる里のこよろも知らぬまつむしのこゑ

寄笛戀

笛竹のたどひとふしを契にて世々のうらみを残せとやおもふ

寄琴戀

昔聞く君が手なれのことならば夢に知られて音をも立てまし

寄繪戀

主ぬやたれ見ぬ世のことをうつしおく筆のすさびにうかぶ面影

寄衣戀

こひ初めしおもひのつまの色ぞこれ身にしむ春のはなの衣手

寄席戀

忘れずば馴れし袖もやこぼるらむねぬ夜の床の霜のさむしろ

寄河戀

いつかさはまたも逢ふ瀬を松浦まつらがたこの河上に家はすむとも

寄海戀

とほざかる人の心はうなばらのおき行くふねのあとの白波

寄關戀

身にたへぬおもひをすまの關すゑて人に心をなどうらむらむ

寄橋戀

人ごころをだえの橋に立ちかへり木のはふりしく秋の通ひぢ

寄草戀

いはざりき我が身ふるやの忍ぶ草思ひたがへて種をまけとは

寄木戀

戀ひ死なば苦むす塚にかへふりてもとの契の朽ちや果てなむ

寄鳥戀

鴨のゐる入江のなみをこよろにて胸とそでとにさわぐ戀かな

旅戀

故郷を出でしにまさるなみだかなあらしの枕ゆめにわかれて

寄月戀

やすらひに出でにしまよの月の影わが涙のみそでにまでども

寄雲戀

時のまに消えてたなびく白雲のしばしも人にあひみてしかな

寄風戀

知らざりし夜深き風のおともにす手枕うときあきのこなたは

寄雨戀

さはらずばこよひぞ君を頼むべき袖には雨のときわかねども

寄煙戀

かぎりなき下のおもひの行方とて燃えむ煙のはてや見ゆべき

寄山戀

足引の山路のあきになる袖はうつろふひとのあらしなりけり

晝戀

おほかたの露はひるまぞ別れける我がそでひとつのこる雫に

夕戀

こひわびてわれとながめし夕暮もなるれば人のかたみ顔なる

夜戀

頼めぬを待ちつるよひも過ぎはてよつらさとぢむる片敷かたしきの床

老戀

あかつきにあかぬ別もいまはとてわがよふくればそふ思かは

幼戀

葉をわかみまだふしなれぬ吳竹のこはしをるべき露の上かな

遠戀

悲しきはさかひことなる中としてなき魂までやよそに浮れむ

近戀

涙せく袖のよそめはならへども忘れずやとも問ふひまぞなき



顯戀

よしさらば今は忍ばで戀ひしなむ思ふにまけし名にだにも立て

稀戀

年ぞふる見るよなくもかさならで我もなき名か夢かと思ふ

絶戀

こゝろさへまたよそ人になりはてばなにかなごりの夢の通路かよひぢ

怨戀

あらざらむ後の世までを恨みてもその面影をえこそうとまね

舊戀

いかなりし世々の報かたのつらさにてこの年月によわらざるらむ

曉戀

面影もわかれにかはる鐘のおとにならひ悲しきしのよめの空

朝戀

雲かよりかさなる山をこえもせず隔てまさるは明くる日の影

見戀

憂しつらしあさかの沼の草の名よかりにも深き江にはむすばで

尋戀

面影はをしへし宿にさきだちてこたへぬかぜのまつに吹く聲

祈戀

年も經ぬいのるちぎりのははつせ山尾上のかねのよその夕ぐれ

契戀

あぢきなし誰もはかなき命にてたのめばけふのくれを頼めよ

待戀

風つらきもとあらのこ萩袖にみて更け行く夜半よはにおもる白露

遇戀

たふまじき明日より後のことかななれて悲しき思そひなば

別戀

かはれたと別ると道の野邊の露いのちにむかふものも思はじ

椎 柴

椎柴はふゆこそ人に知られけれこととふあられ残すこがらし

袈

ひきかくる閨ひなのふすまのへだてにも響はかはる鐘のおとかな

佛 名

河竹のなびくはかぜもとしくれて三世の佛の御名を聞くかな

戀

初 戀

なびかじな蚤わまの藻しほ火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

忍 戀

氷るるみるめなぎさの焼く火かはうへせく袖のしたのさよ浪

聞 戀

もろこしの見す知らぬよの人ばかり名にのみ聞きてやみねとや思ふ

落葉

かつをしむながめもうつる庭の色に何をこすゑの冬に残さむ

殘菊

白菊の散らぬは残るいろがほにはるは風をもうらみけるかな

枯野

夢かさは野邊の千草のおもかけはほのくなびく薄ばかりや

野行幸

狩ごろもおどろの道も立ちかへりうち散るみゆき野風寒けし

翼

この山のみねの村雨吹きまよひまきの葉傳ひみぞれ降り來ぬ

冬朝

一年をながめつくせる朝戸出にうす雪こぼるさびしさのはて

寒松

あらはれてまだ冬ごもる雪のうちにも年深き松のいろかな

廣澤池眺望

すみ來けるあとには光にのこれども月こそふりねひろさはの池

葛

あしの屋のつたはふ軒のむら時雨おとこそたてね色は隠れず

柞

時わかぬ波さへ色にいづみ川はよそのもりにあらし吹くらし

九月九日

いはひおきてなほ長月とちぎるかな今日つむ菊のすゑの白露

秋霜

とけて寐ぬ夢路もしもに結ほほれまづしる秋のかたしきの袖

暮秋

ありあけの名ばかり秋の月影によわりはてたる蟲のこゑかな

冬

稻妻

影やどすほどなき袖のつゆのうへになれてもうとき宵の稻妻

鶉

月ぞすむさとはまことにあれにけり鶉のそこを拂ふあきかぜ

野分

萩の葉にかはりし風の秋のこゑやがて野分のつゆくだくなり

秋雨

ゆくへなき秋のおもひぞせかれぬる村雨なびく雲のを山田

秋夕

秋よたどながめすてよも出でなまし此の里をのみ夕と思はど

秋田

幾夜ともやどはこたへす門田吹く稻葉のかぜの秋のおとづれ

鳴

からころもすすそ野の庵のたび枕そでより鳴の立つことちする

扇

風かよふ扇に秋のさそはれてまづねなれぬる床のつきかけ

夕顔

暮れそめて草のはなびく風のまにかきねすどしき夕顔のはな

夕立

風わたる軒のしたくさうちしをれ涼しくにはふゆふだちの空

蟬

あらし吹く梢はるかに鳴く蟬のあきをちかしと空につぐなる

秋

残暑

秋來てもなほ夕風を松が音になつをわすれしかけぞ立ちうき

乞巧奠

秋ごとにたえぬ星あひのさ夜ふけてひかりならぶるにはの灯せしひ

夏

新樹

影ひたす水さへいろぞみどりなるよもの梢のおなじ若葉に

夏草

なつ山の草葉のたけぞ知られぬる春みし小松ひとしひかねば

賀茂祭

雲のうへを出づる使のもろかづら向ふ日影にかざす今日かな

鵜川

をちこちにながめやかはすうかひ舟やみを光の篝火かとりびのかけ

夏夜

夏の夜はなるよ清水のうきまくら結ぶほどなきうたよねの夢

夏衣

尋ね入るならのはかけのかさなりてさてしもかろき夏衣かな



くり返し春のいとゆふいくよへて同じみどりの空に見ゆらむ

春曙

霞かは花うぐひすにとぢられて春にこもれるやどのあけほの

遅日

ながめわびぬ光のどかにかすむ日に花咲く山は西をわかねど

志賀山越

袖の雪そらふく風もひとつにて花ににほへる志賀のやまごえ

三月三日

から人のあとをつたふる盃のなみにしたがふ今日も來にけり

蛙

ほのかなる枯野のすゑのあらを田に蛙も春のくれうらむなり

残春

木のもとには日數ばかりをにほひにて花ものこらぬはるの故郷

かすみあへすなほ降る雪に空とちて春ものふかき埋火うづみびのもと

春水

氷るしみづのしらなみ立ちかへり春風しるきいけのおもかな

若草

おそくとくおのがさまく咲く花のひとつふたばの春の若草

賭射

もよしきやいてひく庭のあづさ弓むかしに歸る春にあふかな

野遊

皆人のはるのこよろの通ひ來てなれぬる野邊の花のかけかな

雉

立つ雉のなるよ野原もかすみつよ子を思ふ道や春まどふらむ

雲雀

末とほき若葉のしばふうちなびき雲雀鳴く野のはるの夕ぐれ

遊絲

遠行地

障さはりなくとほちを渡す橋なればおち破るてふたぐひだに見す

不動地

おのがじしまもるすがたの身にそひて動かぬ道の固かたのとぞなる

善恵地

はかりなき花の諸人靡き來てまさるかざりのかひぞありける

法雲地

大空の法のくもぢにすむ月のかぎりも知らぬひかりをぞ見る

詠百首和歌（歌合百首春）

建久四年秋）三年給題今年雖憚身依別儀猶被召此歌

春

元日宴

春來れば星の位にかけ見えてくもるのはしに出づるたをやめ

餘寒

釋教十首

歡喜地

嬉しさのなみだも更にとどまらず長きうき世の關をいづとて

無垢地

いさぎよく磨く心しくもらねば玉しくよものさかひをぞ見る

明地

あきらけき朝日のかげにあたご山雪もこほりもきえぞ碎くる

焔惠地

冬枯のおどろのふるえ燃えつきて吹きかふ風に花ぞ散りしく

難勝地

天津風さはりし雲は吹きとちよ少女のすがたはなににほひて

現前地

すみまさる池の心にあらはれてこがねの岸になみぞよせける

春雨のふりにし里をきて見れば枕のちりにすがるみのむし  
自づからうちおく文も月日へてあくればしみのすみかとぞなる

## 神祇十首

照すらむ神路の山の朝日かけあまつくもるをのどかなれとは  
かしまのやひはら杉原ときはなる君がさかえは神のまにく  
春日山峯のまつばら吹くかぜの雲井にたかきよろづよのこゑ  
榊さすをしほの野邊のひめ小松かはす千歳のすゑぞひさしき  
かも山やいくらの人をみつるぎのひさしき世より哀かくらむ  
たのもしな曉ちかき月かけのかねて住むらむみよし野のたけ  
おもかけに思ふもさびしうづもれぬほかたに月の雪の白やま  
雲かよるなちの山陰いかならむみぞれはけしき長き夜のやみ  
わかの浦の浪にこゝろはよすと聞くわれをば知るや住吉の松  
やはらぐるひかりさやかに照し見よたのむ日よしの七ななの御社みやしろ

思ふにはおくれむものか荒熊の住むてふ山のしばしなりとも  
塚古ききつねのかれる色よりもふかきまどひに染むる心よ  
程もなく暮るよ日影にねをぞ鳴く羊のあゆみ聞くにつけても  
高山の峯ふみならずとらの子ののほらむ道のすゑぞはるけき

### 蟲十首

苗代にかつ散る花のいろながらすだくかはづの聲ぞながるよ  
夜もすがらまがふ螢のひかりさへわかればをしき東雲しのよめのそら  
けさ見れば野分のわきののちの雨はれて玉ぞのこれるさよがにの絲  
人ならば恨みもせましそのの花かるればかるよ蝶のこよろよ  
み山吹くかぜのひどきになりにけりこすゑにならふ蛸ひぐらしのこゑ  
わきかぬる夢のちぎりに似たるかな夕の空にまがふかけろふ  
草深きしづがふせやの蚊ばしらにいとふ煙を立て添ふるかな  
うきて世をふるやの軒にすむ蜂のさすがになれぬ厭ふものから

夕立のくもまの日影はれそめてやまのこなたをわたるしら鷺  
なるこひく田のもの風になびきつよなみよる暮のむら雀かな  
深草のさとの夕かぜ通ひ来てふしみのをのうづら鳴くなり  
さらぬだに霜枯れ果つる草の葉をまづうち拂ふにはたよきかな  
人とはぬ冬の山路の淋しさよかきねのそばにしとどおりゐて  
つばくらめあはれに見けるためしかなかはる契は習なる世に

## 獸十首

いつしかと春のけしきにひきかへて雲井の庭にいづるあを馬  
霜ふかくおくる別のをぐるまにあやなくつらき牛のおとかな  
おち積る木の葉もいくへ積るらむふす猪のかるもかきも拂はで  
露をまつうのけのいかにしをるらむ月の桂のかけをたのみて  
山里は人のかよへるあともなし宿もるいぬの聲ばかりして  
花ざかり空しき山になくさるのこよろ知らるよ春のよのつき

まきもくや檜原のしけみかき分けて昔のあとを尋ねてぞ見る  
けふ見れば弓きるほどになりにつけり植ゑし岡べの槻のかた枝  
旅まくら椎の下葉ををりかけてそでもいほりもひとつ夕つゆ  
月もいざ楨の葉ふかき山のかけ雨ぞつたふるしづくをもみし  
かどみ山みがき添へたる玉つばきかけもくもらぬ春の空かな  
夕まぐれ風吹きすさむ桐の葉にそよいまさらの秋にあらねど  
しぐれ行くはじの立枝に風こえてこよろ色づくあきの山ざと  
こすゑより冬の山風はらふらしもとつは残るならのはがしは

### 鳥十首

しのぶ山こさちの奥にかふ鷲のその羽ばかりや人に知らるよ  
梓ゆみすゑの原野にひきすゑとかへる鷹をけふぞあはする  
風立ちて澤邊にかけるはやぶさの早くも秋のけしきなるかな  
枯野やく烟のしたに立つきどすむせぶおもひやなほ増るらむ



年の内はけふの三時にあふひ草かざすみあれをかけて待つらし  
神代よりちぎりありてや山あるもすれる衣のいろとなるらむ  
さやかなるくもるにかざすひかけぐさこよのあかり豊明のひかりませとや  
道もせにしけるよもぎふうちなびき人かけもせぬ秋風ぞ吹く  
霜結ぶ尾花がもとのおもひぐさ消えなむ後やいろに出づべき  
あれにけり軒のしたぐさ葉をしけみ昔しのぶのすゑの白つゆ  
われも思ふ浦のはまゆふいくへかは重ねて人をつ頼めとも  
さくら麻のをふの下露したにのみわけて朽ちぬるよなくの袖  
路芝やまじるかやふのおのれのみうち吹く風に亂れてぞ見る  
流れても思ふ瀬による若芹のねにあらはれて戀ひむとやみし

## 木十首

草も木もひとつに落つる霜のうち葉がへぬ松の色ぞ残れる  
いそのかみふるの神杉ふりぬとも常磐かきはの影はかはらじ

居所十首

もよしきやもる白玉の明けがたにまたしもつらき鐘の聲かな  
隈もなき衛士のたく火のかげ添ひて月になれたる秋のみや人  
秋津島をさむるかどののどけきに傳ふる北のふちなみのかげ  
宿ごとにこよろぞ見ゆるまとるする花の都のやよひきさらぎ  
むら薄<sup>うす</sup>うゑけむあともふりにけり雲井を近くまもるすみかに  
見なれぬる四年をいかに忍ぶらむかざるあがたの立ち別るとて  
旅まくらくいくたび夢のさめぬらむ思ひあかしのうまやくと  
柴の戸よ今はかぎりとしめずとも露けかるべき山のかけかな  
露しものおくての山田かりねして袖ほしわぶる庵のさむしろ  
出でてこし道のさと原しけりあひて誰ながむらむ故郷のつき

草十首

かききらす軒ばの空にかず見えてながめもあへず落つる白雪

## 地部十首

あともなし苦むす谷のおくのみち幾世へぬらむみよし野の山  
わたつみによせては返るしき浪のはじめも果も知る人ぞなき  
うつ波のまなく時なき玉かしはたま〜見ればあかぬ色かも  
わきかへるいはせの波に秋すぎてもみぢになりぬ宇治の川風  
鴛鴦ゝしのるる蘆のかれまの雪ごほり冬こそ池のさかりなりけれ  
若菜つむをちの澤邊のあさみどりかすみの外のはるの色かな  
秋はたど入江ばかりのゆふべかは月まつそらのまのの浦なみ  
月のさす關やのかけのほどなきに一夜は明けぬすまの旅ふし  
知るべなきをだえの橋に行きまよひまた今更のものや思はむ  
語るともかばかり人や知らざらむ宮城の野邊のゆふぐれの色

あぢきなく物おもふ人の袖のうへに有明の月の夜を重ねては  
長月のありあけの月のしぐれゆゑあすの紅葉の色もうらめし

詠百首倭歌（十題百首）

建久二年冬  
左大將家

天部十首

久方の雲井はるかに出づる日のけしきもしるき春は來にけり  
いく秋の空をひとよにつくしても思ふにあまる月のかけかな  
すべらぎのあまねき御代を空に見て星のやどりの影も動かす  
あまの川としのわたりの秋かけてさやかになりぬ夏の夜の闇  
はかなしと見る程もなしいなづまの光にさむるうたよねの夢  
こたへじないつも變らぬ風の音に馴れし昔のゆくへ問ふべく  
見ずしらぬうづもれぬ名のとや誰たなびき渡る夕暮のそら  
けふ暮れぬあすさへ降らむ雨にこそおもはむ人の心をも見ぬ  
この日ごろさえつる風に雲こりてあられこほると冬の夕ぐれ

明くる空いる山のはを恨みつゝいくたび月にものおもふらむ  
袖のうへまくらの下にやどりきて幾年なれぬあきの夜のつき  
さらしなは昔のつきのひかりかはたゞ秋風ぞをばすてのやま  
四方の空ひとつ光にみがかれてならぶものなき秋の夜のつき  
ころもうつひどきに月のかけふけて道行く人の音もきこえず  
かけさえて照すこしおの山人は月にやあきをわすれはつらむ  
あくがるよ心はきはもなきものを山のはちかき月のかけかな  
わすれじよ月もあはれと思ひ出でよわが身の後の行末のあき  
しかりとて月の心もまだ知らずおもへばうとき秋のねざめを  
峯のあらし浦のなみ風ゆきさえてみな白妙のあきの夜のつき  
月きよみねられぬ夜しももろこしの雲の夢まで見る心地する  
今よりはこすゑの秋は深くとも月いづるみねは風のまに／＼  
露時雨下葉のこらぬやまなれば月も夜をへてもりまさりけり  
山のはの思はむこともはづかしく月よりほかの秋はながめじ

月かけは秋より奥の霜おきて木ぶかく見ゆるやまのときはぎ  
山ふかみ岩きりとほす谷川をひかりにせけるあきの夜のつき  
秋の夜は月ともわかぬながめゆるそでに氷のかげぞみちぬる  
見る夢はをぎの葉風にとだえしておもひもあへぬ圍の月かけ  
眺むれば松よりにしになりにけり影はるかなるあけがたの月  
しの上めは月もかはらぬ別にてくもらば暮のたのみなきかな  
月ゆるゑにあまりもつくす心かな思へばつらしあきの夜のそら  
明けばまた秋のなかばも過ぎぬべし傾く月のをしきのみかは  
いく里の露なき野邊にやどかりしひかりともなふもち月の駒  
秋のよの有明のつきの月影はこの世ならでもなほやしのばむ  
いく秋とゆくへも知らぬ神代までたもとに見する月の空かな  
月を思ふこゝろにそへてしのばすば忘れもすべき昔なりけり  
とこのうへの光に月のむすび来てやがて冴えゆくあきの手枕たまくら  
月清みはねうちかはしとぶ雁のこゑあはれなる秋かぜの空

松蟲のこゑのまに／＼とめくれば草葉のつゆに月ぞやどれる  
あかざりし山井の清水手にくめばしづくも月のかげぞ宿れる  
深草のさとの籬はあれはてゝ野となるつゆにつきぞやどれる  
さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしく宇治のはし礫  
なにとなく過ぎこし秋のかすごとにのち見る月の哀とぞなる  
そのふしとおもひもわかぬ涙かな月やはつらき秋もうからむ  
あづまやのまやのあまりの露かけて月のひかりも袖濡しけり  
よもぎふのまがきの蟲のこゑわけて月は秋とも誰かとふべき  
月ゆゑにさよすばしばしこととはむ柴の編戸よわれ待たずとも  
庭の面にうゑおくあきの色よりも月にぞ宿のこゝろ見えける  
分きがたき葎の宿のつゆのうへは月の哀もしくものぞなき  
關の戸を鳥のそらねにはかれども有明の月はなほぞさしける  
思ひやるみねのいはやの苔の上に誰かこよひの月を見るらむ  
尋ね來て聞くだに淋しおく山の月に冴えたるまつかぜのこゑ

さくら花思ふものからうとまれぬ懋めはてぬはるのちぎりに  
わびつゝは花を恨むる春もがな風のゆくへにこよろまよはで  
花を思ふこよろにやどるまくす原あきにもかへす風の音かな  
散りぬとてなどて櫻を恨みけむ散らすばみまじけふの庭かな  
あと絶えしみぎはの庭に春くれて昔もや花のしたに朽ちぬる  
吹く風も散るも惜むも年ふれどことわり知らぬ花のうへかな

月五十首

秋は來ぬ月は木のまにもり初めておきどころなき袖の露かな  
冴えのほる月のひかりにことそひて秋の色なるほしあひの空  
これぞこの待たれし秋の夕よりまづくもはれていづる月かけ  
數ふれば秋來てのちの月のいろをおほめかしくも絞る袖かな  
秋といへば空すむ月をちぎりおきてひかり待ちとる萩の下露  
秋をへてこよろに浮ぶ月影をさながらむすぶやどのましみづ



まだ馴れぬ花のにほひに旅寐して木立ゆかしき春の夜のやみ  
玉鉾のたよりにみつるさくら花またはいづれの春かあふべき  
やまざくらいかなる花の契にてかばかり人のおもひ初めけむ  
時こそあれさらではかゝる匂かは櫻もいかにはるを待ちけむ  
さくらばなたをりもやらぬ一枝にこすゑにのこる心をぞ知る  
やまざくら心のいろをたれみてむいくよの花のそこに宿らば  
後もうしむかしもつらし櫻花うつろふそらのはるのやまかぜ  
梢よりほかなる花のおもかけにありしつらさの似たる風かな  
なにとなくうらみなれたる夕かなやよひの空の花の散るころ  
暮れぬとて花ちる嶺の春のそらなほ宿からむひとよばかりも  
春風のなみこす空になりにけり花のみぎはのきしのはままつ  
山がくれ風のしるべに見る花をやがてさそふはたにがはの水  
山櫻までもいはじ散りぬとておもひ増すべき花しなければ  
いかにして風のつらさを忘れなむ櫻にあらぬさくらたづねて

雲のうち雪の下なる春のいろをたれわが宿の上と見るらむ  
明けはてす夜のまの花にこととへば山のは白く雲ぞたなびく  
檣の戸はのきばの花のかけなれば床もまくらも春のあけほの  
いかばかりのちも忘れぬつまならむさくらに馴るゝ宿の夕暮  
日かれせずいとどさくらぞ惜まるゝうちもまぎれぬ春の山里  
八重葎とぢけるやどのかひもなし故郷とはぬ花にしあらねば  
竹のかき松のはしらはこけむせど花のあるじぞ春さをひける  
花のふち櫻のそことたづぬれば岩もるみづの聲ぞかはらぬ  
枝かはす松のみありしこすゑまで雲と浪とにたどるはるかな  
空はゆき庭をば月のひかりとていづくに花のありかたづねむ  
花の香はかをるばかりを行方とて風よりつらき夕やみのそら  
思ひ入るゆくへは花のうへにして昔にやどかる春のうたよね  
過ぎがてにをしまでものを櫻花かへる夜のまに風もこそ吹け  
散りまがふ木のもとながらまどろめば櫻にむすぶ春の夜の夢

花ざかり外山の春のからにしきかすみの立つも惜しき頃かな  
かすみ立つ峯のさくらのあさほらけくれなるくよる天の川波  
さくら花ちらぬ梢に風ふれててる日もかをる志賀のやまごえ  
花ののちやへ立つ雲に空とちて春にうづめるみよし野のそこ  
さもあらばあれ花より外のながめには霞にくらすみ吉野の春  
あくがれし雪と月との色とめてこすゑに薫るはるのやまかせ  
吉野山かすみ吹きこす谷風の散らぬさくらの色さをふらむ  
降り來ぬる雨もしづくも匂ひけり花より花にうつるやまみち  
長き日に遊ぶいとゆふしづかにて空にぞ見ゆる花のさかりは  
百敷やたましくにはのさくら花てらす朝日のひかり添ひけり  
かざしもて暮す春日ののどけさに千代も經ぬべき花の蔭かな  
宮人の袖にまがへるさくら花にほひもとめよ春のかたみに  
手折りもて行きかふ人のけしきまで花のにほひは都なりけり  
こきまざる柳のいとも結ほほれ亂れてにほふはなざくらかな

心うしかなし戀ひしとのぶとてふたよび見ゆる昔なき世よ  
うたよねに草ひきむすぶこともなしはかなの春のゆめの枕や  
無常

いつ我も筆のすさびはとまりゐてまたなき人の跡といはれむ  
をしまれぬうきにたへたる身ならずばあはれ過ぎにし昔がたりを  
祝

天つそら月日のかけもしづかにて千世は雲井に君ぞかぞへむ

詠百首和歌(花月百首)

建久元年秋  
左大將家

花五十首

さくら花さきにし日より吉野山そらもひとつに薫るしら雪  
足引の山のはごとにさくはなの匂にかすむはるのあけほの

とまびさしものの哀の關するてなみだはとめぬ須磨のうら風  
野原の橋をよるよりの道も清波の中  
夜をこめて朝たつ霧のひまゝにたえぐ見ゆる勢田の長橋

海路

待ちえたる日よりを道のたのみにて遙に出づる波の上かな  
旅の天を雲を封ふ霧を消す智恵の目さな  
露しけきさやの中山なかゝに忘れて過ぐるみやこともがな

別

暮れて行く春の霞をなほこめてへだつるをちに立ちや別れむ  
山の家  
家居してまだかばかりも知らざりきみ山のさとの木枯のこゑ

田家

おきふしにねぞなかれける霜さゆる刈田の庵の鳴のはねがき

懐舊

草の庵の友とはいづか消えなさむこよろのうち松風のこゑ

竹

ときわかぬ籬まがきのたけの色にしもあきのあはれの深く見ゆらむ

苔

なれこしは昨日と思ふ人の跡もこけ踏み分けて道たどるなり

鶴

人とはでみぎりあれにし庭の面にきくも淋しきつるのひと聲

山

いかにせむ夫も憂き世と厭ひ出でば吉野の山もなき身なりけり

川

色はみな空しきものをたつた川もみぢ流るゝ秋もひととき

野

何となく見るよりものの悲しきは野中の庵のゆふぐれのそら

關

おのづから人も時の間思ひ出でばそれをこの世の思出にせむ

旅 戀

旅寐するあらし濱邊のなみの音にいとど立ちそふ人の面かけ

思

いかばかり深きけぶりのそこならむ月日とともにつもる思の

片 戀

よひくは忘れてぬらむ夢にだになるとを見えよ通ふたましひ

恨

きみよりも世よりもつらき契こそ身をかへつとも恨のこらめ

雜二十首

曉

うらめしや別の道にちぎりおきてなべて露おくあかつきの空

松

ながらふる命ばかりをかごとにてあまた過ぎぬる年の暮かな  
戀十首

初戀

後の世をかけてや戀ひむゆふだすきそれとも分かぬ風の紛まぎれに

忍戀

思ふとは君にへだてよさよ衣なれぬなけきにとしぞかさなる

不逢戀

あひ見ての後の心をまづしればつれなしとだにえこそ恨みね

初逢戀

なにとこのみるとも分かぬまほろしに外の歎のちへ増るらむ

後朝戀

いかにせむ夢より外に見し夢の戀にこひますけさの涙を

逢不愚戀



大井河なみをるぜきに吹きとめてこほるは風の結ぶなりけり

水鳥

よそへても見せばや人にをしかものさわぐ入江のそこの思を

網代

夜を経ては見るもはかなき網代木にこしのみ空の風を待つらむ

神樂

香をとめしさかきの聲にさよ更けて身にしみ果つる明星の空

鷹狩

とまるなよ狩場のを野のすり衣ゆきのみだれに空は霧るとも

炭竈

をのやまや見るだにさびし朝夕にたれすみがまの煙たつらむ

爐火

埋火のひかりもはひにつきはてゝ淋しくひどく鐘のおとかな

歳暮

秋のみは風もこよろもとどまらずみな霜がれのふゆの山ざと

時 雨

かへりみる梢に雲のかよるかないでつる里やいざしぐるらむ

霜

おきそめて惜みし菊の色をまたかへすもつらき冬のしもかな

霰

あられふるしがの山路に風こえて峯に吹きまく浦のさよなみ

雪

秋ながらなほながめつる庭のおもの枯葉も見えず積る雪かな

寒 蘆

聲はせて波よるあしのほすゑかな汐干のかたに風や吹くらむ

千 鳥

長き夜をおもひあかしの浦風に鳴く音をそふるとも千鳥かな

氷

月きよみ四方の大空くも消えて千里のあきをうづむしらゆき  
擣衣（き）とけねぬふしみの里は名のみしてたれ深き夜に衣うつらむ

蟲

松蟲のこゑだにつらきよなくを果はこずゑに風よわるなり

菊

ひとすぢに頼みしもせず春雨に植ゑてしきくの花を見むとは

紅葉

立田山やまの通路おしなべてもみぢを分くるあきのくれかな

九月盡

おくれじとちぎらぬ秋のわかれ故ことわりなくも絞る袖かな

冬十五首

初冬

萩の葉に吹き立つ風の音なひよそよ秋ぞかしおもひつること

雁

霧ふかき外山の峯をながめてもまつ程すぎぬはつかりのこゑ

鹿

わび人のわがやどからの秋風になけきくはゑるさをしかの聲

露

よもすがら山のしづくに立ちぬれて花のうはぎは露も乾かず

霧

下むせぶ宇治の川なみ霧こめてをちかた人のながめ侘ぶらむ

槿

朝がほよなきかほどなくうつろはむ人の心のはなもかばかり

駒  
迎

かぞへこし秋の半をこよひぞとさやかに見するもち月のこま

月

けふといへば梢に秋の風たちてしたのなけきも色變るなり

七夕

秋風やいかど身にしむ天の河きみまつよひのうたとねのそこ

萩

散らば散れ露分けゆかむ萩原やぬれてのちの花のかたみに

女郎花

しのよめに別れし袖のつゆの色をよしなく見する女郎花かな

薄

人もとへあれなむのちのむしの音もうゑおくたき薄秋し絶えずば

刈萱

朝まだき千草のはなもさておきつ玉ぬく野邊のかるかやの露

蘭

露のまにひと枝をらむふぢばかまあかぬにほひや袖に移ると

萩

うきよのうらみもなきも萩のうらみもなきも

夜もすがら花たちばなを吹く風の別れがほなるあかつきの袖  
螢

夏蟲のひかりぞそよぐ難波がたあしのはわけに過ぐるうら風

蓮

朝夕にわが思ふかたのしるべせよくるればむかふ蓮葉のつゆ

氷室

厭ひつるころもで悲しひむろ山ゆふべの後の木々のしたかぜ

泉

よるひると人はこの頃たづねきて夏に知られぬやどのま清水

荒和祓

みそぎすとしばし人なす麻の葉も思へば同じかりそめの世を

秋二十首

立秋

板びさし久しくとはぬ山里もなみまに見ゆるうのはなのころ

葵

天の川おふともきかぬもの故に年にあふひとなに契りけむ

郭公

ほととぎす世になきものと思ふともながめやせまし夏の夕暮

春のむ菖蒲むすぶのさきさき

風吹けば夢のまくらにあはすなりしけき菖蒲あやめの軒のほひを

早苗

種まきしむろの早わせ生ひにけりおり立つ田子の雨もしみよに

照射

ともしするしけみがそこのすり衣袖のしのぶも露やおくらむ

五月雨

とはで来しよもぎが門のいかならむ空さへとづる五月雨の頃

盧橘

すみれつむ花染衣つゆを重みかへりてうつるつきくさのいろ

杜若

ふりにけり誰かみぎりのかきつばたなれのみ春の色深くして

藤

行く春をうらむらさきの藤の花歸るたよりにそめや捨つらむ

款冬

過ぎて行くま袖に匂ふ山ぶきにこゝろをさへも分くる道かな

暮春

春のけふ過ぎ行く山にしをりして心づからのかたみとも見む

### 夏十五首

更衣

脱ぎかふる蟬のはごろも袖ぬれて春の名残をしのびね忍音ぞなく

卯花



わらびをる同じ山路の行きずりに春のみやすむ岩のもとかな

花

けふこずば庭にや春の残らましこずゑうつろふ花のしたかぜ

春 雨

春もまだかれし人目に待ちわびぬ草葉はしける雨につけても

春 駒

ひきかへつあしの葉めぐむ難波がた浦曲うらわの空も駒のけしきも

歸 雁

これにみつ越路の秋もいかならむ吉野の春をかへるかりがね

喚子鳥

曇る夜の月のかげのみほのかにてゆくかた知らぬ喚子鳥かな

苗 代

思ふこそ返すくもさびしけれあらたの面のけふのはるさめ

堇

子日ねのひする野邊の小松のひきくに羨ねむましくもはるに逢あふかな

霞

尋たづね來きて秋あきみし山やまのおもかけにあはれ立ちそふ春はるがすみかな

鶯

春はるや疾はやき谷やまのうぐひすうち羽はねぶきけふ白雪しろゆきのふるす出いづなり

若菜

もろともに出いで來きし人の形かたち見みかな色いろも變からぬ野邊のののわかかな

殘雪

こよろにもあらぬ別わかれのなごりかは消きえても惜おぼしき春はるの雪ゆきかな

梅

春はるの夜よは月つきのかつらも匂におふらむひかりに梅うめのいろはまがひぬ

柳

植うゑおきし昔むかしを人ひとに見みせがほにはるかになびくあをやぎの絲いと

早蕨

夢

ぬば玉の夢はうつゝにまさりけりこの世にさむる枕かはして

無常

かつ見つゝ猶すてはてぬ身なりけりいつかは限かぎりあすや後の世

述懐

思ふとてかひなき世をばいかどせむ心は残れなき身なりとも

祝

思ひやる心はきはもなかりけり千とせもあかぬ君が世のため

詠百首和歌（重奉和早寧百首）

文治五年三月

春二十首

立春

よしの山かすまぬかたの谷水もうち出づる浪に春は立つなり

子日

橋

身のうさはくめぢの橋もわたらねど末もとほらぬ道惑ひける

海路

思ふ人あらば急がむふな出してむしあけのせとは猶荒くとも

旅

みやことてしほらぬ袖もならはぬを何を旅寐の露と分くらむ

別

歸るさをちぎるわかれを惜むにもつひの哀は知りぬべき世を

山家

山里を今はかぎりとたづぬともひとかたならぬ道やまどはむ

田家

いかにせむおくての鳴子引きかへしなほ驚かぬか<sub>り</sub>そめの世を

懐舊

面影はたゞ目の前の心地してむかしとしのぶうき世なりけり

竹

吳竹のわがともはみなならへども光よそなるはのはやしかな

莓

奥山のいはねのこけのよとともに色も變らぬなけきをぞする

鶴

たらちねの心をしれば和歌の浦や夜ぶかきつるの聲ぞ悲しき

山

まだ知らぬ山のあなたに宿しめてうき世隔つる雲かとも見む

川

うつせ川うかぶみなわの消えかへり程なき世をも猶歎くかな

野

身の果はこの世ばかりと知りてだにはかなかるべき野邊の煙を

關

くらべばや清見が關による波ももの思ふ袖に立ちやまさると

旅戀

誰故とさよぬたびねのいほりだに都のかたはながめしものを

思

さきだたば人もあはれをかけて見よ思にきえむそらのうき雲

片戀

よしさらば哀なかけそ忍びわび身をこそ捨てめ君が名はをし

恨

身をすれば恨みじと思ふ世の中をありふるまよの心よわさよ

雜二十首

曉

憂かりけるもの思ふころの曉は人をもとはむこの世ならでも

松

松かぜのこすゑの色はつれなくて絶えずおつるは涙なりけり

戀十首

初戀

これもまた契なるらむとばかりに思ひそめつる身を惜むかな

忍戀

思ひねの夢にもいたく馴れぬればしのびもあへず物ぞ悲しき

不逢戀

なとり河いかにせむともまだ知らず思へば人を恨みけるかな

初逢戀

あひ見てもいへば悲しき契かなうつよもおなじはるのよの夢

後朝戀

別れつるほどもなくくまとはれて頼めぬ暮をなほ急ぐかな

逢不遇戀

うらからずわが心にもしられにき馴れても馴れぬ歎せむとは

羽かはすをしの上毛のしもふかく消えぬ契を見るぞかなしき

網代

いかどする網代にひをのよるくは風さへ早きうぢの川瀬を

神樂

立ち歸る山あるの袖に霜さえてあかつきふかきあさくらの聲

鷹狩

かり衣はらふたもとのおもるまでかた野の原に雪は降り來ぬ

炭竈

炭がまのあたりをぬるみ立ちのほる煙や春はまづかすむらむ

爐火

あけ方のはひのしたなる埋火うみびののこりすくなく暮るゝ年かな

歳暮

年くれぬかはらぬけふの空ごとにうきを重ねぬる心地のみして



月は冴えおとは木の葉にならばせて忍びに過ぐる村時雨かな

霜

はがへせぬ竹さへ色の見えぬまで夜ごとに霜をおき渡すらむ

雪

降りそめし空は雪けになりはてぬ人をもまたじふゆの山ざと

霰

霰ふり日さへあれ行くまきのやの心も知らぬやまおろしかな

寒 蘆

こもり江の蘆の下葉の浮き沈み散りうせぬ世のあぢきな身や

千 鳥

淡路島ちどりとわたる聲ごとにいふかひもなくものぞ悲しき

水

とけぬ上に重ねてこぼる谷水にさゆるよごろの數ぞ見えける

水 鳥

しのばじよあはれは汝なれがあはれかは秋をひどきに打つ唐衣

蟲

恨めしやよしなき蟲の聲にさへ人まちわぶるあきのゆふぐれ

菊

またもあらじ花より後の面かけにさえく惜しき庭のむら菊

紅葉

そよやまた山のはごと<sup>に</sup>に時雨して四方のこずゑは色變るなり

九月盛

あぢきなしうき世におなじ世の中ぞ秋は限と夜は更けぬとも

冬十五首

初冬

かきくらす木の葉は道もなきものをいかに分けても冬の來つらむ

時雨

草枯のおしたのはらに風すぎて冴えゆく空にはつかりの鳴く

鹿

鹿の音はつたふるをちの哀にて宿のけしきはわれのみや見む

露

かへるさは絞る袂の露そひて分けつる野邊に夜はふけにけり

霧

秋ふかく霧たつまよのあけほのは思ふそなたの空をだにみす

さればこそとはじと思ひし古里は咲ける朝顔露もさながら

立ちつゞくきりはらの駒こゆれども音はかくれぬせきの岩角

月

秋來ても秋をくれぬとしらせても幾たび月のこよろづくしに

擣衣

擣衣

七夕のあかぬわかれのなみだにや秋しら露のおきはじめけむ  
萩

咲きにけり野邊分けそむるよそめより蟲のね見する秋萩の花

女郎花

をみなへし靡く氣色や秋かぜの分きて身にしむ色となるらむ

薄

しのぶ山裾野のすよきいかばかり秋のさかりを思ひわぶらむ

刈萱

尋ねれば庭のかるかや跡もなく人やふりにし荒れ果てよけり

蘭

ふぢばかまあらぬ草ばもかをるまで夕霧しめる野邊のあき風

萩

こほれぬる露をば袖にやどしおきて萩のはむすぶあきの夕風

雁

人はすむとばかり見ゆるかやり火のけぶりを頼むをちの柴垣

蓮

この世にもこの世のものと見えぬかな蓮の露にやどる月かけ

氷室

氷室ヒツム山ヤマまかせし水のさえぬれば夏のせかるゝ影にぞありける

泉

山かけの岩ねのしみづ立ちよれば心のうちをひとやくむらむ

荒和祓

みそぎして年をなかばと數ふればあきより先にものぞ悲しき

秋二十首

立秋

みむろ山けふより秋のたつた姫いづれの木々の下葉染むらむ

七夕

あづまやのひさしうらめし郭公まつよひすぐるむらさめの聲

菖蒲

春立ちし年もさつきのけふきぬとくもらぬ空に菖蒲かやめふくなり

早苗

とる苗のはやく月日は過ぎにけりそよぎし風の音もほどなく

照射

夏ごろも立田の山にともしすといく夜かさねて袖ぬらすらむ

五月雨

玉ほこの道ゆく人にことづてもたえて程ふるさみだれのそら

盧橘

ふるさとは花橘にながめしてみぬゆくすゑぞはてはかなしき

螢

うちなびく川ぞひ柳ふく風にまづみだるとはほたるなりけり

蚊遣火

思ふからなほうとまれぬ藤の花さくより春のくるよならひに

款冬

散らすなよるでのしがらみせきかへしいはぬ色なる款冬やふきの花

暮春

春しらぬ憂き身ひとつにとまりけりくれぬ暮ををしむ歎は

夏十五首

更衣

いかにせむひとへにかはる袖の上にかさねて惜しき花の別を

卯花

秋冬のあはれ知らする卯花うのはなよつきにもにたりゆきかとも見ゆ

葵

年をへて神もみあれのあふひ草かけてかよらむ身とは祈らず

時鳥

春の夜をまどうつ雨にふしわびてわれのみ鳥の聲を待つかな

春 駒

をちかたや花に嘶なえて行く駒のこゑも春なるながき日ぐらし

歸 雁

春ふかみこしぢに雁のかへる山なこそかすみに隠れざりけり

喚子鳥

思ひ立つみちのしるべかよぶこ鳥ふかき山邊に人さそふなり

苗 代

來なれたる駒にまかせむ苗代の水にやまぢはひきかへてけり

菫

春雨のふる野の道のつほすみれつみてを行かむ袖はぬるとも

杜 若

關路こえ都こひしきやつはしにいとど隔つるかきつばたかな

藤



鶯のやどしめそむるくれ竹にまだふしなれぬわか音鳴くなり

若菜

いざけふはあすの春雨待たずとも野澤の若菜みてもかへらむ

残雪

踏みしだくおどろが下にしみいりて埋うづもれかはる春の雪かな

梅

にはもこれ春のにほひになりにけり梅咲く宿のあけくれの空

柳

おそくときみどりの絲にしるきかな春來るかたのきしの青柳

早蕨

岩そよぐ清水もはるの聲たてようちや出づるか谷のさわらび

花

いかどせむ雲井の櫻なれく〜てうき身をさぞと思ひ果つとも

春雨

黒髪はまじりし雪の色ながらこよろのいろはかはりやはする  
草がれの野原のこまもうらぶれてしらぬさかひの長月のそら  
つてにきく契もかなしあひ思ふこすゑのをしの夜なくの聲  
いかばかり深き心のそこを見ていくたの川に身のしづみけむ

詠百首和歌（奉和無動寺法印早暉露膽百首）

文治二  
年春

春二十首

立 春

年くれしあはれを空の色ながらいかに見すらむ春のあけほの

子 日

なに故に初子のけふの小松原はるのまとるをちぎりそめけむ

霞

立ちかくすよそめは春のかすみにて雪にぞこもるおくの山里

鶯

これもまた思ふにたがふ心かな捨てずば憂をなけくべきかは

## 雜十五首

頼むかな春日の山の峯つゞきかけものどけき松のむらだち  
跡絶えてそなたとたのむ道もなし南のきしのしるべならでは  
しかばかりかたき御法のりの末にあひて哀この世とまづ思ふかな  
花のはるもみぢの秋とあくがれて心のはてや世にはとまらむ  
世の中をおもひのきはの忍ぶ草いく世の宿もあれかはてなむ  
鷺のゐるいけのみぎはに松ふりて都のほかのこよちこそすれ  
行きかはる時につけてはおのづから哀を見する山のかげかな  
瀧のおと峯のあらしもひとつにて中あらはなる柴のかきかな  
里びたる犬の聲にぞきこえつる竹よりおくのひとのいへるは  
菊かれて飛びかふ蝶の見えぬかな咲きちる花や哀れなりけむ  
さかのほる波のいくへにしをれけむ天の河原の秋のはつかぜ

さばかりに心のほどを見せそめしたよりもつらき歎をぞする  
忘られぬ人をいづこと尋ねても馴れしかごとのある世なりせば  
憂く辛き人をも身をもよししらじたと時のまのあふこともがな  
いかにせむ逢ふ夜を増るおもひにてまたそれならぬ慰はなし  
今ぞしるあかぬわかれの涙川身をなけはつるこひのふちとも  
しきたへの枕ながるゝ床の上にせきとめがたく人ぞ戀ひしき  
かへるさのものとや人の眺むらむ待つ夜ながらの有明のつき  
契らずよこよろに秋はたつた川わたるもみぢの中たえむとは

### 述懐五首

むれてるし同じなぎさの友鶴にわが身ひとつのなどおくるらむ  
こす浪ののこりを拾ふはまの石のとをとて後もみとせ過しつ  
おしなべておよばぬ枝の花ならば外にみかさの山も憂からじ  
かけ清き雲井の月を眺めつゝさても經ぬべきこの世ばかりを

霰ふるしづがさとやよそよさらに一夜ばかりの夢をやは見  
淋しさは霜こそゆきにまさりけれ峯のこすゑのあけほの空  
霜ふかき澤邊のあしに鳴くつるの聲もうらむるあけぐれの空  
うらやまし時を忘れぬはつ霜にわれを待つとぞ月日ふれども  
いかにせむ雪さへけさはふりにけりさと分けし野の秋の通路  
山深きまきの葉しのぐ雪を見てしばしはすまむ人とはずとも  
うらかぜやたはに波こそ濱松のねにあらはれて鳴く千鳥かな  
ふる袖の山あるの色も年つみて身もしをれぬる心地こそすれ  
身に積る年をばゆきのいろに見てかけそふ暮ぞものは悲しき  
春秋のあかぬ名残をとりそへてさながら惜しき年のくれかな

## 戀十首

あさましや空しき空にゆふしめのかけてもいかど人は恨みむ  
比ヒふべきむろのやしまをそれとだに知らせぬ空の八重霞かな

色かはる淺茅あさちが末のしらつゆになほ影やどすありあけの月  
わが思ふ人すむ宿のうすもみぢ霧のたえまに見てやすぎなむ  
うつろひぬ心の花はしらぎくの霜おくいゝろをかつうらみても  
龍田山もみぢ踏みわけたづぬればゆふつけ鳥の聲のみぞする  
みよしのも花見し春のけしきかはしぐるゝ秋のゆふぐれの空  
あぢきなく心に秋はとまりゐてながむる野邊の霜かれぬらむ  
行く秋のしぐれもはてぬ夕まぐれ何にわくべき形見なるらむ

### 冬十五首

かくしつゝ今年もくれぬと思ふよりまづ歎かるゝ冬は來にけり  
今よりはいづれの里に宿からむ木の葉しぐれぬ山かけもなし  
風吹けばやがて花野の浮雲のまたいづかたにうちしぐるらむ  
山里はわけいる袖の上をだにはらひもあへず散る木の葉かな  
をの山や焼くすみがまの煙にぞ冬たちぬとはそらに見えける

## 秋二十首

吹く風に軒端の萩はこゑたてつ秋よりほかにとふひとはなし  
草の原をざさが末もつゆふかしおのがさまふく秋たちぬとて  
蟲の音にはかなきつゆの結ほほれところもわかぬ秋の夕暮  
夜をかさね身にしみまさる嵐かな松のこずゑに秋やすぐらむ  
秋深き木々のこずゑに宿かりてみやこにかよふ山おろしの風  
ほのくくとわが住む方はきりこめてあしやの里に秋風ぞ吹く  
秋來ぬとてならしそめしはしたかも末野に鈴の聲ならすなり  
うづら鳴くゆふべの空をなごりにて野となりにけり深草の里  
夢にだにつまにはあはぬさを鹿の思ひたえぬるあけほのの聲  
まどろむとおもひも果てぬ夢路よりうつよに告ぐる初雁の聲  
隈なさは待ちこしことぞ秋の夜の月より後のなぐさめもがな  
ゆくへなきそらに心のかよふかな月すむ秋のくものかけはし

なにとなく過ぎにし春ぞしたはるよふぢつよじ咲く山の細道  
いかにせむひのくま川の時鳥たどひとこゑのかけもとまらず  
橘に風ふきかをりくもる日をすさびになのるほとよぎすかな  
故郷にはもまがきも苦むしてはなたちばなの花ぞ散りける  
五月さつきやみ空やはかをる年を経てのきのあやめの風のまぎれに  
山里の軒端のこすゑ雲きえてあまりなとぢそさみだれの空  
うちも寝ず暮るれば急ぐ鶺鴒舟しづまぬよりや苦しかるらむ  
いかならむ茂みがそこにともしして鹿まちわぶる程の久しさ  
もよしきのたまのみぎりのみかはみづまがふ螢も光そへけり  
八重葎しけるまがきの下露にしをれも果てぬなでしこのはな  
影きよき池のはちすに風すぎてあはれ涼しきゆふまぐれかな  
松風のひどきも色もひとつにてみどりに落つるたにがはの水  
夏深き野邊をまがきにこめおきて霧まの露のいろを待つかな



山里のまがきの春のほどなきにわらびばかりや折は知るらむ  
月影のあはれをつくす春の夜にのこり多くもかすむそらかな  
春の來てあひ見むことは命ぞとおもひし花ををしみつるかな  
面白くさくら咲きけるこのよかなさもこそ月の空にすむとも  
咲くと見し花の梢はほのかにてかすみぞにほふ夕ぐれのそら  
雲の上のかすみにかむる櫻ばなまたちならぶ色を見ぬかな  
尋ね來やしのぶのおくの櫻ばな風に知られぬいろやのこると  
散る花を三世の佛にいのりてもかぎる日數のとまらましかば  
花咲かぬわかみやま木のつれぐといく年過ぎぬ御代の春風  
物ごとに色はかはらでをしまるゝはるはこゝろの別なりけり

## 夏十五首

春夏のおのがきぬぐぬぎかへて重ねしそではなほ惜むかな  
しかりとてけふやはなのる時鳥まづ春暮れてうらめしの世や

たとふなる波路の龜の浮木かはあはでもいくよ萎れ來ぬらむ

### 詠百首倭歌（閑居百首）

文治三年冬興  
越中侍從詠之

#### 春二十首

けふはまたあまつ社の榊葉もはるの日かけをさしやそふらむ  
今よりのけしきにはるはこめてけりかすみも果てぬあけほの曙のそら  
鶯と鳴きつる鳥やはる來ぬとめぐむわかなもひとにしらする  
ふり積る色より外のにほひもて雪をばうめのうづむなりけり  
色見えて春にうつろふこよろなか闇はあやなき梅のにほひに  
雪消ゆるかた山かけの青みどりいはねのこけも春は見せけり  
契りおけ玉まく葛に風吹かばうらみも果てじかへるかりがね  
春雨よ木の葉亂れしむらしぐれそれもまぎるゝ方はありけり  
年ふれど心のはるはよそながらながめ馴れぬるあけほのの空  
しばしとて出でこし庭もあれにけり蓬よもぎの枯葉すみれまじりに

草枕ちるもみぢばのひまもがな馴れこしかたを外にだに見む  
かりに結ふ庵も雪にうづもれて尋ねぞわぶるもずのくさぐさ  
忘ればや松風さむき波のうへにけふ忍べともちぎらぬものを

寄法文戀五首

人天交接兩實相見

人の世も空もあひ見む時をもや君がこころはなほへだつべき

我不愛身命

あぢきなやかみなき道ををしむかは命を捨てむこひの山邊に

又如淨明鏡

法のりにすむこころに身をも磨かばやさても戀しき影や見ゆると

如渡得船

君を置きて待つもひさしきわたし船のり得る人の契なれとや

又如一眼之龜值浮木孔

ほどもなき同じ命をすてはてゝ君にかへつるうき身ともがな  
よなくは身も浮きぬべしあしべより満ち來る潮のまさる思に  
さもこそはみなとは袖の上ならめ君にこゝろのまづ騒ぐらむ  
君のみとわきても今はつらからずかゝる物思ふ世をぞ恨むる  
時のまの袖の中にもまぎるやと通ふこゝろに身をたぐへばや  
恨みつときよだに果てじ待たれずばたと明けぬまの命ともがな  
戀しさのまさるなけきは夢ならでそれとだに見ぬやみの現に  
すまのあまの袖に吹きこす汐風のなるとはすれど手にもたまらず  
みて過ぎよなほあさがほの露のまにしばしもとめむあかぬ光を  
あひみてもなほ行くへなき思かな命やこひのかぎりなるらむ

### 旅戀五首

こひわびぬ花ちる峯に宿からむかさねし袖やさてもまがふと  
夏山やゆくてに結ぶ清水にもあかでわかれしふるさとをのみ

## 寄名所戀十首

霞しく吉野の山のさくらばなあかぬこゝろはかよりとめにき  
いはでのみ年ふる戀をすどか川やとせのなみぞ袖にみなぎる  
いつかこの月日をすぎのしるしとてわが待人をみわの山もと  
清見瀉せきもるなみにこと問はむわれより過ぐる思ありやと  
波こさむ袖とはかねて思ひにきすゑの松山たづね見しより  
鹽がまのうらみになれてたつ煙辛きおもひはわれひとりのみ  
尋ね見よよし更科の月ならばなぐさめかぬることち知るやと  
いかで猶わが手にかけて結びみむたゞ飛鳥井の影ばかりだに  
涙やは紅葉はながすたつた川たぎるとすればかはるいろかな  
ぬのびきの瀧より外にぬきみだるまなく玉ちるとこの上かな

## 雜戀十首

こひ侘びぬ心のおくのしのぶ山つゆも時雨もいろに見せじと  
逢不遇戀十首

明けぬとて別れし空にまさりけりつらきうらみの返る戀路は  
年月はおのがさまく積るとも忘るべしとはちぎりやはせし  
長くしも結ばざりけり契ゆるなにあけまきのよりあひにけむ  
かきながすたどその筆のあとながらかはる心の程は見えけり  
よとともに忍ぶなけきの慰はわすらるよ名のたえぬばかりや  
猶ぞうきこの世にきえし言の葉はかはるもとの契と思へば  
うきをなほしたふ心のよわらぬや絶ゆる契のたのみなるべし  
忘れぬやさは忘れけるわが心ゆめになせとぞいひてわかれし  
移るなりよしさてさらばながらへよさのみあたなる君が名をし  
旅の空しらぬかり寐の立ち別れあしたの雲のかたみだになし

積りける雪の深さも知らざりつまきの戸あくるあけほのの空  
をちかたやはるけき道に雪つもり待つ夜かさなるうぢの橋姫  
年の中にはかなくかはる事もみな暮れぬるけふぞ驚かれぬる

## 忍戀十首

わが戀よきみにもはては忍びけり何をはじめと思ひ初めけむ  
身をつくし忍ぶ涙のみごもりにこの世をかくて朽ちや果てなむ  
いかならむふしにさぞとも知らせましまだ音もたてぬ夜半の笛竹  
ことづてむ人の心もあやふさにふみだにも見ぬあさむつのはし  
袖のうへにさもせきかへす涙かな人の名をさへくだしはてじと  
おりたちてかけをも見ばやわたりがは沈まむ底の同じ深さを  
顯はれむその錦木はさもあらばあれ君が爲てふ名をし立てすば  
あしがきの人目ひまなきまぢかさを分けてつたふる幻もがな  
亂れじとかくて絶えなむ玉の緒よながき恨のいつかさむべき

山のはに名残とどめぬかけよりも人だのめなるありあけの月  
秋深き岸のしら菊かぜふけばにほひは空のものにぞありける  
さびしさはおきそへてけり萩の枝のあきの末葉にまがふ初霜  
色々にもみぢをそむる衣手もあきのくれ行くつまと見ゆらむ  
暮れて行く秋も山路の見えぬまで散りかひ曇れ峯のもみぢば

### 冬十首

さだめなき時雨の雲の絶間かなさてや紅葉のうすくこがらむ  
冬來ては野邊のかりねの草枕くるればしもやまづむすぶらむ  
旅寐する夢路はたえぬすまのせきかよふ千鳥のあかつきの聲  
ふりしきし木の葉の庭にいつなれて霞かすみまちとる夢をつくらむ  
日かけ草くもりなきよのためしとや豊とよの明あかりにかざし初めけむ  
神垣やしもおくまよにうちしめり月影やどるやまあひのそで  
ふる雪にさてもとまらぬみかり野を花の衣のまづかへるらむ



浪風のこゑにも夏は忘れぐさ日かずをぞ積むすみよしのはま  
みそぎ河からぬ浅茅のすゑをさへみな一方にかせぞなびかす

## 秋十五首

秋の色をしらせそむとや三日月のひかりをみがく萩の下つゆ  
忘れ水たえまくのかけ見ればむらごにうつる萩がはなすり  
夕されば過ぎにし秋のあはれさへ更に身にしむをぎの上かぜ  
袖はさぞ秋はこゝろに露やおく風につけてもまづくだくらむ  
尋ねれば花のつゆのみこほれつゝ野風にたぐふまつむしの聲  
さど波や志賀の浦ちのあさぎりにまほにも見えぬおきの友舟  
われのみと聲にも鹿の立つるかな月はひかりに見せぬ秋かは  
待ち惜むひまこそなけれ秋風のくも吹きまよふ夜半の月かけ  
いかにせむさらでうき世はなぐさます頼みし月も涙落ちけり  
となせ河玉ちるせどの月を見てこゝろぞ秋にうつりはてぬる

いかにしてしづ心なく散る花ののどけきはるの色と見ゆらむ  
九重の雲のうへとはさくら花ちりしく春の名にこそありけれ  
ふりにける庭の苔地にはるくれて行方も知らぬ花のしらゆき  
梓弓入る日をいかで引きとめむさてもやおして春のかへると

### 夏十首

いつしかとけふぬく袖よ花の色のうちればかはる心なりけり  
あたらしや賤が垣根をかりそめに隔つばかりのやへの卯の花  
そらもそら鳴かでもやまじ夕ぐれをさもわびさする時鳥かな  
なごりだにしほしな明けそ郭公なきつる夜半のそらのうき雲  
五月雨のをやまぬ空ぞもしほ焼く浦のけぶりの晴間なりける  
庭たづみかきほもたえぬ五月雨はまきの戸ぐちに蛙鳴くなり  
あぢさるの下葉にすだく螢をばよひらの敷のそふかとぞ見る  
紅の露にあさ日をうつしもてあたりまで照るなでしこのはな

詠百首和歌（皇后宮大夫百首）

文治三年  
春詠送之

春十五首

諸人の袖をつらぬるむらさきの庭にやはるも立ちはそむらむ  
春來ぬとかすみは色にみすれども年をこむるはうめの初はな  
嶺の松たにのふるすに雪きえてあさ日と共に出づるうぐひす  
梅の花にほひの色はなけれどもかすめるまゝを行方とぞ見る  
色まさる松のみどりのひとしほに春の日かすの深さをぞしる  
あさみどり露ぬきみだる春雨にしたさへひかる玉やなぎかな  
秋霧をわけし雁が音たちかへりかすみに消ゆるあけほの空  
しぐるらむこれぞそれとはいはずとも花の都の春のけしきは  
白雲とまがふさくらに誘はれてこゝろぞかゝる山のはごと  
霞とも花ともわかすすがはらやふしみの里のはるのあけほの  
雪と散るひらの高嶺のさくらばなほさき返せ志賀の浦かぜ

月よする浦曲うらまの浪をふもとにてまづ袖ぬらすみねのまつかぜ  
故郷をへだてぬ峯のながめにもこえにし雲ぞせきはすゑける

楊貴妃

みがきおく玉のすみかも袖ぬれて露と消えぬる野邊ぞ悲しき

李夫人

ほのかなる煙はたぐふ程もなしなれし雲井に立ちかへれども

王昭君

うつすともくもりあらしと頼みこし鏡の影のまづつらきかな

上陽人

知らざりきちりも拂はぬ床の上にひとり齡のつもるべしとは

陵園妾

馴れ來にし空の光の戀しきにひとりしをるよきくのうはつゆ

そこはかと思えぬ山路の夕煙立つにぞ人のすみかとも知る

夜

昔おもふねざめのそらに過ぎきけむ行くへも知らぬ月の光の

山家

山深きたけのあみ戸に風さえていく夜たえぬる夢路なるらむ

田家

鳴のたつあきの山田のかりまくらたがすることぞ心ならでは

山

あけぬともなほ面影にたつた山戀しかるべき夜半のそらかな

河

よそにても袖こそ濡るれみなれ棹なほさし歸る宇治の河をさ

別

忘るなよやどる袂はかはるともかたみに絞る夜半のつきかけ

旅

おしなべて世はかりそめの草まくら結ぶ袂に消ゆるしらつゆ  
世の中はたどかけやどすます鏡見るをありとも頼むべきかは  
人しれぬ人の心のかねごともかはればかはるこのよなりけり

雜

神祇五首

さやかなる月口のかけにあたりても天照神をたのむばかりぞ  
なか／＼にさしてはいはじ三笠山思ふころは神も知るらむ  
きくごとに頼むころぞすみまさる賀茂の社のみたらしの聲  
憂き事もなぐさむ道のしるべとや世をすみよしと天降るらむ  
いかならむ三輪の山もと年ふりて過ぎ行く秋の暮れ方のそら

曉

しの上めは四方の草葉も萎ゆるまでいかに契りて露のおくらむ

夕

戀はよし心づからもなけくなりこは誰がそへし面影ぞさは  
あぢきなくつらき嵐のこゑも憂しなど夕ぐれに待ち習ひけむ  
しかばかり契りし中もかはりけるこの世に人を頼みけるかな  
ひたち帯かごともいとどまとはれて戀こそ道の果なかりけれ

## 述懐五首

見しはみな昔とかはる夢のうちにおどろかれぬは心なりけり  
自づからあればある世にながらへて惜むと人に見えぬべきかな  
見るもうし思ふもくるしかずならでなど古をしのびそめけむ  
ありはてぬ命をさぞと知りながらはかなくもよをあげ暮すかな  
月の入り秋のくるよを惜みてもものにはわきて慕ふこよろぞ

## 無常五首

幻よ夢ともいはじ世のなかはかくてきよみるはかなさぞこれ

晴れ曇るおなじながめのたのみだに時雨にたゆるをちの里人  
物ごとにあはれ残らぬみ山かな落つるこのはも枯ると草葉も  
朝夕のおとはしぐれのならしげにいつふりかはる霰なるらむ  
淋しけの深きみ山のまつばらや峯にもをにもゆきはつもりて  
跡絶えてゆきもいくよかふりぬらむ斧の柄朽ちし岩のかけ道  
惜みつと暮れぬる年をかねてより今いく度と知るよなりせば

### 戀十首

世の中よたかき賤しきなぞへなくななどありそめし思なるらむ  
思ふとは見ゆらむものをおのづから知れかし宵の夢ばかりだに  
この世より焦ると戀にかつ燃えてなほうとまれぬ心なりけり  
戀ひくゝて思ひし程はえぞなれぬたゞ時のまのあふ名ばかりは  
天の原そら行く月のひかりかは手にとるからに雲のよそなる  
君といへば落つる涙に暮されてこひしつらしと分く方もなし



夕やみになりぬと思へば長月のつき待つまゝにをしき秋かな  
大方の秋のけしきはくれはてゝたゞ山の端のありあけのつき  
はつかりの雲井のこゑははるかにてあけがたちかき天の河霧  
山がつの身のためにうつ衣ゆゑ秋のあはれを手にまかすらむ  
そこはかと心にそめぬ下草もかるればよわるむしのこゑく  
うつろはむまがきの菊は咲き初めてまづ色かはる浅茅原かな  
神なびのみむろの山のいかならむしぐれもて行く秋の暮かな  
たゞいまの野原を己がものと見てこゝろつよくも歸る秋かな

## 冬十首

神無月かたも定めず散るもみぢけふこそ秋のかたみとも見ぬ  
冬來てはいりえのあしの夜を重ねしもおきそふるつるの毛衣  
霜冴ゆるあしたの原のふゆがれに一花さけるやまとなでしこ  
しぐれつるまやの軒端のほどなきにやがてさし入る月の影かな

## 秋二十首

夕まぐれ秋のけしきになるまよに袖より露はおきけるものを  
忘れつるむかしを見つる夢をまた猶おどろかすをぎのうは風  
これもこれうき世の色をあぢきなく秋の野原のはなの上つゆ  
秋の來て風のみたちし空をだにとふ人はなきやどのゆふぎり  
見渡せば花ももみぢもなかりけり浦のとまやのあきの夕ぐれ  
秋といへば人の心にやどり來て待つにたがはぬ月のかけかな  
出づるより照る月かけの清見漏空さへこほるなみのうへかな  
いとほじよ月にたなびく浮雲も秋のけしきはそらに見えけり  
ながめじと思ひしものをあさぢふに風吹く宿のあきの夜の月  
秋のみぞふけゆく月にながめして同じうき世は思ひしれども  
ありあけの光のみかは秋の夜の月はこの世になほのこりけり  
くれて行くかたみにのこる月にさへあらぬ光をそふる秋かな

を山田のみづの流をしるべにてせき入るよなべに鳴く蛙かな  
暮れぬなりあすも春とは頼まぬになほのこりけり鳥のひと聲

## 夏十首

散りねたどあな卯の花やさくからに春をへだつる垣根なりけり  
なべて世に待たてを見ばや時鳥さらばつらさに聲やたつると  
あやめ草かをる軒ばの夕風にきくこよちするほとよぎすかな  
恨めしや待たれ待たれて時鳥それかあらぬかむらさめのそら  
五月雨の雲のあなたを行く月のあはれのこせと薫るたちばな  
夏深きさくらがしたに水せきてこよろのほどを風に見えぬる  
なほしばしさてやはあけむ夏の夜の岩こす波に月はやどりて  
大井河をちのこすゑの落葉よりこよろに見ゆる秋のいろく  
つどきたつせみの諸聲はるかにてこすゑに見えぬならの下蔭  
夏ぞしる山井の清水たづね來ておなじ木かけに結ぶちぎりは

雪きえて若菜つむ野をこめてしも霞のいかではるを見すらむ  
枯れ果てし草のとざしのはかなさも霞にかよるはるの山ざと  
風薫るをちのやまぢの梅のはないろに見するはたにの下みづ  
梅の花した行くみづのかげ見れば匂はそでにまづうつりけり  
あさなぎに行きかふ舟のけしきまで春をうかぶる浪の上かな  
をちこちの四方の梢はさくらにてはる風かをるみよし野の山  
青柳のかづらき山の花ざかり雲ににしきをたちぞかさぬる  
いまもこれすぎても春のおもかけは花見る道の花のいろく  
嵐やはさくより散らす櫻ばな過ぐるつらさは日かずなりけり  
をしまじよ櫻ばかりの花もなし散るべき爲の色にもあるらむ  
いはばしる瀧こそけふも厭はるれ散りてもしばし花は見ましを  
いづくにて風をも世をも恨みまし吉野のおくも花は散るなり  
まだきより花を見すてよ行く雁やかへりて春のとまりをばしる  
花の散るゆくへをだにも隔てつよかすみの外にすぐる春かな

神山に幾世へぬらむさかきばのひさしくしめをゆひかけてける

はんび したがされ

すが枕思はんひとはかくもあらじたがさねぬよに塵つもるらむ

半臂字不可然初學已披露雖不可直改後學可存と

ことにはに住むところは如此可詠

述 懷

みかさ山いかに尋ねむ白雪のふりにしあとは絶え果てにけり

詠百首倭歌（二見浦百首）

文治二年圓位  
上人勸進之

春二十首

吉野山霞める空をけさ見ればとしはひとよのへだてなりけり  
道絶ゆる山のかけはし雪消えて春のくるにもあとは見えける  
なにとなく心ぞとまる山のはにことし見初むる三日月のかけ  
春來ぬとかすむけしきをしるべにて梢につたふうぐひすの聲

水の上に思ひなすこそはかなけれやがて消ゆるを泡と見ながら  
別

別れても心へだつなたびごろもいくへかさなる山路なりとも  
旅

つくんと寝ざめて聞けば浪まくらまださ夜ふかき松風の聲  
行きかへる夢路を頼むよひごとにいやとほざかる都かなしも  
立つ度にこよろほそしや藻鹽やく煙はたびのいほりならねど  
行きかへり旅の空には音をぞ鳴く雲井の雁をよそに見しかど  
旅の空をばすて山の月かけよ住み馴れてだになぐさみやせし

祝

君が代はみねにあさひのさしながら照す光のかずをかぞへよ  
わが君の御世とこたへむ世の中に千歳やなにと人もたづねば

物名

さしぐし ひかげ

おもひのみ大原野邊に年へぬるまつことかなへ神のしるしに

釋教

法師品

流れ來て近づく水にしるきかなまづ開くべきむねのはちすば

壽量品

うき世にはうれへの雲のしけければ人の心につきぞかくるよ

神力品

定めける佛の道をしるべにて今は憂世にまどはずもがな

藥玉品

身にしめてかきおく法の花の色の深さあさは知る人もなし

勸發品

消え果つる花の御法の末にこそ定めおきける身とも知りぬれ

無常

ながめてもさだめなき世の悲しきは時雨に曇るありあけの空

果なくて過ぐるこの世と思ひしはたのめぬ程の日數なりける  
さよ衣わかるよ袖にとどめ置きて心ぞはてはうらやまれぬる  
君がため命をさへもをしませば更につらさをなげかざらまし  
結びけむむかしぞつらき下紐のひとよとけける中のちぎりを  
憂しとても誰にかとはむつれなくてかはる心をさらば教へよ  
つらきさへ君が爲にぞ歎かるよむくいにかよる戀もこそすれ  
諸共にいななさよはら道たえてたど吹くかぜの音にきけとや  
思ひ出でよ末の松山すゑまでもなみこさじとは契らざりきや  
戀ひ渡るさよの船橋かけ絶えて人やりならぬねをのみぞなく  
いかにせむうきにつけても辛つらきにも思ひやむべき心地こそせね

### 雜二十首

#### 神 祇

かすが山たにの藤浪たちかへり花咲くはるにあふよしもがな



花を待ち月ををしむと過しきて雪にぞつもるとしは知らるよ  
つらよゐる。笥の水はたえぬれどをしむに年のとまらざるらむ

## 戀二十首

いかにせむ袖のしがらみかけそむる心のうちを知る人ぞなき  
これやさは空にみつなる戀ならむおもひ立つよりくゆる煙よ  
袖の上はひだりもみぎも朽ちはてと戀は忍ばむ方なかりけり  
もろこしの吉野の山の夢にだにまだ見ぬ戀にまだひぬるかな  
いかにしていかにしらせむともかくもいかどなべての言のはぞかし  
日にそへてますたの池のつよみかね言ひ出づとても濡るよ袖かな  
夢の中にそれとて見えし面影をこの世にいかで思ひあはせむ  
すまの浦のあまりも燃ゆる思かな鹽やくけぶり人はなびかで  
梓弓まゆみつきゆみつきもせず思ひ入れどもなびく世もなし  
ちつかまで立つる錦木いたづらにあはで朽ちなむ名こそ惜しけれ

咲きまさるくらゐの山の菊の花こきむらさきに色ぞうつろふ  
紅葉せぬときはの山に宿もがな忘れてあきをよそにくらさむ  
紅葉ばはうつるばかりに染めてけり昨日の色を身にしめしかど  
響きくる入あひのかねも音たえぬけふ秋風はつき果てぬとて

### 冬十首

晴れくもる空にぞ冬も知りそむる時雨はみねの紅葉のみかは  
冬きてはひと夜ふた夜をたまざさの葉分のしもの所せきまで  
數しらず茂るみやまの青つぐら冬のくるにはあらはれにけり  
しぐるよも音は變らぬ板まより木の葉は月のもるにぞありける  
池水にやどりてさへぞをしまるよ鴛鴦の浮寐にくもる月かけ  
友千鳥なくさの濱のなみかぜに空さへまさるありあけのつき  
音絶えずあられ降りおくさよの葉の拂はぬ袖をなに濡すらむ  
ふみ分くる道ともしらぬ雪の中にけぶりもたゆる冬の山ざと

風吹けば枝もとをよにおくつゆの散るさへ惜しきあき萩の花  
をみなへし露ぞこほるよおきふしに契りそめてし風や色なる  
露ふかき萩のしたばに月さえてをじか鳴くなり秋のやまざと  
月影をむぐらの門にさしそへて秋こそきたれ訪ふ人はなし  
天の原おもへばかはるいろもなし秋こそ月のひかりなりけり  
秋の夜のかぐみと見ゆる月かけは昔の空をうつすなりけり  
うき雲のはるればくもる涙かな月みるまよのものかなしさに  
露の身はかりのやどりに消えぬとも今宵の月のかげは忘れじ  
心こそもろこしまでもあくがるれ月は見ぬ世のしるべならねど  
臥す床をてらす月にやたぐへけむ千里の外をはかるこころは  
鹽竈のうらの浪かぜつき冴えて松こそゆきのたえまなりけれ  
秋の夜は雲路を分くるかりがねのあと方もなくものぞ悲しき  
身にかへて秋や悲しききりくすよなく、聲を惜まざるらむ  
露ながらをりや置かまし菊の花霜に枯れては見るほどもなし

惜しむにも心なるべきたもとさへ花の名残はとまらざるらむ  
卯の花によるの光をてらさせて月にかはらぬたまがはのさと  
とどめ置きしうつり香ならぬ橘にまづ戀ひらるゝ郭公かな  
たちばなの花散る風にあらねども吹くにはかをる菖蒲草かな  
さつき闇くらぶの山のほとよぎすほのかなる音に似る物ぞなき  
過ぎぬるを恨みははてじほとよぎす鳴き行く方に人も待つらむ  
五月雨にけふもくれぬる飛鳥川いとど淵瀬やかはり果つらむ  
五月雨に水なみまさるまこも草みじかくてのみ明くる夏の夜  
柚川やうきねになるゝ筏士はなつのくれこそすどしかるらめ  
夏の日の入る山みちをしるべにて松のこすゑにあき風ぞ吹く

### 秋二十首

おしなべてかはる色をばおきながら秋を知らする萩のうは風  
恨をやたちそへつらむたなばたの明くれば歸る雲のころもに

吉野山たかきさくらの咲き初めて色たちまさるみねのしら雲  
花ゆゑに春はうき世ぞをしまるよおなじ山路にふみ迷へども  
いにしへの人に見せばやさくら花誰もさこそは思ひ置きけめ  
あづさ弓はるは山路もほどぞなき花のにほひを尋ね入るとて  
年を経ておなじこそよにさく花のなごためしなき匂なるらむ  
都べはなべて錦になりにけりさくらを折らぬ人しなければ  
なか／＼にをしみもとめじ我ならで見人もなきやどの櫻は  
風ならで心とをちれさくら花うきふしにだにおもひ置くべく  
春の野にはなるよ駒はゆきとのみ散りかふ花に人やまどへる  
水かみに花やちるらむよしの山にほひをそふるたきのしら玉  
おしなべて峯のさくらや散りぬらむ白妙になるよもの山かぜ  
恨みてもかひこそなけれ行く春の歸る方をばそこと知らねば

# 拾遺愚草

上

## 詠百首和歌（初學百首）

養和元年四月

### 春二十首

出づる日のおなじ光に四方の海の浪にもけふや春は立つらむ  
朝がすみ隔つるからに春めくは外山やふゆのとまりなるらむ  
鶯のはつねを松にさそはれてはるけき野邊に千代もへぬべし  
雪の中にいかでをらまし鶯のこゑこそ梅のしるべなりけれ  
梅の花こすゑをなべて吹く風にそらさへ匂ふはるのあけほの  
なか／＼にもに匂へる梅の花尋ねぞわぶる夜半の木のもと  
春雨のはれ行く空にかぜ吹けば雲とともにもかへるかりがね  
春雨のしく／＼ふればいなむしろ庭に亂るゝあをやぎのいと

さまぐのあはれありつる山里を人につたへて秋の暮れける  
山賤やまがらのすみぬと見ゆるわたりかな冬にあせゆくしづはらの里  
やまざとの心の夢にまどひをれば吹きしらまかす風の音かな  
月をこそながめば心うかれ出でめ闇なる空にたどよふやなぞ  
波たかき芦屋の沖を歸る船のことなくて世を過ぎむとぞ思ふ  
蜘蛛くまごのいと世をかくて過ぎにける人の人なる手にもかよらで

身につきて燃ゆる思の消えましや涼しき風にあふがざりせば  
千手經三首

花まではみに似ざるべし朽ち果てよ枝もなき木の根をな枯しそ  
誓ありて願はむ國へゆくべくばにしの言葉にふさねたるかな  
さまざまにたな心なる誓をばなものの言葉にふさねたるかな

又一首この心を

楊梅の春を匂はへんきちの功德なり紫蘭の秋の

色は普賢菩薩の真相なり

野べのいろも春の匂も押しなべて心そめたるさとりにぞなる

雑十首

澤のおもにふせたるたづの一聲におどろかされて千鳥鳴くなり  
ともになりて同じ湊を出づる舟の行方も知らずこぎ別れぬる  
瀧おつる吉野のおくのみやがはの昔を見けむあとしたはばや  
わが園の岡べにたてるひとつ松を友とみつよ老いにけるかな



熊野二首

み熊野の空しき事はあらかしむしたれいたの運ぶあゆみは  
あらたなる熊野詣のしるしをばこほりのこりにうべきなりけり

御裳裾二首

初春をくまなくてらす影を見て月にまづ知るみもすそのきし  
みもすその岸のいは根によをこめてかためたてたる宮柱かな

釋教十首

きりきわうの夢の中に三首

まどひてし心をたれも忘れつよひかへらるなる事のうきかな  
ひきくにわがめでつるとおもひける人の心やせばまくの衣きぬ  
すゑの世の人の心をみがくべき玉をもちりにまぜてけるかな

無量義經三首

悟さとりひろきこの法のりをまづときおきて二つなしとはいひきはめけり  
山櫻やまざくらつほみはじむる花の枝にはるをばこめてかすむなりけり

うらくと死なむするなと思ひ解けば心のやがてさぞと答ふる  
いひ捨てゝ後のゆくへを思ひはてばさてさはいかに浦島の箱  
世の中になくなる人をきくたびにおもひはしるを愚おろかなる身に

神祇十首

神樂二首

めづらしなあさくら山の雲井よりしたひ出でたるあか星の影  
名残いかにかへすくもをしからむそのこまにたつ神樂ごほり舎人は

賀茂二首

御手洗みたらしにわかなすゝぎて宮人のまてにさゝけてみとひらくなり  
長月の力あはせにかちにけりわがかたをかをつよくたのみて

男山一首

けふの駒はみつのさそふをおひてこそ敵かたぢをらちにかけて通らめ

放生會

みこしをさの聲さきだてゝ下りますおとかしこまる神の宮人

うき世とし思はでも身の過ぎにけり月の影にもなづさはりつゝ  
雲につきてうかれのみ行く心をば山にかけてをとめむとぞ思ふ  
捨てゝ後はまぎれし方は覺えぬを心のみをばよにあらせける  
ちりつかでゆがめる道を直くなしてゆく／＼人をよにつかむとや  
はとしまんと思ひも見えぬよにしあれば末にさこそはおほねき大幣おほねきの空  
ふりにける心こそなほ哀なれおよばぬ身にも世をおもはする

## 無常十首

はかなしな千年おもひし昔をも夢のうちにて過ぎにける世は  
蜘蛛きりぎりすの絲につらぬく露の玉をかけて飾れる世にこそありけれ  
現うつをもうつとさらに思はねば夢をもゆめとなにかおもはむ  
さらぬことも跡方なきを分きてなど露をあだにもいひもおきけむ  
燈火どんしびのかよけぢからもなくなりてとまる光をまつわが身かな  
水ひたる池にうるほふしたよりを命にたのむいろくづやたれ  
みぎは近くひきよせらるゝ大綱にいくせのもの命こもれり

古き妹が園に植ゑたる唐なづな誰なづさへとおほし立つらむ  
紅のよそなる色は知られねばふくにこそまづ染めはじめけれ  
さま／＼の歎なげきを身には積みおきていつしめるべき思なるらむ  
君をいかに細こまかに結へるしけめゆひ立ちも離れず並びつゝみむ  
こひすともみさを人にいはればや身にしたがはぬ心やはある  
思ひ出でよ三津の濱松よそたつる志賀のうらなみたゝむ袂を  
うとくなるひとは心のかはるともわれとは人に心おかれじ  
月をうしと眺めながらも思ふかなその夜ばかりの影とやは見し  
我はたどかへさでを著むさよ衣きてねしことを思ひ出でつゝ  
川風に千鳥なくらむ冬の夜はわがおもひにてありけるものを

述懐十首（二首不足）

いざさらば盛思ふもほどもあらしはこやが嶺の春にむつれて  
山深く心はかねておくりてき身こそうき身を出でやらねども  
月にいかで昔の事をかたらせて影にそひつゝ立ちもはなれむ

うき世とも思ひとほさじおしかへし月のすみける久方ひさかたのそら  
月の夜や友とをなりていづくにも人しらざらむすみか教へよ

## 雪十首

しがらきの袖のおほぢはとどめてよはつ雪ふりぬむその山人  
いそがずば雪にわが身や留められて山邊の里に春をまたまし  
あはれ知りてたれかわけ來む山里の雪ふりうづむ庭のゆふ暮  
湊川みなとがわとまに雪ふくともぶねはむやひつよこそ夜をあかしけれ  
筏士いふたじのなみのしづむと見えつるは雪をつみつよ下すなりけり  
たまりをる梢のゆきの春ならば山ざといかにもてなされまし  
大原はせれうを雪の道にあけてよもには人もかよはざりけり  
晴れやらで二むら山に立つ雪は比良の吹雪の名残なりけり  
雪しのぐ庵のつまをさしそへてあととめてこむ人をとどめむ  
くやくも雪のみ山へわけいらで麓にのみもとしをつみける

## 戀十首

五月雨のはれまたづねて郭公くもるにつたふ聲きこゆなり  
郭公なべてきくには似ざりけりふかき山邊のあかつきのこゑ  
時鳥ふかき山邊にすむかひはこすゑにつどくこゑを聞くなり  
よるの床をなきうかされむ時鳥もの思ふ袖をとひにきたらば  
時鳥つきのかたぶく山の端にいでつるこゑのかへりいるかな

月十首

伊勢島や月の光のさびるうらは明石には似ぬかけぞすみける  
池みづにそこきよくすむ月かけはなみに氷をしきわたすかな  
月を見てあかしの浦を出づる舟は波のよるとや思はざるらむ  
はなれたる白良しららのはまのおきの石をくだかであらふ月の白波  
思ひとけば千里ちうきの影もかすならずいたらぬ隈も月はあらせじ  
大かたの秋をば月につよませて吹きほころばす風のおとかな  
なにごとかこの世に經たる思出をとへかし人に月を教へむ  
おもひ知るをよには限なき影ならずわが目にくもる月の光は

人はみな吉野の山へいりぬめりみやこの花にわれはとまらむ  
たづねいる人には見せじ山櫻われとふ花にあはむとおもへば  
山ざくら咲きぬと聞きて見にゆかむ人をあらそふ心とどめて  
山ざくら程なく見ゆるにほひかなさかりを人にまたれくゝて  
花の雪の庭につもるとあとつけじ門かぢなき宿といひちらさせて  
ながめつるあしたの雨のにはのおもに花の雪しく春のゆふ暮  
よしの山ふもとのたきにながす花やみねにつもりし雪の下水  
根にかへる花をおくりて吉野山夏のさかひにいりて出でぬる

## 郭公十首

なかむ聲や散りぬる花のなごりなるやがてまたるゝ郭公かな  
春くれてこゑにはなさく郭公たづぬることもまつもかはらぬ  
きかでまつ人思ひ知れほとよぎす聞きても人は猶ぞまつめる  
所からきよがたきかと郭公さとをかへても待たむとぞ思ふ  
初聲をきよてののちはほとよぎすまつも心のたのもしきかな

竝べける心はわれかほとよぎす君まちえたるよひのまくらに

筑紫にはらかと申すいをのつりをば十月一日に

おろすなり師走しふすに引きあけて京へはのほせ侍り

そのつりの繩はるかに遠くひきわたしてとほる

船のこの繩にあたりぬるをばかこちかよりてか

うけかましく申してむつかしく侍るなりその心

を詠める

腹かつるおほわた崎のうけ繩に心かけつよすぎむとぞおもふ

伊勢島やいるよつきてすまふ波にけこと覺ゆるいりとの蟹

磯菜つみて波かけられて過ぎにける鰐の住みける大磯の根を

## 百首

### 花十首

よしの山花のちりにし木のもとにとめし心はわれをまつらむ

吉野山たかねのさくら咲きそめばかよらむものか花のうす雲



つばなぬく北野の茅原ちほらあせゆけば心すみれぞ生ひかはりける

れいならぬ人の大事なりけるが四月に梨の花の

咲きたりけるを見て梨のほしきよしをねがひけ

るにもしやと人に尋ねければ枯れたるかしはに

包みたるなしを唯一つ遣してこればかりなど申

したる返事に

花の折柏に包むしなのなしはひとつなれどもありの實と見ゆ

讚岐の位に座おはしける折御幸ゆきの鈴のろうを聞きて

詠みける

ふりにける君がみゆきの鈴のろうはいかなるよにもたえず聞えむ

日のいるつどみの如し

波のうつ音を鼓にまがふればいり日のかげのうちてゆるるよ

題しらす

山里の人もこすゑのまつがうれに哀にきるるほとよぎすかな

君がすむきしの岩より出づる水のたえぬ末をぞ人もくみける  
たしろ見ゆる池の堤のかさそへて湛ふる水や春の夜のため  
庭にながす清水の末をせきとめて門田養ふ頃にもあるかな  
伏見すぎぬ岡のやになほとどまらじ日野までゆきて駒試みむ  
秋のいろは風ぞ野もせにしきりたつ時雨はおとを袂にぞきく  
しぐれそむる花園山にあきくれて錦のいろもあらたむるかな  
伊勢のいそのへちの錦の島に磯曲いそまの紅葉のちり  
けるを見て

浪にしく紅葉の色をあらふゆゑに錦の嶋といふにやあるらむ  
陸奥國むちのくにに平泉にむかひてたわしのねと申す山の  
侍るにこと木は少なきやうに櫻のかぎり見えて

花の咲きたるを見て詠める

きよもせずたわしね山の櫻花よしののほかにかよるべしとは  
おくになほ人見ぬはなの散らぬあれやたづねをいらむ山郭公

庭の岩に目立つる人もなからましかどある様に建てしおかねば

瀧のわたりりの木立あらぬことになりて松ばかり

なみたちたりけるを見て

ながれ見しきしの木立もあせはてよ松のみこそは昔なるらめ

龍門にまるとて

瀬を早みみやたき川をわたり行けば心の底のすむことちする  
おもひ出でて誰かはとめてわけも來むいる山道の露の深さを  
くれ竹の今いくよかはおきふして庵の窓をあけおろすべき  
そのすぢにいりなば心なにしかも人め思ひて世につよむらむ  
みどりなる松にかさなる白雪は柳のきぬを山におほつる  
さかりならぬ木もなく花の咲きにけり思へば雪をわくる山道  
波と見ゆる雪をわけてぞこぎ渡る木曾の棧かけはしそこも見えねば  
みなづるは澤の氷のかどみにて千年のかけをもてやなすらむ  
澤もとけずつめど籠かたろにとどまらでめにもたまらぬゑぐの草莖

いつかわれこのよの空をへだたらむあはれくくと月を思ひて  
露もありつかへすくも思も出でてひとりぞ見つる朝顔の花  
ひとときは都を捨てと出づれどもめぐりて花をきそのかけ橋  
捨てたれど隠れてすまぬ人になれば猶世にあるに似たるなりけり  
世の中をすてと捨てえぬ心地して都はなれぬわが身なりけり  
すてし折の心をさらにあらためて見るよの人に別れ果てなむ  
思へ心人のあらばや世にも恥ぢむさりとてやはと諫むばかりぞ  
吳竹の節しけからぬよなりせばこの君はとてさし出でなまし  
あしよしを思ひわくこそ苦しけれ只あらるればあられる身を  
深くいるは月ゆゑとしもなき物をうき世忍ばむみ吉野の山  
嵯峨野の見し世にもかはりてあらぬやうになり

て人いなむとしたりけるを見て

この里やさがのみかりの跡ならむ野山も果はあせかはりけり

大覺寺の金岡がたてたる石を見て

立ちのほる月のあたりに雲きえて光かさぬるなよことのみね

讃岐の國へまかりてみのつと申す津につきて月

のあかくてひどのても通はぬほどに遠く見えわ

たりたりけるに水鳥のひどのてはつきてとび渡

むき渡す月のこほりをうたがひてひどのてまはるあぢの村鳥

いかでわが心の雲にちりすべき見るかひありて月をながめむ

詠めをりて月の影にぞよをば見るすむすまぬもさなりけりとは

雲晴れて身にうれひなき人のみぞさやかに月の影は見るべき

さのみやは袂に影をやどすべきよはしこよろに月なながめそ

月にはおてさし出でられぬ心かなながむる袖に影のやどれば

心をば見る人ごとにくるしめてなにかは月のとりどころなる

露けさはうき身の袖のくせなるを月見る咎におほせつるかな

ながめきて月いかばかり忍ばれむこのよし雲の外になりなば

見るも憂きは鶺鴒に遁るいろくづをのがらかさでもしたむもち網  
秋風にすどきつり舟はしるめりうのひとはしの名残したひて

新宮より伊勢の方へまかりけるにみきしまにふ

れの沙汰しける浦人の黒き髪はひとすぢもなか

りけるを呼びよせて

年へたるうらのあま人こととはむ浪をかづきて幾世すぎにき  
黒髪は過ぐると見えし白波をかづきはてたる身には知るあま

小鳥どもの歌よみける中に

聲せずといろこくなるとおもはまし柳のめはむひはのむら鳥  
桃園の花にまがへるてりうそのむらだつをりはちる心地する  
ならび居て友をはなれぬこがらめのねぐらにたのむ椎の下枝

月の夜賀茂にまるりてよみ侍りける

月のすむみをやはらに霜さえて千鳥とほだつ聲きこゆなり

熊野へ参りけるに七越なごえの嶺の月を見て詠みける

沖のかたより風のあしきとてかつをと申す魚つ  
りける船どものかへりけるを見て

いらこ崎さきにかつを釣り舟並び浮きてはかちの浪に浮びてぞよる  
ふたつおりける鷹のいらこわたりすると申しけ  
るがひとつのたかはとどまりて木のすゑにかゝ  
りて待ると申しけるを聞きて

すたかわたるいらこが崎をうたがひて猶きにかよる山歸かな  
はし鷹のすどろかさでもふるさせて据ゑたる人のありがたの世や  
宇治川をくだりける舟のかなつきと申すものを

もて鯉のくだるをつきけるを見て

宇治川の早瀬おちまふれふ舟のかづきにちがふこひのむらまけ  
こばえつどふ沼の入江の藻の下は人つけおかぬふしにぞありける  
たねつくるつほ井の水のひくすゑにえふなあつまる落合のはた  
しらははに小鮎ひかれて下る瀬にもちまうけたるこめのしき網

すがしまやたふしの小石わけかへて黑白まぜようらのほま風  
さぎしまの小石の白をたか浪のたふしのはまにうちよせてける  
からすぎきの濱の小石と思ふかな白もまじらぬすがじまの黒  
あはせばやさぎを烏と碁をうたばたふしすがじまくろ白の濱  
伊勢の二見の浦にさるやうなる女の童どもの集

まりてわざとの事とおほしくはまぐりをとりあ  
つめけるをいふかひなきあま人こそあらめうた  
てきことなりと申しければ貝合に京みやこより人の申  
させ給ひたればえりつよとるなりと申しけるに  
今ぞ知る二見の浦のはまぐりを貝あはせとておほふなりけり  
石子へわたりけるに井かひと申すはまぐりにあ  
こやのむねと侍るなりそれをとりたるからを高  
くつみおきたりけるを見て

あこやとる井貝のからを積みおきて寶の跡を見するなりけり



うしまどの迫門に海人のいでいりてさだえと申  
す物をとりにて舟に入れぐしけるを見て

さだえすむせとの岩つほ求め出でていそしき蟹の氣色なるかな  
沖なる岩につきて海人どものあはびとりける所

にて

岩の根にかたおもむきも波うきてあはびをかづくあまの村君

題しらす

こだひひく網のうけ繩よりめぐりうきしわざある鹽崎のうら  
かすみしく波のはつ花をりかけてさくら鯛つるおきの海人舟  
蟹人のいそしくかへるひじきものはこにし蛤がうなしたどみ  
磯菜つまむと思ひはじむるわかふのりみるめきはさひしきこよるふと

伊勢のたふしと申す島には小石の白のかぎり侍

る濱にて黒はひとつもまじらずむかひてすがし

まと申すは黒かぎり侍るなり

らむとしけるに風あしくて程經けりしぶ川の浦  
田と申す所に幼なき者どものあまた物を拾ひけ  
るを問ひければつみと申す物ひろふなりと申し  
けるを聞きて

おり立ちてうらたに拾ふ蟹の子はつみよりつみを習ふなりけり  
まなべと申す島に京よりあき人どものくだりて  
やうくのつみの物どもあきなひて又しばくの  
島に渡りてあきなはむするよし申しけるを聞き  
て

まなべよりしばくへ通ふ商人はつみをかひにて渡るなりけり  
串にさしたる物をあきなひけるをなにぞと問ひ  
ければはまぐりを干して侍るなりと申しけるを

聞きて

同じくばかきをぞさして干しもすべき蛤はまぐりよりは名も便たよりあり

善通寺の大師の御影みえいにはそばにさしあけて大師の御師かきぐせられたりき大師の御手などもおはしましき四の門のがく少々われておほかたはたがはずして侍りき末にこそいかどなりけむすらむとおほつかなくおほえ侍りしか

備前の國に小島と申す島に渡りけるにあみと申す物をとる所はおのくわれくしめて長き竿に袋をつけて渡すなりその竿のたてはじめをば一のさをとぞ名づけたる中に年たかきあま人のたてそむるなりたつるとて申すなる詞きよ侍りしこそ涙こほれて申すばかりなく覺えて詠みける

たてそむるあみとる浦の初竿はつみの中にもすぐれたるかな  
ひよしぶかはと申す方へまかりて四國の方へ渡

めぐりあはむことの契ちぎぞたのもしききびしき山のちかひ見るにも

やがてそれが上は大師の御師にあひまるらせさ  
せおはしましたる嶺なりわかはいしさとうの山  
をば申すなりその邊の人はわかいしとぞ申しな  
らひたる山文字をばすてゝ申さず又筆の山とも  
なづけたり遠くて見れば筆に似てまろくくと山  
の嶺のさきのとがりたるやうなるを申しならば  
したるなめり行道ところよりかまへてかきつき  
登りて嶺に参りたれば師にあはせおはしました  
る所のしるしに塔をたておはしましたりけり塔  
の礎はかりなく大きなり高野の大塔ばかりなり  
ける塔の跡と見ゆ昔は深く埋みたれども石おほ  
きにしてあらはに見ゆ筆の山と申す名につきて  
ふでの山にかき登りても見つるかな昔の下なる岩のけしきを

しきみおくあかの折敷にふちなくばなにに霞の玉とならまし

大師のうまれさせ給ひたる所とてめぐりしまは

してそのしるしの松のたてりけるを見て

哀なり同じ野山にたてる木のかよるしるしのちぎりありけり

岩にせくあか井の水のわりなきはこよろすめとも宿る月かな

又ある本に曼陀羅寺の行道どころへのほるは世

の大事にて手をたてたるやうなり大師の御經か

きてうづませおはしましたる山の嶺なりはうの

卒塔婆一丈ばかりなる壇つきてたてられたりそ

れへ日毎にのほらせおは。しまして行道しおはし

ましけると申し傳へたりめぐり行道すべきやう

にだんも二重につきまはされたりのほるほどの

あやふさことに大事なりかまへてはひまはりつ

きて

今よりは厭はじ命あればこそかゝるすまひのあはれをも知れ  
庵の前に松のたてりけるを見て

ひさにへてわが後の世をとへよ松跡したふべき人もなき身ぞ  
こゝをまた我すみうくてうかれなば松は獨にならむとすらむ  
雪のふりけるに

松の下は雪ふるをりのいろなれや皆しろたへに見ゆる山路に  
雪つみて木もわかずさく花なれば常磐の松も見えぬなりけり  
花と見るこすゑの雪に月さえてたとへむ方もなきこゝちする  
まがふ色は梅とのみ見て過ぎ行くに雪の花には香ぞなかりける  
折しもあれ嬉しく雪のうづむかな來こもりなむと思ふ山路を  
なかくゝに谷の細道うづめゆきありとて人のかよふべきかは  
谷の庵に玉の簾をすたれかけましやすがるたるひののきを閉ぢずば  
花まるらせける折しも折敷せしきに霰のふりかよりけ

れば

まきごとに玉のこゑせし玉章のたぐひは又もありけるものを  
かへし

よしさらば光なくとも玉といひて詞のちりは君みがかなむ

蹟岐にまうでて松山と申す所に院おはしけむ御

跡尋ねけれどもかたもなかりければ

松山の波にながれてこし舟のやがてむなしくなりにけるかな

松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり

白峯と申す所に御墓の侍りけるにまるりて

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらむのちは何にかはせむ

おなじ國に大師のおはしましける御あたりの山

に庵むすびて住みけるに月いとあかくて海の方

くもりなく見え侍りければ

くもりなき山にて海の月見れば島ぞこほりの絶間なりける

住みけるまよに庵いとあはれに覺えて

君にそむ心の色のふかさにはキイにほひもさらに見えぬなりけり  
さもこそは人目思はずなりはてめあなさまにくの袖の氣色けしきや  
かつすよぐ澤の小芹の根を白みきよけにものを思はするかな  
いかさまに思ひ續けてうらみまし一重につらき君ならなくに  
恨みても慰めてましなかくにつらくて人のあはぬと思へば  
うちたえて君にあふ人いかなれやわが身も同じ世にこそはふれ  
とにかくに厭はまほしき世なれども君がすむにも引かれぬるかな  
何事につけてか世をばいとはましうかりし人ぞ今はうれしき  
逢ふとみし其夜の夢のさめであれな長き眠はうかるべけれど

この歌題もまた人にかはりたることどももあり  
けれどかゝすこのうたども山里なる人の語るに  
したがひて書きたるなりさればひがごとどもや  
昔今の事取りあつめたればときをりふしたがひ  
たることどもも此の集を見て返しけるに

院少納言の局



ひとり著て我が身にまとふ唐衣しほくとこそなき濡さるれ  
いひ立ててうらみばいかにつらからむ思へばうしや人の心は  
なけかるよ心の中のくるしさを人のしらばやきみにかたらむ  
人知れぬなみだに咽ぶ夕暮はひきかつぎてぞうちふされける  
おもひきやかよる戀路に入り初めてよぐ方もなき歎せむとは  
あやふさに人目ぞつねによがれける岩のかどふむほきの崖道がびみち  
知らざりき身に餘りたるなけきして隙なく袖を絞るべしとは  
吹く風に露もたまらぬ葛の葉のうらがへれとは君をこそ思へ  
我からと藻にすむ蟲の名にしおへば人をば更に恨みやはする  
むなしくてやみぬべきかな空蟬うつせみの此身わがイからにて思ふなけきは  
包めども袖より外にこほれ出でてうしろめたきは涙なりけり  
わがなみだうたがはれぬるべきイる心かな故なく袖のしをるべきかは  
さる事のあるべきかはと忍ばれて心いつまでみさをなるらむ  
とりのくし思ひもかけぬ露はらひあなくしたるらイのわが心かな

今はわれ戀せむ人とぶらはむ世にうき事と思ひ知られぬ  
思へども思ふかひこそなかりけれおもひも知らぬ人を思へば  
あやひねるさよめのこみの衣きぬにきむ涙の雨をしのぎがてらに  
なぞもかくこと新しく人のとふわがもの思はふりにしものを  
しなばやななに思ふらむ後の世も戀はよにうき事とこそ聞け  
わりなしやいつをおもひの果にして月日を送る我が身なるらむ  
いとほしやさらにイば心のをまさいなびてたまぎれらるゝ戀もするかな  
君慕ふ心のうちはちごめきてなみだもろにもなるわが身かな  
なつかしき君が心のいろをいかで露もちらさで袖につよまむ  
幾程もながらふまじき世の中にものを思はでふるよしもがな  
いつかわが塵つむ床を拂ひあけて來むと頼めむ人を待つべき  
よだけたつ袖にたぐへてしのぶかな袂の瀧に落つるなみだを  
うきによりつひに朽ちぬるわが袖を心づくしになに忍びけむ  
心から心にものをおもはせて身をくるしむるわが身なりけり

あふことのなき病にて戀ひしなばさすがに人や哀とおもはむ  
いかにぞやいひやりたりし方もなくものを思ひて過ぐる頃かな  
我ばかりもの思ふ人や又もあると唐土もろこしまでも尋ねてしがな  
君に我いかばかりなる契ちぎひありてまなくものを思ひそめけむ  
さらぬだにもとの思のたよぬまになけきを人のそふるなりけり  
我のみぞ我が心をばいとほしむあはれむ人のなきにつけても  
恨みじとおもふ我さへつらきかなとはで過ぎぬる心づよさを  
いつとなきおもひは不二の煙にておきふすところやうき島が原  
これもみな昔の事といひながらなどもの思ふちぎりなりけむ  
などか我つらき人ゆゑものを思ふ契をしもはむすびおきけむ  
紅にあらぬたもとの濃き色はこがれてものをおもふなみだか  
せきかねてさはとてながす瀧つ瀬にわくしら玉は涙なりけり  
歎かじとつよみし頃は涙だにうちまかせたるこよちやはせし  
ながめこそうき身の癖となり果てゝ夕暮ならぬ折もわかれね

言の葉の霜枯にしにおもひにき露のなさけもかよらましかば  
夜もすがらうらみを袖にたふれば枕に波のおとぞきこゆる  
ながらへて人のまことを見るべきに戀に命のたへむものは  
頼めおきしそのいひ事やあだになりし波こえぬべき末の松山  
河の瀬によに消えぬべきうたかたの命をなぞや君がたのむる  
かりそめにおく露とこそ思ひしかあきにあひぬるわが袂かな  
おのづからありへばとこそ思ひつれ頼みなくなる我が命かな  
身をも厭ひ人のつらさも歎かれて思ひ數ある頃にもあるかな  
菅の根の長くものをば思はじとたむけし神にいのりしものを  
打ちとけてまどろまばやと唐衣よなく返すかひもあるべき  
我がつらき事をやなさむおのづから人目をおもふ心ありやと  
言とへばもてはなれたるけしきかなうらゝかなれや人の心の  
もの思ふ袖になけきのたけ見えてしのぶ知らぬは涙なりけり  
草の葉にあらぬたもとにものおもへば袖に露おく秋の夕ぐれ

袖の上の人目しられしをりまではみさをなりけるわが涙かな  
あやにくに人めもしらぬ涙かなたえぬこゝろに忍ぶかひなく  
萩の音はものおもふ我に何なればこほるゝ露に袖のしをるゝ  
草しゆみさはにぬはれてふす嶋のいかによそたつひとの心ぞ  
哀とて人の心のなさけあれなかずならぬにはよらぬなさけを  
いかにせむうき名をよよにたて果てゝ思もしらぬ人のこゝろを  
忘れむことをかさねて思ひにきなどおどろかす涙なるらむ  
問れぬもとはぬ心のつれなさもうきはかはらぬ心地こそすれ  
つらからむ人故身をば恨みじと思ひしかどもかなはざりけり  
今さらになにかは人もとがむべきはじめてぬるゝ袂ならねば  
わりなしな袖になけきのみつまゝに命をのみも厭ふこゝろは  
いろふかき涙の川のみなかみは人をわすれぬこゝろなりけり  
待ちかねてひとりはふせど敷妙しきたの枕ならぶるあましぞする  
とへかきななさけは人の身の爲をうきものとても心やはある

いかにせむその五月雨の名残よりやがてをやまぬそでの雪を  
さるほどの契はなににありながら行かぬ心のくるしきやなぞ  
今はさは覺めぬを夢になし果てよ人に語らでやみねとぞ思ふ  
折る人の手にはたまらでうめの花誰か移香うつかにならむとすらむ  
轉寐まがの夢をいとひし床の上の今朝いかばかり起きうかるらむ  
ひきかへて感しかるらむ心にもうかりしことを忘れざらなむ  
柵機さしはあふをうれしとおもふらむ我れは別のうきこよひかな  
同じくは咲き初めしよりしめおきて人に折られぬ花と思はむ  
朝露にぬれにし袖をほす程にやがて夕だつわが涙かな  
待ちかねて夢に見ゆやとまどろめばねざめすとむる萩の上風  
つとのども人しるこひや大井川るぜきのひまをくぐるしら波  
あふまでの命もがなとおもひしはくやしかりけるわが心かな  
今よりはあはでものをば思ふとも後うき人に身をばまかせじ  
いつかはと答へむ事のねたきかな思もしらす恨みきかせよ

わりなしや我も人目をつゝむまに強ひてもいはぬ心づくしは  
なかく、に思ふけしきやしるからむかゝる思に習ひなき身は  
氣色（かき）をばあやめて人の替むとも打ち任せてはいはじとぞ思ふ  
心にはしのぶとおもふかひもなくしるきはこひの涙なりけり  
色に出でていつより物は思ふぞと問ふ人あらばいかゞ答へむ  
逢ふ事のなくて止みぬる物ならば今見よ世にもありやはつると  
うき身とて思ばと戀の思ばれて人の名たてになりもこそすれ  
みさをなる涙なりせば唐ころもかけても人に知られましやは  
歎き餘り筆のすさびに盡（つ）せども思ふばかりはかゝれざりけり  
我が歎く心のうちのくるしきをなにとたとへて君にしられむ  
今はたどしのぶ心ぞつゝまれぬなげかば人やおもひしるとて  
心にはふかくしめども梅の花をらぬにほひはかひなかりけり  
さりとよとほのかに人を見つれども覺めぬは夢の心地こそすれ  
消えかへり暮まつ袖ぞしをれぬるおきつる人は露ならねども

めの前にかはり果てにし世のうきに涙を君もながしけるかな  
松山のなみだは海にふかくなりて蓮の池はらすに入れよとぞおもふ  
波のたつ心の水を沈めつゝ咲かむはちすをいまは待つかな  
老人述懐といふ事を人々よみけるに

山ふかみつゑにすがりている人の心のそこのはづかしきかな

左京大夫俊成歌あつめらるゝと聞きて歌つかは

すとて

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君ひろはなむ

かへし

俊

成

世をすてゝいりにし道の言の葉ぞ哀もふかきいろは見えける

戀百十首

思ひあまりいひいでてこそ池水のふかき心の色は知られめ  
なき名こそ飾磨しよかの市に立ちにけれまだあひそめぬ戀する物を  
つゝめども涙の色にあらはれてしのぶおもひは袖よりぞちる



ことの葉の情絶えにし折ふしにありあふ身こそ悲しかりけれ

かへし

寂

しきしまや絶えぬる道になくくも君とのみこそ跡を忍ばめ

讚岐にて御心引きかへて後の世の事御つとめ隙

なくせさせおはしますと聞きて女房の許へ申し

ける此文をかきて若人不嗔打以何修忍辱

世の中をそむく便やなからましうきをりふしに君があはずば

是もついでに具してまるらせける

淺ましやいかなる故の報ひがひにてかゝる事しもある世なるらむ

ながらへて終に住むべき都かはこの世はよしやとてもかくても

幻まぼろしの夢をうつゝに見る人は目もあはせでやよをあかすらむ

かくて後人のまるりけるに

その日よりおつる涙をかたみにておもひ忘るゝ時のまぞなき

かへし

女

房

然

思ひきやいみこし人のつてにして馴れし御うちをきかむ物とは  
伊勢に齋王おはしまさで年へにけり齋宮木だち  
ばかりさかと見えてついがきもなきやうになり

けるを見て

いつかまた齋いさの宮のいつかれてしめのみうちに塵をはらはむ

世の中に大事出で来て新なあらぬさまにならせ  
おはしまして御ぐしおろして仁和寺の北院にお  
はしましてけるに参りてけんけん阿闍梨出であひ  
たり月あかくて詠みける

かよるよに影も變らずすむ月を見る我が身さへ恨めしきかな  
讃岐へおはしまして後歌といふことによいにいと  
きこえざりければ寂然がもとへいひつかはしけ  
る

み侍りける

神の代も變りにけりと見ゆるかなそのことわざのあらずなるにも

ふけゆくまゝに御手洗みたくしの音神さびてきこえけれ

ば

御手洗の流はいつもかはらぬを末にしなればあさましの世や

伊勢にまかりたりけるに太神宮にまゐりて詠み

ける

榊葉にこゝろをかけむ木綿しでて思へば神もほとけなりけり

齋院おりさせ給ひて本院の前を過ぎけるに人の

うちへ入りければゆかしうおほえてぐして見ま

はりけるにかくやありけむとあはれに覺えてお

りておはしますところへ宣旨の局のもとへ申し

つかはしける

君すまぬ御うちはあれてありす川いむ姿をもうつしつるかな

給ふらむと覺えてよめる

絶えたりし君が御幸を待ちつけて神いかばかり嬉しかるらむ

松の下枝を洗ひけむ浪いにしへにかはらずやと

覺えて

いにしへの松の下枝をあらひけむなみを心にかけてこそ見れ

齋院おはしまさぬころにて祭のかへさもなかり

ければ紫野をとほるとて

紫の花なきころの野べなれやかたまほりにてかけぬあふひは

北まつりの頃賀茂にまゐりたりけるにをりうれ

しくてまたるゝほどに使まゐりたりはし殿につ

きてついふし拜まるゝまではさることにて舞人

のけしきふるまひ見し世の事ともおほえず東遊

に琴うつ陪従もなかりけりさこそすゑの世なら

め神いかに見給ふらむとはづかしき心地してよ

炭がまのたなびくけぶりひとすぢにこよろほそきは大原の里  
なにとなくつゆぞこほると秋の田のひたひきならず大原の里  
水のおとはまくらにおつる心地してねざめがちなる大原の里  
あだにふく草のいほりのあはれよりそでにつゆおく大原の里  
山かぜにみねのさよぐりはらくとにはにおちしく大原の里  
ますらをがつま木にあけびさしそへて暮るれば歸る大原の里  
むぐらはふかどは木の葉にうづもれて人もさし來ぬ大原の里  
もろともにあきも山路もふかければしかぞかなしき大原の里

## 神樂に星を

ふけて出づるみ山もみねのあか星は月待ちえたる心地こそすれ

承安元年六月一日院熊野へまるらせ給ひけるつ  
いでに住吉に御幸ありけり修行しめぐりて三日  
の社に詣でたりけるにすみの江あたらししくた  
てたりけるを見て後三條院の御幸神も思ひいで

しける

山ふかみさこそあらめときこそえつとおとあはれなる谷川の水  
山ふかみ槇の葉わくる月影ははけしきものすごきなりけり  
山ふかみ窓のつれづれといふものは色づきそむる櫺はじの立枝たちえぞ  
山ふかみ苔のむしろのうへに居てなに心なく鳴くましらかな  
山ふかみ岩にしたよる水とめむかすいかつくおつるとちひろふ程  
山ふかみけぢかき鳥のおとはせでもの恐しきふくろふのこゑ  
山ふかみこぐらき嶺の梢よりものしくもわたるあらしか  
山ふかみほだきるなりときこゑつと所にぎはふ斧のおとかな  
山ふかみいりて見と見る物はみな哀もよほすけしきなるかな  
山ふかみ馴るとかせぎのけ近さに世に遠ざかる程ぞ知らるよ  
かへし

然

に月のうたつりたるよしをつくりてその心を詠

みける

ゆくすゑの名にやながれむ常よりも月すみわたる白川の水

二條院

内に貝合せむとせさせ給ひけるに人にかはりて

風たとでなみををさむる浦々に小貝をむれてひろふなりけり  
難波がた汐干にむれて出でたとむしら洲の崎の小貝ひろひに  
風ふけば花さくなみのをるたびにさくら貝よる三島江のうら  
波あらふころものうらの袖貝をみぎはに風のとよみおくかな  
波かくるふきあけのはまの箔貝すだれがひ風もておろすいそにひろはむ  
汐そむるますをの小貝拾ふとて色の濱とはいふにや有るらむ  
波よする竹の泊とまりのすどめがひうれしき世にもあひにけるかな  
波よするしらよの濱のからす貝拾ひやすくもおもほゆるかな  
かひありな君が御袖におほはれて心にあはぬことしなき世は  
入道寂然大原に住み侍りけるに高野よりつかは

にあたりける日をりびつに引き植ゑてつかはす

とて

君がためごえふの子日しつるかな度々千代をふべきしるしに

たどの松ひきそへてこの松の思ふ事申すべくな

むとて

子日する野べのわれこそ主なるをごえふなしとて引く人のなき

世につかへぬべきやうなるゆかりあまたありけ

る人のさもなかりける事を思ひて清水に年越に

こもりたりけるにつかはしける

この春はえだくまでイごとイに榮ゆべし枯れたる木だに花は咲くめり

是もぐして

あはれびの深き誓にたのもしき清きながれの底くまれつと

八條院の宮と申しけるをり白河殿にて蟲合せら

れけるにかはりて蟲入りてとり出しける物に水



むれ立ちて雲井にたづの聲すなり君がちとせや空に見ゆらむ  
澤べより巢立はじむる鶴の子は松のしたにやうつりそむらむ<sup>す</sup>  
大海のしほ干て山になるまでに君はかはらぬ君にましませ  
君が代のためしになにを思はましかはらぬ松の色なかりせば  
君が代は天つ空なる星なれやかずもしられぬこよちのみして  
ひかりさす三笠の山のあさ日こそけに萬代のためしなりけれ  
萬代のためしにひかむかめ山のすそ野のはらにしける小松を  
かずかくる波にしづえの色そめて神さびまさるすみの江の松  
若葉さす平野の松はさらにまたえだに八千代の數をそふらむ  
竹の色も君が縁にそめられていく世ともなくひさしかるべし  
うまごまうけて悦びける人のもとへいひ遣しけ

る

千代ふべき二葉の松の生ひさきを見る人いかに嬉しかるらむ

五葉の下に二葉なる小松どもの侍りけるを子目

おなじ繪に苦のうち人にねおどろきたる所に

いそよるなみに心のあらはれてねざめがちなる苦屋形かな

庚申の夜ぐしくはよりて歌よみけるに古今後撰

拾遺是を梅櫻山吹によせたる題をとりてよみけ

る古今梅によす

くれなるの色こきむめを折る人の袖には深き香やとまるらむ

後撰さくらによす

春かぜのふきおこせんに櫻花となりくるしくぬしやおもはむ

拾遺山吹によす

山吹の花咲く井手のさとこそはやしうゐたりと思はざらなむ

祝

ひまもなくふりくる雨の足よりも數かぎりなき君が御代かな  
千代ふべき物をさながらあつむとも君が齡をしらむものかは  
苔うづむゆるがぬ岩のふかき根は君が千歳をかためたるべし

一筋にいかで杣木のそろひけむいつよりつくる心だくみに

陰陽頭に侍りけるものにある所のはしたものの物

申しけりいと思ふやうにもなかりければ六月晦

日につかはしけるにかはりて

我がためにつらき心を水無月の手づからやがて祓ひすてなむ

ゆかりありける人の新院の勘當なりけるをゆる

し給ふべきよし申しいれたりける御返事に

最上川もがみ綱手がはひくともいな舟のしばしがほどはいかりおろさむ

御返事奉りけり

つよくひく綱手と見せよ最上川そのいな舟のいかりをさめて

かく申したりければ許し給ひてけり

屏風の繪を人々よみけるに海のきはにをさなき

いやしき者のある所を

いそなつむあまのさをとめ心せよ沖ふく風になみたかくなる

ろともにながめあかしてその頃西住上人京へ出  
でにけりその夜の月忘れがたくて又おなじ橋の

月の頃西住上人のもとへいひつかはしける

事となく君戀ひわたる橋の上にあらそふものは月のかけのみ

かへし

西住上人

思ひやる心は見えて橋の上にあらそひけりな月のかけのみ

忍西入道西山の籠に住みけるに秋の花いかに面

白からむとゆかしうと申し遣しける返事に色々

の花を折り集めて

鹿の音や心ならねばとまるらむさらでは野べを皆見するかな

かへし

鹿のたつ野べの錦のきりはしはのこりおほかる心ちこそすれ

人あまたして一人に隠してあらぬさまにいひなしける

事の侍りけるを聞きてよめる

をいたどきて道をゆくといふ事を

くみてこそ心すむらめしづの女がいたどく水にやどる月かけ

木蔭の納涼といふ事を人々よみけるに

けふもまた松の風ふく岡へゆかむ昨日すゞみし友にあふやと

入日影かくれけるまよに月の窓にさしいりけれ

ば

さしきつる窓のいり日をあらためて光をかふるゆふ月夜かな

月蝕を題にて歌よみけるに

思むと言ひて影にあたらぬ今宵しもわれて月見る名や立ちぬらむ

寂然入道大原に住みけるにつかはしける

大原は比良の高根のちかければ雪ふるほどをおもひこそやれ

かへし

思へたど都にてだにそでさえし比良のたかねの雪のけしきは

高野の奥の院の橋の上にて月あかよりければも

世をのがれて嵯峨に住みける人のもとにまかり  
て後の世のことおこたらずつとむべきよし申し  
て歸りけるに竹の柱をたてたりける見て

よよふとも竹のはしらの一筋にたてたるふしはかはらざらなむ

題しらす

あはれたど草の庵のさびしきはかぜよりほかにとふ人ぞなき  
哀なりよりくしらぬ野の末にかせぎを友に馴るよすみかは

高野にこもりたる人を京より何事かまたいつか

出づべきと申したる由聞きてその人にかはりて

山水のいつ出づべしとおもはねば心ほそくてすむと知らずや

松のたえ間より僅に月のかけろひて見えけるを

見て

かけうすみ松のたえまをもりきつよ心ほそくや三日月のそら

松の木のまより僅に月のかけろひけるを見て月

さりともとなほあふことを頼むかな死出の山路をこえぬ別は

同じ折壺の櫻の散りけるを見てかくなむ覺え侍

ると申しける

この春は君に別のをしきかなはなのゆくへはおもひわすれて

かへしせよと承りて扇にかきてさしいでける 女房六角局

君がいなむ形見にすべき櫻さへなごりあらせず風さそふなり

西國へ修行してまかりける折小島と申す所に八

幡のいはよれ給ひたりけるに籠りたりけり年へ

て又その社を見けるに松どもの古木になりたり

けるを見て

昔見しまつは老木おきになりにけりわが年へたるほども知られて

山里にまかりて侍りけるに竹の風の萩にまがひ

て聞えければ

竹の音も萩吹く風のすくなきに加へて聞けばやさしかりけり

新院讀岐におはしましけるに便に付けて女房の

許より

水莖のかきながすべきかたぞなき心のうちは汲みてしるらむ

かへし

ほどとほみかよふ心のゆくばかりなほかきながせ水莖のあと

又女房つかはしける

いとどしくうきにつけても頼むかな契りし道のしるべ違ふな  
かよりける涙に沈む身のうさを君ならでまた誰かうかべむ

かへし

頼むらむしるべもいざやひとつ世の別にだにも迷ふこよろは  
流れ出づる涙に今日はしづむともうかばむ末を猶おもはなむ

遠く修行することありけるに菩薩院の前齋宮に

まゐりたりけるに人々わかれの歌つかうまつり

けるに



十月十二日平泉にまかりつきたりけるに雪ふり  
嵐はけしく殊の外にあれたりけるいつしか衣川ころもがは  
見まほしくて罷り向ひて見けり川の岸につきて  
衣川の城しまはしたる事柄やうかはりて物を見  
る心ちしけり汀こほりてとり分けさびければ

とりわきて心もしみてさえぞわたる衣川見にきたるけふしも

又の年の三月に出羽國にこえてたきの山と申す

山寺に侍りける櫻の常よりも薄紅の色こき花に

て竝み立てりけるを寺の人々も見興じければ

たぐひなきおもひいではのさくらかなうす紅の花のにほひは

おなじ旅にて

風あらし柴のいほりは常よりもねざめぞものは悲しかりける

明石に人をまちて日數へにけるに

何となく都のかたとときく空はむつましくてぞながめられける

ける心ひとつに思ひしられて詠みける

都いでてあふ坂こえしをりまでは心かすめししらかはのせき

武隈たけぐまの松も昔になりたりけれども跡をだにとて

見にまかりて詠みける

枯れにける松なき宿の武隈はみきといひてもかひなからまし

ふりたる棚橋を紅葉のうづみたりけるわたりに

ぐしてやすらはれて人に尋ねければおもはくの

はしと申すはこれなりと申しけるを聞きて

ふまよき紅葉の錦ちりしきて人もかよはぬおもはくのはし

信夫の里よりおくに二日ばかりいりてあり下野

國にて柴の煙を見てよみける

都近き小野おほ原をおもひいづるしばのけぶりの哀なるかな

名取川を渡りけるに岸の紅葉のかけを見て

名取川きしの紅葉のうつるかけはおなじ錦をそこにさへしく

にける哀なりけりいそぎ歸りし人のもとへまた

かはりて

露おきし庭の小萩もかれにけりいづちみやこに秋とまるらむ

かへし  
じ 人

慕ふ秋は露もとまらぬ都へとなどていそぎし舟出かなでなるらむ

みちのくにへ修行してまかりけるに白川の關に

とまりて所がらにや常よりも月おもしろく哀に

て能因が秋風ぞふくと申しけむをりいつなりけ

むと思ひ出でられて名残おほくおほえければ關

屋の柱に書きつけける

しらかはの關屋をつきのもるかけは人の心をとむるなりけり

さきにいりてしのぶと申すわたりあらぬ世のこ

とにおほえて哀なり都出でし日數思ひつどけら

れて霞とともにと侍ることの跡たどるまで來に

こよこそは法のりとかれたる所よと聞く悟さとりをもえつるけふかな  
修行して遠くまかりけるをり人の思ひへだてた

るやうなる事の侍りければ

よしさらば幾重ともなく山越えてやがても人に隔てられなむ

思はずなる事思ひたつよしきこえける人のもと

へ高野よりいひつかはしける

しをりせでなほ山ふかく分けいらむうき事きかぬ所ありやと

しほ湯にまかりけるにぐしたりける人九月つも

ごりにさきへ上りければつかはしける人にかは

りて

秋はくれ君は都へかへりなばあはれなるべきたびのそらかな

かへし

大宮の女房加賀

君をおきて立ちいづる空の露けさは秋さへくるよ旅の悲しさ

鹽湯いでて京へ歸りまうで來て故郷の花霜がれ

ちくさのたけにて

わけてゆく色のみならず梢さへちくさのたけは心そみけり

ありのと渡と申す所にて

さよふかみきりこすくきを朝立ちてなびきわづらふ蟻の門渡

行者がへりちごのとまりにつどきたる宿すくなり春

の山伏はびやうぶだてと申す所をたひらかに過

ぎむことをかたく思ひて行者ちごのとまりにて

も思ひ煩ふなるべし

屏風にや心を立てよおもひけむ行者はかへりちごはとまりぬ

三重の瀧をがみけるに殊にたふとく覺えて三業

の罪もすよがるよ心地してければ

身につもることばの罪もあらはれて心すみぬる三かさねの瀧

轉法輪の嶽と申す所にて釋迦の説法の座の石と

申す所ををがみて

さよのすくにて

庵さす草のまくらにともなひてさよのつゆにもやどる月かな

へいちと申す宿にて月を見けるに梢の露のたも

とにかよりければ

こずゑなる月もあはれをおもふべし光にぐして露のこほるよ

あづまやと申す所にて時雨の後月を見て

神無月時雨はるればあづまやのみねにぞ月はむねとすみける

かみな月たににぞ雲はしぐるめる月すむみねは秋にかはらで

ふるやと申す宿にて

神無月しぐれふるやにすむ月はくもらぬ影もたのまれぬかな

行尊僧正なり

平等院の名かよれる率塔婆に紅葉の散りかより

ける見て花より外のとありけむ人ぞかしとあは

れに覺えて詠みける

哀とも花見しみねに名をとめて紅葉ぞけふはともに散りける

と申す所にぐしならひたる同行の侍りけるに親  
しきものの例ならぬこと侍るとてぐせざりけれ  
ば

山城のみづのみ草につながれて駒ものうけに見ゆるたびかな  
大峯のしんせんと申す所にて月を見て詠みける  
を

深き山にすみける月を見ざりせば思出もなきわが身ならまし  
嶺の上もおなじ月こそてらすらめ所がらなるあはれなるべし  
月すめば谷こそくもはしづむめれ嶺吹きはらふ風にしかれて  
をばすての嶺と申す所の見わたされて思ひなし

にや月ことに見えければ

姨捨は信濃ならねどいづくにも月すむ嶺の名にこそありけれ  
小池と申すすくにて

いかにして梢の隙をもとめえてこいけにこよひ月のすむらむ

思ひ出されて詠みける

あくがれし天の河原ときくからに昔のなみのそでにかよれる  
四國の方へぐして罷りたりける同行の都へ歸り  
けるに

かへりゆく人のこよろを思ふにもはなれがたきは都なりけり  
ひとり見おきて歸りまかりなむするこそ哀にい

つか都へはかへるべきなど申しければ

柴の庵のしばし都へ歸らじとおもはむだにもあはれなるべし  
旅の歌よみけるに

草枕たびなるそでにおく露をみやこの人やゆめに見るらむ  
きこえつる都へだつる山さへにはては霞に消えにけるかな  
わたの原はるかになみをへだて来て都にいでし月を見るかな  
わたのはら波にもつきはかくれけり都の山をなにとひけむ  
西の國のかたへ修行してまかり侍るとてみづ野



れて後も賀茂に参りけり年高くなりて四國の方  
修行しけるに又歸りまるらぬ事もやとて仁安二  
年十月十日の夜参りて幣まるらせけり内へもま  
るらぬ事なればたなうの社に取りつぎて参らせ  
給へとて心ざしけるに木の間の月ほのくくと常  
よりも神さび衰におほえて詠みける

かしこまるしでに涙のかよるかなまたいつかはと思ふ心に  
播磨の書寫へまるとて野中の清水を見ける事  
ひとむかしに成りにける年へて後修行すとて通  
りけるに同じさまにてかはらざりければ

昔見し野中の清水かはらねばわがかけをもやおもひいづらむ  
天王寺へまゐりけるに交野など申すわたり過ぎ  
て見はるかされたる所の侍りけるを問ひければ  
天の川と申すを聞きて宿からむといひけむこと

遠く修行に思ひ立ち侍りけるに遠行別といふこ  
とを人々まうできて詠み侍りしに

程ふればおなじ都の内だにもおほつかなさ  
は問はまほしきに  
年久しく相頼みたりける同行にはなれて遠く修  
行して歸らずもやと思ひけるに何となく哀にて  
詠みける

さだめなしいく年君になれく  
て別をけふはおもふなるらむ  
年頃きゝわたりける人に初めて對面申して歸る

朝に

別るともなるゝ思をかさねまし過ぎにしかたの今宵なりせば  
修行して伊勢にまかりたりけるに月の頃都おも  
ひ出でられて詠みける

都にもたびなる月のかげをこそおなじ雲井のそらに見るらめ  
そのかみ心ざし仕うまつりけるならひに世を遁

かへし

山の端に月すむまじと知られにき心のそらになると見しより  
年頃申しなれたりける人にとほく修行するよし  
申して罷りたりける名残おほくて立ちけるに紅  
葉のしたりけるを見せまほしくて待ちつるかひ  
なくいかにと申しければ木のもとに立ちより詠  
みける

心をば深き紅葉の色にそめてわかれて行くや散るになるらむ  
駿河の國久能の山寺にて月を見てよみける

涙のみ搔きくらさるゝ旅なれやさやかに見よと月はすめども  
題知らず

身にもしみものあらけなるけしきさへ哀をせむる風の音かな  
いかでかは音にこよろのすまざらむ草木もなびく嵐なりけり  
松風はいつもときはに身にしめどわきてさびしき夕ぐれ空

かへし

谷深く住むかと思ひてとはぬまにうらみをむすぶ菊の下水

旅にまかりけるに入相を聞きて

思へたどくれぬときよし鐘の音は都にてだにかなしきものを

秋遠く修行し侍りける程にほど経ける所より侍

従大納言成道のもとへつかはしける

嵐ふくみねの木の葉にともなひていづちうかるよ心なるらむ

かへし

何となく落つる木の葉も吹く風に散りゆく方は知られやはせぬ

宮の法印高野にこもらせ給ひておほろけにては

出でじと思ふに修行せまほしき由かたらせ給ひ

けり千日はてよ御嶽にまるらせ給ひていひつか

はしける

あくがれし心を道のしるべにて雲にともなふ身とぞ成りぬる

夏野へ参りけるに岩田と申す所に涼みて下向し  
ける人につけて京へ同行に侍りける上人の許へ  
遣しける

松が根の岩田のきしの夕すどもみ君があれなとおもほゆるかな  
葛城を尋ね侍りけるに折にもあらぬ紅葉の見え  
けるを何ぞと問ひければ正木なりと申すを聞き  
て

かづらきや正木の色はあきに似てよその梢のみどりなるかな  
天王寺へまゐりたりけるに松に鷲の居たりける  
を月のひかりに見て

庭よりも驚るる松のこすゑにぞゆきはつもれるなつの夜の月  
高野より出でたりけると覺堅阿闍梨きかぬさま  
なりければ菊を遣すとて

くみてなど心かよはどとはざらむ出でたるものをきくの下水

けり思ひがけぬやうなれども供養をのべむ料に  
とてくだ物を高野の御山へつかはしけるに花と

申すくだ物侍りけるを見て申しつかはしける

をりびつに花のくだ物つみてけり吉野の人のみやたてにして

かへし  
いやたて

心ざし深くはこべるみやたてをさとりひらけむ花にたぐへて

櫻に並びて立てりける柳に花の散りかよりける

を見て

吹きみだる風になびくと見しほどは花ぞむすべる青柳の糸

寂然紅葉のさかりに高野に詣でて出でにける又

の年の花のをりに申しつかはしける

紅葉見し高野のみねの花ざかりたのめし人のまたるよやなぞ

かへし  
寂然

ともに見し嶺の紅葉のかひなれや花のをりにも思ひいでける

かへし

靜忍法師

立ち歸り君やとひくとまつ程にまだ消えやらず野べのあは雪

鳴き絶えたりける鶯の住み侍りける谷に聲のし

ければ

思ひ出でてふる巢にかへる鶯は旅たづのねぐらや住みうかるらむ

春の月あかよりけるに花まだしき櫻のえだを風

のゆるがしけるを見て

月見ればかぜに櫻のえだなえて花かとつぐるこよちこそすれ

國々めぐりまはりて春歸りて吉野の方へまから

んとしけるに人のこの程はいづくにか跡とむべ

きと申しければ

花を見し昔の心あらためて吉野のさとにすまむとぞおもふ

みやたてと申しけるはした物の年高くなりてさ

まかへなどしてゆかりにつきて吉野に住み侍り

ば菜摘むものなりとこたへけるに年のうちに立

ちかはる春のしるしの若菜かさはとおもひて

年ははや月なみかけて越えにけりうべ摘みけらしるぐの若立

春立つ日よみける

なにとなく春になりぬときく日より心にかゝるみよしのの山

正月元日雨ふりけるに

いつしかも初春雨ぞふりにける野べの若菜も生ひやしぬらむ

山ふかくすみ侍りけるに春立ちぬと聞きて

山路こそ雪の下みづとけざらめみやこのそらは春めきぬらむ

深山不知春といふ事を

雪わけて外山が谷のうぐひすはふもとの里に春やつぐらむ

嵯峨にまかりたりけるに雪ふりかよりけるを見

おきて出でし事など申しつかはすとて

覺つかな春の日數のふるまゝに嵯峨野の雪は消えやしぬらむ



常よりも道たどらるゝほどに雪深かりける頃高  
野へまゐると聞きて中宮大夫のもとよりいつか  
都へは出づべきかゝる雪にはいかにと申したり  
ければ返事かへりこひに

雪わけてふかき山路にこもりなば年かへりてや君にあふべき  
かへし

時

忠

卿

わけてゆく山路の雪はふかくともとく立ち歸れ年にたぐへて  
山ごもりして侍りけるに年をこめて春に成りぬ  
と聞きけるからに霞わたりの山川の音日ごろに  
も似ずきこえれば

かすめども年のうちとはわかぬまに春をつぐなる山川の水  
年のうちに春立ちて雨のふりければ

春としもなほおもはれぬ心かな雨ふるとしのことちのみして  
野に人あまた侍りける何をす人ぞと聞きけれ

山寺の夕暮といふことを人々よみ侍りけるに

嶺おろす松のあらしの音にまたひときをそふるいりあひの鐘

夕暮山路

夕されや檜原のみねを越えゆけばすごくきこゆる山鳩のこゑ

海邊重旅宿といへる事を

なみちかき磯の松が根枕にてうらがなしきはこよひのみかは

俊恵天王寺にこもりて人々ぐして住吉にまゐり

て歌よみけるにぐして

すみよしの松が根あらふ波のおとをこすゑにかくる沖つ白波

寂然高野に詣でて立ち歸りて大原よりつかはし

ける

へだてこしその年月もあるものをなごりおほかるみねの朝霧

かへし

したはれし名残をこそはながめつれたち歸りにし嶺の朝霧

に別の歌よむとて

君いなば月まつとてもながめやらむあづまの方の夕暮のそら

大原に良遅りやうぢんが住みける所に人々まかりて述懐の

歌よみて妻戸にかきつけける

大原やまだすみがまもならはずといひけむ人を今あらせばや

大覺寺の瀧殿の石ども閑院にうつされて跡もな

くなりたりと聞きて見にまかりたりけるに赤染

がいまにかよりとよみけむ折おもひ出でられて

哀とおほえければ詠みける

今だにもかよるといひし瀧つせのそのをりまでは昔なりけり

深夜水聲といふ事を高野にて人々よみけるに

まぎれつる窓の嵐のこゑとめてふくるとつぐる水の音かな

竹風驚夢

玉みがくつゆぞ枕にちりかよるゆめおどろかす竹のあらしに

りけり底を見いれければ淺茅のつゆに月のやど  
れるけしき哀なり垣にそひたる萩の風身にしむ  
らむとおほえて申し入れてとほりけり

秋風のことに身にしむこよひかな月さへすめる宿のけしきに  
泉のぬしかくれて跡傳へたる人の許にまかりて  
泉に向ひてふるきを思ふといふ事を人々よみけ  
るに

すむ人の心くまるよいづみかなむかしをいかに思ひ出づらむ  
友にあひて昔を戀ふるといふことを

今よりはむかしがたりは心せむ怪しきまでにそでしをれけり  
秋の末に寂然高野にまるりて暮の秋によせてお  
もひをのべけるに

なれ來にし都もうとくなり果てよかなしさそふる秋の暮かな  
あひ知りたりける人のみちのくにへまかりける

しぐるるは山めぐりする心かないつまでとのみ打ち萎れつゝ  
はらくと落つる涙ぞ哀なるたまらずものの悲しかるべし  
何となくせりと聞くこそ哀なれつみけむ人のこゝろしられて  
山人よ吉野のおくにしるべせよ花もたづねむまたおもひあり  
わび人のなみだに似たる櫻かな風身にしめばまづこほれつゝ  
吉野山やがて出でじとおもふ身を花ちりなばと人や待つらむ  
人も來すこゝろもちらで山里は花を見るにもたよりありけり  
風のおとに思おもふわが色そめて身にしみわたる秋の夕暮  
我なれや風をわづらふ篠竹はおきふしものこゝろほそくて  
來むよにもかゝる月をし見るべくば命ををしむ人なからまし  
このよにてながめなれぬる月なれば迷はむ間も照さどらめや

八月つきの頃夜ふけて北白川へまかりけるよし

ある様なる家の侍りけるに琴の音のしければ立  
ちどまりて聞きけりをり哀に秋風樂と申す樂がくな

蓬生はさることなれや庭のおもにからす扇のなぞしけるらむ  
かり残すみつの眞菰にかくろひてかけもちがほに鳴く蛙かな  
柳はら河かぜふかぬかけならばあつくや蟬のこゑにならまし  
ひさぎ生ひてすゞめとなれる影なれや波打つ岸に風渡りつよ  
月のためみさびすゑじとおもひしにみどりにもしく池の浮草  
思ふ事みあれのしめに引く鈴の協はずばよもならじとぞ思ふ  
み熊野の濱木綿生ふるうらさびて人なみくゝに年ぞかさぬる  
いその上ふるきすみかへ分けいれば庭の淺茅に露ぞこほるよ  
とほくだすひたのおもてにひくしほは沈む心ぞ悲しかりける  
ませにさく花にむつれてとぶ蝶の羨しきもはかなかりけり  
うつりゆくいろをば知らず言の葉の名さへあだなる露草の花  
風ふけばあだに成りゆく芭蕉葉のあればと身をも頼むべきよか  
故郷のよもぎは宿のなになれば荒れゆく庭にまづしけるらむ  
ふる郷は見しよにもなくあせにけりいづち昔の人行きにけむ

磯にをる浪のけはしく見ゆるかな沖になごろや高く行くらむ  
覺束な膽吹おろしのかぜさきにあさづま舟はあひやしぬらむ  
くれ舟にあさづま渡り今朝なよせそ膽吹の嶽に雪しまくなり  
近江路や野ぢの旅人いそがなむ野洲が原ととほからぬかは  
錦をばいく野べこゆる唐櫃にをさめて秋はゆくにぞ有るらむ  
里人の大幣小ぬさたてなめてむなかたむすぶ野べに成りけり  
いたけもるあまみが時に成りにけりえぞが千島を煙こめたり  
ものよふのならすすさびは夥あけとのしさりかもの入りくひ  
むつのくのおくゆかしくぞおもほゆるつほの碑文そとの濱風  
朝かへるかりるうなこの村鳥は原のをがやにこゑやしぬらむ  
すがるふすこぐれが下の葛まきを吹きうらがへす秋の初かぜ  
もろ聲にもりかきみかぞ聞ゆなるいひ合せてや妻をこふらむ  
堇さくよこ野のつばな生ひぬればおもひくくに人かよふなり  
紅のいろなりながらたでの穂のからしや人の目にもたてぬは

雲かゝる山とはわれも思ひいでよ花ゆるゑなれしむつび忘れず  
山ふかみ霞こめたる柴のいほにこととふものは谷のうぐひす  
すぎて行く羽風なつかし鶯のなづさひけりなうめのたち枝を  
鶯はるなかのたにの巢なれどもだみたる聲はなかぬなりけり  
鶯の聲にさとりをうべきかは聞くうれしさもはかなかりけり  
山もなき海のおもてにたなびきて波のはなにもまがふしら雲  
おなじくばつきのをり咲け山櫻花見るをりのたえまあらせじ  
ふる畑のそばのたつ木に居る鳩の友よぶこゑのすごき夕ぐれ  
浪につきて磯わに座す荒神は潮ふむきねを待つにや有るらむ  
潮風に伊勢の濱をぎふせばまづほすゑに波のあらたむるかな  
荒磯の波にそなれてはふ松はみさごのゑるぞたよりなりけり  
浦ちかみかかれたる松のこすゑには波のおとをや風は借るらむ  
あはぢ島せとのなごろは高くともこの潮わだにおし渡らばや  
潮路ゆくかこみのともろ心せよまたうづはやきせと渡るなり



ねわたしにしるしの竿やたてつらむこひのまちつる越この中山  
雲鳥やしこき山路はさておきてをよちる原の寂しからぬは  
ふもとゆく舟人いかに寒からむくま山だけをおろすあらしに  
をりかへる波の立つかとお見ゆるかな洲さきにきる鷺の村鳥  
わづらはで月には夜よるもかよひけりとなりへつたふあぜの細道  
荒れにける澤田の畦にくらよ生ひて秋待つべくもなきわたりかな  
傳かたひ來る懸樋ひをたえずまかすれば山田は水もおもはざりけり  
身にしみし萩のおとにはかはれども柴ふくかぜも哀なりけり  
小ぜりつむさはの氷のひま絶えて春めきそむるさくら井の里  
來る春はみねの霞をさきだてよ谷のかけひをつたふなりけり  
春になる櫻のえだはなにとなく花なけれどもむつまじきかな  
空はるよくもなりけりなよし野山花もてわたる風とみたれば  
さらにまた霞にくるよ山路かな花をたづぬるはるのあけほの  
雲もかよれ花とを春もは見て過ぎむいづれの山もあだに思はで

おともせで岩間たばしる霞こそよもぎのやどの友になりけれ  
あられにぞものめかしくは聞えける枯れたる櫓の柴の落葉は  
柴かこふ庵のうちはたびだちてすどほる風もとまらざりけり  
谷風は戸を吹きあけて入るものをなにと嵐のまどたよくらむ  
春あさみすどのまがきに風さえてまだ雪きえぬしがらきの里  
水脈よどむ天の河ぎしなみかけて月をば見るやさぐさみの神  
光をばくもらぬつきぞみがきける稻葉にかよるあさひこの玉  
磐余野の萩が絶間のひまゝにこのてがしはの花咲きにけり  
衣手にうつりしはなのいろなれやそでほころぶる萩が花ずり  
をざさ原葉すゑの露の玉に似てはしなき山をゆくこちする  
まさきわる飛驒のたくみや出でぬらむ村雨すぎぬ笠取の山  
川あひやまきのすそやま石たてる柚人いかにすどしかるらむ  
柚くだすまくにがおくの川上にたつきうつべしこけさ浪よる  
雪とくるしみとにしだくからさきの道行きにくき足柄の山

尋ね来てこととふ人もなき宿に木の間の月のかげぞさしいる  
柴の庵いははすみうきこともあらましを伴ともなふ月の影なかりせば  
影きえて端山はつの月はもりもこずたにはこずゑの雪と見えつよ  
雲にたど今宵の月をまかせてむ厭してイふとてしもはれぬものゆゑ  
月を見る外もさこそはいとふらめ雲たどことの空にたどよへ  
晴間なく雲こそ空にみちにけれ月見ることはおもひたよなむ  
濡るれども雨もる宿のうれしきはいり來む月を思ふなりけり  
わけいりて誰かは人のたづぬべきいはかけ草のしける山路を  
山里は谷のかけひのたえくゝに水こひどりのこゑきこゆなり  
つがはねどうつれる影をともとして鴛鴦をすみけりな山川の水  
つらなりて風に亂れてなく雁のしどろに聲こゑのきこゆなるかな  
はれがたき山路の雲にうづもれて苔のたもとは霧朽ちにけり  
つどらはふは山は下も茂もければ住む人いかにこぐらかるらむ  
熊のすむこけの岩山おそろしみむべなりけりな人もかよはず

木枯こがらしに木の葉のおつる山里はなみださへこそもろくなりけれ  
嶺わたるあらしはけしき山ざとにそへてきこゆる瀧川のみづ  
とふ人も思ひたえたる山里のさびしさなくば住みうからまし  
曉のあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞ聞く  
待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらばきかむすとらむ  
松風のおとあはれなる山里にさびしさそふる日ぐらしのこゑ  
谷戸イの間にひとりぞ松はたてりけるわれのみ友はなきと思へば  
入日さす山のあなたは知らねども心をぞかねておくり置きつる  
何となく汲むたびにすむ心かな岩井のみづにかけうつしつゝ  
水のおとはさびしき庵いはのともなれやみねの嵐のたえまゝに  
嵐ふくみねの木の間をわけ來つるたにの清水しみづにやどる月かけ  
鶉うすふすかり田のひつち思ひ出でてほのかにてらす三日月の影  
濁るべき岩井の水にあらねども汲まば宿れる月やさわがむ  
ひとりすむいほりに月のさしこずば何か山邊の友とならまし

寂超ためたどが歌にわが歌かきぐし又おとうと  
の寂然じやくねんがうたなどとりぐして新院へまるらせけ  
る人とりつたへまるらせけりと聞きて兄に侍り  
ける想空さうくうがもとより

家の風傳ふばかりはなけれどもなどか散らさぬなけの言の葉  
かへし

家の風むねと吹くべき木のもとは今ちりなむと思ふことの葉  
新院百首の歌めしけるに奉るとて右大將きんよ  
しのもとより見せに遣したりけるかへし申すと  
て

家の風吹き傳へけるかひありて散る言の葉のめづらしきかな  
かへし

家の風吹き傳ふとも和歌の浦にかひある言の葉にてこそしれ  
題しらす

てよろしくなりなば又と申し侍りけるに各心ざおのしく

しを思ひ知りて

さだめなし風わづらはぬ折だにもまた來むことを頼むべき世に  
あだに散る木の葉につけておもふかな風さそふめる露の命を  
われなくばこの里人や秋ふかき露をたもとにかけてしのばむ  
さまざまに哀おほかる別かなこゝろをきみがやどにとどめて  
歸れども人のなさけにしたはれて心は身にもそはずなりぬる

かへしどもありける聞きおよばねばかよす

新院歌あつめさせおはしますと聞きて常磐にた

めたどが歌の侍りけるをかき集めてまるらせけ

る大原より見せにつかはすとて

寂超長門入道

木のもとに散る言の葉をかく程にやがても袖のそほちぬるかな

かへし

としお経れどくちぬときはの言の葉をさぞしのぶらむ大原の里

とにて僧綱さうがうになりぬと聞きていひ遣しける

袈裟の色やわかむらさきに染めてける苔の袂を思ひかへして

秋頃風わづらひける人を訪ひたりける返事に

消えぬべきつゆの命も君がとふ言の葉にこそおきゐられけれ

かへし

吹きすぐる風しやみなばたのもしき秋の野もせの露のしら玉

院の小侍従例ならぬこと大事にふし沈みて年月

經にけりと聞きてとぶらひにまかりたりけるに

此程すこし宜しき由申して人にもきかせぬ和琴

の手ひきならしけるを聞きて

琴のねに涙をそへてながすかなたえなましかばと思ふ哀に

かへし

頼むべきこともなき身を今日までも何にかよれる玉の緒ならむ

風わづらひて山寺にかへり入りけるに人々訪ひ

浅く出でし心の水やたよふらむすみゆくまよに深くなるかな  
閑中曉心といふことを同夜

嵐のみときく窓におとづれてあけぬる空の名残をぞおもふ  
殊の外にあれ寒かりけるころ宮法印高野にこも  
らせ給ひて此ほどの寒さはいかどするとて小袖  
給はせたりける又の朝申しける

今宵こそあはれみあつき心地して嵐の音をよそに聞きつれ  
御嶽より笙の岩屋へまるりたりけるにもらぬ岩  
やもとありけむ折おもひ出でられて

露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずばいかに怪しからまし  
小篋せきのとまりと申す所にて露のしけかりければ  
わけ來つるをざさの露にそほちつよほしぞわづらふ墨染の袖

阿闍梨兼堅世をのがれて高野にすみ侍りけりあ  
からさまに仁和寺に出でてかへりもまるらぬこ



いかでわれきよく曇らぬ身となりて心の月の影をみがかむ  
遁のがれなく終に行くべき道をさは知らではいかどすぐべかりける  
愚おろかなる心こころにのみやまかすべき師となることもあるなるものを  
野にたてる枝なき木にもおとりけりのちの世しらぬ人の心は

## 五首述懐

身のうさを思ひ知らでや止みなまし背く習のなき世なりせば  
いづくにか身を隠さまし厭ひてもうき世に深き山なかりせば  
身のうさのかくれがにせむ山里は心ありてぞ住むべかりける  
あはれ知るなみだの露ぞこほれける草の庵をむすぶちぎり  
うかれ出づる心は身にも叶はねばいかなりとてもいかにかはせむ  
高野より京なる人のもとへいひ遣しける

住むことは所がらぞといひながら高野はものあはれなるべき

仁和寺の宮にて道心逐年深といふことを詠ませ

給ひけるに

六道の歌よみけるに地獄

罪人のしめる世もなく燃ゆる火の薪とならむことぞかなしき

餓鬼

朝夕の子をやしなひにすと聞けばくにすぐれても悲しかるらむ

畜生

かぐら歌に草とりかふはいたけれどなほ其駒になる事はうし

修羅

よしなしな争ふことをたてにしていかりをのみもむすぶ心は

人

ありがたき人になりけるかひありてさとり求むる心あらなむ

天

雲の上の樂たのしみとてもかひぞなきさてしもやがてすみし果てねば

心に思ひけることを

にぎりたる心の水のすくなきになにかは月のかけやどるべき

雲はるゝわしのみやまの月かけを心すみてや君ながむらむ

一心欲見佛の文を人々よみけるに

わしの山たれかは月を見ざるべき心にかゝるくもしなければ

神力品於我滅度後の文を

行末の爲にとどめぬ法のりならば何かわが身にたのみあらまし

普賢品

散りしきし花の匂の名残おほみたゝまうかりし法にはかな

心經

なにごとちむなしき法の心にて罪ある身とはつゆもおもはず

無上菩提の心を詠みける

わしの山うへくらからぬみねなればあたりをはらふ有明の月

和光同塵は結縁のはじめといふことを詠みける

に

いかなれば塵にまじりてます神につかふる人は清まはるらむ

やすむべき宿をばおもへ中空なかそらのたびもなにかは苦しかるべき

五百弟子品

おのづからきよき心にみがかれて玉ときかへる法をしるかな

提婆品

これやさは年つもるまでこりつめし法のりにあふごの薪なるらむ  
いかにして聞く事のかく易からむあだに思ひてえつる法のりかは  
いさぎよき玉を心にみがき出でていはけなき身に悟さとりをぞえし

勸持品

あまぐもの晴るゝみそらの月かけにうらみなぐさむ姨捨の山

壽量品

わしのやま月をいりぬと見る人はくらきにまよふ心なりけり  
さとりえし心の月のあらはれて鷲の高嶺にすむにぞ有りける  
なき人の跡に一品經供養しけるに壽量品を人に  
代りて

あだならぬやがてさとりに歸りけり人のためにもすつる命は

疏文に心自悟心自證心

まどひきてさとりうべくも無かりつる心をしるは心なりけり

觀心（心自證心自悟心）

やみはれて心のそらにすむ月はにしの山邊やちかくなるらむ

序品

散りまがふ花のにはひをさきだてゝ光をのりの蕤にぞしく

花の香をつらなる軒に吹きしめて悟れと風の散らすなりけり

方便品深著終五欲の文を

こりもせずき世の闇にまよふかな身を思はぬは心なりけり

譬喩品

のり知らぬひとをぞけにはうしと見るみつの車に心かけねば

はかなくなりける人の跡に五十日のうちに一品

經供養しけるに化城喩品

まどひつゝ過ぎける方の悔しさになくく身をぞ今は恨むる  
遇教待龍花といふことを

朝日まつほどは闇にてまよはまし有明ありあけの月のかけなかりせば

寄藤花述懐

西をまつころにふぢをにかけてこそその紫のくもをおもはめ  
見月思西といふことを

山の端にかくるゝ月をながむればわれも心のにしに入るかな  
曉念佛といふことを

夢さむる鐘のひどきに打ちそへて十度じゅうどの御名を稱なづへつるかな  
易往無人の文を

西へ行くつきをやよそにおもふらむ心に入らぬ人のためには  
人命不停速於山水の文の心を

山川のみなざる水の音きけばせむるいのちぞおもひ知らるゝ  
菩薩心論に乃至身命而不憊惜文を

おのともしつぎけるを見て

消えぬべき法の<sup>のり</sup>光のともし火をかよぐる和田の<sup>みき</sup>岬なりけり

天王寺へまるりて龜井の水を見て詠める

あさからぬ契のほどぞくまれぬる龜井の水にかけうつしつよ

心ざす事ありて扇を佛にまるらせけるに新院よ

り給ひけるに女房承りてつよみ紙に書きつけら

れける

ありがたき法<sup>のり</sup>にあふぎの風ならば心の塵をはらふとぞおもふ

御かへし奉りける

塵ばかりうたがふ心なからなむ法をあふぎてたのむとならば

心性さだまらずといふことを題にて人々よみけ

るに

雲雀<sup>あがるイ</sup>たつあらし野におふる姫百合のなにつくともなき心かな

懺悔業障といふことを

傳へきくながれなりとも法の水くむ人からやふかくなるらむ

さだのぶ入道觀音寺に堂つくり結縁すべきよ

し申しつかはすとて

觀音寺入道生光

寺つくるこのわが谷につちうめよ君ばかりこそ山もくづさめ

かへし

山くづすそのちからねは難くとも心だくみを添へこそはせめ

阿闍梨勝命千人あつめて法華經結縁をせさせけ

るにまゐりて又の日つかはしける

つらなりし昔に露もかはらじとおもひ知られし法のにはかな

人にかはりてこれもつかはしける

いにしへにもれけむことの悲しさはきのふの庭に心ゆきにき

六波羅太政入道持經者千人あつめて津國和田と

申す所にて供養侍りけるやがてそのついでに萬

燈會しけり夜更くるまゝに灯の消えけるをおの



ちれて

木のもとに住みけむ跡を見つるかな那智の高根の花を尋ねて

同行に侍りける上人月の頃天王寺にこもりたり

と聞きていひつかはしける

いとどいかに西に傾く月かけをつねよりもけに君したふらむ

堀河局仁和寺に住み侍りけるに參るべきよし申

したりけれどもまぎると事ありてほど經にけり

月の頃前を過ぎけるを聞きていひ送られける

西へ行くしるべとたのむ月影の空だのめこそかひなかりけれ

かへし

さしいらで雲路をよぎし月かけはまたぬ心やそらに見えけむ

寂超入道談義すと聞きてつかはしける

ひろむらむ法のりにはあらぬ身なりとも名を聞く數に入らざらめやは

かへし

なき跡をたれと知らねどとりべ山おのく、すごきつかの夕暮  
なみたかき世をこぎく、て人はみな舟岡山をとまりにぞする  
死にてふさむこけの蕙をおもふよりかねて知らるゝ岩陰の露  
つゆと消えば蓮臺野におくりおけねがふ心を名にあらはさむ

那智に籠りて瀧に入堂し侍りけるに此上に一二  
の瀧おはしますそれへまるるなりと申す住僧の  
侍りけるにぐしてまるりけり花や咲きぬらんと  
尋ねまほしかりける折節にてたよりある心地し  
て分け参りたり二の瀧のもとへまるりつきたり  
如意輪の瀧となむ申すと聞きて拜みければまこ  
とにすこしうちかたぶきたるやうにながれくだ  
りてたふとくおほえけり花山院の御庵室の跡の  
侍りける前に年ふりたる櫻の木の侍りけるを見  
てすみかとするばと詠ませ給ひけむ事思ひ出で

なか／＼にとはぬは深きかたもあらむ心淺くも恨みつるかな  
かへし

わけ入りてよもぎが露をこほさじと思ふも人をとふにあらずや  
よそに思ふ別わかれならねば誰をかは身より外には訪ふべかりける  
へだてなき法のりのことばにたよりえて蓮はらすの露にあはれかくらむ  
なき人をしのぶ思の慰まばあとをも千度とひこそはせめ  
御法のりをば詞なけれど説くと聞けば深き哀はいはでこそおもへ  
是はぐしてつかはしける

露ふかき野邊になりゆく故郷はおもひやるにも袖しをれけり  
無常の歌あまた詠みける中に

いづくにか眠り／＼てたふれふさむと思ふ悲しき路芝の露  
おどろかむと思ふ心のあらばやは長きねぶりの夢も覺むべし  
風あらきいそにかよれる蟹かまびと人はつながぬ舟のことちこそすれ  
おほ波にひかれ出でたる心地してたすけ舟なき沖にゆるるよ

同日くれけるまよに雨のかきくらし降りければ

あはれ知るそらも心のありければ涙にあめをそふるなりけり

かへし

院少納言局

あはれ知る空にはあらじわび人の涙ぞ今日はあめと降るらむ

行きちりて又の朝つかはしける

今朝はいかに思の色のまさるらむ昨日にさへもまた別れつよ

かへし

少將なかのり

君にさへたち別れつよ今日よりぞ慰むかたはけになかりける

兄の入道想空はかなくなりけるをとほざりけれ

ばいひつかはしける

寂

然

とへかした別のそでにつゆしけきよもぎがもとの心ほそさを  
待ちわびぬおくれさきだつ哀をも君ならでさは誰かとふべき  
別れにし人のふたよび跡を見ばうらみやせましとはぬ心を  
いかにせむ跡の哀はとはすともわかれし人のゆくへたづねよ

ふなをかの裾野のつかのかず添へて昔の人にきみをなしつる  
あらぬよの別はけにぞうかりける淺茅が原を見るにつけても  
後の世をとへと契りし言の葉や忘らるまじき形見なるらむ  
おくれるてなみだにしづむ故郷をたまのかけにも哀とや見る  
跡をとふ道にや君はいりぬらむくるしき死出の山へかよらで  
名残さへほどなく過ぎば悲しきに七日のかずを重ねずもがな  
跡しのぶ人にさへまたわかるべきその日をかねて知る涙かな

跡の事ども果ててちりふゝになりけるにしけ  
のりなかのりなど泪ながして今日にさへ又と申  
しける程に南面の櫻に鶯の鳴きけるを聞きてよ

みける

さくら花ちりふゝになる木のもとになごりををしむ鶯のこゑ

かへし

少將なかのり

散る花はまた來む春も咲きぬべし別はいつかめぐりあふべき

かへし

おもへたと今日のわかれのかなしさに姿をかへてしのぶ心を

やがて其日さまかへて後此返事かく申したりけ

りいと哀なり同じさまに世をのがれて大原にす

み侍りける妹のはかなくなり<sub>に</sub>ける哀とぶらひ

けるに

いかばかり君思はまし道にいらでたのもしからぬ別<sub>わかれ</sub>なりせば

かへし

頼もしき道には入りて行きしかど我が身をつめば如何とぞ思ふ

院の二位の局身まかりける跡に十の歌人々よみ

けるに

ながれゆく水に玉なすうたかたの哀あだなるこの世なりけり

消えぬめるもとの雫<sub>しづく</sub>をおもふにも誰かはすゑの露の身ならぬ

送りおきてかへりし道の朝露を袖にうつすはなみだなりけり

いるさにはひろふ形見ものこりけり歸る山路の友はなみだか

返事

いかでも思ひわかでぞ過ぎにける夢に山路をゆく心地して

侍従大納言入道はかなくなりてよひ曉につとめ

する僧おのゝ歸りける日申しおくりける

ゆきちらむ今日の別をおもふにも更になけきはそふ心地する

かへし

ふししづむ身には心のあらばこそ更になけきもそふ心地せめ

此歌もかへしの外にぐせられける

たぐひなき昔の人の形見には君をのみこそたのみましけれ

かへし

いにしへの形見になると聞くからにいとど露けき墨染のそで

同日なりつながもとへつかはしける

なき跡も今日まではなほ名残あるを明日や別をそへて忍ばむ

ゆかりにつけて物を思ひける人のもとよりなど  
かとはざらむと恨みつかはしたりける返事に

衰とも心におもふほどばかりいはれぬべくはとひもこそせめ

はかなくなりて年へにける人の文を物の中より

見出でてむすめに侍りける人のもとへ見せにつ

かはすとて

涙をやしのばむ人はながすべきあはれに見<sup>ゆイ</sup>ける水莖の跡

同行に侍りける上人をはりよく思ふさまなりと

聞きて申し送りける

寂

然

亂れずとをはり聞くこそ嬉しけれさても別はなぐさまねども

かへし

この世にて又あふまじき悲しさにすよめし人ぞ心みだれし

とかくわざ果てて跡のことどもひろひて高野へ

参りて歸りたりけるに

寂

然



御墓と申すはこれがことなりと申しければ中將  
とは誰が事ぞと又問ひければ實方さねかたの御事なりと  
申しけるいと悲しかりけるさらぬだに物哀にお  
ほえけるに霜枯の薄ほのく見え渡りて後にか  
たらむ詞なきやうにおほえて

朽ちもせぬその名ばかりを留めおきて枯野の薄かたみにぞ見る  
ゆかりなくなりて住みうかれにける故郷へ歸り  
るける人のもとへ

住みすてしその故郷をあらためて昔にかへるこゝちもやす  
親におくれて歎きける人を五十日過ぐるまでと  
はざりければ問ふべき人のとはぬことをあやし  
みて人に尋ぬと聞きてかく思ひて今まで申さど  
りつるよし申してつかはしける人にかはりて

なべて皆君がなさけをとふ數におもひなされぬ言の葉もがな

故郷述懐といふことをときはの家にて爲業たゐなりよみ

けるにまかりあひて

しけき野を幾ひとむらにわけなして更に昔をしのびかへさむ

十月中の十日頃法金剛院の紅葉見けるに上西門

院おはしますよし聞きて待賢門院の御とき思ひ

出でられて兵衛殿の局にさしおかせける

紅葉見て君がたもとやしぐるらむ昔のあきのいろをしたひて

かへし

色深き梢を見てもしぐれつよふりにしことをかけぬ日ぞなき

周防内侍我さへ軒のと書き付けける故郷にてお

もひをのべけるに

いにしへはついるし宿も有る物を何をか忍ぶしにはせむ

みちの國にまかりたりけるに野中に常よりもと

おほしき塚の見えけるを人にとひければ中將の

る人の又ほどなくむすめにさへおくれけりと聞  
きてとぶらひけるに

この度はさきぐ見けむ夢よりもさめずや物は悲しかるらむ  
五十日のはてつかたに二條院の御墓に御佛供養  
しける人にぐして参りたりけるに月あかくて哀  
なりければ

こよひ君死出の山路の月を見て雲のうへをや思ひいづらむ  
御跡に三河内侍さぶらひけるに九月十三夜人に  
かはりて

隠れにし君がみかけの戀しさに月に向ひてねをやなくらむ  
かへし

内

侍

わが君の光かくれしゆふべよりやみにぞまよふ月はすめども  
寄紅葉懐舊といふ事を法金剛院にて詠みけるに

いにしへを戀ふる涙のいろに似て袂にちるはもみぢなりけり

同じ歎し侍りける人のもとへ

君がため秋は世のうき折なれや去年もことしも物を思ひて

かへし

晴れやらぬ去年の時雨の上に又かきくらさるゝ山めぐりかな

母なくなりて山寺にこもりゐたりける人をほど

へて思ひ出でて人のとひたりければかはりて

思ひ出づるなさを人の同じくばその折とへな嬉しからまし

ゆかりありける人はかなくなりにけりとかくの

わざに鳥部山へまかりて歸るに

かぎりなくかなしかりけり鳥部山なきをおくりて歸る心は

父のはかなくなりけるそとばを見て歸りける

人に

なきあとをそとばかり見てかへるらむ人の心を思ひこそやれ

親かくれたのみたりける婿失せなどして歎しけ

けられて詠みける

こよひこそおもひ知らるれ浅からぬ君に契のある身なりけり

をさめまるらせける所へ渡しまるらせけるに

道かはるみゆきかなしき今宵かな限のたびと見るにつけても

納めまるらせて後御供にさぶらはれし人々たと

へむ方なく悲しながら限あることなりければ歸

られにけりはじめたることありて明日までさぶ

らひて詠める

とはばやと思ひよりてぞ歎かまし昔ながらのわが身なりせば

右大將きんよしの父の服中に母なくなりぬと聞

きて高野よりとぶらひ申しける

重ねきる藤の衣をたよりにてこよろの色を染めよとぞおもふ

かへし

ふぢ衣かさぬるいろはふかけれどあさき心のしまぬばかりぞ

尋ぬとも風のつてにもきかじかし花と散りにし君がゆくへを  
かへし

吹く風の行方しらするものならば花と散るにもおくれざらまし

近衛院の御墓に人に供して参りたりけるに露の

深かりければ

みがかれし玉の柄を露すゐふかき野べにうつして見るぞ悲しき

一院かくれさせおはしましてやがて御所へ渡し

まゐらせける夜高野より出合ひて参りたりける

いと悲しかりけり此後おはしますべき所御らん

じはじめけるそのかみの御ともに右大臣さねよ

し大納言と申しけるさぶらはれけり忍ばせおは

しますことにて又人さぶらはざりけり其をりの

御供にさぶらひけることの思ひ出でられて折し

も今宵に参りあひたる昔いまのことおもひつど

七月十五日月あかよりけるに舟岡と申す所にて  
いかでわれこよひの月を身にそへて死出の山路の人を照さむ  
もの心ほそう哀なる折しも庵のまくらちかう蟲  
の音聞えければ

そのをりの蓬がもとの枕にもかくこそむしの音にはむつれめ  
鳥邊山にてとかくのことしけるけぶりの中より  
わけて出づる月影は諸行無常のこゝろを

はかなくて行きにし方を思ふにもいまもさこそは朝顔のつゆ  
同行どうぎやうにて侍りける上人例ならぬこと大事に侍り  
けるに月のあかくて哀なるを見て

もろともにながめくゝて秋の月ひとりにならむことぞ悲しき  
待賢門院かくれさせおはしましにける御跡みなるあとに人  
人又の年の御はてまでさぶらはれけるに南面の  
花ちりける頃堀川の女房のもとへ申送りける

あればとて頼まれぬかな明日はまた昨日きのうと今日はいはるべければ  
秋の色は枯野ながらもあるものを世のはかなさや浅茅生あさぢふの露  
年月をいかでわが身におくりけむ昨日の人もけふはなき世に  
范蠡がちやうなんの心を

捨てやらで命を終ふる人は皆ちどのこがねをもてかへるなり  
曉無常を

つきはてしその入相いりあひのほどなさをこの曉あけつぎに思ひ知りぬる  
霞によせて常なき事を

なき人をかすめるそらにまがふるは道をへだつる心なるべし  
花の散りたりけるにならびて咲きはじめける櫻  
を見て

散ると見れば又咲く花の匂にもおくれ先だつためしありけり

月前述懐

月を見ていづれのとしの秋までかこの世にわれが契あるらむ



むきて都はなれて遠くまからむと思ひ立ちて

まゐらせけるにかはりて

悔しくもよしなく君になれそめていとふ都の忍ばれぬべき

## 題しらす

さらぬだに世のはかなさをおもふ身にぬえなきわたる曙の空  
鳥部野を心のうちに分けゆけばいまきの露にそでぞそほつる  
いつのよに長きねぶりのゆめ覺めて驚く事のあらむとすらむ  
世の中を夢と見るくはかなくもなほおどろかぬわが心かな  
なき人もあるを思ふに世の中はねぶりのうちの夢とこそ知れ  
來しかたの見しよの夢にかはらねば今も現うつのこよちやはする  
事となく今日暮れぬめり明日もまた變らずこそはひま過ぐる影  
こえぬればまたもこの世に歸りこぬ死出の山こそ悲しかりけれ  
はかなしやあだに命の露きえて野べにわが身の送りおかれむ  
露の玉は消ゆればまたもおくものを頼たのもなきはわが身なりけり

に見て歸られにけり待賢門院の女房堀川の局の  
もとよりいひおくられる

この世にてかたらひおかむ郭公死出しでの山路のしるべともなれ  
かへし

時鳥なくくこそはかたらはめ死出の山路にきみしかよらば  
天王寺にまゐりけるに雨のふりければ江口と申

す所に宿をかりけるにかさどりければ

世の中を厭ふまでこそかたらはめかりのやどりを惜む君かな  
かへし

家を出づる人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ  
ある人世をのがれて北山寺にこもりゐたりと聞

きて尋ねまかりたりけるに月あかよりければ

世をすてと谷底にすむ人見よとみねの木のまをいづる月かけ  
ある宮ばらにつけつかへ侍りける女房世をそ

ではいまはあるまじきことなり吹上ふきあは見むといふ  
事具せられたりける人々申出でて吹上へおはし  
けり道より大雨風ふきて興なくなりにけりさり  
とてはとて吹上に行きつきたりけれども見所な  
きやうにて社にこしかきすゑておもふにも似ざ  
りけり能のう因いんがなはしろ水にせきくだせと詠みて  
いひつたへられたるものと思ひて社にかきつ  
ける

あまくだる名を吹上のかみならばくも晴れのきて光あらはせ  
なはしろにせきくだされし天の川とむるもかみの心なるべし  
かく書きたりければやがて西の風吹きかはりて  
忽ちに雲はれてうらくと日なりにけり末の代よ  
なれど志いたりぬる事にはしるしあらたなる事  
を人々申しつよしんおこして吹上わかのうら若浦思ふやう

待賢門院たいてんもんゐんの中納言つねせの局世をそむきて小倉山のふもとに住み侍りける頃まかりたりけるにことがらまことに幽に哀なりけり風のけしきさへことに悲しかりければかきつけける

山おろす嵐のおとははけしきをいつならひける君がすみかぞ

哀なるすみかをとひにまかりたりけるに此のうたを見てかきつけける

同院兵衛局

うき世をば嵐の風にさそはれて家を出でぬるすみかとぞ見る

小倉をすてと高野のふもとにあまのと申す山にすまれけりおなじ院の帥すけの局都つの外ほかのすみか訪ひ申さではいかがとてわけおはしたりけるありがたくなむかへるさに粉川へまるられけるに御山よりいであひたりけるをしるべせよとありければぐし申して粉川へ参りたりけりかよるついで

又かへし

思ふともいかにしてかはしるべせむ教ふる道にいらばこそあらめ

後の世の事むけに思はずしもなしと見えける人

ものもとへいひ遣しける

世の中に心ありあけの人はみなかくて闇にはまよはぬものを

かへし

世をそむく心ばかりはありあけのつきせぬ闇は君にはるけむ

ある所の女房世をのがれて西山に住むと聞きて

尋ねければ住みあらしたるさまして人の影もせ

ざりけりあたりの人にかくと申しおきたりける

を聞きていひ送りける

鹽刷れし苦屋もあれてうき波による方もなきあまと知らずや

かへし

苦のやに波立ちよらぬけしきにてあまり住みうき程は見えけり

ある人さまかへて仁和寺の奥なる所に住むと聞  
きてまかりて尋ねければあからさまに京にと聞  
きて歸りにけり其後人遣してかくなむ参りたり  
しと申したる返事に

たちよりて柴の煙のあはれさをいかどおもひしふゆの山ざと  
かへし

山ざとに心はふかく住みながら柴のけぶりの立ちかへりにし  
この歌もそへられたりける

惜からぬ身をすてやらでふるほどに長き闇にやまた迷ひなむ  
かへし

世をすてぬ心のうちに闇こめてまよはむことは君ひとりかは  
したしき人々あまたありければおなじ心に誰も

御らんぜよとつかはしける返事に又

なべてみなはれせぬ闇のかなしさを君しるべせよ光見ゆやと

おどろかぬ心なりせば世の中を夢ともかたるかひなからまし  
中院右大臣しゅうげ出家思ひ立つよし語り給ひけるに月  
のいとあかくよもすがら哀にて明けにければ歸  
りけり其後其夜の名残おほかりしよしいひ送り  
給ふとて

夜もすがら月を眺めて契りおきしそのむつごととに闇は晴れにし  
かへし

すむと見し心の月しあらはればこの世の闇は晴れざらめやは  
爲業たあなりときはに堂供養しけるに世をのがれて山寺  
に住み侍りけるしたしき人々まうで來たりと聞  
きていひつかはしける

いにしへに變らぬ君が姿こそけふはときはのかたみなるらめ  
かへし

色かへで獨のこれるときは木はいつをまつとか人の見るらむ

りける

世の中を背き果てぬといひおかむ思ひしるべき人はなくとも

はるかなる所にこもりて都なりける人のもとへ

月の頃つかはしける

月のみやうはの空なるかたみにておもひもいでは心かよはむ

世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに鈴鹿山

にて

鈴鹿山憂世をよそにふり捨てよいかになり行く我身なるらむ

述懐

何ごとにとまる心のありければさらにしもまた世の厭はしき

侍従大納言成道のもとへ後の世の事おどろかし

申したりける返事に

驚かす君によりてぞ長き夜のひさしき夢はさむべかりける

かへし



世の中にすまぬもよしや秋の月にごれる水のたよふさかりに  
五日さうぶを人のつかはしたりける返事かへりごとに

世のうきにひかるよ人は菖蒲草あやめぐさ心のねなきこよちこそすれ  
花橘によせて思を述べけるに

世のうきを昔がたりになしはてよ花たちばなに思ひ出でばや  
世にあらじと思ひける頃東山にて人々霞によせ

て思をのべけるに

空になる心は春のかすみにて世にあらじともおもひたつかな  
おなじ心をよみける

世を厭ふ名をだにもさは留め置きて數ならぬ身の思出にせむ  
いにしへごろ東山に阿彌陀房と申しける上人しやうじんの

庵室にまかりて見けるに哀と覺えてよみける

柴の庵いはときくは賤しき名なれどもよに頼もしき住居なりけり

世を遁れける折ゆかりなりける人の許へいひ贈

# 山家和歌集 卷下

## 雜

### 題しらす

つくづくとものを思ふにうち添へてをり哀なる鐘のおとかな  
なさけありし昔のみ猶忍ばれてながらへまうき世にもあるかな  
軒ちかき花たちばなに袖しめて昔をしをぶなみだつよまむ  
何ごとも昔をきくはなさけありて故あるさまに忍ばるよかな  
わがやどは山のあなたにあるものを何とうき世をしらぬ心ぞ  
くもりなき鏡の上にある塵をめにたてよ見る世とおもはばや  
ながらへむと思ふ心ぞ露もなき厭ふにだにもたらぬ憂き身は  
思ひ出づる過ぎにし方を恥かしみあるに物うきこの世なりけり  
世につかふべかりける人のこもりるたりけるも  
とへつかはしける

たのもしなよひ曉あかつきの鐘の音にも思ふ罪はつきざらめやは

播磨路はりまぢや心のすまに關すゑていかでわが身のこひをとどめむ  
哀あはれてふなさに戀のなぐさまば問ふ言の葉やうれしからまし  
物思はまだ夕ぐれゆぐれのまよなるに明けぬとつぐるしば鳥の聲  
夢をなど夜頃頼たのまで過ぎきけむさらで逢ふべき君ならなくに  
さはといひて衣かへして打ちふせど目の合はばやは夢も見るべき  
戀ひらるこうき名を人に立てじとて忍ぶわりなきわが袂かな  
夏草なつぐさのしけりのみゆく思ひかな待たるま秋のあはれ知られて  
紅くれなるのいろにたもとのしぐれつとそでに秋あるこよちこそすれ  
あはれとてなどとふ人のなかるらむ物思ふやどの萩あはせの上風かぜ  
わりなしやさこそ物思ふ袖ならめ秋にあひてもおける露かな  
いかにせむ來む世の蟹かにとなる程にみるめ難くて過ぐる恨を  
秋ふかき野べの草葉にくらべばやものおもふころの袖の白露  
ものおもふ涙ややがてみつせ川人をしづむるふちとなるらむ  
哀あはれ々この世はよしやさもあらばあれ來む世もかくや苦しかるべき

日にそへて恨はいとどおほ海のゆたかなりけるわが涙かな  
さる事のあるなりけりと思ひ出でてしの憊ぶ心をしのべとぞ思ふ  
今ぞ知るおもひ出でよと契りしはわすれむとての情なりけり  
難波瀉なみのみいとど數そひてうらみのひまや袖のかわかむ  
心ざしのありてのみやは人をとふ情はなしとおもふばかりぞ  
なか／＼に思ひ知るてふ言の葉とはぬに過ぎて恨めしきかな  
などかわれ事の外なる歎なげせでみさをなる身にうまれざりけむ  
汲みて知る人もありけむおのづからほりかねの井の底の心を  
煙立つ富士のおもひの争ひてよだけき戀をするがへぞゆく  
涙川さかまくみをの底ふかみみなぎりあへぬわがこゝろかな  
迫門口せきぐちに立てるうしほのおほよどみよどむとしひもなき涙かな  
いそのまになみあらけなる折々はうらみをかづく里のあま  
東路あづまぢやあひの中山ほどせばみこゝろの奥の見えばこそあらめ  
いつとなく思ひに燃ゆるわが身かな淺間の煙しめるよもなく

かきくらす涙の雨のあし繁みさかりにもものなけかしきかな  
もの思へどかゝらぬ人もあるものを哀なりける身の契ちぎらかな  
岩代の松風きけばものをおもふ人もこゝろはむすほほれけり  
なほざりの情は人のあるものをたゆるは常のならひなれども  
何とこはかすまへられぬ身のほどに人をうらむる心ありけむ  
うきふしをまづおもひしる涙かなさのみこそはと慰むれども  
さまざまに思ひみだると心をば君がもとにぞつかねあつむる  
もの思へばちどに心ぞくだけぬる信太しのたの森のえだならねども  
かゝる身におふし立てけむたらちねの親さへつらき戀もするかな  
おほつかない何の報はぐのかへり来て心せたむるあだとなるらむ  
かきみだる心やすめのことぐさはあはれくと歎くばかりぞ  
身を知れば人の咎とは思はぬにうらみがほにも濡ると袖かな  
なか／＼になるよつらさにくらぶればうとき恨は操なりけり  
人はうしなけきは露もなぐさまずこはさばいかにすべき心ぞ

うち向ふそのあらましの佛おとこけをまことになして見るよしもがな  
山やま賤ぢぞうのあら野をしめて住みそむる片かた便たよりなる戀もするかな  
常磐山しひの下柴かりすてむかくれておもふかひのなきかと  
歎くとも知らばや人のおのづから哀とおもふこともあるべき  
なにとなくさすがに惜き命かなありへば人やおもひ知るとて  
なに故か今日までものを思はまし命にかへてあふせなりせば  
あやめつゝ人知るとてもいかどせむ忍び果つべき袂たもとならねば  
なみだ川深く流るゝ水脈みづならばあさき人目につゝまざらまし  
うきたびになどなと人を思へどもかなはで年の積りぬるかな  
なか／＼になれぬ思のまとならば恨ばかりや身につもらまし  
何せむにつれなかりしを恨みけむ逢はずばかりおもひ思せましや  
むかはらば我われがなけきのむくいにて誰たれゆる君がものを思はむ  
身のうさの思ひ知らるゝことわりに抑へられぬは涙なりけり  
日をふれば袂の雨の足そひて晴るべくもなきわが心かな

秋の月もの思ふ人のためとてや影にあはれをそへて出づらむ  
へだてたる人の心のくまにより月をさやかに見ぬがかなしさ  
涙ゆゑつねはくもれる月なればながれぬをりぞ晴間なりける  
くまもなきをりしも人を思ひいでて心と月をやつしつるかな  
もの思ふ心の隈をのごひすてよくもらぬ月を見るよしもがな  
こひしさや思ひよわるとながむればいとど心をくだく月かな  
ともすれば月すむ空にあくがるよ心のはてをしるよしもがな  
ながむるに戀むことはなけれども月を友にてあかすころかな  
もの思ひてながむる頃の月の色にかばかりなる哀そふらむ  
雨雲かきくものわりなきひまをもる月の影ばかりだにあひ見てしがな  
秋の月しのだの杜もりの千枝よりもしけきなけきや隈になるらむ  
思ひ知る人ありあけのよなりせばつきせず身をば恨みざらまし

戀

數ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそは身をも恨みめ



あしびきの山のあなたに君すまば入るとも月を惜まざらまし  
なけけとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな  
君にいかで月に争ふほどばかりめぐりあひつゝ影をならべむ  
白妙の衣かさぬる月かけのさゆるまそでにかゝるしらつゆ  
しのびねの涙たゝふる袖のうらになづますやどる秋の夜の月  
ものおもふ袖にも月はやどりけり濁らですめる水ならねども  
戀しさをもよほす月のかけなればこほれかゝりてかこつ涙か  
よしさらば涙のいけに身をなして心のまゝに月をやどさむ  
うち絶えてなけく涙にわが袖のくちなばなどか月をやどさむ  
よゝふとも忘れがたみのおもひでは袂に月のやどるばかりぞ  
涙ゆる限なき月ぞくもりぬるあまのはらくねのみながれて  
あやにくにしるくも月のやどるかな夜にまぎれてと思ふ袂に  
おもかけに君が姿を見つるよりにはかに月のくもりぬるかな  
よもすがら月を見顔にもてなして心のやみにまよふころかな

けるに

月

天くだる神のしるしのありなしをつれなき人のゆくへにて見む  
月待つといひなされつるよひのまの心の色のそでに見えぬる  
知らざりき雲井のよそに見し月のかけを袂にやどすべしとは  
あはれとも見る人あらばおもはなむ月のおもてにやどす心を  
月見ればいでやとよのみ思ほえてもたりにくよなる心かな  
弓張の月にはづれて見し影のやさしかりしはいつかわすれむ  
おもかけのわすらるまじき別かな名残なごりを人の月にとどめて  
あきの夜の月や涙をかこつらむ雲なきかけをもてやつすとて  
天の原さゆるみそらは晴れながらなみだぞ月の隈になるらむ  
もの思ふ心のたけぞ知られぬるよなく月をながめあかして  
月を見る心のふしをとがにしてたよりえ顔にぬるよそでかな  
思ひ出づる事はいつもといひながら月にはたへぬ心なりけり

賀茂の方にさよきと申す里に冬深く侍りけるに  
人々まうで来て山里の戀といふことを

算にもきみがつらゝやむすぶらむ心ほそくも絶えぬなるかな  
商人に文をつくる戀といふことを

思ひかね市の中には人おほみゆかりたづねてつくるたまづさ

海路戀

波のしくことをもなにか煩はむ君があふべきみちとおもはば  
九月ふたつありける年閏月を忌む戀といふこと  
を人々よみけるに

長月のあまりにつらき心にて忌むとは人のいふにやあるらむ  
みあれの頃賀茂にまるりたりけるに精進きんじんにはど  
かる戀といふことを人々よみけるに

ことつくるみあれの程をすぐしてもなほや卯月の心なるべき  
同社にて神に祈る戀といふことを神主どもよみ

寄鹿戀

妻戀ひてひとめつよまぬ鹿の音を羨むそでのみさをなるかな

寄荇萱戀

一方にみだるともなきわがこひやかぜさだまらぬ野べの荇萱

寄霧戀

夕霧のへだてなくこそおもひつれ隠れて君があはぬなりけり

寄紅葉戀

わが涙時雨のあめにたくへばやもみぢのいろの袖にまがへる

寄落葉戀

朝ごとに聲ををさむる風のおとはよをへてかるよひとの心か

寄氷戀

春をまつ諏訪のわたりもある物をいつを限にすべきつらよぞ

寄水鳥戀

わが袖の涙かよると濡れてあれなうらやましきは池のをし鳥

寄絲戀

賤ぢの女めがすゝぐる絲にゆづりおきて思ふにたがふ戀もするかな

寄梅戀

折らばやと何思はまし梅の花めづらしからぬにほひなりせば  
ゆきすりに一枝をりし梅が香のふかくも袖にしみにけるかな

寄花戀

つれもなき人に見せばや櫻花かぜにしたがふこゝろよわさを  
花を見る心はよそにへだたりて身につきたるは君がおもかけ

寄殘花戀

葉がくれに散りとどまれる花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する

寄歸雁戀

つれもなく絶えにし人を雁がねのかへる心とおもはましかば

寄草花戀

朽ちてたゞしをればよしや我が袖も萩しづえの下枝しもえの露によそへて

さらぬだに歸りやられぬしのよめに添へてかたらふ郭公かな  
後朝花橘

かさねてはこからまほしきうつり香を花橘に今朝たぐへつよ  
後朝霧

やすらはむ大方の夜は明けぬとも闇とかこへる霧にこもりて  
歸るあしたの時雨

ことづけて今朝の別はやすらはむ時雨をさへや袖にかくべき  
逢ひてあはぬ戀

つらくともあはずば何のならひにか身の程知らず人を恨みむ  
さらば唯さらでぞ人の止みなましさて後も又さもやあらじと

恨

もらさじとそでにあまるをつよままし情をしのぶ涙なりせば

ふたよび絶ゆる戀

唐衣からころもたちはなれにしまよならば重ねてものは思はざらまし

あはざらん事をば知らずはらきぎ帚木の伏屋と聞きて尋ね行くかな

自門歸戀

たてそめてかへる心はにしき木の千束ちづかまつべき心地こそすれ

涙顯戀

おほつかないかにと人の吳織くれはおりあやむるまでにぬるとそでかな

夢會戀

なか／＼に夢に嬉しきあふ事はうつゝにものを思ふなりけり  
あふことを夢なりけりと思ひわく心の今朝はうらめしきかな  
あふと見る事をかぎりの夢路にてさむる別のなからましかば  
夢とのみおもひなさると現うつこそあひ見る事のかひなかりけれ

後朝

今朝よりぞ人の心はつらからで明けはなれ行く空をうらむる  
逢ふ事をしのばざりせば道芝の露よりさきにおきてこましや

後朝郭公

山家歳暮

新しき柴のあみ戸をたちかへて年のあくるを待ちわたるかな

東山にて人々年の暮に思を述べけるに

年くれしその營いごなうはわすられてあらぬさまなるいそぎをぞする

年の暮に縣あがたより都なる人の許へ申し遣しける

おしなべておなじ月日の過ぎゆけば都もかくや年は暮れぬる  
山里に家るをせずば見ましやはくれなるふかき秋のこすゑを

歳暮に人のもとへ遣しける

おのづからいはぬを慕ふ人やあると休らふ程に年の暮れぬる  
常なき事をよせて

いつか我むかしの人といはるべきかさなる年をおくり迎へて

戀

名を聞きて尋ぬる戀



山櫻おもひよそへてながむれば木ごとの花はゆきまさりけり

仁和寺の御室おけむろにて山家閑居見雪といふ事を詠ま

せ給ひけるに

降りつもる雪をともにて春までは日をおくるべきみ山べの里

山里に冬深しといふ事を

とふ人も初雪をこそわけこしかみちとぢてけりみやまべの里

山居雪といふ事を

年の内はとふ人さらにあらじかし雪も山路もふかきすみかを

世を遁れて鞍馬の奥に侍りけるにかけひのこほ

りて水までこざりけるに春になるまではかく侍

るなりと申しけるを聞きてよめる

わりなしやこほるかりほの水ゆゑにおもひ捨てよし春のまたるよ

陸奥國にて年の暮によめる

常よりも心ほそくぞおもほゆるたびのそらにて年の暮れぬる

水筏をとづといふ事を

氷わる筏のさをのたゆければもちやこさまし保津ほつのやまごえ

冬の歌十首よみけるに

花もかれもみぢも散りぬ山里はさびしさをまたとふ人もがな  
ひとりすむかた山陰の友なれやあらしに晴るよふゆの夜の月  
津の國の芦のまろ屋の淋しさは冬こそわきてとふべかりけれ  
さゆる夜はよその空にぞをしも鳴くこほりにけりな昆陽こやの池水  
よもすがら嵐の山にかぜさえて大井のよどにこほりをぞしく  
さえわたるうら風いかにさむからむ千鳥むれるるゆふ崎の浦  
山里はしぐれし頃のさびしきにあられの音はやまさりけり  
風さえてよすればやがてこほりつゝかへる波なき志賀の唐崎  
吉野山ふもとにふらぬ雪ならば花かと見てやたづね入らまし  
宿ごとにさびしからじとはけむべし煙こめたる小野の山ざと

題しらす

月前炭竈といへる事を

限あらむ雲こそあらめ炭がまのけぶりに月のすゝけぬるかな

千鳥

淡路がたいそわの千鳥こゑしけし追門せの汐風せさえまさる夜は、  
淡路がた追門の汐干の夕ぐれに須磨よりかよふ千鳥なくなり  
さゆれども心やすくぞきよあかす川瀬の千鳥ともぐしてけり  
霜さえて汀ふけゆくうら風をおもひ知りけに鳴くちどりかな  
やせ渡るみなどの風につきふけて汐干るかたに千鳥なくなり

題しらす

千どりなく繪島の浦にすむ月を波にうつして見るこよひかな

氷留山水

岩間せく木の葉わけこし山みづをつゆもらさぬは氷なりけり

瀧上氷

水上みなかみにみづや氷をむすぶらむ繰るとも見えぬたきのしらいと

玉がきはあけもみどりもうづもれて雪おもしろき松の尾の山  
雪の歌ども詠みけるに

何となくくると半のおとまでも山邊はゆきぞあはれなりける  
雪ふれば野路も山路もうづもれて遠近とちしらぬたびのそらかな  
あをね山苔こひのむしろの上にして雪はしとねのこよちこそすれ  
卯の花のこよちこそすれ山里のかきねの柴をうづむしらゆき  
をりならぬめぐりの垣の卯花うのはなをうれしく雪のさかせつるかな  
とへな君ゆふぐれになる庭の雪をあとなきよりは哀ならまし

船中霰

追門すま渡るたななし小舟心せよあられみだるよしまきよこぎる

深山霰

柚人のまきのかり屋の下ぶしに音するものはあられなりけり

櫻の木に霰のたばしるを見て

たどは落ちで枝をつたへる霰かなつほめる花のちる心地して

雪朝待人といふ事を

わが宿に庭より外の道もがなとひ來むひとのあとつけで見む  
雪に庵うづもれてせむかたなく面白かりけり今  
も來たらばと詠みけむことを思ひ出でて見ける  
ほどに鹿の分けてとほりけるを見て

人來こばと思ひて雪を見るほどにししか跡つくることもありけり

雪朝會友といふ事を

跡留むる駒の行方はさもあらばあれ嬉しく君にゆきも逢ぞいひぬる

雪埋竹といふことを

雪うづむ園の吳竹をれふしてねぐらもとむるむらすどめかな

賀茂の臨時の祭歸り立の御神樂土御門内裏にて

侍りけるに竹のつほに雪のふりたりけるを見て

うらがへす小忌こみの衣と見ゆるかな竹のうら葉にふれるしら雪

社頭雪

雪のふりけるに竹のつほに雪のふりたりけるを見て

庭雪似月

木の間もる月の影とも見ゆるかなはだらにふれる庭のしら雪  
雪の朝靈山と申す所にて眺望を人々よみけるに

たけのほる朝日のかけのさすまよに都の雪は消えみ消えすみ  
枯野に雪の降りたるを

枯れはつる萱かきがうは葉にふる雪はさらに尾花の心地こそすれ  
雪の歌よみけるに

あち山さかしくくだる谷もなくかじきの道をつくるしら雪  
たゆみつよそりのはやをもつけなくに積りにけりな越こしの白雪  
雪道を埋む

ふる雪にしをりし柴もうづもれておもはぬ山に冬ごもりする  
秋の頃高野へまるるべきよし頼めてまるらざり

ける人のもとへ雪ふりて後申しつかはしける

雪ふかくうづみてけりな君來やと紅葉のにしきしきし山路を

月枯れたる草を照す

花におく露にやどりし影よりもかれ野の月はあはれなりけり  
こほりしく沼の芦原かぜさえて月もひかりぞさびしかりける  
しづかなる夜の冬月

霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見るやと訪ふ人もがな  
庭上冬月といふ事を

さゆと見えて冬ふかくなる月かけは水なきにはに氷をぞしく

鷹狩

あはせたる木るのはし鷹をぎとよし犬かひ人の聲しきるなり

雪中鷹狩

かきくらす雪にきどすは見えねども羽音に鈴をたぐへてぞやる  
降る雪に鳥立さだちも見えずうづもれてとりどころなき御狩野の原

夜初雪

月いづるのきにもあらぬ山の端のしらむもしるし夜はの白雪

冬の歌よみけるに

難波江のいり江のあしに霜さえてうら風さむき朝ほらけかな  
玉かけし花のかづらもおとろへて霜をいたどく女郎花かな  
山櫻初ゆき降れば咲きにけりよし野はさとにふゆごもれども  
さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山ざと

水邊寒草

霜にあひて色あらたむる芦のほのさびしく見ゆる難波江の浦  
山里の冬といを事を人々よみけるに

玉まきし垣ねのまくす霜がれてさびしく見ゆる冬のやまざと

寒夜旅宿

旅寐する草のまくらに霜さえてありあけの月の影ぞ待たるよ

山家冬月

冬がれのすさまじけなるやまざとに月のすむこそ哀なりけれ  
月出づる峯の木の葉も散りはてふもとの里は嬉しかるらむ



時雨の歌よみけるに

あづまやのあまりにもふるしぐれかな誰かは知らぬ神無月とは

落葉網代にとどまる

紅葉よる網代の布の色そめてひをくるよとは見ゆるなりけり

山家枯草といふ事を覺雅僧都の坊にて人々よみ

けるに

かきこめしすそ野の薄霜枯れてさびしさまさるしばの庵かな

野のわたりの枯れさる草といふ事を双林寺にて

詠みけるに

さまざまに花さきたりと見し野邊の同じ色にも霜枯れにけり

枯野の草をよめる

分けかねし袖に露をばとめ置きて霜にくちぬる眞野の萩原

霜かつぐ枯野の草はさびしきにいづくは人のことろとむらむ

霜がれてもろくくだくる萩の葉をあらく吹くなる風の音かな

曉落葉

時雨かとねざめの床にきこゆるは嵐にたへぬ木の葉なりけり

水上落葉

立田姫そめしこすゑの散るをりはくれなるあらふ山川のみづ

落葉

嵐ふく庭の落葉のをしきかなまことのちりになりぬと思へば

月前落葉

山おろしの月に木の葉を吹きかけて光にまがふ影を見るかな

瀧上落葉

木枯こがらしにみねの紅葉やたぐふらむむらごに見ゆる瀧のしらいと

山家時雨

宿がこふはよその柴のいろをさへしたひてそむる初時雨かな

閑中時雨といふ事を

おのづから音する人もなかりけり山めぐりする時雨ならでは

冬

長樂寺にて夜紅葉を思ふといふ事を人々よみけ

るに

夜もすがらをしけなく吹く嵐かなわざと時雨のそむる紅葉を  
題しらす

神無月木の葉のおつるたびごとに心うかるよみやまべのさと  
ねざめする人の心をわびしめてしぐるよ音はかなしかりけり  
十月のはじめつかた山里にまかりたりけるに葢  
の聲のわづかにしければ詠みける

霜うづむ葎むらの下のきりくすあるかなきかにこゑきこゆなり

山家落葉

道もなしやどは木の葉にうづもれぬまだきせさする冬籠ふゆごもりかな  
木の葉散れば月に心ぞあくがるよみ山がくれに住まむと思ふに

葉を

ときはなる松のみどりも神さびて紅葉ぞ秋はあけのたまがき

草花野路落葉

紅葉ちる野はらをわけて行くひとは花ならぬまで錦きるべし

秋の末に法輪にこもりて詠める

大井川るぜきによどむ水の色に秋ふかくなる程ぞ知らるよ  
小倉山ふもとにあきのいろはあれや梢のにしき風にたよれて  
わがものと秋の梢をおもふかなをぐらのさとに家居せしより  
山ざとは秋の末にぞおもひ知るかなしかりけりこがらしの風  
暮れ果つる秋の形見にしばし見む紅葉ちらすなこがらしの風  
あきくるよ月なみわかぬ山賤やまがづのこよろうらやむけふの夕ぐれ

終夜秋を惜む

をしめども鐘の音さへかはるかな霜にや露のむすびかふらむ

限あれば枯れゆく野べはいかどせむ蟲の音のこせあきの山里  
寂蓮高野に詣でて深き山の紅葉といふ事を詠み

さまぐに錦ありけるみ山かな花見しみねをしぐれそめつよ  
紅葉色深しといふ事を

限あればいかどは色も増るべきをあかずしぐるよ小倉山かな  
もみぢ葉の散らで時雨の日數へばいばかりなる色かあらまし

霧中紅葉

錦はる秋のこすゑを見せぬかなへだつる霧のやどをつくりて

賤しかりける家に薦の紅葉面白かりけるを見て

思はずよよしある賤がすみかかな薦の紅葉をのきに這はせて

寄紅葉戀

我が涙しぐれの雨にたぐへばや紅葉のいろのそでにまがへる

東へまかりけるにしのおの奥に侍りける社の紅

ませなくば何をしるしにおもはまし月もまかよふしら菊の花  
秋ものへまかりける道にて

心なき身にもあはれは知られけり鳴たつさはの秋のゆふぐれ

嵯峨に住みける比隣こゝろの坊に申すべき事ありてま

かりけるに道もなく葎せむぎの茂りければ

立ちよりて隣とふべき垣にそひてひまなくはへる八重葎かな

題しらす

いつよりか紅葉の色はそむべきと時雨にくもる空にとはどや

紅葉未遍といふことを

いとか山時雨にいろを染めさせてかつく織れる錦なりけり

山家紅葉

そめてけり紅葉のいろのくれなるをしぐると見えし山べの里

秋の末に松蟲のなくを聞きて

さらぬだに聲よわりにし松蟲の秋のすゑにはきよもわかれず

うちぐする人なき道の夕さればこゑたておくるくつわ蟲かな

田家秋夕

ながむれば袖にもつゆぞこほれける外面の小田の秋の夕ぐれ  
吹きすぐる風さへことに身にぞしむ山田のいほの秋の夕ぐれ

京極太政大臣中納言と申しける折菊をおびたど

しき程にしたてと鳥羽院にまるらせ給ひたりけ

る鳥羽の南殿の東面のつほに所なきほどにうゑ

させたまひけり公重きんしげせうしやう少將人々をすゝめて菊もて

なさせけるにくはよるべきよしあれば

君が住むやどのつほには菊ぞかざる仙やまじぞの宮といふべかるらむ

菊

いく秋にわがあひぬらむ長月のこよぬかにつむ八重のしら菊  
秋ふかみならぶ花なき菊なればところを霜のおけとこそ思へ

月前菊

きりぐす夜寒よさむになるをつけがほに枕まくらのもとにきつゝ鳴くなり  
蟲の音をよわりゆくかと聞くからに心に秋の日かすをぞふる  
秋ふかみよわるは蟲の聲のみかきく我とてもこの身やはある  
虫のねにさのみぬるべきたもとかは怪しや心ものおもふらし  
もの思ふ寐覺とぶらふきりぐす人よりもけに露けかるらむ

獨聞蟲

ひとり寐のともにはならでさりとす蝻さりとすなく音をきけば物おもひぞそふ

故郷蟲

草ふかみ分け入りてとふ人もあれやふりゆく宿のすど蟲の聲

雨中蟲

かべに生ふる小草こぐさにわぶる蝻さりとすしぐるよにはのつゆいとふらし

田家に蟲をきく

小秋こあきさく山田やまののくろの蟲の音にいほもる人やそでぬらすらむ

夕いふたの道の蟲といふ事を



ければ

わけて入る袖に哀をかけよとてつゆけきにはに蟲さへぞなく

蟲の歌よみ侍りけるに

夕されや玉うごくつゆの小笹生こさぎふにこゑまづならずさりとす 葎かな  
秋風にほすゑ波よるかるかやの下葉にむしのこゑみだるなり  
葎なくなる野邊はよそなるを思はぬそでに露ぞこほるよ  
秋風の更けゆく野邊の虫の音のはしたなきまでぬるよ袖かな  
蟲の音をよそにおもひてあかさねば袂も露は野べにかはらじ  
野べになく蟲もやものは悲しきと答へましかば問ひて聞かまし  
秋の夜に聲も惜まずなく蟲をつゆまどろます聞きあかすかな  
あきの夜を獨や鳴きてあかさましともなふ蟲の聲なかりせば  
秋の野の尾花がそでにまねかせていかなる人をまつ蟲のこゑ  
よもすがら袂に蟲の音をかけてはらひわづらふ袖のしらつゆ  
獨寐のぬぎめのとこのさむしろに涙もよほすきりくすかな

夕暮に鹿を聞く

しの原やきりにまがひてなく鹿のこゑかすかなる秋の夕ぐれ  
幽居に鹿を聞く

となりぬはたの假屋に明す夜はしか哀なる物にぞ有りける  
田庵の鹿

小山田のいほちかく鳴くしかの音におどろかされて驚すかな  
人を尋ねて小野にまかりけるに鹿のなきければ

鹿の音を聞くにつけてもすむ人のこゝろ知らるゝ小野の山里  
獨聞擣衣

獨寐の夜寒よさじになるにかさねばや誰たが爲たにうつころもなるらむ  
隔里擣衣

さ夜衣いづこの里にうつならむ遠くきこゆるつちのおとかな  
年頃申されたる人の伏見に住むと聞きて尋ねま  
かりたりけるに庭の道も見えずしけりて蟲なき

たちこむる霧のしたにもうづもれて心はれせぬみ山べの里  
よをこめて竹の縷戸あみどに立つ霧の晴ればやがてや明けむとすらむ

## 鹿

しだり咲く萩の古枝ふるえにかぜかけてすがひくゝにを鹿なくなり  
萩がえの露ためず吹くあきかぜにをじか鳴くなり宮城野の原  
よもすがら妻こひかねて鳴く鹿の涙や野べのつゆとなるらむ  
さらぬだに秋はもののみ悲しきを涙もよほすさをしかのこゑ  
山おろしに鹿のねたぐふ夕暮をも悲しとはいふにや有るらむ  
しかもわぶ空の氣色もしぐるめり悲しかれともなれる秋かな  
何となくすまよほしくぞおもほゆる鹿の音たえぬ秋の山ざと  
小倉の麓にすみ侍りけるに鹿の鳴きけるを聞きて

を鹿なく小ぐらの山のすそちかみたとひとりすすむわが心かな

## 曉の鹿

夜をのこすねざめに聞くぞ哀なる夢野の鹿もかくや鳴きけむ

横ぐもの風にわかるよしのよめに山飛びこゆるはつ雁のこゑ  
夜に入りて雁を聞く

烏羽にかく玉づさのこよちしてかり鳴きわたるゆふやみの空  
雁聲遠きを

白雲をつばさにかけてゆく雁のかど田のおもの友したふなり

霧中雁

玉章たまづさのつづきは見えで雁がねの聲こそきりにけたれざりけれ

霧上雁

空色のこなたをうらに立つ霧のおもてに雁のかくるたまづさ

霧

鶉なく折にしなれば霧こめてあはれさびしき深草ふかくさのさと

霧行客をへだつ

名残なごりおほみむつごとつきで歸りゆく人をば霧も立ち隔てけり

山家霧

嬉しきは君にあふべき契ありて月にこゝろのさそはれにけり

心ざすことありて安藝の一の宮へ詣でけるに高富

の浦と申す所に風に吹きとめられて程經けり苦

ふきたる庵より月のもるを見て

波のおとを心にかけてあかすかなとまもる月のかけを友にて

詣でつきて月いと明あかくて哀に覺えければ詠ける

もろともに旅なる空に月もいでてすめばやかかけの哀なるらむ

旅宿の月といへる心をよめる

あはれ知る人みたらばと思ふかな旅寐のところにやどる月かけ

月やどるおなじうきねの波にしもそでしほるべき契ありけり

都にて月をあはれとおもひしは數よりほかのすさびなりけり

船中初雁

沖かけて八重の汐路をゆく舟はほのかにぞきくはつ雁のこゑ

朝に初雁を聞く

春日かすがに参りたりけるに常よりも月明く哀なりければ

ふりさけし人のこゝろぞ知られける今宵三笠の山を眺めて

月寺のほとりにあきらかなり

晝と見る月にあくるを知らましや時つく鐘のおとなかりせば

人々住吉にまゐりて月を翫びけるに

片そぎの行き合はぬまよりもる月やさえて御袖の霜におくらむ  
波にやどる月を汀にゆりよせて鏡にかくるすみよしのきし

旅まかりけるにとまりて

あかずのみ都にて見し影よりもたびこそ月はあはれなりけれ  
見しまゝに姿もかけもかはらねばつきぞ都のかたみなりける

旅宿の月をおもふといふ事を

月はなほ夜なくごとくにやどるべしわがむすびおく草の庵に

月前に友に逢ふといふことを

たぐひなき心地こそすれ秋の夜の月すむ嶺のさを鹿の聲

## 月前紅葉

木の間もる有明の月のさやけきさいに紅葉をそへて眺めつるかな

## 霧月をへだつといふ事を

立田山月すむみねのかひぞなきふもとに霧のはれぬかぎりは

## 月前にいにしへを懐ふ

古いにしへを何につけてかおもひいでむ月さへかはる世ならましかば

## 月によせて思を述べけるに

世の中にうきをも知らですむ月の影は我が身の心地こそすれ  
世の中は曇り果てぬる月なれやさりとともに見し影も待たれず  
厭ふ世も月すむ秋に成りぬればながらへずばと思ふなるかな  
さらぬだにうかれてものを思ふ身の心をさそふあきの夜の月  
捨てよいにし憂世に月のすまであれなさらば心の留とどまらざらまし  
あながちに山にのみすむ心かなたれかは月のいるををしまぬ

花の色をかけにうつせば秋の夜の月ぞ野守のかどみなりける  
月前草花

月のいろを花にかさねて女郎花うはものしたに露をかけたる  
よひのまの露にしをれて女郎花有明のつきのかけにたはるよ  
月前女郎花

庭さゆる月なりけりな女郎花しもにあひぬるはなと見たれば  
月前蟲

月のすむ浅茅にすだくきりふす雲のおくにや秋を知るらむ  
露ながらこほさで折らむ月かけに小萩がえだのまつ蟲のこゑ  
深夜聞菘

わが世とや更け行く月を思ふらむ聲も休めぬきりふすかな  
田家月

夕露の玉しく小田のいなむしろかへす穂すゑに月ぞやどれる  
月前鹿



月瀧を照すといふことを

雲消ゆる那智の高嶺に月たけてひかりをぬけるたきのしら絲

久しく月を待つといふ事を

出でながら雲にかくるゝ月影をかさねて待つやふたむらの山

雲間に月を待つといふ事を

秋の月いざよふ山の端のみかは雲のたえまもまたれやはせぬ

月前薄

をしむ夜の月にならひて有明のいらぬをまねく花すゝきかな  
花すゝき月の光にまがはましふかきますほのいろにそめずば

月前荻

月すむと荻うゑざらむやどならば哀すくなき秋にやあらまし

月照野花といふ事を

月なくば暮るれば宿へ歸らまし野べには花のさかりなりとも

月前野花

なか／＼にくもると見えて晴ると夜の月は光の添ふ心地する  
浮雲の月のおもてにかゝれどもはやく過ぐるは嬉しかりけり  
過ぎやらで月近くゆく浮雲のたゞよふ見ればわびしかりけり  
厭へどもさすがに雲のうちちりて月のあたりを離れざりけり  
雲はらふ嵐に月のみがかれてひかりえてすむあきのそらかな  
くまもなき月の光をながむればまづをばすての山ぞこひしき  
月さゆるあかしの瀬戸に風ふけば氷のうへにたゞむしらなみ  
天の原おなじ岩戸をいづれどもひかりことなる秋の夜のつき  
限りなくなごりをしきは秋の夜の月にともなふあけほのよ空

九月十三夜

こよひはとところえがほにすむ月の光もてなす菊のしらつゆ  
雲きえし秋のなかばの空よりも月はこよひぞ名におへりける

後九月月をもてあそぶといふ事を

月見れば秋くはよれる年はまたあかぬ心もそふにぞ有りける

行く末の月をば知らず過ぎきつる秋まだかゝる影はなかりき  
まことよも誰か思はむひとり見て後にこよひの月をかたらば  
月のため晝と思ふがかひなきにしばしくもりて夜を知らせよ  
あまの原朝日山より出づればや月のひかりのひるにまがへる  
有明の月のころにしなりぬれば秋はよるなきこよちこそすれ  
なか／＼に時々雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりけれ  
空晴るゝあらしのおとは松にあれや月も緑のいろにはえつゝ  
さだめなく鳥やなくらむあきの夜は月の光をおもひまがへて  
たれもみなことわりとこそ定むらめ晝をあらそふ秋の夜の月  
影さえてまことに月のあかき夜は心もそらにうかびてぞすむ  
隈もなき月のおもてに飛ぶ雁のかけを雲かと思ひけるかな  
ながむればいなや心のくるしきにいたくなすみそ秋の夜の月  
雲も見ゆかぜも吹くればあらくなるのどかなりつる月の光を  
もろともにかけをならぶる人もあれや月のもりくる笹の庵に

身にしみて哀しらする風よりもつきにぞ秋のいろは見えける  
蟲の音もかれゆく野べの草のはらに哀をそへてすめる月かけ  
人も見ぬよしなき山の末までもすむらむ月の影をこそおもへ  
木の間もる有明の月をながむればさびしさ添ふるみねの松風  
いかにせむ影をばそでにやどせども心のすめば月のくもるを  
くやしくも賤が伏屋とおとしめて月のもるをも知らで過ぎける  
あれわたる草の庵にもる月をそでにうつしてながめつるかな  
月を見て心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐりあひぬる  
何事もかはりのみゆく世のなかにおなじ影にてすめる月かな  
よもすがら月こそそでにやどりけれ昔の秋をおもひいづれば  
ながむれば外の影こそゆかしけれかはらじものを秋の夜の月  
行方なく月に心のすみくゝてはてはいかにかならむとすらむ  
月影のかたぶく山をながめつゝをしむしるしやありあけの空  
ながむるもまことしからぬ心地してよに餘りたる月の影かな

かぞへねどこよひの月のけしきにて秋の半なかにをそらに知るかな  
天の川名にながれたるかひありて今宵の月はことにすみけり  
さやかなる影にてしるし秋の月十夜じゅうよにあまれ五日なりけり  
うちつけに又來こむ秋のこよひまで月故をしくなるいのちかな  
秋はたごよひ一夜の名なりけりおなじ雲井に月はすめども  
おもひせぬ十五のとしもある物を今宵の月のかよらましかば  
くもれる十五夜を

月見れば影なく雲につままれて今夜こよひならずばやみに見えまし  
月歌あまた詠みるけに

入りぬとや東あづまに人はをしむらむ都にいづるやまの端のつき  
待ち出でてくまなき宵の月見ればくもぞ心にまづかよりける  
秋風や天あまつくもるにはらふらむ更あけゆくまよに月のさやけき  
いづくとて哀ならずはなぬいけれどもあれたる宿ぞ月はさびしき  
よもぎ分けて荒れたる宿の月見れば昔むかしすみけむ人ぞこひしき

池にすむ月にかよれる浮雲ははらひのこせる水さびなりけり

月池の水に似たりといふことを

水なくてこほりぞしたる勝間田のいけあらたむる秋の夜の月

名所の月といふことを

清見がたおきの岩こすしら波にひかりをかはず秋の夜のつき  
なべてなき所の名をやをしむらむ明石は分きて月のさやけき

海邊明月

難波潟月のひかりにうらさえて波のおもてにこほりをぞしく

月前に遠く望むといふ事を

くまもなき月の光にさそはれていく雲井まで行くこよろども

終夜月を見る

誰來なむ月の光にさそはれてと思ふに夜はの明けにけるかな

八月十五夜

山の端を出づる宵よりしるきかなこよひ知らする秋の夜の月

いざよはで出づるは月の嬉しくて入る山の端はつらきなりけり  
水の面おもにやどる月さへいりぬるは波のそこにも山やあるらむ  
したはるゝ心や行くと山の端にしばしな入りそ秋の夜のつき  
明くるまで宵より空に雲なくてまだこそかゝる月見ざりけれ  
あさぢ原葉すゑのつゆの玉ごとにひかりつらぬく秋の夜の月  
秋の夜の月を雪かとながむれば露もあられのこゝちこそすれ  
閑しづかに月を待つといふことを

月ならでさし入るかけもなきまゝに暮るゝうれしき秋の山里

## 海邊月

清見瀉月すむよはのうきくもは不二の高嶺たかねのけぶりなりけり  
池上月といふことを

みさびるぬ池の面おもてのきよければやどれる月もめやすかりけり  
同じ心を遍照寺にて人々よみけるに

やどしもつ月の光のおほさははいかにいづともひろさはの池こゝ

晴れやらぬみ山の霧のたえなくにほのかに鹿の聲きこゆなり  
かねてより梢のいろを思ふかなしぐれはじむるみやまべの里  
鹿の音を垣根にこめて聞くのみか月もすみけりあきの山ざと  
庵もる月の影こそさびしけれ山田のひたのおとばかりして  
わづかなる庭の小草のしらつゆをもとめてやどる秋の夜の月  
何とかく心をさへはつくすらむわがなけきにて暮るゝ秋かな

月

秋の夜のそらにいつてふ名のみして影ほのかなる夕月夜かな  
あまの原月たけのほる雲路をばわけても風のみきはらはなむ  
うれしとや待つ人ごとに思ふらむ山の端いづる秋の夜のつき  
なかくくに心つくすもくるしきにくもらばいりね秋の夜の月  
いかばかり嬉しからまし秋の夜の月すむそらに雲なかりせば  
はりま瀧なだのみ沖にこぎ出でてあたり思はぬ月をながめむ  
月すみてなきたる海のおもてかな雲の波さへ立ちもかよらで



おほつかな秋はいかなる故のあればすどろに物の悲しかるらむ  
何ごとをいかに思ふとなけれどもたもとかわかぬ秋の夕ぐれ  
何となくもの悲しくぞ見えわたる鳥羽田の面のあきの夕ぐれ  
野の家の秋の夜

ねざめつよ長き夜かなと磐余野に幾秋までも我が身へぬらむ  
秋の歌に露をよむとて

おほかたの露には何のなるならむ袂におくはなみだなりけり  
山里に入々まかりて秋の歌よみけるに

山里の外面のをかのたかき木にそどろがましき秋のせみかな  
人々秋の歌十首よみけるに

玉にぬく露はこほれて武藏野のくさの葉むすぶあきのはつ風  
穂に出でてしのの小薄まねく野にたはれてたてる女郎花かな  
花をこそ野べの物とは見に来つれ暮るれば蟲の音をも聞きけり  
萩の葉をふき過ぎて行く風のおとに心みだるよ秋のゆふぐれ

池の面おもにかけをさやかにうつしもて水鏡見るをみなへしかな  
たぐひなき花のすがたを女郎花池のかどみにうつしてぞ見る  
女郎花水に近しといふことを

女郎花池のさ波にえだひぢてものおもふ袖のぬるゝがほなる  
萩

おもふにもすぎて哀にきこゆるは萩あきの葉みだる秋のゆふかぜ  
題しらす

おしなべて木草の末の原までもなびきて秋のあはれ見えける  
萩の風露を拂ふ

をじかふす萩さへ野べの夕露をしばしもためぬ萩のうはかせ  
隣あかの夕の萩の風

あたりまで哀しれともいひがほに萩のおとする秋のゆふかせ  
秋の歌よみける中に

吹きわたる風も哀をひとしめていづこもすぎき秋のゆふぐれ

薄道にあたりてしけしといふことを

花薄こゝろあてにぞわけて行くほの見し道にあとしなければ

古籬蒨萱

籬あれて薄ならねどかるかやも繁き野べとは成りけるものを

女郎花

女郎花わけつる袖とおもはばやおなじ露にもぬると知れよば  
女郎花いろめく野べにふれはらふ袂たもとに露やこほれかよると

草花露重

今朝見れば露のすがるに折れふして起きもあがらぬ女郎花かな  
大方おほかたの野邊の露には萎るれどわがなみだなきをみなへしかな  
女郎花帶露といふことを

花の枝に露の白玉ぬきかけて折るそで濡らすをみなへしかな  
折らぬより袖ぞぬれける女郎花露むすほれてたてるけしきに  
水邊女郎花といふことを

行路草花

折らで行くそでにも露ぞこほれける萩の葉しけき野邊の細道

露中草花

ほに出づるみ山がすそのむら薄うすまがきにこめてかこふ秋ざり

終日野の花を見るといふことを

みだれさく野べの萩原わけくれて露にも袖を染めてけるかな

萩野に満てり

咲きそはむ所の野べにあらばやは萩よりほかの花も見るべく

萩野の家にみてりといふことを

分けて出づる庭しもやがて野べなれば萩の盛さかを我が物に見る

野萩似錦といふことを

けふぞ知るその江にあらふ唐錦うらにしき萩さく野べにありけるものを

草花を詠みける

しけりゆくしばの下草をばないおはれ出でて招くや誰を慕ふなるらむ

七 夕

いそぎ起きて庭の小草をぐさの露ふまむやさしきかずに人や思ふと  
暮れぬめり今日待ちつけて柵機たはたは嬉しきにもや露こほるらむ  
天河あまのがはけふの七日はながきよのためしにもひくいみもしつべし  
舟よする天の川べのゆふぐれはすどしき風やふきわたるらむ  
待ちつけてうれしかるらむ柵機の心のうちぞそらに知らるよ  
蜘蛛のいかきたるを見て

さよがにのくもでにかけて引く絲や今日柵機にかさよぎの橋  
草花道きくくわを遮るといふ事を

夕露をはらへばそでに玉消えて道わけかぬる小野の萩はら

野徑秋風

末葉ふく風は野もせにわたるともあらくはわけじ萩のした露

草花時を得たりといふことを

絲すよきぬはれてしかのふす野べにほころびやすき藤袴かな

山家待秋といふことを

山里は外面そとのまくす葉をしけみうら吹きかへす秋を待つかな

六月祓

御祓みそぎしてぬさとりながす川の瀬にやがて秋めく風ぞすどしき

## 秋

山里のはじめの秋といふ事を

さまざまのあはれをこめて梢ふくかぜに秋知るみやまべの里

山居さんきょのはじめの秋といふ事を

秋たつと人はつけねど知られけりみ山のすその風のけしきに

常磐とこひの里にて初秋月といふ事をよみけるに

秋たつとおもふに空もたどならでわれて光をわけむ三日月

初秋の頃鳴尾なるおと申す所にて松風の音を聞きて

常よりも秋になるをの松風はわきて身にしむこよちこそすれ

夏の月の歌よみけるに

夏の夜も小笹が原にしもぞおく月のひかりのさえしわたれば  
山河のいはにせかれてちる波をあられとぞ見る夏の夜のつき

池上夏月といふことを

影さえて月しもことにすみぬれば夏の池にもつらゝるにけり  
蓮池に満てりといふ事を

おのづから月やどるべきひまもなく池に蓮はちすのはな咲きにけり

雨中夏月

夕立のはるればつきぞやどりける玉ゆりすうる蓮はのうき葉に

涼風如秋

まだきより身にしむ風のけしきかな秋さきだつるみ山やまべの里

松風如秋といふ事を北白川なる所にて人々よみ

しに又水聲秋ありといふ事をかさねけるに

まつ風の音のみなにかいはばしる水にも秋はありけるものを

旅行草深といふ事を

旅人のわくる夏野のくさしけみ葉するにすけの小笠はづれて

行路夏といふことを

雲雀あがる大野の茅原夏來ればすむ木蔭をねがひてぞ行く

ともし

照射する火串の松もかへなくにしかめあはせて明す夏の夜

題しらす

夏の夜はしのの小竹のふし近みそよや程なく明くるなりけり

夏の夜の月見ることやなかるらむ蚊遣火たつるしづが伏屋は

海邊夏月

露のほる芦のわか葉に月さえてあきをあらそふ難波江のうら

泉にむかひて月を見るといふ事を

むすびあぐる泉にすめる月かけは手にもとられぬ鏡なりけり

むすぶ手に涼しき影を添ふるかな清水にやどるなつの夜の月



隣の泉

風をのみ花なき宿はまちくいていづみの末をまたむすぶかな  
水邊納涼とい事を北白川にて詠みける

水の音に暑さ忘るよまとるかなこずゑの蟬のこゑもまぎれて

深山水雞

杣人の暮にやどかるこよちしていほりをたよく水雞なりけり

題しらす

夏山のゆふした風のすどしさに櫓の木かけのたよまうきかな

撫子

かき分けて折れば露こそこほれけれ淺茅にまじる撫子のはな

雨中撫子といふことを

露おもみ園の撫子いかならむあらく見えつるゆふだちのそら

夏野の草をよみける

みまくさに原の小薄しがふとてふしどあせぬと鹿おもふらむ

水無瀬川をちのかよひち水みちて舟わたりするさみだれの頃  
ひろ瀬川渡の沖のみをつくし水嵩そふらしさみだれのころ  
早瀬川つなでの岸を沖に見てのほりわづらふさみだれのころ  
水分くる難波堀江のなかりせばいかにかせましさみだれの頃  
舟とめしみなとの芦間さをたえて心行きみむさみだれのころ  
水底にしかれにけりなさみだれて水の眞菰を刈りに來たれば  
五月雨のをやむ晴れまのなからめや水のかさほせ眞菰かり舟  
五月雨にさのの舟橋うきぬれば乗りてぞ人はさしわたるらむ  
五月雨の晴れぬ日數のふるまゝに沼の眞菰は水隠れにけり  
水なしときよてふりにし勝間田の池あらたむる五月雨のころ  
五月雨は行くべき道のあてもなしをささが原もうきぎ流れて  
五月雨はやまだのあぜの瀧枕かすをかさねて落つるなりけり  
河わだのよどみにとまる流木のうきはしわたす五月雨のころ  
思はずもあなづりにくき小川かな五月のあめに水まさりつよ

五月雨さみだれののきのしづくに玉かけてやどをかざれる菖蒲草かな

## 五月雨

水たよふ入江の眞菰まごもかりかねてむなでにすつる五月雨のころ  
五月雨に水まさるらし宇治橋やくもでにかよるなみのしら絲  
こざさしく古里ふるさと小野の道のあとをまた澤になすさみだれの頃  
つくぐと軒の雫をながめつと日をのみくらす五月雨のころ  
五月雨は岩せくぬまの水ふかみわけし岩間のかよひ路ぢもなし  
東屋あづまのをがやが軒のいと水に玉ぬきかくるさみだれのころ  
五月雨に小田のさなへやいかならむあぜの泥土うまひぢ洗ひこされて  
五月雨のころにしなれば荒小田あらかたに人にまかせぬ水たよひけり

ある所にて五月雨の歌十五首よみ侍りし人にか

## はりて

五月雨にほすひまもなくもしほ草煙もたてぬうらの海士あまびと  
五月雨はいさよ小川の橋もなしいづくともなく濬あに流れて

郭公なごりあらせて歸りしが聞すつるにもなりにけるかな

題しらす

空晴れてぬまのみかさを落さずば菖蒲もふかぬ五月なるべし

さることありて人の申し遣しける返事に五日

折に生ひて人に我が身や引かれまし筑摩の沼の菖蒲なりせば

高野に中院と申す所に菖蒲ふきたる坊の侍りけ

るに櫻の散りけるがめづらしくおほえて詠みけ

る

櫻ちる宿にかさなるあやめをば花あやめとやいふべかるらむ

ちる花を今日の菖蒲のねにかけて薬玉ともやいふべかるらむ

五月五日山寺へ人の今日いる物なればとて菖蒲

をつかはしける返事に

西にのみ心ぞかよるあやめ草この世ばかりのやどとおもへば

みな人の心のうきはあやめ草にしにおもひのひかぬなりけり

郭公さく折にこそなつ山のあを葉は花におとらざりけれ  
時鳥おもひもわかぬひとこゑを聞きつといかど人にかたらむ  
時鳥いかばかりなるちぎりにて心つくさで人のきくらむ  
かたらひしその夜の聲は時鳥いかなるよにもわすれむものか  
時鳥はなたちばなはにほふとも身をうの花のかきねわするな  
雨の中に郭公を待つといふことを詠みけるに

時鳥しのぶ卯月もすぎにしをなほ聲をしむさみだれのそら  
雨中郭公

さみだれのはれまも見えぬくもぢより山郭公なきて過ぐなり  
山寺の郭公といふことを人々よみけるに

郭公きよにとてしもこもらねど初瀬のやまはたよりありけり  
五月さつきの晦日つひに山里にまかりて立ち歸りにけるを  
時鳥もすけなく聞き捨てよ歸りし事など人の申

郭公かくらし遣しける返事かへりこに

尋ねれば聞きがたきかと時鳥こよひばかりは待ちこよろみむ  
時鳥まつこよろのみつくさせて聲をばをしむさつきなりけり  
人にかはりて

待つ人のこよろを知らば郭公たのもしくてや夜をあかさまし  
時鳥を待ちて明けぬといふ事を

郭公なかで明けぬとつけがほにまたれぬ鳥の音ぞきこゆなる  
郭公きかであけぬる夏の夜のうらしまの子はまことなりけり  
時鳥の歌五首よみけるに

郭公きかぬものゆゑまよはまし花をたづぬるやま路なりせば  
待つことは初音までかと思ひしにきよふるされぬ時鳥かな  
きよおくるこよろをぐして郭公たかまのやまの嶺こえぬなり  
大井川をぐらの山のほとよぎするせきに聲のとまらましかば  
郭公そののち越えむ山路にもかたらぬこゑはかはらざらなむ

時鳥を

山川の波にまがへる卯の花をたちかへりてや人は折るらむ

夜卯花

まがふべき月なきころの卯の花はよるさへさらす布かとぞ見る

社頭卯花

神垣のあたりに咲くも便あれや木綿かけたりと見ゆる卯の花

無言なりける頃郭公の初聲を聞きて

時鳥ひとにかたらぬをりにしも初音きくこそかひなかりけれ

不尋聞子規といふ事を賀茂社にて人々よみけ

るに

時鳥卯月のいみにるこもるを思ひ知りても來鳴くなるかな

夕暮郭公といふことを

さとなるよたそがれ時の郭公きかすがほにもまた名のらせむ

郭公

我が宿に花たちばなを植ゑてこそ山ほとよぎす待つべかりけれ

の春の暮といふことを神主ども詠みけるに

過ぐる春潮のみつより舟出して波の花をやさきにたつらむ

三月一日たらで暮れけるに詠みける

春故にせめても物を思へとやみそかにだにもたらで暮れぬる

三月の晦日に

今日のみとおもへば長き春の日も程なく暮るゝ心地こそすれ  
行く春をとどめかねぬる夕暮はあけほのよりも哀れなりけり

## 夏

かぎりあれば衣ばかりをぬぎかへて心は花をしたふなりけり

夏の歌よみけるに

草しけり道かりあけて山里にはな見し人のこゝろをぞ見る

水邊卯花

たつた川岸の籬を見わたせばるぜきのなみにまがふ卯のはな



沼水に茂る眞菰のわかれぬを咲きへだてたるかきつばたかな

山路のつよじ

はひつたひ折らで躑躅を手にぞとるさかしき山のとり所ところには

つよじ山のひかりたりといふことを

躑躅つじさく山の岩陰ゆふばえてをぐらはよその名のみなりけり

やまぶき

岸ちかみうゑけむ人ぞうらめしき波にをらるゝやまぶきの花

山吹の花さく里になりぬればこゝにも井手とおもほゆるかな

蛙

眞菰まひ生ふる山田に水をまかすればうれしがほにも啼く蛙かな

みさびるて月もやどらぬにごり江に我すまむとて蛙なくなり

春のうちに郭公をきくといふ事を

うれしとおもひぞわかぬ郭公春きくことのならひなければ

伊勢にまかりたりけるにみつと申す所にて海邊

吹く風のなべて梢にあたるかなかばかり人のをしむさくらを  
なにとかくあだなる花の色をしも心にふかくそめはじめけむ  
おなじ身の珍めづらしからず惜めばや花もかはらず咲けば散るらむ  
嶺にちる花はたになる木にぞ咲くいたくいとほじ春の山かぜ  
山おろしに亂れて花のちりけるを岩はなれたる瀧と見たれば  
花もちりひとも都にかへりなば山さびしくもならむとすらむ  
散りて後花を思ふといふ事を

青葉さへ見れば心のとまるかな散りにし花のなごりと思へば

堇

跡たえてあさぢしけれる庭の面おもにたれ分けいりて堇摘みけむ  
たれならむあら田のくろに堇つむひとは心のわりなかりけり  
さわらび

なほざりに焼き捨てし野の早蕨さわらびは折る人なくてほどろとやなる

かきつばた

雨中落花

梢うつ雨にしをれて散る花のをしきこゝろをなににたとへむ

遠山殘花

よし野山一むら見ゆる白雲は咲きおくれたるさくらなるべし

花の歌十五首よみけるに

吉野山人にこゝろをつけがほに花よりさきにかゝるしらくも  
山さむみ花咲くべくもなかりけりあまりかねても尋ね來にけり  
かたばかりつほむと花を思ふよりそらまた心ものになるらむ  
おほつかな谷は櫻のいかならむみねにはいまだかけぬしら雲  
花と聞くは誰もさこそはうれしけれ思ひしづめぬ我が心かな  
初花のひらけはじめむる梢よりそばえて風のわたるなるかな  
おほつかな春の心の花にのみいづれのとしかうかれそめけむ  
いざ今年こゝしちれと櫻をかたらはむなか／＼さらば風やをまむと  
風ふくとえだをはなれて落つまじく花とぢつけよ青柳あざやなぎのいと

風さそふ花のゆくへは知らねどもをしむ心は身にとまりけり  
花ざかり梢をさそふ風ならでのどかに散らむ春はあらばや

庭の花波に似たりといふ事を詠みけるに

風あらみこずるの花のながれ来て庭になみたつ白川のさと

白川の花庭面白かりけるを見て

あだに散る梢の花をながむればにはには消えぬ雪ぞつもれる

高野に籠りたりける頃草の庵に花のちりつみけ

れば

散る花の庵いほりのうへをふくならば風いるまじくめぐりかこはむ

夢中落花といふことを前齋院にて人々よみける

に

春風の花をちらすと見る夢はさめてもむねのさわぐなりけり

風の前の落花といふ事を

山櫻枝きるかぜのなごりなく花をさながらわがものにする

ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ  
をしめばと思ひけもなくあだにちる花は心ぞかしこかりける  
こずゑふく風の心はいかどせむしたがふ花のうらめしきかな  
いかでかはちらであれとも思ふべきしとしたふ情なごひしれ花  
木のもとの花に今宵はうづもれてあかぬ梢をおもひあかさむ  
木のもとに旅ねをすれば吉野山花のふすまをきするはるかぜ  
雪と見てかけに櫻のみだるれば花のかさきる春の夜のつき  
ちる花ををしむ心やとどまりてまた來む春のたれになるべき  
春ふかみ枝もうごかで散る花は風のとがにはあらぬなるべし  
あながちに庭をさへ吹く嵐かなさこそこゝろに花をまかせめ  
あだに散るさこそ梢の花ならめすこしはこのこせ春のやま風  
心得つたとひとすぢに今よりは花ををしまで風をいとはむ  
よし野山櫻にまがふ白雲のちりなむのちは晴れずもあらなむ  
花と見ばさすが情をかけましを雲とてかぜのはらふなるべし

落花の歌あまた詠みけるに

勅ちよくとかやくだす御門みかどのいませかしさらば恐れて花やちらぬと  
浪もなく風ををさめし白川のきみのをりもやはなは散りけむ  
いかでわれこの世の外の思ひ出に風をいとはで花をながめむ  
年をへてまちもをらむと山櫻こよろを春はつくすなりけり  
よし野山たにへたなびく白雲はみねの櫻のちるにやあるらむ  
山おろしの木のもと埋む花の雪は岩井にうくも氷とぞ見る  
春風の花のふどきにうづもれて行きもやられぬ志賀のやま道  
立ちまがふ嶺の雲をば拂ふとも花をちらさぬあらしなりせば  
よし野山花ふきぐして峯こゆるあらしは雲とよそに見ゆらむ  
惜まれぬ身だにも世にはあるものをあなあやくの花の心や  
うき世には留とどめおかじと春風の散らすは花ををしむなりけり  
諸共に我をもぐしてちりね花うき世をいとふこよろある身ぞ  
思へたど花のなからむ木この下もとに何をかけにて我が身住みなむ

かくなむ申さまほしかりしとてつかはしける

見る人に花も昔をおもひ出でてこひしかるべき雨にしをるよ  
かへし

いにしへを忍ぶる雨とたれか見む花もそのよの友しなければ

若き人々ばかりなむ老いにける身は風の煩しさ

にいとはるゝ事にてと有りけるなむやさしくき

こえける雨のふりけるに花の下もとに車を立てよな

がめける人に

ぬるともと蔭を頼みて思ひけむ人の跡ふむ今日にもあるかな

世をのがれて東山に侍る頃白川の花盛に人さそ

ひければまかり歸りけるに昔思ひ出でて

ちるを見て歸ることろや櫻花むかしにかはるしるしなるらむ

山路落花

ちり初むる花の初雪ふりぬればふみわけまうき志賀の山ごえ

よし野山ほき路<sup>ぢ</sup>づたひに尋ね入りて花見し春は一むかしかも  
修行し侍るに花おもしろかりける所にて

ながむるに花の名だての身ならずば木<sup>こ</sup>の下<sup>もと</sup>にてや春をくらすむ

熊野へまるりけるにやがみの王子の花おもしろ

かりければ社にかきつけける

待ち來つるやがみの櫻咲きにけり荒くおろすなみすの山かぜ

せか院の花盛なりける頃としたどがいひ送りけ

る

おのづから來る人あらばもろともにながめまほしき山櫻かな

かへし

ながむてふ數<sup>かず</sup>に入るべき身なりせば君が宿にて春はへなまし

上西門院女房法勝寺の花見られけるに雨のふり

て暮れにければ歸られにけり又の日兵衛の局の

もとへ花の御幸思ひ出でさせ給ふらんと覺えて



雲にまがふ花の下にてながむれば臙に月は見ゆるなりけり

春のあけほの花見けるに鶯の鳴きければ

花の色やこゑにそむらむ鶯のなく音ことなるはるのあけほの

春は花を友といふ事をせか院のさい院にて人々

詠みけるに

おのづから花なき年の春もあらば何につけてか日をくらさまし

老見花といふことを

老苞おぼに何をかせましこの春の花まちつけぬ我身なりせば

老木おきの櫻のところへに咲きたるを見て

わきて見む老木は花もあはれなりいま幾度いくたびか春にあふべき

屏風の繪を人々よみけるに春の宮人むれて花見

ける所によそなる人の見やりてたてけるを

木このとは見る人しけし櫻花よそにながめて我はをしまむ

山寺の花さかりなりけるに昔を思ひ出でて

思ひやる高嶺の雲の花ならば散らぬ七日は晴れじとぞ思ふ  
のどかなる心をさへに過しつゝ花ゆゑにこそはるを待ちしか  
かざこしの嶺のつゞきに咲く花はいつ盛ともなくや散らむ  
ならひありて風さそふとも山櫻たづぬる我を待ちつけて散れ  
すそ野やくけぶりぞ春は吉野山花をへだつるかすみなりける  
今よりは花見む人につたへおかむ世を遁れつゝ山に住まむと  
閑ならむと思ひける頃花見に人々のまうで來け

れば

花見にとむれつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎さかには有りける  
花もちり人も來ざらむをりはまた山のかひにて長閑のびかなるべし  
かき絶えこととはすなりにける人の花見に山里

へ詣で來たりと聞きて詠みける

年をへておなじ梢とにほへども花こそひとにあかれざりけれ  
花の下にて月を見て詠みける

あくがるよ心はさてもやまざくら散りなむ後や身に歸るべき  
花見ればそのいはれとは無けれども心のうちぞ苦しかりける  
白川のこずゑを見てぞなぐさむる吉野の山にかよふこゝろを  
引きかへて花見る春は夜はなく月見る秋はひるなからなむ  
花ちらで月はくもらぬ世なりせば物を思はぬわが身ならまし  
たぐひなき花をし枝に咲かすれば櫻にならぬ木ぞなかりける  
身を分けて見ぬ梢なくつくさばやよろづの山の花のさかりを  
櫻さく四方の山邊をかぬるまにのどかに花を見ぬこゝちする  
花にそむ心はいかで残りけむすて果てよきと思ふわが身に  
白川の春のこずゑのうげひすは花のことばをきくこゝちする  
ねがはくば花の下にて春死なむそのきさらぎのもち月のころ  
佛はつきりにはさくらの花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはど  
何とかや世にありがたき名をえたる花よ櫻にまさりしもせじ  
山ざくら霞のころもあつく著てこのはるだにも風つよまなむ

待つにより散らぬころを山櫻さきなば花のおもひ知らなむ

獨山ひとりの花を尋ぬといふ事を

たれかまた花をたづねて吉野山こけふみわくる岩つたふらむ

花を待つ心を

今更に春を忘ると花もあらじやすく待ちつと今日もくらさむ

おほつかないづれの山の嶺よりか待たるよ花の咲きはじむらむ

花の歌あまた詠みけるに

野イ空に出でていづくともなく尋ねれば雲雪イとは花の見ゆるなりけり

雪とぢし谷のふる巢を思ひ出でて花にむつるようぐひすの聲

吉野山雲をはかりに尋ね入りてころにかけし花を見るかな

おもひやるころや花にゆかざらむ霞こめたるみよし野の山

おしなべて花の盛になりにけり山の端ごとにかよるしらくも

まがふ色に花咲きぬれば吉野山春は晴れせぬ嶺のしら雲

吉野山こすゑのはなを見し日より心は身にもそはずなりにき

山里に誰をまたこはよぶこ鳥ひとりのみこそすまむと思ふに

苗代

苗代のみづを霞はたなびきてうちひのうへにかくるなりけり

霞に月のくもれるを見て

雲なくしておほろなりとも見ゆるかな霞かよれるはるの夜の月

山里の柳

山がつかたをかかけてしむる庵のさかひにたてる玉の小柳

柳風にみだる

見わたせばさほの川原にくりかけて風によらると青柳のいと

雨中柳

なかくに風のおすにぞみだれける雨にぬれたる青柳のいと

水邊柳

みなそこにふかきみどりの色見えてかぜになみよる川柳かな

待花忘他といふ事を

梅が香にたぐへて聞けば鶯のこゑなつかしきはるのやまざと  
つくり置きし梅のふすまに鶯は身にしむ梅の香やうつすらむ  
旅のとまりの梅

ひとりぬる草の枕のうつり香はかきねの梅のにほひなりけり  
ふるき砌の梅

何となく軒なつかしき梅ゆゑに住みけむ人のこゝろをぞ知る  
山里の春雨といふ事を大原にて人々よみけるに

春雨ののきたれこむるつれづれに人に知られぬ人のすみかか  
霞中歸雁といふことを

なにとなくおほつかなきは天のはら霞に消えてかへる雁がね  
かりがねはかへるみちにやまどふらむこしの中山霞へだてよ

歸雁

玉づさのはしがきかとも見ゆるかなとびおくれつゝ歸る雁がね

山家呼子鳥

香にぞまづ心しめおく梅の花いろはあだにも散りぬべければ

山里の梅といふ事を

香をとめむ人をこそ待て山里の垣ねの梅の散らぬかぎりは  
心せむしづが垣ほの梅はあやなよしなく過ぐる人とどめけり  
この春は賤が垣ほにふれわびて梅が香とめむ人したしまむ  
嵯峨に住みけるに道をへだてよ坊の侍りけるよ

り梅の風にちりけるを

ぬしいかに風わたるとていとふらむよそにうれしき梅の匂を  
庵の前なりける梅を見てよめる

梅が香を山ふところに吹きためていり來む人にしめよ春かぜ

伊勢のにしふく山と申す所に侍りけるに庵の梅

かぐはしく匂ひけるを

柴の庵いほによるく梅の匂ひ來てやさしき方もあるすまひかな

梅に鶯の鳴きけるを

うぐひすの聲ぞかすみにもれて來る人目ともしきはるの山里

雨中鶯

鶯のはるさめぐと鳴きゐたる竹のしづくやなみだなるらむ

住みける谷に鶯の聲せずなりにければ

ふる巢うとく谷の鶯なりはてば我やかはりてなかむとすらむ  
鶯は谷のふるすをいでぬともわがゆくへをばわすれざらなむ  
鶯はわれをすもりにたのみてや谷のほかへはいでてゆくらむ  
春のほどはわが住む庵の友になりてふる巢ないでそたにの鶯

きどすを

もえ出づる若菜あさると聞ゆなり雉子なく野の春のあけほの  
生ひかはる春の若くさまちわびて原のかれ野に雉子鳴くなり  
片岡に芝うつりして鳴くきどす立つ羽音してたかよらぬかは  
春霞いづ地立ち出でてゆきにけむ雉子住む野をやきてけるかな

梅を



今日はたゞ思ひもよらで歸りなむ雪つむ野邊の若菜なりけり

若菜

春日野は年のうちには雪つみて春はわか菜の生ふるなりけり

雨中若菜

春雨のふる野の若菜生ひぬらしぬれく摘まむかたみ手ぬきれ

若菜によせてふるきを思ふといふ事を

若菜つむ野への霞ぞあはれなる昔をとほくへだつとおもへば

老人の若菜といへることを

卯杖つき七草にこそ出でにけれ年をかさねて摘めるわか菜は

寄若菜述懐といふことを

若菜生ふる春の野守にわれなりてうき世を人につみ知らせばや

鶯によせて思を述べけるに

うき身にて聞くもをしきはうぐひすの霞にむせぶあけほのの聲

閑中鶯といふことを

春知れとたにの下水もりぞくる岩間のこほりひま絶えにけり  
かすますばなにをか春とおもはましまだ雪消えぬみ吉野の山  
海邊の霞といふことを

藻鹽やくうらのあたりは立ちのかでけぶりあらそふ春霞かな  
おなじ心を伊勢の二見といふ所にて

波こすとふたみの松の見えつるは梢にかゝるかすみなりけり

子 日

春毎に野べの小松を引く人はいくらの千代をな経べきなるらむ  
子日する人にかすみはさきだちて小松が原をたなびきにけり  
子日しに霞たなびく野べに出でて初うぐひすの聲をきくかな  
若菜に初子のあひたりければ人の許へ申しつか

はしける

わか菜つむ今日に初子のあひぬれば松にや人の心ひくらむ

雪中若菜

元日子日にて侍りけるに

子日してたてたる松に植ゑそへむ千代重ぬべき年のしるしに

山里に春立つといふことを

山里はかすみわたれるけしきにて空にや春のたつを知るらむ

難波わたりに年越に侍りけるに春立つ心をよみ

ける

いつしかも春きにけりと津の國の難波のうらを霞こめたり

春になりけるかただがへに志賀のさとへまかり

ける人にぐしてまかりけるに逢坂山のかすみた

りけるを見て

わきてけふ逢坂山のかすめるはたちおくれたる春や越ゆらむ

春きて猶雪

かすめども春をばよその空に見てとけむともなき雪のした水

題しらす

山家歌集

卷上

春

立春の朝よみける

年くれぬ春くべしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢  
山のはのかすむけしきにしるきかな今朝よりやさは春の曙  
春たつと思ひもあへぬ朝戸出あさでにいつしかかすむ音羽山かな  
たちかはる春をしれとも見せがほに年を隔つる霞なりけり  
とけそむるはつ若水のけしきにて春立つことのくまれぬる哉  
家々に春を甃ぶといふことを

門ごとにたつる小松にかざされて宿てふやどに春は來にけり

目錄

夏部……………五六八

秋部……………五七四

冬部……………五八九

卷之中

戀の部……………一〇一

卷之下

雜部……………六一六

百二十八首和歌……………三六二

詠五十首和歌……………三七二

春日應太上皇製和歌五十首……………三七七

冬日同詠五十首應製和歌……………三八一

月次御屏風十二帖和歌……………三八九

泥繪の御屏風の和歌……………三九四

入道皇太后宮大夫九十賀算屏風の歌……………三九四

名所御障子の和歌……………三九五

冬日同詠二十首應製和歌……………四〇一

後仁和寺宮月次の花鳥の歌のふにかゝ

るべき事あるをふるき歌かずのまゝ

にありがたくは今よみても奉るべき

よし仰せられしかば詠花鳥倭歌……………四〇三

詠五十首和歌……………四〇七

詠三十首和歌……………四一五

月次御屏風十二帖倭歌……………四一九

泥繪の御屏風……………四二五

下

部類歌

春……………四三六

夏……………四三八

秋……………四四四

冬……………四六九

賀……………四八二

戀……………四九〇

雜……………五〇八

無常……………五二四

神祇……………五三六

釋教……………五四一

金槐和歌集

卷之上

春部……………五五三

目錄

山家和歌集

卷上

春……………一  
 夏……………二  
 秋……………三  
 冬……………五  
 戀……………六  
 卷下  
 雜……………八  
 百首……………一八  
 拾遺愚草  
 上  
 詠百首和歌……………一九

詠百首倭歌……………二〇八  
 詠百首和歌……………二一八  
 詠百首倭歌……………二二七  
 詠百首和歌……………二三三  
 詠百首和歌……………二五〇  
 詠百首和歌……………二六五  
 詠百首倭歌……………二七三  
 詠百首和歌……………二八二  
 秋日侍太上皇仙洞同詠百首應製和歌……………二九七  
 夏日侍太上皇仙同詠百首應製和歌……………三〇六  
 詠百首和歌……………三一五  
 初冬同詠百首和歌……………三二九  
 春日同詠百首應製和歌……………三四四  
 關白左大臣家百首……………三五二  
 中  
 韻歌



壘を磨するものあるに至りては、又誠に我歌學史上の一偉觀たらずんばあらず。今貞享四年刊行する所の板本を原とし、之に參酌するに群書類従本を以てせり。

大正四年四月

校訂者 塚本哲三

## 緒言

山家和歌集二卷、拾遺愚草三卷、金槐和歌集三卷を收めて本篇一冊となす。

山家和歌集は詩僧西行法師の詠を萃むる所、其神韻縹渺として超俗の趣に富めるに至りては、蓋し幾多歌集中稀に覩る所と稱すべし。本集には絶對の典據と認むべき善本なきを以て、姑く六家集本を以て底本とし、類題本其他一二の異本を對照校合せり。

拾遺愚草は京極黃門として知られたる藤原定家の詠集也。定家は新古今集及び新勅撰集の撰者として重きを一代に爲したる者、其特に力を修辭の上に致し、爲に詠歌概ね淨華輕靡に流れ、實感の充實を缺くものあるは、また争ふべからざる事實なりと雖も、和歌の技巧的方面に於ける成功の一點よりすれば、寔に古今の第一人者たらずんばあらず。本集の校訂は専ら六家集本に據れり。

金槐和歌集は鎌倉右大臣源實朝の家集也。實朝は萬葉派の一大歌人にして、賀茂眞淵は「奈良朝以後に於ける唯一獨歩の大歌人」と推獎せり。その歌風雄渾壯大にして遠く萬葉集の



PL

788

.5

A17

1915

山拾金  
家遺槐  
和思和  
歌歌  
集草集

全全全





PL

Saigyō

788

Sanka waka shu

.5

A17

1915

East  
Asiatic  
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

